

うらめしげにぞ思したるや。帝、

「世の常の紅葉とや見るいにしへの

ためしにひける庭の錦を」

と、聞こえ知らせたまふ。御容貌いよいよねびととのほりたまひて、ただ一つもの見えさせたまふを、中納言さぶらひたまふが、ことことならぬこそ、めざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りまさらむ、あざやかに匂はしきところは、添ひてさへ見ゆ。

笛仕うまつりたまふ、いとおもしろし。唱歌の殿上人、御階にさぶらふ中に、弁少将の声すぐれたり。なほさるべきにこそと見えたる御仲らひなめり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

らず、なまめかしきほどに、殿上の童べ、舞仕うまつる。朱雀院の紅葉の賀、例の古事思し出でらる。「賀王恩」といふものを奏するほどに、太政大臣の御弟子の十ばかりなる、切におもしろう舞ふ。内の帝、御衣ぬぎて賜ふ。太政大臣降りて舞踏したまふ。

主人の院、菊を折らせたまひて、「青海波」の折を思し出づ。

「色まさる籬の菊も折々に

袖うちかけし秋を恋ふらし」

大臣、その折は、同じ舞に立ち並びきこえたまひしを、我も人にはすぐれたまへる身ながら、なほこの際はこよなかりけるほど、思し知らる。時雨、折知り顔なり。

「紫の雲にまがへる菊の花

濁りなき世の星かとぞ見る

時こそありけれ」

と聞こえたまふ。

夕風の吹き敷く紅葉の色々、濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上、見えまがふ庭の面に、容貌をかしき童べの、やむごとなき家の子どもなどにて、青き赤き白椽、蘇芳、葡萄染めなど、常のごと、例のみづらに、額ばかりのけしきを見せて、短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭に返り入るほど、日の暮るるもいと惜しげなり。

楽所などおどろおどろしくはせず。上の御遊び始まりて、書司の御琴ども召す。ものの興切なるほどに、御前に皆御琴ども参れり。宇多法師の変はらぬ声も、朱雀院は、いとめづらしくあはれに聞こし召す。

「秋をへて時雨ふりぬる里人も

かかる紅葉の折をこそ見ね」

老人どもも、かやうの筋に聞こえ集めたるを、中納言は、をかしと思す。女君は、あいなく面赤み、苦しと聞きたまふ。

神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。紅葉の盛りにて、興あるべきたびの行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、院さへ渡りおはしますべければ、世にめづらしくありがたきことにて、世人も心をおどろかす。主人の院方も、御心を尽くし、目もあやなる御心まうけをせさせたまふ。

巳の時に行幸ありて、まづ、馬場殿に左右の寮の御馬牽き並べて、左右近衛立ち添ひたる作法、五月の節にあやめわかれず通ひたり。未くだるほどに、南の寝殿に移りおはします。道のほどの反橋、渡殿には錦を敷き、あらはなるべき所には軟障を引き、いつくしうしなさせたまへり。

東の池に舟ども浮けて、御厨子所の鵜飼の長、院の鵜飼を召し並べて、鵜をおろさせたまへり。小さき鮒ども食ひたり。わぎとの御覧とはなけれども、過ぎさせたまふ道の興ばかりになむ。

山の紅葉、いづ方も劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁を崩し、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧ぜさせたまふ。

御座、二つよそひて、主人の御座は下れるを、宣旨ありて直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝は、なほ限りあるるやるやしさを尽くして見せたてまつりたまはぬことをなむ、思しける。

池の魚を、左少将捕り、蔵人所の鷹飼の、北野に狩仕まつれる鳥一番を、右少将捧げて、寝殿の東より御前に出でて、御階の左右に膝をつきて奏す。太政大臣、仰せ言賜ひて、調じて御膳に参る。親王たち、上達部などの御まうけも、めづらしきさまに、常の事どもを変へて仕うまつらせたまへり。

皆御酔ひになりて、暮れかかるほどに、楽所の人召す。わぎとの大楽にはあ

う上り集りて、いとうれしと思ひあへり。

男君、

「なれこそは岩守るあるじ見し人の

行方は知るや宿の真清水」

女君、

「亡き人の影だに見えずつれなくて

心をやれるいさらぬの水」

などのたまふほどに、大臣、内よりまかでたまひけるを、紅葉の色に驚かさ  
れて渡りたまへり。

昔おはさひし御ありさまにも、をさをさ変はることなく、あたりあたりおと  
なく住まひたまへるさま、はなやかなるを見たまふにつけても、いともあ  
はれに思さる。中納言も、けしきことに、顔すこし赤みて、いとどしづまりて  
ものしたまふ。

あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど、女は、またかかると容貌のたぐ  
ひも、などかなからむと見えたまへり。男は、際もなくきよらにおはす。古人  
ども御前に所得て、神さびたることども聞こえ出づ。ありつる御手習どもの、  
散りたるを御覧じつけて、うちしほたれたまふ。

「この水の心尋ねまほしけれど、翁は言忌して」  
とのたまふ。

「そのかみの老木はむべも朽ちぬらむ

植ゑし小松も苔生ひにけり」

男君の御宰相の乳母、つらかりし御心も忘れねば、したり顔に、

「いづれをも蔭とぞ頼む双葉より

根ざし交はせる松の末々」

とをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。

内大臣上がりたまひて、宰相中将、中納言になりたまひぬ。御よろこびに出でたまふ。光いとどまさりたまへるさま、容貌よりはじめて、飽かぬことなきを、主人の大臣も、「なかなか人に圧されまし宮仕へよりは」と、思し直る。

女君の大輔乳母、「六位宿世」と、つぶやきし宵のこと、ものの折々に思し出でければ、菊のいとおもしろくて、移ろひたるを賜はせて、

「浅緑若葉の菊を露にても

濃き紫の色とかけきや

からかりし折の一言葉こそ忘れね」

と、いと匂ひやかにほほ笑みて賜へり。恥づかしう、いとほしきものから、うつくしう見たてまつる。

「双葉より名立たる園の菊なれば

浅き色わく露もなかりき

いかに心おかせたまへりけるにか」

と、いと馴れて苦しがる。

御勢ひまさりて、かかる御住まひも所狭ければ、三条殿に渡りたまひぬ。すこし荒れにたるを、いとめでたく修理しなして、宮のおはしましし方を改めしつらひて住みたまふ。昔おぼえて、あはれに思ふさまなる御住まひなり。

前裁どもなど、小さき木どもなりしも、いとしげき蔭となり、一村薄も心にまかせて乱れたりける、つくろはせたまふ。遣水の水草もかき改めて、いと心ゆきたるけしきなり。

をかしき夕暮のほどを、二所眺めたまひて、あさましかりし世の、御幼さの物語などしたまふに、恋しきことも多く、人の思ひけむことも恥づかしう、女君は思し出づ。古人どもの、まかで散らず、曹司曹司にさぶらひけるなど、参

に言ひなしなどすれど、それに消たるべくもあらず。いまめかしう、並びなきことをば、さらにもいはず、心にくくよしある御けはひを、はかなきことにつけても、あらまほしうもてなしきこえたまへれば、殿上人なども、めづらしき挑み所にて、とりどりにさぶらふ人びとも、心をかけたる女房の、用意ありさまさへ、いみじくととのへなしたまへり。

上も、さるべき折節には参りたまふ。御仲らひあらまほしううちとけゆくに、さりとしてさし過ぎもの馴れず、あなづらはしかるべきもてなし、はた、つゆなく、あやしくあらまほしき人のありさま、心ばへなり。

大臣も、「長からずのみ思さるる御世のこなたに」と、思しつる御参りの、かひあるさまに見たてまつりなしたまひて、心からなれど、世に浮きたるやうにて、見苦しかりつる宰相の君も、思ひなくめやすきさまにしづまりたまひぬれば、御心おちる果てたまひて、「今は本意も遂げなむ」と、思しなる。

対の上の御ありさまの、見捨てがたきにも、「中宮おはしませば、おろかならぬ御心寄せなり。この御方にも、世に知られたる親さまには、まづ思ひきこえたまふべければ、さりとも」と、思し譲りけり。

夏の御方の、時に花やぎたまふまじきも、「宰相のものしたまへば」と、皆とりどりにうしろめたからず思しなりゆく。

明けむ年、四十になりたまふ、御賀のことを、朝廷よりはじめたてまつりて、大きなる世のいそぎなり。

その秋、太上天皇に准らふ御位得たまうて、御封加はり、年官年爵など、皆添ひたまふ。かからでも、世の御心に叶はぬことなけれど、なほめづらしかりける昔の例を改めで、院司どもなどなり、さまことにいつくしうなり添ひたまへば、内に参りたまふべきこと、難かるべきをぞ、かつは思しける。

かくても、なほ飽かず帝は思して、世の中を憚りて、位をえ譲りきこえぬこ

て、上は、「まことにあはれにうつくし」と思ひきこえたまふにつけても、人に譲るまじう、「まことにかかることもあらましかば」と思す。大臣も、宰相の君も、ただこのことひとつをなむ、「飽かぬことかな」と、思しける。

三日過ごしてぞ、上はまかでさせたまふ。たち変はりて参りたまふ夜、御対面あり。

「かくおとなびたまふけぢめになむ、年月のほども知らればべれば、疎々しき隔ては、残るまじくや」

と、なつかしうのたまひて、物語などしたまふ。これもうちとけぬる初めなめり。ものなどうち言ひたるけはひなど、「むべこそは」と、めざましう見たまふ。

また、いと気高う盛りなる御けしきを、かたみにめでたしと見て、「そこらの御中にもすぐれたる御心ざしにて、並びなきさまに定まりたまひけるも、いとことわり」と思ひ知らるるに、「かうまで、立ち並びきこゆる契り、おろかなりやは」と思ふものから、出でたまふ儀式の、いとことによそほしく、御輦車など聴されたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、思ひ比ぶるに、さすがなる身のほどなり。

いとうつくしげに、雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して見たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、一つものとぞ見えざりける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざま憂き身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、まことに住吉の神もおろかならず思ひ知らる。

思ふさまにかしづききこえて、心およばぬことはた、をさをさなき人のらうらうじさなれば、おほかたの寄せ、おぼえよりはじめ、なべてならぬ御ありさま容貌なるに、宮も、若き御心地に、いと心ことに思ひきこえたまへり。

挑みたまへる御方々の人などは、この母君の、かくてさぶらひたまふを、疵

博士ならでは」

と聞こえたり。はかなけれど、ねたきいらへと思す。なほ、この内侍にぞ、思ひ離れず、はひまぎれたまふべき。

かくて、御参りは北の方添ひたまふべきを、「常に長々しうえ添ひさぶらひたまはじ。かかるついでに、かの御後見をや添へまし」と思す。

上も、「つひにあるべきことの、かく隔たりて過ぐしたまふを、かの人も、ものしと思ひ嘆かるらむ。この御心にも、今はやうやうおぼつかなく、あはれに思し知るらむ。かたがた心おかれたてまつらむも、あいなし」と思ひなりたまひて、

「この折に添へたてまつりたまへ。まだいとあえかなるほどもうしろめたきに、さぶらふ人とても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母たちなども、見及ぶことの心いたる限りあるを、みづからは、えつとしもさぶらはざらむほど、うしろやすかるべく」

と聞こえたまへば、「いとよく思し寄るかな」と思して、「さなむ」と、あなたにも語らひのたまひければ、いみじくうれしく、思ふこと叶ひはべる心地して、人の装束、何かのことも、やむごとなき御ありさまに劣るまじくいそぎたつ。

尼君なむ、なほこの御生ひ先見たてまつらむの心深かりける。「今一度見たてまつる世もや」と、命をさへ執念くなして念じけるを、「いかにしてかは」と、思ふも悲し。

その夜は、上添ひて参りたまふに、さて、車にも立ちくだりうち歩みなど、人悪るかるべきを、わがためは思ひ憚らず、ただ、かく磨きたてまつりたまふ玉の疵にて、わがかくながらふるを、かつはいみじう心苦しう思ふ。

御参りの儀式、「人の目おどろくばかりのことはせじ」と思しつつめど、おのづから世の常のさまにぞあらぬや。限りもなくかしづきすゑたてまつりたまひ

「時により心おごりして、さやうなることなむ、情けなきことなりける。こよなく思ひ消ちたりし人も、嘆き負ふやうにて亡くなりなき」

と、そのほどはのたまひ消ちて、

「残りとまれる人の、中將は、かくただ人にて、わづかになりのぼるめり。宮は並びなき筋にておはするも、思へば、いとこそあはれなれ。すべていと定めなき世なればこそ、何ごとも思ふさまにて、生ける限りの世を過ぐさまほしければ、残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ、思ひ憚らるれば」

と、うち語らひたまひて、上達部なども御棧敷に参り集ひたまへれば、そなたに出でたまひぬ。

近衛司の使は、頭中將なりけり。かの大殿にて、出で立つ所よりぞ人びとは参りたまうける。藤典侍も使なりけり。おぼえことにて、内、春宮よりはじめたてまつりて、六条院などよりも、御訪らひども所狭きまで、御心寄せいとめでたし。

宰相中將、出で立ちの所にさへ訪らひたまへり。うちとけずあはれを交はしたまふ御仲なれば、かくやむごとなき方に定まりたまひぬるを、ただならずうち思ひけり。

「何とかや今日のかぎしよかつ見つ

おぼめくまでもなりにけるかな

あさまし」

とあるを、折過ぐしたまはぬばかりを、いかが思ひけむ、いともの騒がしく、車に乗るほどなれど、

「かぎしてもかつたどらるる草の名は

桂を折りし人や知るらむ

出だし、布施など、公さまに変はらず、心々にしたまへり。御前の作法を移して、君達なども参り集ひて、なかなか、うるはしき御前よりも、あやしう心づかひせられて臆しがちなり。

宰相は、静心なく、いよいよ化粧じ、ひきつくろひて出でたまふを、わざとならねど、情けだちたまふ若人は、恨めしと思ふもありけり。年ごろの積もり取り添へて、思ふやうなる御仲らひなめれば、水も漏らむやは。

主人の大臣、いとどしき近まさを、うつくしきものに思して、いみじうもてかしづきこえたまふ。負けぬる方の口惜しさは、なほ思せど、罪も残るまじうぞ、まめやかなる御心ざまなどの、年ごろ異心なくて過ぐしたまへるなどを、ありがたく思し許す。

女御の御ありさまなどよりも、はなやかにめでたくあらまほしければ、北の方、さぶらふ人びとなどは、心よからず思ひ言ふもあれど、何の苦しきことかはあらむ。按察使の北の方なども、かかる方にて、うれしと思ひきこえたまひけり。

かくて、六条院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。対の上、御阿礼に詣うでたまふとて、例の御方々いぎなひきこえたまへど、なかなか、さしも引き続きて心やましきを思して、誰も誰もとまりたまひて、ことことしきほどにもあらず、御車二十ばかりして、御前なども、くだくだしき人数多くもあらず、ことそぎたるしも、けはひことなり。

祭の日の暁に詣うでたまひて、かへさには、物御覽すべき御棧敷におはします。御方々の女房、おのおの車引き続き、御前、所占めたるほど、いかめしう、「かれはそれ」と、遠目よりおどろおどろしき御勢ひなり。

大臣は、中宮の御母御息所の、車押し避けられたまへりし折のこと思し出でて、

御返り、いと出で来がたげなれば、「見苦しや」とて、さも思し憚りぬべきことなれば、渡りたまひぬ。

御使の祿、なべてならぬさまにて賜へり。中将、をかしきさまにもてなしたまふ。常にひき隠しつつ隠ろへありきし御使、今日は、面もちなど、人びとしく振る舞ふめり。右近将監なる人の、むつましう思し使ひたまふなりけり。

六条の大臣も、かくと聞こし召してけり。宰相、常よりも光添ひて参りたまへれば、うちまもりたまひて、

「今朝はいかに。文などものしつや。賢しき人も、女の筋には乱るる例あるを、人悪ろくかかづらひ、心いられせで過ぐされたるなむ、すこし人に抜けたりける御心とおぼえける。

大臣の御おきての、あまりすくみて、名残なくくづほれたまひぬるを、世人も言ひ出づることあらむや。さりとても、わが方たけう思ひ顔に、心おごりして、好き好きしき心ばへなど漏らしたまふな。

さこそおいらかに、大きな心おきてと見ゆれど、下の心ばへ男々しからず癖ありて、人見えにくきところつきたまへる人なり」

など、例の教へきこえたまふ。ことうちあひ、めやすき御あはひ、と思さる。

御子とも見えず、すこしがこのかみばかりと見えたまふ。ほかほかにては、同じ顔を写し取りたると見ゆるを、御前にては、さまざま、あなめでたと見えたまへり。

大臣は、薄き御直衣、白き御衣の唐めきたるが、紋けぎやかにつやつやと透きたるをたてまつりて、なほ尽きせずあてになまめかしようおはします。

宰相殿は、すこし色深き御直衣に、丁子染めの焦がるるまでしめる、白き綾のなつかしきを着たまへる、ことさらめきて艶に見ゆ。

灌仏率てたてまつりて、御導師遅く参りければ、日暮れて、御方々より童女

かなな。『河口の』ところ、さしいらへまほしかりつれ」

とのたまへば、女、いと聞き苦し、と思して、

「浅き名を言ひ流しける河口は

いかが漏らしし関の荒垣

あさまし」

とのたまふさま、いとこめきたり。すこしうち笑ひて、

「漏りにける岫田の関を河口の

浅きにのみはおほせざらなむ

年月の積もりも、いとわりなくて悩ましきに、ものおほえず」

と、酔ひにかこちて、苦しげにもてなして、明くるも知らず顔なり。人びと、

聞こえわづらふを、大臣、

「したり顔なる朝寝かな」

と、とがめたまふ。されど、明かし果てでぞ出でたまふ。ねくたれの御朝顔、  
見るかひありかし。

御文は、なほ忍びたりつるさまの心づかひにてあるを、なかなか今日はえ聞  
こえたまはぬを、もの言ひさがなき御達つきじろふに、大臣渡りて見たまふぞ、  
いとわりなきや。

「尽きせざりつる御けしきに、いとど思ひ知らるる身のほどを。堪へぬ心に  
また消えぬべきも、

とがむなよ忍びにしぼる手もたゆみ

今日あらはるる袖のしづくを」

など、いと馴れ顔なり。うち笑みて、

「手をいみじうも書きなられにけるかな」

などのたまふも、昔の名残なし。

「いとけやけうも仕うまつるかな」

と、うち乱れたまひて、

「年経にけるこの家の」

と、うち加へたまへる御声、いとおもしろし。をかしきほどに乱りがはしき御遊びにて、もの思ひ残らずなりぬめり。

やうやう夜更け行くほどに、いたうそら悩みして、

「乱り心地いと堪へがたうて、まかでむ空もほとほとしようこそはべりぬべけれ。宿直所譲りたまひてむや」

と、中将に愁へたまふ。大臣、

「朝臣や、御休み所求めよ。翁いたう酔ひ進みて無礼なれば、まかり入りぬ」

と言ひ捨てて、入りたまひぬ。

中将、

「花の蔭の旅寝よ。いかにぞや、苦しきしるべにぞはべるや」

と言へば、

「松に契れるは、あだなる花かは。ゆゆしや」

と責めたまふ。中将は、心のうちに、「ねたのわざや」と思ふところあれど、人ぎまの思ふさまにめでたきに、「かうもあり果てなむ」と、心寄せわたることなれば、うしろやすく導きつ。

男君は、夢かとおぼえたまふにも、わが身いとどいつかしうぞおぼえたまひけむかし。女は、いと恥づかしと思ひしみてものしたまふも、ねびまされる御ありさま、いとど飽かぬところなくめやすし。

「世の例にもなりぬべかりつる身を、心もてこそ、かうまでも思し許さるめれ。あはれを知りたまはぬも、さま異なるわざかな」

と、怨みきこえたまふ。

「少将の進み出だしつる『葦垣』の趣きは、耳とどめたまひつや。いたき主

べくや。なにがしの教へも、よく思し知るらむと思ひたまふるを、いたう心悩  
ましたまふと、恨みきこゆべくなむ」

などのたまひて、酔ひ泣きにや、をかしきほどにけしきばみたまふ。

「いかでか。昔を思うたまへ出づる御変はりどもには、身を捨つるさまにも  
とこそ、思うたまへ知りはべるを、いかに御覧じなすことにかはべらむ。もと  
より、おろかなる心のおこたりにこそ」

と、かしこまりきこえたまふ。御時よく、さうどきて、

「藤の裏葉の」

とうち誦じたまへる、御けしきを賜はりて、頭中將、花の色濃く、ことに房  
長きを折りて、客人の御盃に加ふ。取りて、もて悩むに、大臣、

「紫にかことはかけむ藤の花

まつより過ぎてうれたけれども」

宰相、盃を持ちながら、けしきばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよ  
しあり。

「いく返り露けき春を過ぐし来て

花の紐解く折にあふらむ」

頭中將に賜へば、

「たをやめの袖にまがへる藤の花

見る人からや色もまさらむ」

次々順流るめれど、酔ひの紛れにはかばかしからで、これよりまさらず。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに澄みわたれり。げに、まだ  
ほのかなる梢どもの、さうぎうしきころなるに、いたうけしきばみ横たはれる  
松の、木高きほどにはあらぬに、かかれる花のさま、世の常ならずおもしろし。

例の、弁少將、声いとなつかしくて、「葦垣」を謡ふ。大臣、

入れたてまつる。いづれとなくをかしき容貌どもなれど、なほ、人にすぐれて、あざやかにきよらなるものから、なつかしう、よしづき、恥づかしげなり。

大臣、御座ひきつくるはせなどしたまふ御用意、おろかならず。御冠などしたまひて、出でたまふとて、北の方、若き女房などに、

「覗きて見たまへ。いと警策にねびまさる人なり。用意などいと静かに、ものものしや。あざやかに、抜け出でおよすけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。

かれは、ただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。公ぎまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。

これは、才の際もまさり、心もちる男々しく、すぐよかに足らひたりと、世におぼえたためり」

などのたまひてぞ、対面したまふ。ものまめやかに、むべむべしき御物語は、すこしばかりにて、花の興に移りたまひぬ。

「春の花、いづれとなく、皆開け出づる色ごとに、目おどろかぬはなきを、心短くうち捨てて散りぬるが、恨めしうおぼゆるころほひ、この花のひとり立ち後れて、夏に咲きかかるほどなむ、あやしう心にくくあはれにおぼえはべる。色もはた、なつかしきゆかりにしつべし」

とて、うちほほ笑みたまへる、けしきありて、匂ひきよげなり。

月はさし出でぬれど、花の色さだかにも見えぬほどなるを、もてあそぶに心を寄せて、大酒参り、御遊びなどしたまふ。大臣、ほどなく空酔ひをしたまひて、乱りがはしく強ひ酔はしたまふを、さる心して、いたうすまひ悩めり。

「君は、末の世にはあまるまで、天の下の有職にもしたまふめるを、齢古りぬる人、思ひ捨てたまふなむつらかりける。文籍にも、家礼といふことある

「なかなか折りやまどはむ藤の花

たそかれ時のたどたどしくは」

と聞こえて、

「口惜しくこそ臆しにけれ。取り直したまへよ」

と聞こえたまふ。

「御供にこそ」

とのたまへば、

「わづらはしき隨身は、否」

とて、返しつ。

大臣の御前に、かくなむ、とて、御覽ぜさせたまふ。

「思ふやうありてものしたまひつるにやあらむ。さも進みものしたまはばこそは、過ぎにし方の孝なかりし恨みも解けめ」

とのたまふ。御心おごり、こよなうねたげなり。

「さしもはべらじ。対の前の藤、常よりもおもしろう咲きてはべるなるを、静かなるころほひなれば、遊びせむなどにやはべらむ」

と申したまふ。

「わざと使ひさされたりけるを、早うものしたまへ」

と許したまふ。いかならむと、下には苦しう、ただならず。

「直衣こそあまり濃くて、軽びためれ。非参議のほど、何となき若人こそ、

二藍はよけれ、ひき繕はむや」

とて、わが御料の心ことなるに、えならぬ御衣ども具して、御供に持たせてたてまつれたまふ。

わが御方にて、心づかひいみじう化粧じて、たそかれも過ぎ、心やましきほどに参うでたまへり。主人の君達、中将をはじめて、七、八人うち連れて迎へ

のけしきに、いとどうちしめりて、「雨気あり」と、人びとの騒ぐに、なほ眺め入りてゐたまへり。心ときめきに見たまふことやありけむ、袖を引き寄せて、「などか、いとこよなくは勘じたまへる。今日の御法の縁をも尋ね思さば、罪許したまひてよや。残り少なくなりゆく末の世に、思ひ捨てたまへるも、恨みきこゆべくなむ」

とのたまへば、うちかしまりて、

「過ぎにし御おもむけも、頼みきこえさすべきさまに、うけたまはりおくことはべりしかど、許しなき御けしきに、憚りつつなむ」

と聞こえたまふ。

心あわたたしき雨風に、皆ちりぢりに競ひ帰りたまひぬ。君、「いかに思ひて、例ならずけしきばみたまひつらむ」など、世とともに心をかけたる御あたりなれば、はかなきことなれど、耳とまりて、とやかうやと思ひ明かしたまふ。

ここらの年ごろの思ひのしるしにや、かの大臣も、名残なく思し弱りて、はかなきついでの、わざとはなく、さすがにつきづきしからむを思すに、四月の朔日ごろ、御前の藤の花、いとおもしろう咲き乱れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむこと惜しき盛りなるに、遊びなどしたまひて、暮れ行くほどの、いとど色まされるに、頭中将して、御消息あり。

「一日の花の蔭の対面の、飽かずおぼえはべりしを、御暇あらば、立ち寄りたまひなむや」

とあり。御文には、

「わが宿の藤の色濃きたそかれに

尋ねやは来ぬ春の名残を」

げに、いとおもしろき枝につけたまへり。待ちつけたまへるも、心ときめきせられて、かしまりきこえたまふ。

御いそぎのほどにも、宰相中将は眺めがちにて、ほればれしき心地するを、「かつはあやしく、わが心ながら執念きぞかし。あながちにかう思ふことならば、関守の、うちも寝ぬべきけしきに思ひ弱りたまふなるを聞きながら、同じくは、人悪からぬさまに見果てむ」と念ずるも、苦しう思ひ乱れたまふ。

女君も、大臣のかすめたまひしことの筋を、「もし、さもあらば、何の名残かは」と嘆かしうて、あやしく背き背きに、さすがなる御もろ恋なり。

大臣も、さこそ心強がりたまひしかど、たけからぬに思しわづらひて、「かの宮にも、さやうに思ひ立ち果てたまひなば、またとかく改め思ひかかづらはむほど、人のためも苦しう、わが御方さまにも人笑はれに、おのづから軽々しきことやまじらむ。忍ぶとすれど、うちうちのことあやまりも、世に漏りにたるべし。とかく紛らはして、なほ負けぬべきなめり」と、思しなりぬ。

上はつれなくて、恨み解けぬ御仲なれば、「ゆくりなく言ひ寄らむもいかが」と、思し憚りて、「ことごとしくもてなきむも、人の思はむところをこなり。いかなるついでしてかはほのめかすべき」など思すに、三月二十日、大殿の大宮の御忌日にて、極楽寺に詣でたまへり。

君達皆ひき連れ、勢ひあらまほしく、上達部などもあまた参り集ひたまへるに、宰相中将、をさをさけはひ劣らず、よそほしくて、容貌など、ただ今のいみじき盛りにねびゆきて、取り集めめでたき人の御ありさまなり。

この大臣をば、つらしと思ひきこえたまひしより、見えたてまつるも、心づかひせられて、いといたう用意し、もてしづめてものしたまふを、大臣も、常よりは目とどめたまふ。御誦経など、六条院よりもせさせたまへり。宰相君は、まして、よろづをとりもちて、あはれにいとなみ仕うまつりたまふ。

夕かけて、皆帰りたまふほど、花は皆散り乱れ、霞たどたどしきに、大臣、昔を思し出でて、なまめかしううそぶき眺めたまふ。宰相も、あはれなる夕べ

藤裏葉

藤  
裏  
葉

御文は、思ひあまりたまふ折々、あはれに心深きさまに聞こえたまふ。「誰がまことをか」と思ひながら、世馴れたる人こそ、あながちに人の心をも疑ふなれ、あはれと見たまふふし多かり。

「中務宮なむ、大殿にも御けしき賜はりて、さもやと、思し交はしたなる」と人の聞こえければ、大臣は、ひき返し御胸ふたがるべし。忍びて、「さることをこそ聞きしか。情けなき人の御心にもありけるかな。大臣の、口入れたまひしに、執念かりきとて、引き違へたまふなるべし。心弱くなびきても、人笑へならましこと」

など、涙を浮けてのたまへば、姫君、いと恥づかしきにも、そこはかとなく涙のこぼるれば、はしたなくて背きたまへる、らうたげさ限りなし。

「いかにせまし。なほや進み出でて、けしきをとらまし」  
など、思し乱れて立ちたまひぬる名残も、やがて端近う眺めたまふ。

「あやしく、心おくれても進み出でつる涙かな。いかに思しつらむ」  
など、よろづに思ひるたまへるほどに、御文あり。さすがにぞ見たまふ。こまやかにて、

「つれなさは憂き世の常になりゆくを  
忘れぬ人や人にことなる」

とあり。「けしきばかりもかすめぬ、つれなさよ」と、思ひ続けたまふは憂けれど、

「限りとて忘れがたきを忘るるも

こや世になびく心なるらむ」

とあるを、「あやし」と、うち置かれず、傾きつつ見るたまへり。

たまふ。

「かやうのことは、かしこき御教へにだに従ふべくもおぼえざりしかば、言まぜま憂けれど、今思ひあはするには、かの御教へこそ、長き例にはありけれ。つれづれのものすれば、思ふところあるにやと、世人も推し量るらむを、宿世の引く方にて、なほなほしきことにありありてなびく、いと尻びに、人悪ろきことぞや。

いみじう思ひのぼれど、心にしもかなはず、限りのあるものから、好き好きしき心つかはるな。いはけなくより、宮の内に生ひ出でて、身を心にまかせず、所狭く、いささかの事のあやまりもあらば、軽々しきそしりをや負はむと、つみしだに、なほ好き好きしき咎を負ひて、世にはしたなめられき。

位浅く、何となき身のほど、うちとけ、心のままなる振る舞ひなどものせらるな。心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女のことにてなむ、かしこき人、昔も乱るる例ありける。

さるまじきことに心をつけて、人の名をも立て、みづからも恨みを負ふなむ、つひのほだしとなりける。とりあやまりつつ見む人の、わが心にかなはず、忍ばむこと難き節ありとも、なほ思ひ返さむ心をならひて、もしは親の心にゆづり、もしは親なくて世の中かたほにありとも、人柄心苦しうなどあらむ人をば、それを片かどに寄せても見たまへ。わがため、人のため、つひによかるべき心ぞ深うあるべき」

など、のどやかにつれづれなる折は、かかる御心づかひをのみ教へたまふ。

かやうなる御諫めにつきて、戯れにても他ぎまの心を思ひかかるは、あはれに、人やりならずおぼえたまふ。女も、常よりことに、大臣の思ひ嘆きたまへる御けしきに、恥づかしう、憂き身と思し沈めど、上はつれなくおほどかにて、眺め過ぐしたまふ。

沈の筥に入れて、いみじき高麗笛添へて、奉れたまふ。

またこのころは、ただ仮名の定めをしたまひて、世の中に手書くとおぼえたる、上中下の人びとにも、さるべきものども思しはからひて、尋ねつつ書かせたまふ。この御筥には、立ち下れるをば混ぜたまはず、わざと、人のほど、品分かせたまひつつ、草子、巻物、皆書かせたてまつりたまふ。

よろづにめづらかなる御宝物ども、人の朝廷までありがたげなる中に、この本どもなむ、ゆかすと心動きたまふ若人、世に多かりける。御絵どもととのへさせたまふ中に、かの『須磨の日記』は、末にも伝へ知らせむと思せど、「今すこし世をも思し知りなむに」と思し返して、まだ取り出でたまはず。

内の大臣は、この御いそぎを、人の上にて聞きたまふも、いみじう心もとなく、さうぎうしと思す。姫君の御ありさま、盛りにととのひて、あたらしううつくしげなり。つれづれとうちしめりたまへるほど、いみじき御嘆きぐさなるに、かの人の御けしき、はた、同じやうになだらかなれば、「心弱く進み寄らむも、人笑はれに、人のねむごろなりしきぎみに、なびきなましかば」など、人知れず思し嘆きて、一方に罪をもおほせたまはず。

かくすこしたわみたまへる御けしきを、宰相の君は聞きたまへど、しばしつらかりし御心を憂しと思へば、つれなくもてなし、しづめて、さすがに他ざまの心はつくべくもおぼえず、心づから戯れにくき折多かれど、「浅緑」聞こえごちし御乳母どもに、納言に昇りて見えむの御心深かるべし。

大臣は、「あやしう浮きたるさまかな」と、思し悩みて、

「かのわたりのこと、思ひ絶えにたらば、右大臣、中務宮などの、けしきばみ言はせたまふめるを、いづくも思ひ定められよ」

とのたまへど、ものも聞こえたまはず、かしこまりたる御さまにてさぶらひ

て澄まぬ心地して、いたはり加へたるけしきなり。歌なども、ことさらめきて、選り書きたり。

女の御は、まほにも取り出でたまはず。齋院のなどは、まして取う出たまはざりけり。葦手の草子どもぞ、心々にはかなうをかしき。

宰相中将のは、水の勢ひ豊に書きなし、そそけたる葦の生ひざまなど、難波の浦に通ひて、こなたかなたいきまじりて、いたう澄みたるどころあり。また、いとかめしう、ひきかへて、文字やう、石などのたたずまひ、好み書きたまへる枚もあめり。

「目も及ばず。これは暇いりぬべきものかな」

と、興じめでたまふ。何事ももの好みし、艶がりおはする親王にて、いといみじうめできこえたまふ。

今日はまた、手のことどものたまひ暮らし、さまざまの継紙の本ども、選り出でさせたまへるついでに、御子の侍従して、宮にさぶらふ本ども取りに遣はす。

嵯峨の帝の、『古万葉集』を選び書かせたまへる四卷、延喜の帝の、『古今和歌集』を、唐の浅縹の紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺の表紙、同じき玉の軸、緞の唐組の紐など、なまめかしうて、巻ごとに御手の筋を変へつつ、いみじう書き尽くさせたまへる、大殿油短く参りて御覧ずるに、

「尽きせぬものかな。このころの人は、ただかたそばをけしきばむにこそありけれ」

など、めでたまふ。やがてこれはとどめたてまつりたまふ。

「女子などを持てはべらましにだに、をさをさ見はやすまじきには伝ふまじきを、まして、朽ちぬべきを」

など聞こえてたてまつれたまふ。侍従に、唐の本などのいとわざとがましき、

たてまつる。うちかしこまりて、かたみにうるはしだちたまへるも、いとぎよらなり。

「つれづれに籠もりはべるも、苦しきまで思うたまへらるる心のどけさに、折よく渡らせたまへる」

と、よろこびきこえたまふ。かの御草子待たせて渡りたまへるなりけり。やがて御覧ずれば、すぐれてしもあらぬ御手を、ただかたかどに、いといたう筆澄みたるけしきありて書きなしたまへり。歌も、ことさらめき、そばみたる古言どもを選びて、ただ三行ばかりに、文字少なに好ましくぞ書きたまへる。大臣、御覧じ驚きぬ。

「かうまでは思ひたまへずこそありつれ。さらに筆投げ捨てつべしや」と、ねたがりたまふ。

「かかる御中に面なくくだす筆のほど、さりとともとなむ思うたまふる」など、戯れたまふ。

書きたまへる草子どもも、隠したまふべきならねば、取う出たまひて、かたみに御覧ず。

唐の紙の、いとすくみたるに、草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、高麗の紙の、肌こまかに和うなつかしきが、色などははなやかならで、なまめきたるに、おほどかなる女手の、うるはしう心とどめて書きたまへる、たとふべきかたなし。

見たまふ人の涙さへ、水茎に流れ添ふ心地して、飽く世あるまじきに、また、ここの紙屋の色紙の、色あひはなやかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見所限りなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、さらに残りどもに目も見やりたまはず。

左衛門督は、ことごとしうかしこげなる筋をのみ好みて書きたれど、筆の掟

とて、まだ書かぬ草子ども作り加へて、表紙、紐などいみじうせさせたまふ。  
「兵部卿宮、左衛門督などにもものせむ。みづから一具は書くべし。けしきば  
みいますがりとも、え書き並べじや」

と、われぼめをしたまふ。

墨、筆、並びなく選り出でて、例の所々に、ただならぬ御消息あれば、人び  
と、難きことに思ひて、返さひ申したまふもあれば、まめやかに聞こえたまふ。  
高麗の紙の薄様だちたるが、せめてなまめかしきを、

「この、もの好みする若き人びと、試みむ」

とて、宰相中將、式部卿宮の兵衛督、内の大殿の頭中將などに、

「葦手、歌絵を、思ひ思ひに書け」

とのたまへば、皆心々に挑むべかめり。

例の寢殿に離れおはしまして書きたまふ。花ざかり過ぎて、浅緑なる空うら  
らかなるに、古き言どもなど思ひすましたまひて、御心のゆく限り、草のも、  
ただのも、女手も、いみじう書き尽くしたまふ。

御前に人しげからず、女房二、三人ばかり、墨など擦らせたまひて、ゆゑあ  
る古き集の歌など、いかにぞやなど選り出でたまふに、口惜しからぬ限りさぶ  
らふ。

御簾上げわたして、脇息の上に草子うち置き、端近くうち乱れて、筆の尻く  
はへて、思ひめぐらしたまへるさま、飽く世なくめでたし。白き赤きなど、掲  
焉なる枚は、筆とり直し、用意したまへるさまさへ、見知らむ人は、げにめで  
ぬべき御ありさまなり。

「兵部卿宮渡りたまふ」と聞こゆれば、おどろきて、御直衣たてまつり、御  
茵参り添へさせたまひて、やがて待ち取り、入れたてまつりたまふ。この宮も  
いときよげにて、御階さまよく歩み昇りたまふほど、内にも人びとのぞきて見

草子の筈に入るべき草子どもの、やがて本にもしたまふべきを選らせたまふ。いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を残したまへるたぐひのも、いと多くさぶらふ。

「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなむ、今の世はいと際なくなりたる。古き跡は、定まれるやうにはあれど、広き心ゆたかならず、一筋に通ひてなむありける。

妙にをかしきことは、外よりてこそ書き出づる人びとありけれど、女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多く集へたりしなかに、中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行ばかり、わぎとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。

さて、あるまじき御名も立てきこえしぞかし。悔しきことに思ひしみたまへりしかど、さしもあらざりけり。宮にかく後見仕うまつることを、心深うおはせしかば、亡き御影にも見直したまふらむ。

宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらむ」と、うちささめきて聞こえたまふ。

「故入道宮の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞすくなかりし。

院の尚侍こそ、今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。

さはありとも、かの君と、前齋院と、ここにこそは、書きたまはめ」と、聴しきこえたまへば、

「この数には、まばゆくや」と聞こえたまへば、

「いたうな過ぐしたまひそ。にこやかなる方のなつかしきは、ことなるものを。真名のすすみたるほどに、仮名はしどけなき文字こそ混じるめれ」

後の世のためしにやと、心狭く忍び思ひたまふる」

など聞こえたまふ。宮、

「いかなるべきこととも思うたまへ分きはべらざりつるを、かうことごとしうとりなさせたまふになむ、なかなか心おかれぬべく」

と、のたまひ消つほどの御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、大臣も、思すさまにをかしき御けはひどもの、さし集ひたまへるを、あはひめでたく思さる。母君の、かかる折だにえ見たてまつらぬを、いみじと思へりしも心苦しうて、参う上らせやせましと思せど、人のもの言ひをつつみて、過ぐしたまひつ。

かかる所の儀式は、よろしきにだに、いとこと多くうるさきを、片端ばかり、例のしどけなくまねばむもなかなかやとて、こまかに書かず。

春宮の御元服は、二十余日のほどになむありける。いと大人しくおはしませば、人の女ども競ひ参らすべきことを、心ざし思すなれど、この殿の思しきざすさまの、いとことなれば、なかなかにてや交じらはむと、左の大臣なども、思しとどまるなるを聞こしめして、

「いとたいだいしきことなり。宮仕への筋は、あまたあるなかに、すこしのけぢめを挑まむこそ本意ならめ。そこらの警策の姫君たち、引き籠められなば、世に映えあらじ」

とのたまひて、御参り延びぬ。次々にもとしづめたまひけるを、かかるよし所々に聞きたまひて、左大臣殿の三の君参りたまひぬ。麗景殿と聞こゆ。

この御方は、昔の御宿直所、淑景舎を改めしつらひて、御参り延びぬるを、宮にも心もとながらせたまへば、四月にと定めさせたまふ。御調度どもも、もとあるよりもとのへて、御みづからも、もの下形、絵様などをも御覧じ入れつつ、すぐれたる道々の上手どもを召し集めて、こまかに磨きととのへさせたまふ。

とりあへぬまで吹きや寄るべき  
情けなく」

と、皆うち笑ひたまふ。弁少将、

「霞だに月と花とを隔てずは

ねぐらの鳥もほころびなまし」

まことに、明け方になりてぞ、宮歸りたまふ。御贈り物に、みづからの御料の御直衣の御よそひ一領、手触れたまはぬ薰物二壺添へて、御車にたてまつらせたまふ。宮、

「花の香をえならぬ袖にうつしもて

ことあやまりと妹やとがめむ」

とあれば、

「いと屈したりや」

と笑ひたまふ。御車かくるほどに、追ひて、

「めづらしと故里人も待ちぞ見む

花の錦を着て帰る君

またなきことと思さるらむ」

とあれば、いといたうからがりたまふ。次々の君達にも、ことことしからぬさまに、細長、小桂などかづけたまふ。

かくて、西の御殿に、戌の時に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髪上の内侍なども、やがてこなたに参れり。上も、このついでに、中宮に御対面あり。御方々の女房、押しあはせたる、数しらず見えたり。

子の時に御裳たてまつる。大殿油ほのかなれど、御けはひいとめでたしと、宮は見たてまつれたまふ。大臣、

「思し捨つまじきを頼みにて、なめげなる姿を、進み御覽ぜられはべるなり。

月さし出でぬれば、大御酒など参りて、昔の御物語などしたまふ。霞める月の影心にくきを、雨の名残の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、御殿のあたり言ひ知らず匂ひ満ちて、人の御心地いと艶あり。

蔵人所の方にも、明日の御遊びのうちならしに、御琴どもの装束などして、殿上人などあまた参りて、をかしき笛の音ども聞こゆ。

内の大殿の頭中将、弁少将なども、見参ばかりにてまかづるを、とどめさせたまひて、御琴ども召す。

宮の御前に琵琶、大臣に箏の御琴参りて、頭中将、和琴賜はりて、はなやかに掻きたてたるほど、いとおもしろく聞こゆ。宰相中将、横笛吹きたまふ。折にあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたてたり。弁少将、拍子取りて、「梅が枝」出だしたるほど、いとをかし。童にて、韻塞ぎの折、「高砂」謡ひし君なり。宮も大臣もさしいらへしたまひて、ことごとしからぬものから、をかしき夜の御遊びなり。

御土器参るに、宮、

「鶯の声にやいとどあくがれむ

心しめつる花のあたりに

千代も経ぬべし」

と聞こえたまへば、

「色も香もうつるばかりにこの春は

花咲く宿をかれずもあらなむ」

頭中将に賜へば、取りて、宰相中将にさす。

「鶯のねぐらの枝もなびくまで

なほ吹きとほせ夜半の笛竹」

宰相中将、

「心ありて風の避くめる花の木に

ささかの咎を分きて、あながちに劣りまさりのけぢめをおきたまふ。かのわが御二種のは、今ぞ取う出させたまふ。

右近の陣の御溝水のほとりになずらへて、西の渡殿の下より出づる汀近う埋ませたまへるを、惟光の宰相の子の兵衛尉、堀りて参れり。宰相中将、取りて伝へ参らせたまふ。宮、

「いと苦しき判者にも当たりてはべるかな。いと煙たしや」

と、悩みたまふ。同じうこそは、いづくにも散りつつ広ざるべかめるを、人びとの心々に合はせたまへる、深さ浅さを、かぎあはせたまへるに、いと興あること多かり。

さらにいづれともなき中に、齋院の御黒方、さいへども、心にくくしづやかなる匂ひ、ことなり。侍従は、大臣の御は、すぐれてなまめかしうなつかしき香なりと定めたまふ。

対の上の御は、三種ある中に、梅花、はなやかに今めかしう、すこしはやき心しつらひを添へて、めづらしき薫り加はれり。

「このころの風にたぐへむには、さらにこれにまさる匂ひあらじ」とめでたまふ。

夏の御方には、人びとの、かう心々に挑みたまふなる中に、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、ただ荷葉を一種合はせたまへり。さま変はりしめやかなる香して、あはれになつかし。

冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしと思して、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選り仕うまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしきを取り集めたる、心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、

「心ぎたなき判者なめり」

と聞こえたまふ。

宮、

「うちのこと思ひやらるる御文かな。何ごとの隠ろへあるにか、深く隠したまふ」

と恨みて、いとゆかしと思したり。

「何ごとかはべらむ。隈々しく思したるこそ、苦しけれ」

とて、御硯のついでに、

「花の枝にいとど心をしむるかな

人のとがめむ香をばつつめど」

とやありつらむ。

「まめやかには、好き好きしきやうなれど、またもなかめる人の上にて、これこそはことわりのいとなみなめれと、思ひたまへなしてなむ。いと醜ければ、疎き人はかたはらいたさに、中宮まかでさせたてまつりてと思ひたまふる。親しきほどに馴れきこえかよへど、恥づかしきところの深うおはする宮なれば、何ごとも世の常にて見せたてまつらむ、かたじけなくてなむ」

など、聞こえたまふ。

「あえものも、げに、かならず思し寄るべきことなりけり」

と、ことわり申したまふ。

このついでに、御方々の合はせたまふども、おのおの御使して、

「この夕暮れのしめりにこころみむ」

と聞こえたまへれば、さまさまをかしうしなして奉りたまへり。

「これ分かせたまへ。誰れにか見せむ」

と聞こえたまひて、御火取りども召して、こころみさせたまふ。

「知る人にもあらずや」

と卑下したまへど、言ひ知らぬ匂ひどもの、進み遅れたる香一種などが、い

へも、目馴れぬさまに、今めかしう、やう変へさせたまへるに、所々の心を尽くしたまへらむ匂ひどもの、すぐれたらむどもを、かぎあはせて入れむと思すなりけり。

二月の十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿宮渡りたまへり。御いそぎの今日明日になりにけることども、訪らひきこえたまふ。昔より取り分きたる御仲なれば、隔てなく、そのことかのこと、と聞こえあはせたまひて、花をめでつつおはするほどに、前齋院よりとて、散りすきたる梅の枝につけたる御文持て参れり。宮、聞こしめすこともあれば、

「いかなる御消息のすすみ参れるにか」

とて、をかしと思したれば、ほほ笑みて、

「いと馴れ馴れしきこと聞こえつけたりしを、まめやかに急ぎものしたまへるなめり」

とて、御文は引き隠したまひつ。

沈の筥に、瑠璃の坏二つ据ゑて、大きにまろがしつっ入れたまへり。心葉、紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を選びて、同じくひき結びたる糸のさまも、なよびやかになまめかしうぞしたまへる。

「艶あるものさまかな」

とて、御目止めたまへるに、

「花の香は散りにし枝にとまらねど

うつらむ袖に浅くしまめや」

ほのかなるを御覧じつけて、宮はことごとしう誦じたまふ。

宰相中将、御使尋ねとどめさせたまひて、いたう酔はしたまふ。紅梅襲の唐の細長添へたる女の装束かづけたまふ。御返りもその色の紙にて、御前の花を折らせてつけさせたまふ。

御裳着のこと、思しいそぐ御心おきて、世の常ならず。春宮も同じ二月に、御かうぶりのことあるべければ、やがて御参りもうち続くべきにや。

正月の晦日なれば、公私のどやかなるころほひに、薰物合はせたまふ。大忒の奉れる香ども御覧ずるに、「なほ、いにしへのには劣りてやあらむ」と思して、二条院の御倉開けさせたまひて、唐の物ども取り渡させたまひて、御覧じ比ぶるに、

「錦、綾なども、なほ古きものこそなつかしうこまやかにはありけれ」

とて、近き御しつらひの、物の覆ひ、敷物、茵などの端どもに、故院の御世の初めつ方、高麗人のたてまつれりける綾、緋金錦どもなど、今の世のものに似ず、なほさまざま御覧じあてつつせさせたまひて、このたびの綾、羅などは、人びとに賜はず。

香どもは、昔今の、取り並べさせたまひて、御方々に配りたてまつらせたまふ。

「二種づつ合はせさせたまへ」

と、聞こえさせたまへり。贈り物、上達部の禄など、世になきさまに、内にも外にも、ことしげくいとなみたまふに添へて、方々に選りとのへて、鉄臼の音耳かしかましきころなり。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけむ、心にしめて合はせたまふ。

上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみに挑み合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、

「匂ひの深さ浅さも、勝ち負けの定めあるべし」

と大臣のたまふ。人の御親げなき御あらそひ心なり。

いづ方にも、御前にさぶらふ人あまたならず。御調度どもも、そこのきよらを尽くしたまへるなかにも、香壺の御筥どものやう、壺の姿、火取りの心ば

梅 枝

梅

枝

とめでて、ささめき騒ぐ声、いとしるし。人びと、いと苦しと思ふに、声いときはやかにて、

「沖つ舟よるべ波路に漂はば

棹さし寄らむ泊り教へよ

棚なし小舟漕ぎ返り、同じ人をや。あな、悪や」

と言ふを、いとあやしう、

「この御方には、かう用意なきこと聞こえぬものを」と思ひまはすに、「この聞く人なりけり」

と、をかしうて、

「よるべなみ風の騒がす舟人も

思はぬ方に磯伝ひせず」

とて、はしたなかめり、とや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyya/index.html>)

の尚侍の君を、いとなつかしきはらからにて、睦びきこえたまふものから、さすがなる御けしきうちまぜつつ、

「宮仕ひに、かひありてものしたまはましものを」

と、この若君のうつくしきにつけても、

「今まで皇子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに、いかに面目あらまし」

と、あまりのことをぞ思ひてのたまふ。

公事は、あるべきさまに知りなどしつつ、参りたまふことぞ、やがてかくてやみぬべかめる。さてもありぬべきことなりかし。

まことや、かの内の大殿の御女の、尚侍のぞみし君も、さるものの癖なれば、色めかしう、さまよふ心さへ添ひて、もてわづらひたまふ。女御も、「つひに、あはあはしきこと、この君ぞ引き出でむ」と、ともすれば、御胸つぶしたまへど、大臣の、

「今は、なまじらひそ」

と、制しのたまふをだに聞き入れず、まじらひ出でてものしたまふ。

いかなる折にかありけむ、殿上人あまた、おぼえことなる限り、この女御の御方に参りて、物の音など調べ、なつかしきほどの拍子打ち加へてあそぶ。秋の夕べのただならぬに、宰相中将も寄りおはして、例ならず乱れてものなどのたまふを、人びとめづらしがりて、

「なほ、人よりことにも」

とめづるに、この近江の君、人びとの中を押し分けて出でゐたまふ。

「あな、うたてや。こはなぞ」

と引き入るれど、いときがなげににらみて、張りゐたれば、わづらはしくて、

「あうなきことや、のたまひ出でむ」

と、つき交はすに、この世に目馴れぬまめ人をしも、

「これぞな、これぞな」

よろしからぬ御けしきにおどろきて。すぎずきしや」

と聞こえたまへり。

「この大将の、かかるはかなしごと言ひたるも、まだこそ聞かざりつれ。めづらしう」

とて、笑ひたまふ。心のうちには、かく領じたるを、いとからしと思す。

かの、もとの北の方は、月日隔たるままに、あさましと、ものを思ひ沈み、いよいよ呆け疾れてものしたまふ。大将殿のおほかたの訪らひ、何ごとをも詳しく思しおきて、君達をば、変はらず思ひかしづきたまへば、えしもかけ離れたまはず、まめやかなる方の頼みは、同じことにてなむものしたまひける。

姫君をぞ、堪へがたく恋ひきこえたまへど、絶えて見せたてまつりたまはず。若き御心のうちに、この父君を、誰れも誰れも、許しなう恨みきこえて、いよいよ隔てたまふことのみまされば、心細く悲しきに、男君たちは、常に参り馴れつつ、尚侍の君の御ありさまなどをも、おのづからことにふれてうち語りて、

「まろらをも、らうたくなつかしうなむしたまふ。明け暮れをかしきことを好みてものしたまふ」

など言ふに、うらやましう、かやうにても安らかに振る舞ふ身ならざりけむを嘆きたまふ。あやしう、男女につけつつ、人にもものを思はする尚侍の君にぞおはしける。

その年の十一月に、いとをかしき稚児をさへ抱き出でたまへれば、大将も、思ふやうにめでたしと、もてかしづきたまふこと、限りなし。そのほどのありさま、言はずとも思ひやりつべきことぞかし。父大臣も、おのづから思ふやうなる御宿世と思したり。

わざとかしづきたまふ君達にも、御容貌などは劣りたまはず。頭中将も、こ

言はでぞ恋ふる山吹の花

顔に見えつつ」

などのたまふも、聞く人なし。かく、さすがにもて離れたることは、このたびぞ思しける。げに、あやしき御心のすさびなりや。

かりの子のいと多かるを御覧じて、柑子、橘などやうに紛らはして、わぎとならずたてまつれたまふ。御文は、「あまり人もぞ目立つる」など思して、すくよかに、

「おぼつかなき月日も重なりぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨みきこゆるも、御心ひとつにのみはあるまじう聞きはべれば、ことなるついでならば、対面の難からむを、口惜しう思ひたまふる」

など、親めき書きたまひて、

「同じ巢にかへりしかひの見えぬかな

いかなる人か手ににぎるらむ

などか、さしもなど、心やましうなむ」

などあるを、大将も見たまひて、うち笑ひて、

「女は、まことの親の御あたりにも、たはやすくうち渡り見えたてまつりたまはむこと、ついでなくてあるべきことにあらず。まして、なぞ、この大臣の、をりをり思ひ放たず、恨み言はしたまふ」

と、つぶやくも、憎しと聞きたまふ。

「御返り、ここにはえ聞こえじ」

と、書きにくくおぼいたれば、

「まる聞こえむ」

と代はるも、かたはらいたしや。

「巢隠れて数にもあらぬかりの子を  
いづ方にかは取り隠すべき

と、つれなくもてなしたまへど、胸に満つ心地して、かの昔の、尚侍の君を朱雀院の後の切に取り籠めたまひし折など思し出づれど、さしあたりたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。

「好いたる人は、心からやすかるまじきわぎなりけり。今は何につけてか心をも乱らまし。似げなき恋のつまなりや」

と、さましわびたまひて、御琴掻き鳴らして、なつかしう弾きなしたまひし爪音、思ひ出でられたまふ。あづまの調べを、すが掻きて、

「玉藻はな刈りそ」

と、歌ひすさびたまふも、恋しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。

内にも、ほのかに御覽ぜし御容貌ありさまを、心にかけてたまひて、

「赤裳垂れ引き去にし姿を」

と、憎げなる古事なれど、御言種になりてなむ、眺めさせたまひける。御文は、忍び忍びにありけり。身を憂きものに思ひしみたまひて、かやうのすさびごとをも、あいなく思しければ、心とけたる御いらへも聞こえたまはず。

なほ、かの、ありがたかりし御心おきてを、かたがたにつけて思ひしみたまへる御ことぞ、忘れざりける。

三月になりて、六条殿の御前の、藤、山吹のおもしろき夕ばえを見たまふにつけても、まづ見るかひありてゐたまへりし御さまのみ思し出でらるれば、春の御前をうち捨てて、こなたに渡りて御覽ず。

呉竹の籬に、わぎとなう咲きかかりたるにほひ、いとおもしろし。

「色に衣を」

などのたまひて、

「思はずに井手の中道隔つとも」

と、起き臥し面影にぞ見えたまふ。

大将の、をかしやかに、わららかなる気もなき人に添ひるたらむに、はかなき戯れごともつつまじう、あいなく思されて、念じたまふを、雨いたう降りて、いとのだやかなるころ、かやうのつれづれも紛らはし所に渡りたまひて、語らひたまひしきまなどの、いみじう恋しければ、御文たてまつりたまふ。

右近がもとに忍びて遣はすも、かつは、思はむことを思すに、何ごともえ続けたまはで、ただ思はせたることどもぞありける。

「かきたれてのどけきころの春雨に

ふるさと人をいかに偲ぶや

つれづれに添へて、うらめしう思ひ出でらること多うはべるを、いかでか分き聞こゆべからむ」

などあり。

隙に忍びて見せたてまつれば、うち泣きて、わが心にも、ほど経るままに思ひ出でられたまふ御さまを、まほに、「恋しや、いかで見たてまつらむ」などは、えのたまはぬ親にて、「げに、いかでかは対面もあらむ」と、あはれなり。

時々、むつかしかりし御けしきを、心づきなう思ひきこえしなどは、この人にも知らせたまはぬことなれば、心ひとつに思し続くれど、右近は、ほのけしき見けり。いかなりけることならむとは、今に心得がたく思ひける。

御返り、「聞こゆるも恥づかしけれど、おぼつかなくやは」とて、書きたまふ。

「眺めする軒の雫に袖ぬれて

うたかた人を偲ばざらめや

ほどふるころは、げに、ことなるつれづれもまさりはべりけり。あなかしこ」と、ゐやゐやしく書きなしたまへり。

引き広げて、玉水のこぼるるやうに思さるるを、「人も見ば、うたてあるべし」

やがて今宵、かの殿にと思しまうけたるを、かねては許されあるまじきにより、漏らしきこえたまはで、

「にはかにいと乱り風邪の悩ましきを、心やすき所にうち休みはべらむほど、よそよそにてはいとおぼつかなくはべらむを」

と、おいらかに申しないたまひて、やがて渡したてまつりたまふ。

父大臣、にはかなるを、「儀式なきやうにや」と思せど、「あながちに、さばかりのことを言ひ妨げむも、人の心おくべし」と思せば、

「ともかくも。もとより進退ならぬ人の御ことなれば」

とぞ、聞こえたまひける。

六条殿ぞ、「いとゆくりなく本意なし」と思せど、などかはあらむ。女も、塩やく煙のなびきけるかたを、あさましと思せど、盗みもて行きたらましと思しなずらへて、いとうれしく心地おちるぬ。

かの、入りみさせたまへりしことを、いみじう怨じきこえさせたまふも、心づきなく、なほなほしき心地して、世には心解けぬ御もてなし、いよいよけしき悪し。

かの宮にも、さこそたけうのたまひしか、いみじう思しわぶれど、絶えて訪れず。ただ思ふことかなひぬる御かしづきに、明け暮れいとなみて過ぐしたまふ。

二月にもなりぬ。大殿は、

「さて、つれなきわざなりや。いとかう際々しうとしも思はで、たゆめられたるねたさを、人悪ろく、すべて御心にかからぬ折なく、恋しう思ひ出でられたまふ。

「宿世などいふもの、おろかならぬことなれど、わがあまりなる心にて、かく人やりならぬものは思ふぞかし」

「さらば。物懲りして、また出だし立てぬ人もぞある。いとこそからけれ。人より先に進みにし心ぎしの、人に後れて、けしき取り従ふよ。昔のなにがしが例も、引き出でつべき心地なむする」

とて、まことにいと口惜しと思し召したり。

聞こし召ししにも、こよなき近まさを、はじめよりさる御心なからむにてだにも、御覧じ過ぐすまじきを、まいていとねたう、飽かず思さる。

されど、ひたぶるに浅き方に、思ひ疎まれじとて、いみじう心深きさまにのたまひ契りて、なつけたまふも、かたじけなう、「われは、われ、と思ふものを」と思す。

御輦車寄せて、こなた、かなたの、御かしづき人ども心もとながり、大将も、いともものむつかしうたち添ひ、騒ぎたまふまで、えおはしまし離れず。

「かういと厳しき近き守りこそむつかしけれ」と憎ませたまふ。

「九重に霞隔てば梅の花

ただ香ばかりも匂ひ来じとや」

殊なることなきことなれども、御ありさま、けはひを見たてまつるほどは、をかしくもやありけむ。

「野をなつかしみ、明かいつべき夜を、惜しむべかめる人も、身をつみて心苦しうなむ。いかでか聞こゆべき」

と思し悩むも、「いとかたじけなし」と、見たてまつる。

「香ばかりは風にもつてよ花の枝に

立ち並ぶべき匂ひなくとも」

さすがにかけ離れぬけはひを、あはれと思しつつ、返り見がちにて渡らせたまひぬ。

「あやしうおぼつかなきわざかな。よろこびなども、思ひ知りたまはむと思ふことあるを、聞き入れたまはぬさまにのみあるは、かかる御癖なりけり」

とのたまはせて、

「などでかく灰あひがたき紫を

心に深く思ひそめけむ

濃くなり果つまじきにや」

と仰せらるるさま、いと若くきよらに恥づかしきを、「違ひたまへるところやある」と思ひ慰めて、聞こえたまふ。宮仕への労もなくて、今年、加階したまへる心にや。

「いかならむ色とも知らぬ紫を

心してこそ人は染めけれ

今よりなむ思ひたまへ知るべき」

と聞こえたまへば、うち笑みて、

「その、今より染めたまはむこそ、かひなかべいことなれ。愁ふべき人あらば、ことわり聞かまほしくなむ」

と、いたう怨みさせたまふ御けしきの、まめやかにわづらはしければ、「いとうたてもあるかな」とおぼえて、「をかしきさまをも見えたてまつらじ、むつかしき世の癖なりけり」と思ふに、まめだちてさぶらひたまへば、え思すさまなる乱れごともうち出でさせたまはで、「やうやうこそは目馴れめ」と思しけり。

大将は、かく渡らせたまへるを聞きたまひて、いとど静心なければ、急ぎまどはしたまふ。みづからも、「似げなきことも出で来ぬべき身なりけり」と心憂きに、えのどめたまはず、まかでさせたまふべきさま、つきづきしきことづけども作り出でて、父大臣など、かしこくたばかりたまひてなむ、御暇許されたまひける。

宿直所にゐたまひて、日一日、聞こえ暮らしたまふことは、

「夜さり、まかでさせたてまつりてむ。かかるついでにと、思し移るらむ御宮仕へなむ、やすからぬ」

とのみ、同じことを責めきこえたまへど、御返りなし。さぶらふ人びとぞ、

「大臣の、『心あわたたしきほどならで、まれまれの御参りなれば、御心ゆかせたまふばかり。許されありてを、まかでさせたまへ』と、聞こえさせたまひしかば、今宵は、あまりすがすがしうや」

と聞こえたるを、いとつらしと思ひて、

「さばかり聞こえしものを、さも心になはぬ世かな」

とうち嘆きてゐたまへり。

兵部卿宮、御前の御遊びにさぶらひたまひて、静心なく、この御局のあたり思ひやられたまへば、念じあまりて聞こえたまへり。大将は、司の御曹司にぞおはしける。「これより」とて取り入れたれば、しぶしぶに見たまふ。

「深山木に羽うち交はしゐる鳥の

またなくねたき春にもあるかな

さへづる声も耳とどめられてなむ」

とあり。いとほしう、面赤みて、聞こえむかたなく思ひゐたまへるに、主上渡らせたまふ。

月の明かきに、御容貌はいふよしなくきよらにて、ただ、かの大臣の御けはひに違ふところなくおはします。「かかる人はまたもおはしけり」と、見たてまつりたまふ。かの御心ばへは浅からぬも、うたてもの思ひ加はりしを、これは、などかはさしもおぼえさせたまはむ。いとなつかしげに、思ひしことの違ひにたる怨みをのたまはするに、面おかむかたなくぞおぼえたまふや。顔をもて隠して、御応へもえ聞こえたまはねば、

しき更衣たち、あまたもさぶらひたまはず。

中宮、弘徽殿女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひたまふ。さては、中納言、宰相の御女二人ばかりぞさぶらひたまひける。

踏歌は、方々に里人参り、さまことに、けににぎははしき見物なれば、誰も誰もきよらを尽くし、袖口の重なり、こちたくめでたくとのへたまふ。春宮の女御も、いとほなやかにもてなしたまひて、宮は、まだ若くおはしませど、すべていと今めかし。

御前、中宮の御方、朱雀院とに参りて、夜いたう更けにければ、六条の院には、このたびは所狭しとはぶきたまふ。朱雀院より帰り参りて、春宮の御方々めぐるほどに、夜明けぬ。

ほのぼのとをかしき朝ぼらけに、いたく酔ひ乱れたるさまして、「竹河」謡ひけるほどを見れば、内の大殿の君達は、四、五人ばかり、殿上人のなかに、声すぐれ、容貌きよげにて、うち続きたまへる、いとめでたし。

童なる八郎君は、むかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並みたるを、尚侍の君も、よそ人と見たまはねば、御目とまりけり。やむごとなくまじらひ馴れたまへる御方々よりも、この御局の袖口、おほかたのけはひ今めかしう、同じものの色あひ、襲なりなれど、ものよりことにはなやかなり。

正身も女房たちも、かやうに御心やりて、しばしは過ぐいたまはまし、と思ひあへり。

皆同じごと、かづけわたす綿のさまも、匂ひ香ことにらうらうじうしないたまひて、こなたは水駅なりけれど、けはひにぎははしく、人びと心懸想しそして、限りある御饗などのことどもも、したるさま、ことに用意ありてなむ、大将殿せさせたまへりける。

うち絶えて訪れもせず、はしたなかりしにことづけ顔なるを、宮には、いみじうめざましがり嘆きたまふ。

春の上も聞きたまひて、

「ここにさへ、恨みらるるゆゑになるが苦しきこと」

と嘆きたまふを、大臣の君、いとほしと思して、

「難きことなり。おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかりに、内にも心おきたるさまに思したなり。兵部卿宮なども、怨じたまふと聞きしを、さいへど、思ひやり深うおはする人にて、聞きあきらめ、恨み解けたまひにたなり。おのづから人の仲らひは、忍ぶることと思へど、隠れなきものなれば、しか思ふべき罪もなし、となむ思ひはべる」

とのたまふ。

かかることどもの騒ぎに、尚侍の君の御けしき、いよいよ晴れ間なきを、大将は、いとほしと思ひあつかひきこえて、

「この参りたまはむとありしことも、絶え切れて、妨げきこえつるを、内にも、なめく心あるさまに聞こしめし、人びとも思すところあらむ。公人を頼みたる人はなくやはある」

と思ひ返して、年返りて、参らせたてまつりたまふ。男踏歌ありければ、やがてそのほどに、儀式いといまめかしく、二なくて参りたまふ。

かたがたの大臣たち、この大将の御勢ひさへさしあひ、宰相中將、ねむごろに心しらひきこえたまふ。兄弟の君達も、かかる折にと集ひ、追従し寄りて、かしづきたまふさま、いとめでたし。

承香殿の東面に御局したり。西に宮の女御はおはしければ、馬道ばかりの隔てなるに、御心のうちは、遙かに隔たりけむかし。御方々、いづれとなく挑み交はしたまひて、内わたり、心にくくをかしきころほひなり。ことに乱りがは

ひうかれたまふさま、聞きわたりても久しくなりぬるを、いづくをまた思ひ直るべき折とか待たむ。いとどひがひがしきさまにのみこそ見え果てたまはめ」と諫め申したまふ、ことわりなり。

「いと、若々しき心地もしはべるかな。思ほし捨つまじき人びともはべればと、のどかに思ひはべりける心のおこたりを、かへすがへす聞こえてもやるかたなし。今はただ、なだらかに御覧じ許して、罪さりどころなう、世人にもことわらせてこそ、かやうにももてないたまはめ」

など、聞こえわづらひておはす。「姫君をだに見たてまつらむ」と聞こえたまへれど、出だしたてまつるべくもあらず。

男君たち、十なるは、殿上したまふ。いとうつくし。人にほめられて、容貌などようはあらねど、いとらうらうじう、ものの心やうやう知りたまへり。

次の君は、八つばかりにて、いとらうたげに、姫君にもおぼえたれば、かき撫でつつ、

「あこをこそは、恋しき御形見にも見るべかめれ」

など、うち泣きて語らひたまふ。宮にも、御けしき賜はらせたまへど、

「風邪おこりて、ためらひはべるほどにて」

とあれば、はしたなくて出でたまひぬ。

小君達をば車に乗せて、語らひおはす。六条殿には、え率ておはせねば、殿にとどめて、

「なほ、ここにあれ。来て見むにも心やすかるべく」

とのたまふ。うち眺めて、いと心細げに見送りたるさまども、いとあはれなるに、もの思ひ加はりぬる心地すれど、女君の御さまの、見るかひありてめでたきに、ひがひがしき御さまを思ひ比ぶるにも、こよなくて、よろづを慰めたまふ。

かな。正身は、しかひききりに際々しき心もなきものを、宮のかく軽々しうおはする」

と思ひて、君達もあり、人目もいとほしきに、思ひ乱れて、尚侍の君に、

「かくあやしきことなむはべる。なかなか心やすくは思ひたまへなせど、さて片隅に隠ろへてもありぬべき人の心やすさを、おだしう思ひたまへつるに、にはかにかの宮ものしたまふならむ。人の聞き見ることも情けなきを、うちほのめきて、参り来なむ」

とて出でたまふ。

よき上の御衣、柳の下襲、青鈍の綺の指貫着たまひて、引きつくろひたまへる、いとものものし。「などかは似げなからむ」と、人びとは見たてまつるを、尚侍の君は、かかることどもを聞きたまふにつけても、身の心づきなう思し知らるれば、見もやりたまはず。

宮に恨み聞こえむとて、参うでたまふままに、まづ、殿におはしたれば、木工の君など出で来て、ありしさま語りきこゆ。姫君の御ありさま聞きたまひて、男々しく念じたまへど、ほろほろとこぼるる御けしき、いとあはれなり。

「さて、世の人にも似ず、あやしきことどもを見過ぐすこちらの年ごろの心ざしを、見知りたまはずありけるかな。いと思ひのままならむ人は、今までも立ちとまるべくやはある。よし、かの正身は、とてもかくても、いたづら人と見えたまへば、同じことなり。幼き人びとも、いかやうにもてなしたまはむとすらむ」

と、うち嘆きつつ、かの真木柱を見たまふに、手も幼けれど、心ばへのあはれに恋しきままに、道すがら涙おしのごひつつ参うでたまへれば、対面したまふべくもあらず。

「何か。ただ時に移る心の、今はじめて変はりたまふにもあらず。年ごろ思

梢をも目とどめて、隠るるまでぞ返り見たまひける。君が住むゆゑにはあらで、  
こころ年経たまへる御住みかの、いかでか偲びどころなくはあらむ。

宮には待ち取り、いみじう思したり。母北の方、泣き騒ぎたまひて、

「太政大臣を、めでたきよすがと思ひきこえたまへれど、いかばかりの昔の  
仇敵にかおはしけむとこそ思ほゆれ。

女御をも、ことに触れ、はしたなくもてなしたまひしかど、それは、御仲の  
恨み解けざりしほど、思ひ知れとにこそはありけめと思しのたまひ、世の人も  
言ひなししだに、なほ、さやはあるべき。

人一人を思ひかしづきたまはむゆゑは、ほとりまでもにほふ例こそあれと、  
心得ざりしを、まして、かく末に、すずろなる継子かしづきをして、おのれ古  
したまへるいとほしみに、実法なる人のゆるぎどころあるまじきをとて、取り  
寄せもてかしづきたまふは、いかがつらからぬ」

と、言ひ続けののしりたまへば、宮は、

「あな、聞きにくや。世に難つけられたまはぬ大臣を、口にまかせてなおと  
しめたまひそ。かしこき人は、思ひおき、かかる報いもがなと、思ふことこそ  
はものせられけめ。さ思はるるわが身の不幸なるにこそはあらめ。

つれなうて、皆かの沈みたまひし世の報いは、浮かべ沈め、いとかしこくこ  
そは思ひわたいたまふめれ。おのれ一人をば、さるべきゆかりと思ひてこそは、  
一年も、さる世の響きに、家よりあまることどももありしか。それをこの生の  
面目にてやみぬべきなめり」

とのたまふに、いよいよ腹立ちて、まがまがしきことなどを言ひ散らしたま  
ふ。この大北の方ぞ、さがな者なりける。

大将の君、かく渡りたまひにけるを聞きて、

「いとあやしう、若々しき仲らひのやうに、ふすべ顔にてもしたまひける

うもこそあれ」

と思ほすに、うつぶし伏して、「え渡るまじ」と思ほしたるを、

「かく思したるなむ、いと心憂き」

など、こしらへきこえたまふ。「ただ今も渡りたまはなむ」と、待ちきこえたまへど、かく暮れなむに、まさに動きたまひなむや。

常に寄りゐたまふ東面の柱を、人に譲る心地したまふもあはれにて、姫君、桧皮色の紙の重ね、ただいささかに書いて、柱の干割れたるはさまに、笄の先して押し入れたまふ。

「今はとて宿かれぬとも馴れ来つる

真木の柱はわれを忘るな」

えも書きやらで泣きたまふ。母君、「いでや」とて、

「馴れきとは思ひ出づとも何により

立ちとまるべき真木の柱ぞ」

御前なる人びとも、さまざまに悲しく、「さしも思はぬ木草のときへ恋しからむこと」と、目とどめて、鼻すすりあへり。

木工の君は、殿の御方の人にてとどまるに、中將の御許、

「浅けれど石間の水は澄み果てて

宿もる君やかけ離るべき

思ひかけざりしことなり。かくて別れたてまつらむことよ」

と言へば、木工、

「ともかくも岩間の水の結ぼほれ

かけとむべくも思ほえぬ世を

いでや」

とてうち泣く。

御車引き出でて振り返るも、「またはいかでは見む」と、はかなき心地す。

乱れ散るべし。御調度どもは、さるべきは皆したため置きなどするままに、上  
下泣き騒ぎたるは、いとゆゆしく見ゆ。

君たちは、何心もなくてありきたまふを、母君、皆呼び据ゑたまひて、

「みづからは、かく心憂き宿世、今は見果てつれば、この世に跡とむべきに  
もあらず、ともかくもさすらへなむ。生ひ先遠うて、さすがに、散りぼひたま  
はむありさまどもの、悲しうもあべいかな。

姫君は、となるともかうなるとも、おのれに添ひたまへ。なかなか、男君た  
ちは、えさらず参うで通ひ見えたてまつらむに、人の心とどめたまふべくもあ  
らず、はしたなうてこそただよはめ。

宮のおはせむほど、形のやうに交じらひをすとも、かの大臣たちの御心にか  
かれる世にて、かく心おくべきわたりぞと、さすがに知られて、人にもなり立  
たむこと難し。さりとて、山林に引き続きまじらむこと、後の世までいみじき  
こと」

と泣きたまふに、皆、深き心は思ひ分かねど、うちひそみて泣きおはさうず。

「昔物語などを見るにも、世の常の心ざし深き親だに、時に移ろひ、人に従  
へば、おろかにのみこそなりけれ。まして、形のやうにて、見る前にだに名残  
なき心は、かかりどころありてももてないたまはじ」

と、御乳母どもさし集ひて、のたまひ嘆く。

日も暮れ、雪降りぬべき空のけしきも、心細う見ゆる夕べなり。

「いたう荒れはべりなむ。早う」

と、御迎への君達そそのかしきこえて、御目おし拭ひつつ眺めおはす。姫君  
は、殿いとかなしうしたてまつりたまふならひに、

「見たてまつらではいかでかあらむ。『今』なども聞こえて、また会ひ見ぬや

修法などし騒げど、御もののけこちたくおこりてののしるを聞きたまへば、「あるまじき疵もつき、恥ぢがましきこと、かならずありなむ」と、恐ろしうて寄りつきたまはず。

殿に渡りたまふ時も、異方に離れるたまひて、君達ばかりをぞ呼び放ちて見たてまつりたまふ。女一所、十二、三ばかりにて、また次々、男二人なむおはしける。近き年ごろとなりては、御仲も隔たりがちにてならはしたまへれど、やむごとなう、立ち並ぶ方なくてならひたまへれば、「今は限り」と見たまふに、さぶらふ人びとも、「いみじう悲し」と思ふ。

父宮、聞きたまひて、

「今は、しかかけ離れて、もて出でたまふらむに、さて、心強くものしたまふ、いと面なう人笑へなることなり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、などか従ひくづほれたまはむ」

と聞こえたまひて、にはかに御迎へあり。

北の方、御心地すこし例になりて、世の中をあさましう思ひ嘆きたまふに、かくと聞こえたまへれば、

「しひて立ちとまりて、人の絶え果てむさまを見果てて、思ひとぢめむも、今すこし人笑へにこそあらめ」

など思し立つ。

御兄弟の君達、兵衛督は、上達部におはすれば、ことごとしとて、中将、侍従、民部大輔など、御車三つばかりしておはしたり。「さこそはあべかめれ」と、かねて思ひつることなれど、さしあたりて今日を限りと思へば、さぶらふ人びとも、ほろほろと泣きあへり。

「年ごろならひたまはぬ旅住みに、狭くはしたなくては、いかでかあまたはさぶらはむ。かたへは、おのおの里にまかでて、しづませたまひなむに」  
など定めて、人びとおのがじし、はかなきものどもなど、里に払ひやりつつ、

うちにも、「このころばかりだに、ことなく、うつし心にあらせたまへ」と念じたまふ。「まことの心ばへのあはれなるを見ず知らずは、かうまで思ひ過ぐすべくもなきけ疎さかな」と、思ひゐたまへり。

暮るれば、例の、急ぎ出でたまふ。御装束のことなども、めやすくしなしたまはず、世にあやしう、うちあはぬさまにのみむつかりたまふを、あざやかなる御直衣なども、え取りあへたまはで、いと見苦し。

昨夜のは、焼けとほりて、疎ましげに焦れたるにほひなども、ことやうなり。御衣どもに移り香もしみたり。ふすべられけるほどあらはに、人も倦じたまひぬべければ、脱ぎ替へて、御湯殿など、いたうつくろひたまふ。

木工の君、御薫物しつつ、

「ひとりゐて焦がるる胸の苦しきに

思ひあまれる炎とぞ見し

名残なき御もてなしは、見たてまつる人だに、ただにやは」

と、口おほひてゐたる、まみ、いといたし。されど、「いかなる心にて、かやうの人にものを言ひけむ」などのみぞおぼえたまひける。情けなきことよ。

「憂きことを思ひ騒げばさまさまに

くゆる煙ぞいとど立ちそふ

いとことのほかなることどもの、もし聞こえあらば、中間になりぬべき身なめり」

と、うち嘆きて出でたまひぬ。

一夜ばかりの隔てだに、まためづらしう、をかしさまさりておぼえたまふありさまに、いとど心を分くべくもあらずおぼえて、心憂ければ、久しう籠もりゐたまへり。

「例の御もののけの、人に疎ませむとするわざ」

と、御前なる人びとも、いとほしう見たてまつる。

立ち騒ぎて、御衣どもたてまつり替へなどすれど、そこらの灰の、鬢のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に満ちたる心地すれば、きよらを尽くしたまふわたりに、さながら参うでたまふべきにもあらず。

「心違ひとはいひながら、なほめづらしう、見知らぬ人の御ありさまなりや」と爪弾きせられ、疎ましうなりて、あはれと思ひつる心も残らねど、「このころ、荒立てては、いみじきこと出で来なむ」と思ししづめて、夜中になりぬれど、僧など召して、加持参り騒ぐ。呼ばひののしりたまふ声など、思ひ疎みたまはむにことわりなり。

夜一夜、打たれ引かれ、泣きまどひ明かしたまひて、すこしうち休みたまへるほどに、かしこへ御文たてまつれたまふ。

「昨夜、にはかに消え入る人のほしにより、雪のけしきもふり出でがたく、やすらひはべしに、身さへ冷えてなむ。御心をばさるものにて、人いかに取りなしはべりけむ」

と、きすくに書きたまへり。

「心さへ空に乱れし雪もよに

ひとり冴えつる片敷の袖

堪へがたくこそ」

と、白き薄様に、つつやかに書いたまへれど、ことにをかしきところもなし。手はいときよげなり。才かしくくなどぞものしたまひける。

尚侍の君、夜がれを何とも思されぬに、かく心ときめきしたまへるを、見も入れたまはねば、御返りなし。男、胸つぶれて、思ひ暮らしたまふ。

北の方は、なほいと苦しげにしたまへば、御修法など始めさせたまふ。心の

けれ。よそにても、思ひだにおこせたまはば、袖の氷も解けなむかし」  
など、なごやかに言ひるたまへり。

御火取り召して、いよいよ焚きしめさせたてまつりたまふ。みづからは、萎えたる御衣ども、うちとけたる御姿、いとど細う、か弱げなり。しめりておはする、いと心苦し。御目のいたう泣き腫れたるぞ、すこしものしけれど、いとあはれと見る時は、罪なう思して、

「いかで過ぐしつる年月ぞ」と、「名残なう移ろふ心のいと軽きぞや」とは思ふ思ふ、なほ心懸想は進みて、そら嘆きをうちしつつ、なほ装束したまひて、小さき火取り取り寄せて、袖に引き入れてしめるたまへり。

なつかしきほどに萎えたる御装束に、容貌も、かの並びなき御光にこそ圧されるれど、いとあざやかに男々しきさまして、ただ人と見えぬ、心恥づかしげなり。

侍に、人びと声して、

「雪すこし隙あり。夜は更けぬらむかし」

など、さすがにまほにはあらで、そそのかしきこえて、声づくりあへり。

中將、木工など、「あはれの世や」などうち嘆きつつ、語らひて臥したるに、正身は、いみじう思ひしづめて、らうたげに寄り臥したまへり、と見るほどに、にはかに起き上がりて、大きな籠の下なりつる火取りを取り寄せて、殿の後ろに寄りて、さと沃かけたまふほど、人のややみあふるほどもなう、あさましきに、あきれてものしたまふ。

さるこまかなる灰の、目鼻にも入りて、おぼはれてものもおぼえず。払ひ捨てたまへど、立ち満ちたれば、御衣ども脱ぎたまひつ。

うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへりみすべくもあらずあさましけれど、

「いとよようのたまふを、例の御心違ひにや、苦しきことも出で来む。大殿の北の方の知りたまふことにもはべらず。いつき女のやうにてもものしたまへば、かく思ひ落とされたる人の上までは知りたまひなむや。人の御親げなくこそものしたまふべかめれ。かかることの聞こえあらば、いとど苦しかるべきこと」など、日一日入りみて、語らひ申したまふ。

暮れぬれば、心も空に浮きたちて、いかで出でなむと思ほすに、雪かきたれて降る。かかる空にふり出でむも、人目いとほしう、この御けしきも、憎げにふすべ恨みなどしたまはば、なかなかことつけて、われも迎ひ火つくりであるべきを、いとおいらかに、つれなうもてなしたまへるさまの、いと心苦しければ、いかにせむ、と思ひ乱れつつ、格子などもさながら、端近ううち眺めてゐたまへり。

北の方けしきを見て、  
「あやにくなめる雪を、いかで分けたまはむとすらむ。夜も更けぬめりや」  
とそそのかしたまふ。「今は限り、とどむとも」と思ひめぐらしたまへるけしき、いとあはれなり。

「かかるには、いかでか」  
とのたまふものから、

「なほ、このころばかり。心のほどを知らで、とかく人の言ひなし、大臣たちも、左右に聞き思さむことを憚りてなむ、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめて、なほ見果てたまへ。ここになど渡しては、心やすくはべりなむ。かく世の常なる御けしき見えたまふ時は、ほかぎまに分くる心も失せてなむ、あはれに思ひきこゆる」

など、語らひたまへば、

「立ちとまりたまひても、御心のほかならむは、なかなか苦しうこそあるべ

ず、涙にまつはれたるは、いとあはれなり。

こまかに匂へるところはなくて、父宮に似たてまつりて、なまめいたる容貌したまへるを、もてやつしたまへれば、いづこのはなやかなるけはひかはあらむ。

「宮の御ことを、軽くはいかが聞こゆる。恐ろしう、人聞きかたはにのたまひなしそ」とこしらへて、

「かの通ひはべる所の、いとまばゆき玉の台に、うひうひしう、きすくなるさまにて出で入るほども、かたがたに人目たつらむと、かたはらいたければ、心やすく移ろはしてむと思ひはべるなり。

太政大臣の、さる世にたぐひなき御おぼえをば、さらにも聞こえず、心恥づかしう、いたり深うおはすめる御あたりに、憎げなること漏り聞こえば、いとなむいとほしう、かたじけなかるべき。

なだらかにて、御仲よくて、語らひてものしたまへ。宮に渡りたまへりとも、忘るることははべらじ。とてもかうても、今さらに心ぎしの隔たることはあるまじけれど、世の聞こえ人笑へに、まろがためにも軽々しうなむはべるべきを、年ごろの契り違へず、かたみに後見むと、思せ」

と、こしらへ聞こえたまへば、

「人の御つらさは、ともかくも知りきこえず。世の人にも似ぬ身の憂きをなむ、宮にも思し嘆きて、今さらに人笑へなることと、御心を乱りたまふなれば、いとほしう、いかでか見えたてまつらむ、となむ。

大殿の北の方と聞こゆるも、異人にやはものしたまふ。かれは、知らぬさまにて生ひ出でたまへる人の、末の世に、かく人の親だちもてないたまふつらさをなむ、思ほしのたまふなれど、ここにはともかくも思はずや。もてないたまはむさまを見るばかり」

とのたまへば、

「昨日今日の、いと浅はかなる人の御仲らひだに、よろしき際になれば、皆思ひのどむる方ありてこそ見果つなれ。いと身も苦しげにもてなしたまひつれば、聞こゆべきこともうち出で聞こえにくくなむ。

年ごろ契りきこゆることにはあらずや。世の人にも似ぬ御ありさまを、見たてまつり果てむとこそは、こころ思ひしづめつつ過ぐし来るに、えさしもあり果つまじき御心おきてに、思し疎むな。

幼き人びともはべれば、とぎまかうぎまにつけて、おろかにはあらずと聞こえわたるを、女の御心の乱りがはしきままに、かく恨みわたりたまふ。ひとり見果てたまはぬほど、さもありぬべきことなれど、まかせてこそ、今しばし御覧じ果てめ。

宮の聞こし召し疎みて、さはやかにふと渡したてまつりてむと思しのたまふなむ、かへりていと軽々しき。まことに思しおきつることにやあらむ、しばし勘事したまふべきにやあらむ」

と、うち笑ひてのたまへる、いとねたげに心やまし。

御召人だちて、仕うまつり馴れたる木工の君、中将の御許などいふ人びとだに、ほどにつけつつ、「やすからずつらし」と思ひきこえたるを、北の方は、うつし心ものしたまふほどにて、いとなつかしううち泣きてゐたまへり。

「みづからを、ほけたり、ひがひがし、とのたまひ、恥ぢしむるは、ことわりなることになむ。宮の御ことをさへ取り混ぜのたまふぞ、漏り聞きたまはむはいとほしう、憂き身のゆかり軽々しきやうなる。耳馴れにてはべれば、今はじめていかにもものを思ひはべらず」

とて、うち背きたまへる、らうたげなり。

いとさきやかなる人の、常の御悩みに痩せ衰へ、ひはづにて、髪いとけうらにて長かりけるが、わけたるやうに落ち細りて、削ることもをさをさしたまは

ろもありけれ、ひたおもむきにすくみたまへる御心にて、人の御心動きぬべきこと多かり。

女君、人に劣りたまふべきことなし。人の御本性も、さるやむごとなき父親王の、いみじうかしづきたてまつりたまへるおぼえ、世に軽からず、御容貌なども、いとようおはしけるを、あやしう、執念き御もののけにわづらひたまひて、この年ごろ、人にも似たまはず、うつし心なき折々多くものしたまひて、御仲もあくがれてほど経にけれど、やむごとなきものとは、また並ぶ人なく思ひきこえたまへるを、めづらしう御心移る方の、なのめにだにあらず、人にすぐれたまへる御ありさまよりも、かの疑ひおきて、皆人の推し量りしことさへ、心きよくて過ぐいたまひけるなどを、ありがたうあはれと、思ひましきこえたまふも、ことわりになむ。

式部卿宮聞こし召して、

「今は、しか今めかしき人を渡して、もてかしづかむ片隅に、人悪ろくて添ひものしたまはむも、人聞きやさしかるべし。おのがあらむこなたは、いと人笑へなるさまに従ひなびかでも、ものしたまひなむ」

とのたまひて、宮の東の対を払ひしつらひて、「渡したてまつらむ」と思ひのたまふを、「親の御あたりといひながら、今は限りの身にて、たち返り見えたてまつらむこと」と、思ひ乱れたまふに、いとど御心地もあやまりて、うちはへ臥しわづらひたまふ。

本性は、いと静かに心よく、子めきたまへる人の、時々、心あやまりして、人に疎まれぬべきことなむ、うち混じりたまひける。

住まひなどの、あやしうしどけなく、もののきよらもなくやつして、いと埋れいたくもてなしたまへるを、玉を磨ける目移しに、心もとまらねど、年ごろの心ざしひき替ふるものならねば、心には、いとあはれと思ひきこえたまふ。

涙の滯の泡と消えなむ」

「心幼なの御消えどころや。さても、かの瀬は避き道かななるを、御手の先ばかりは、引き助けきこえてむや」と、ほほ笑みたまひて、

「まめやかには、思し知ることもあらむかし。世になき痴れ痴れしきも、またうしろやすさも、この世にたぐひなきほどを、さりともとなむ、頼もしき」

と聞こえたまふを、いとわりなう、聞き苦しと思いたれば、いとほしうて、のたまひ紛らはしつつ、

「内にのたまはすることなむいとほしきを、なほ、あからさまに参らせたまつらむ。おのがものと領じ果てては、さやうの御交じらひもかたげなめる世なめり。思ひそめきこえし心は違ふさまなめれど、二条の大臣は、心ゆきたまふなれば、心やすくなむ」

など、こまかに聞こえたまふ。あはれにも恥づかしくも聞きたまふこと多かれど、ただ涙にまつはれておはす。いとかう思したるさまの心苦しければ、思すさまにも乱れたまはず、ただ、あるべきやう、御心づかひを教へきこえたまふ。かしこに渡りたまはむことを、とみにも許しきこえたまふまじき御けしきなり。

内へ参りたまはむことを、やすからぬことに大将思せど、そのついでにや、まかでさせたてまつらむの御心つきたまひて、ただあからさまのほどを許しきこえたまふ。かく忍び隠ろへたまふ御ふるまひも、ならひたまはぬ心地に苦しければ、わが殿のうち修理ししつらひて、年ごろは荒らし埋もれ、うち捨てたまへりつる御しつらひ、よろづの儀式を改めいそぎたまふ。

北の方の思し嘆くらむ御心も知りたまはず、かなしうしたまひし君達をも、目にもとめたまはず、なよびかに情け情けしき心うちまじりたる人こそ、とぎまかうぎまにつけても、人のため恥がましからむことをば、推し量り思ふとこ

に、「恥づかしう、口惜しう」のみ思ほすに、もの心づきなき御けしき絶えず。殿も、いとほしう人びとも思ひ疑ひける筋を、心きよくあらはしたまひて、「わが心ながら、うちつけにねぢけたることは好まずかし」と、昔よりのことも思し出でて、紫の上にも、

「思し疑ひたりしよ」

など聞こえたまふ。「今さらに人の心癖もこそ」と思しながら、ものの苦しう思されし時、「さてもや」と、思し寄りたまひしことなれば、なほ思しも絶えず。

大将のおはせぬ昼つ方渡りたまへり。女君、あやしう悩ましげにのみもてないたまひて、すぐよかなる折もなくしをれたまへるを、かくて渡りたまへれば、すこし起き上がりたまひて、御几帳にはた隠れておはす。

殿も、用意ことに、すこしけけしきさまにもてないたまひて、おほかたのとどもなど聞こえたまふ。すぐよかなる世の常の人にならひては、まして言ふ方なき御けはひありさまを見知りたまふにも、思ひのほかなる身の、置きどころなく恥づかしきにも、涙ぞこぼれける。

やうやう、こまやかなる御物語になりて、近き御脇息に寄りかかりて、すこのぞきつつ、聞こえたまふ。いとをかしげに面瘦せたまへるさまの、見まほしう、らうたいことの添ひたまへるにつけても、「よそに見放つも、あまりなる心のすさびぞかし」と口惜し。

「おりたちて汲みは見ねども渡り川

人の瀬とはた契らざりしを

思ひのほかなりや」

とて、鼻うちかみたまふけはひ、なつかしうあはれなり。

女は顔を隠して、

「みつせ川渡らぬさきにいかでなほ

など、忍びてのたまひけり。げに、帝と聞こゆとも、人に思し落とし、はかなきほどに見えたてまつりたまひて、ものものしくもてなしたまはずは、あはつけきやうにもあべかりけり。

三日の夜の御消息ども、聞こえ交はしたまひけるけしきを伝へ聞きたまひてなむ、この大臣の君の御心を、「あはれにかたじけなく、ありがたし」とは思ひきこえたまひける。

かう忍びたまふ御仲らひのことなれど、おのづから、人のをかしきことに語り伝へつつ、次々に聞き洩らしつつ、ありがたき世語りにぞささめきける。内にも聞こし召してけり。

「口惜しう、宿世異なりける人なれど、さ思しし本意もあるを。宮仕へなど、かけかけしき筋ならばこそは、思ひ絶えたまはめ」  
などのたまはせけり。

霜月になりぬ。神事などしげく、内侍所にもこと多かるころにて、女官ども、内侍ども参りつつ、今めかしう人騒がしきに、大将殿、昼もいと隠ろへたるさまにもてなして、籠もりおはするを、いと心づきなく、尚侍の君は思したり。

宮などは、まいていみじう口惜しと思す。兵衛督は、妹の北の方の御ことをさへ、人笑へに思ひ嘆きて、とり重ねもの思ほしけれど、「をこがましう、恨み寄りても、今はかひなし」と思ひ返す。

大将は、名に立てるまめ人の、年ごろいささか乱れたるふるまひなくて過ぐしたまへる、名残なく心ゆきて、あらざりしさまに好ましう、宵暁のうち忍びたまへる出で入りも、艶にしなしたまへるを、をかすと人びと見たてまつる。

女は、わららかににぎははしくもてなしたまふ本性も、もて隠して、いといたう思ひ結ぼほれ、心もてあらぬさまはしるきことなれど、「大臣の思すらむこと、宮の御心ぎまの、心深う、情け情けしうおはせし」などを思ひ出でたまふ

「内に聞こし召さむこともかしこし。しばし人にあまねく漏らさじ」と諫め  
きこえたまへど、さしもえつつみあへたまはず。ほど経れど、いささかうちと  
けたる御けしきもなく、「思はずに憂き宿世なりけり」と、思ひ入りたまへるさ  
まのためみなきを、「いみじうつらし」と思へど、おぼろけならぬ契りのほど、  
あはれにうれしく思ふ。

見るままにめでたく、思ふさまなる御容貌、ありさまを、「よそのものに見果  
ててやみなましよ」と思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁の御許をも、並  
べて戴かまほしう思へど、女君の、深くものしと疎みにければ、え交じらはで  
籠もりるにけり。

げに、そこら心苦しげなることどもを、とりどりに見しかど、心浅き人のた  
めにぞ、寺の験も現はれける。

大臣も、「心ゆかず口惜し」と思せど、いふかひなきことにて、「誰れも誰れ  
もかく許しそめたまへることなれば、引き返し許さぬけしきを見せむも、人の  
ためいとほしう、あいなし」と思して、儀式いと二なくもてかしづきたまふ。  
いつしかと、わが殿に渡いたてまつらむことを思ひいそぎたまへど、軽々し  
くふとうちとけ渡りたまはむに、かしこに待ち取りて、よくも思ふまじき人の  
ものしたまふなるが、いとほしさにことづけたまひて、

「なほ、心のどかに、なだらかなるさまにて、音なく、いづ方にも、人のそ  
しり恨みなかるべくをもてなしたまへ」

とぞ聞こえたまふ。

父大臣は、

「なかなかめやすかめり。ことにこまかなる後見なき人の、なまほの好いた  
る宮仕へに出で立ちて、苦しげにやあらむとぞ、うしろめたかりし。心ざしは  
ありながら、女御かくてもものしたまふをおきて、いかがもてなさまし」

真木柱

真  
木  
柱

思しだに知らば、慰む方もありぬべくなむ」

とて、いとかしけたる下折れの霜も落とさず持て参れる御使さへぞ、うちあひたるや。

式部卿宮の左兵衛督は、殿の上の御はらからぞかし。親しく参りなどしたまふ君なれば、おのづからいとよくものの案内も聞きて、いみじくぞ思ひわびける。いと多く怨み続けて、

「忘れなむと思ふものの悲しきを

いかさまにしていかさまにせむ」

紙の色、墨つき、しめたる匂ひも、さまざまなるを、人びとも皆、

「思し絶えぬべかめるこそ、さうざうしけれ」

など言ふ。

宮の御返りをぞ、いかが思すらむ、ただいささかにて、

「心もて光に向かふ葵だに

朝おく霜をおのれやは消つ」

とほのかなるを、いとめづらしと見たまふに、みづからはあはれを知りぬべき御けしきにかけたまひつれば、つゆばかりなれど、いとうれしかりけり。

かやうに何となけれど、さまざまなる人びとの、御わびことも多かり。

女の御心ばへは、この君をなむ本にすべきと、大臣たち定めきこえたまひけりとや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

まつりて、さしつぎの御おぼえ、いとやむごとなき君なり。年三十二三のほどにものしたまふ。

北の方は、紫の上の御姉ぞかし。式部卿宮の御大君よ。年のほど三つ四つがこのかみは、ことなるかたはにもあらぬを、人柄やいかがおはしけむ、「嫗」とつけて心にも入れず、いかで背きなむと思へり。

その筋により、六条の大臣は、大将の御ことは、「似げなくいとほしからむ」と思したるなめり。色めかしくうち乱れたるところなきさまながら、いみじくぞ心を尽くしありきたまひける。

「かの大臣も、もて離れても思したらざなり。女は、宮仕へをもの憂げに思いたなり」と、うちうちのけしきも、さる詳しきたよりあれば、漏り聞きて、

「ただ大殿の御おもむけの異なるにこそはあなれ。まことの親の御心だに違はずは」

と、この弁の御許にも責ためたまふ。

九月にもなりぬ。初霜むすぼほれ、艶なる朝に、例の、とりどりなる御後見どもの、引きそばみつつ持て参る御文どもを、見たまふこともなくて、読みきこゆるばかりを聞きたまふ。大将殿のには、

「なほ頼み来しも、過ぎゆく空のけしきこそ、心尽くしに、

数ならば厭ひもせまし長月に

命をかくるほどぞはかなき」

「月たたば」とある定めを、いとよく聞きたまふなめり。

兵部卿宮は、

「いふかひなき世は、聞こえむ方なきを、

朝日さす光を見ても玉笹の

葉分けの霜を消たずもあらなむ

「妹背山深き道をば尋ねずて  
緒絶の橋に踏み迷ひける

よ」

と恨むるも、人やりならず。

「惑ひける道をば知らず妹背山

たどたどしくぞ誰も踏み見し」

「いづ方のゆゑとなむ、え思し分かぎめりし。何ごとも、わりなきまで、おほかたの世を憚らせたまふめれば、え聞こえさせたまはぬになむ。おのづからかくのみもはべらじ」

と聞こゆるも、さることなれば、

「よし、長居しはべらむも、すさまじきほどなり。やうやう労積もりてこそは、かことをも」

とて、立ちたまふ。

月隈なくさし上がりて、空のけしきも艶なるに、いとあてやかにきよげなる容貌して、御直衣の姿、好ましくはなやかにて、いとをかし。

宰相中將のけはひありさまには、え並びたまはねど、これもをかしかめるは、  
「いかでかかる御仲らひなりけむ」と、若き人びとは、例の、さるまじきことをも取り立ててめであへり。

大將は、この中將は同じ右の次將なれば、常に呼び取りつつ、ねむごろに語らひ、大臣にも申させたまひけり。人柄もいとよく、朝廷の御後見となるべかめる下形なるを、「などかはあらむ」と思しながら、「かの大臣のかくしたまへることを、いかがは聞こえ返すべからむ。さるやうあることにこそ」と、心得たまへる筋さへあれば、任せきこえたまへり。

この大將は、春宮の女御の御はらからにぞおはしける。大臣たちをおきたて

もはべらねど、絶えぬたとひもはべなるは。いかにぞや、古代のことなれど、頼もしくぞ思ひたまへける」

とて、ものしと思ひたまへり。

「げに、年ごろの積もりも取り添へて、聞こえまほしけれど、日ごろあやしく悩ましくはべれば、起き上がりなどもえしはべらでなむ。かくまでとがめたまふも、なかなか疎々しき心地なむしはべりける」

と、いとまめだちて聞こえ出だしたまへり。

「悩ましく思さるらむ御几帳のものをば、許させたまふまじくや。よしよし。げに、聞こえさするも、心地なかりけり」

とて、大臣の御消息ども忍びやかに聞こえたまふ用意など、人には劣りたまはず、いとめやすし。

「参りたまはむほどの案内、詳しくさまもえ聞かぬを、うちうちにのたまはむなむよからむ。何ごとも人目に憚りて、え参り来ず、聞こえぬことをなむ、なかなかいぶせく思したる」

など、語りきこえたまふついでに、

「いでや、をこがましきことも、えぞ聞こえさせぬや。いづ方につけても、あはれをば御覧じ過ぐすべくやはありけると、いよいよ恨めしさも添ひはべるかな。まづは、今宵などの御もてなしよ。北面だつ方に召し入れて、君達こそめざましくも思し召さめ、下仕へなどやうの人びととだに、うち語らはばや。またかかるやうはあらじかし。さまざまにめづらしき世なりかし」

と、うち傾きつつ、恨み続けたるもをかしければ、かくなむと聞こゆ。

「げに、人聞きを、うちつけなるやうにやと憚りはべるほどに、年ごろの埋れいたさをも、あきらめはべらぬは、いとなかなかなること多くなむ」

と、ただすくよかに聞こえなしたまふに、まばゆくて、よろづおしこめたり。

と思すにぞ、「げに、宮仕への筋にて、けぎやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひ寄りたまひけるかな」と、むくつけく思さる。

かくて御服など脱ぎたまひて、

「月立たば、なほ参りたまはむこと忌あるべし。十月ばかりに」

と思しのたまふを、内にも心もとなく聞こし召し、聞こえたまふ人びとは、誰も誰も、いと口惜しくて、この御参りの先にと、心寄せのよすががよすがに責めわびたまへど、

「吉野の滝を堰かむよりも難きことなれば、いとわりなし」

と、おのおの応ふ。

中将も、なかなかなることをうち出でて、「いかに思すらむ」と苦しきままに、駆けりありきて、いとねむごろに、おほかたの御後見を思ひあつかひたるさまにて、追従しありきたまふ。たはやすく、軽らかにうち出でては聞こえかかりたまはず、めやすくもてしづめたまへり。

まことの御はらからの君たちは、え寄り来ず、「宮仕へのほどの御後見を」と、おのおの心もとなくぞ思ひける。

頭中将、心を尽くしわびしことは、かき絶えにたるを、「うちつけなりける御心かな」と、人びとはをかしがるに、殿の御使にておはしたり。なほもて出でず、忍びやかに御消息なども聞こえ交はしたまひければ、月の明かき夜、桂の蔭に隠れてものしたまへり。見聞き入るべくもあらざりしを、名残なく南の御簾の前に据ゑたてまつる。

みづから聞こえたまはむことはしも、なほつつましなければ、宰相の君して応へ聞こえたまふ。

「なにがしらを選びてたてまつりたまへるは、人伝てならぬ御消息にこそはべらめ。かくもの遠くては、いかが聞こえさすべからむ。みづからこそ、数に

ものの、公事などにもおぼめかしからず、はかばかしくて、主上の常に願はせたまふ御心には、違ふまじ」

などのたまふけしきの見まほしければ、

「年ごろかくて育みきこえたまひける御心ぎしを、ひがさまにこそ人は申すなれ。かの大臣も、さやうになむおもむけて、大将の、あなたさまのたよりにけしきばみたりけるにも、応へける」

と聞こえたまへば、うち笑ひて、

「かたがたいと似げなきことかな。なほ、宮仕へをも、御心許して、かくなむと思されむさまにぞ従ふべき。女は三つに従ふものにこそあなれど、ついでを違へて、おのが心にまかせむことは、あるまじきことなり」

とのたまふ。

「うちうちにも、やむごとなきこれかれ、年ごろを経てもものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、捨てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕への筋に、領ぜむと思しおきつる、いとかしこくかどあることなりとなむ、よろこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり」

と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、「げに、さは思ひたまふらむかし」と思すに、いとほしくて、

「いとまがまがしき筋にも思ひ寄りたまひけるかな。いたり深き御心ならひならむかし。今おのづから、いづ方につけても、あらはなることありなむ。思ひ隈なしや」

と笑ひたまふ。御けしきはげやかなれど、なほ、疑ひは置かる。大臣も、

「さりや。かく人の推し量る、案に落つることもあらましかば、いと口惜しくねぢけたらまし。かの大臣に、いかで、かく心清きさまを知らせたてまつらむ」

て、いと心深きあはれを尽くし、言ひ悩ましたまふになむ、心やしみたまふらむと思ふになむ、心苦しき。

されど、大原野の行幸に、主上を見たてまつりたまひては、いとめでたくおはしけり、と思ひたまへりき。若き人は、ほのかにも見たてまつりて、えしも宮仕への筋もて離れじ。さ思ひてなむ、このこともかくものせし」

などのたまへば、

「さて、人ぎまは、いづ方につけてかは、たぐひてものしたまふらむ。中宮、かく並びなき筋にておはしまし、また、弘徽殿、やむごとなく、おぼえことにてものしたまへば、いみじき御思ひありとも、立ち並びたまふこと、かたくこそはべらめ。

宮は、いとねむごろに思したなるを、わざと、さる筋の御宮仕へにもあらぬものから、ひき違へたらむさまに御心おきたまはむも、さる御仲らひにては、いといとほしくなむ聞きたまふる」

と、おとなおとなしく申したまふ。

「かたしや。わが心ひとつなる人の上にもあらぬを、大将さへ、我をこそ恨むなれ。すべて、かかることの心苦しきを見過ぐさで、あやなき人の恨み負ふ、かへりては軽々しきわざなりけり。かの母君の、あはれに言ひおきしことの忘れざりしかば、心細き山里になど聞きしを、かの大臣、はた、聞き入れたまふべくもあらずと愁へしに、いとほしくて、かく渡しはじめたるなり。ここにかくものめかすとて、かの大臣も人めかいたまふなめり」

と、つきづきしくのたまひなす。

「人柄は、宮の御人にていとよかるべし。今めかしく、いとなまめきたるさまして、さすがにかしこく、過ちすまじくなどして、あはひはめやすからむ。さてまた、宮仕へにも、いとよく足らひたらむかし。容貌よく、らうらうじき

薄紫やかことならまし

かやうにて聞こゆるより、深きゆゑはいかが」

とのたまへば、すこしうち笑ひて、

「浅きも深きも、思し分く方ははべりなむと思ひたまふる。まめやかには、いとかたじけなき筋を思ひ知りながら、えしづめはべらぬ心のうちを、いかでかしろしめさるべき。なかなか思し疎まむがわびしきに、いみじく籠めはべるを、今はた同じと、思ひたまへわびてなむ。

頭中将のけしきは御覧じ知りきや。人の上に、なんと思ひはべりけむ。身にこそ、いとをこがましく、かつは思ひたまへ知られけれ。なかなか、かの君は思ひさまして、つひに、御あたり離るまじき頼みに、思ひ慰めたるけしきなど見はべるも、いとうらやましくねたきに、あはれとだに思しおけよ」  
など、こまかに聞こえ知らせたまふこと多かれど、かたはらいたければ書かぬなり。

尚侍の君、やうやう引き入りつつ、むつかしと思したれば、

「心憂き御けしきかな。過ちすまじき心のほどは、おのづから御覧じ知らるるやうもはべらむものを」

とて、かかるついでに、今すこし漏らさまほしけれど、

「あやしくなやましくなむ」

とて、入り果てたまひぬれば、いといたくうち嘆きて立ちたまひぬ。

「なかなかにもうち出でてけるかな」と、口惜しきにつけても、かの、今すこし身にしみておぼえし御けはひを、かばかりの物越しにても、「ほのかに御声をだに、いかならむついでにか聞かむ」と、やすからず思ひつつ、御前に参りたまへれば、出でたまひて、御返りなど聞こえたまふ。

「この宮仕へを、しづげにこそ思ひたまへれ。宮などの、練じたまへる人に

にさぶらふべくなむ思ひたまふる」

と聞こえたまへば、

「たぐひたまはむもこととしきやうにやはべらむ。忍びやかにてこそよくはべらめ」

とのたまふ。この御服などの詳しきさまを、人にあまねく知らせじとおもむけたまへるけしき、いと労あり。中将も、

「漏らさじと、つつませたまふらむこそ、心憂けれ。忍びがたく思ひたまへらるる形見なれば、脱ぎ捨てはべらむことも、いともの憂くはべるものを。さても、あやしうもて離れぬことの、また心得がたきにこそはべれ。この御あらはし衣の色なくは、えこそ思ひたまへ分くまじかりけれ」

とのたまへば、

「何ごとも思ひ分かぬ心には、ましてともかくも思ひたまへたどられはべらねど、かかる色こそ、あやしくものあはれなるわざにはべりけれ」

とて、例よりもしめりたる御けしき、いとらうたげにをかし。

かかるついでにとや思ひ寄りけむ、蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、

「これも御覧すべきゆゑはありけり」

とて、とみにも許きで持たまへれば、うつたへに思ひ寄らで取りたまふ御袖を、引き動かしたり。

「同じ野の露にやつるる藤袴

あはれはかけよかことばかりも」

「道の果てなる」とかや、いと心づきなくうたてなりぬれど、見知らぬさまに、やをら引き入りて、

「尋ぬるにはるけき野辺の露ならば

みて見たてまつるに、宰相中将、同じ色の、今すこしこまやかなる直衣姿にて、  
櫻巻きたまへる姿しも、またいとなまめかしくきよらにておはしたり。

初めより、ものまめやかに心寄せきこえたまへば、もて離れて疎々しきさま  
には、もてなしたまはざりしならひに、今、あらざりけりとて、こよなく変は  
らむもうたてあれば、なほ御簾に几帳添へたる御対面は、人伝てならでありけ  
り。殿の御消息にて、内より仰せ言あるさま、やがてこの君のうけたまはりた  
まへるなりけり。

御返り、おほどかなるものから、いとめやすく聞こえなしたまふけはひの、  
らうらうじくなつかしきにつけても、かの野分の朝の御朝顔は、心にかかりて  
恋しきを、うたてある筋に思ひし、聞き明らめて後は、なほもあらぬ心地添ひ  
て、

「この宮仕ひを、おほかたにしも思し放たじかし。さばかり見所ある御あは  
ひどもにて、をかしきさまなることのわづらはしき、はた、かならず出で来な  
むかし」

と思ふに、ただならず、胸ふたがる心地すれど、つれなくすくよかにて、

「人に聞かすまじとはべりつることを聞こえさせむに、いかがはべるべき」

とけしき立てば、近くさぶらふ人も、すこし退きつつ、御几帳のうしろなど  
にそばみあへり。

そら消息をつきづきしくとり続けて、こまやかに聞こえたまふ。主上の御け  
しきのただならぬ筋を、さる御心したまへ、などやうの筋なり。いらへたまは  
む言もなくて、ただうち嘆きたまへるほど、忍びやかに、うつくしくいとなつ  
かしきに、なほえ忍ぶまじく、

「御服も、この月には脱がせたまふべきを、日ついでなむ吉ろしからざりけ  
る。十三日に、河原へ出でさせたまふべきよしのたまはせつ。なにがしも御供

尚侍の御宮仕へのことを、誰れも誰れもそそのかしたまふも、

「いかならむ。親と思ひきこゆる人の御心だに、うちとくまじき世なりければ、ましてきやうの交じらひにつけて、心よりほかに便なきこともあらば、中宮も女御も、方がたにつけて心おきたまはば、はしたなからむに、わが身はかくはかなきさまにて、いづ方にも深く思ひとどめられたてまつれるほどもなく、浅きおぼえにて、ただならず思ひ言ひ、いかで人笑へなるさまに見聞きなきむと、うけひたまふ人びとも多く、とかくにつけて、やすからぬことのみありぬべき」を、もの思し知るまじきほどにしあらねば、さまさまに思ほし乱れ、人知れずもの嘆かし。

「さりとて、かかるありさまも悪しきことはなけれど、この大臣の御心ばへの、むつかしく心づきなきも、いかなるついでにかは、もて離れて、人の推し量るべかめる筋を、心きよくもあり果つべき。

まことの父大臣も、この殿の思さむところ、憚りたまひて、うけばりてとり放ち、けぎやぎたまふべきことにもあらねば、なほとてもかくても、見苦しう、かけかけしきありさまにて、心を悩まし、人にもて騒がるべき身なめり」

と、なかなかこの親尋ねきこえたまひて後は、ことに憚りたまふけしきもなき大臣の君の御もてなしを取り加へつつ、人知れずなむ嘆かしかりける。

思ふことを、まほならずとも、片端にてもうちかすめつべき女親もおはせず、いづ方もいづ方も、いと恥づかしげに、いとうるはしき御さまどもには、何ごとをかは、さなむ、かくなむとも聞こえ分きたまはむ。世の人に似ぬ身のありさまを、うち眺めつつ、夕暮の空のあはれげなるけしきを、端近うて見出だしたまへるさま、いとをかし。

薄き鈍色の御衣、なつかしきほどにやつれて、例に変はりたる色あひにしも、容貌はいとはなやかにもてはやされておはするを、御前なる人びとは、うち笑

藤 袴

藤

袴

なご、ちまぢまぢま言ひけり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyra/index.html>)

と召せば、

「を」

と、いとけぎやかに聞こえて、出で来たり。

「いと、仕へたる御けはひ、公人にて、げにいかにあひたらむ。尚侍のことは、などか、おのれに疾くはものせざりし」

と、いとまめやかにてのたまへば、いとうれしと思ひて、

「さも、御けしき賜はらまほしうはべりしかど、この女御殿など、おのづから伝へ聞こえさせたまひてむと、頼みふくれてなむさぶらひつるを、なるべき人ものしたまふやうに聞きたまふれば、夢に富したる心地しはべりてなむ、胸に手を置きたるやうにはべる」

と申したまふ。舌ぶりいともさはやかなり。笑みたまひぬべきを念じて、

「いとあやしう、おぼつかなき御癖なりや。さも思しのたまはましかば、まづ人の先に奏してまし。太政大臣の御女、やむごとなくとも、ここに切に申さむことは、聞こし召さぬやうあらざらまし。今にても、申し文を取り作りて、びびしう書き出だされよ。長歌などの心ばへあらむを御覧ぜむには、捨てさせたまはじ。主上は、そのうちに情け捨てずおはしませば」

など、いとようすかしたまふ。人の親げなく、かたはなりや。

「大和歌は、悪し悪しも続けはべりなむ。むねむねしき方のことはた、殿より申させたまはば、つま声のやうにて、御徳をもかうぶりはべらむ」

とて、手を押しすりて聞こえりたり。御几帳のうしろなどにて聞く女房、死ぬべくおぼゆ。もの笑ひに堪へぬは、すべり出でてなむ、慰めける。女御も御面赤みて、わりなう見苦しと思したり。殿も、

「ものむつかしき折は、近江の君見るこそ、よろづ紛るれ」

とて、ただ笑ひ種につくりたまへど、世人は、

「恥ぢがてら、はしたなめたまふ」

などのたまふに、腹立ちて、

「めでたき御仲に、数ならぬ人は、混じるまじかりけり。中将の君ぞつらくおはする。さかしらに迎へたまひて、軽めあざけりたまふ。せうせうの人は、え立てるまじき殿の内かな。あな、かしこ。あな、かしこ」

と、後へさまにゐざり退きて、見おこせたまふ。憎げもなけれど、いと腹悪しげに目尻引き上げたり。

中将は、かく言ふにつけても、「げにし過ちたること」と思へば、まめやかにてもものしたまふ。少将は、

「かかる方にも、類ひなき御ありさまを、おろかにはよも思さじ。御心しづめたまうてこそ。堅き巖も沫雪になしたまうつべき御けしきなれば、いとよう思ひかなひたまふ時もありなむ」

と、ほほ笑みて言ひるたまへり。中将も、

「天の岩門鎖し籠もりたまひなむや、めやすく」

とて、立ちぬれば、ほろほろと泣きて、

「この君達さへ、皆すげなくしたまふに、ただ御前の御心のあはれにおはしませば、さぶらふなり」

とて、いとかやすく、いそしく、下臈童女などの仕うまつりたらぬ雑役をも、立ち走り、やすく惑ひありきつつ、心ざしを尽くして宮仕へしありきて、

「尚侍に、おれを、申しなしたまへ」

と責めきこゆれば、あさまじう、「いかに思ひて言ふことならむ」と思すに、ものも言はれたまはず。

大臣、この望みを聞きたまひて、いとはなやかにうち笑ひたまひて、女御の御方に参りたまへるついでに、

「いづら、この、近江の君。こなたに」

とぞ聞こえさせたまひける。

父大臣は、

「ほのかなりしさまを、いかでさやかにまた見む。なまかたほなること見えたまはば、かうまでことごとしうもてなし思さじ」

など、なかなか心もとなう恋しう思ひきこえたまふ。

今ぞ、かの御夢も、まことに思しあはせける。女御ばかりには、さだかなることのさまを聞こえたまうけり。

世の人聞きに、「しばしこのこと出ださじ」と、切に籠めたまへど、口さがなきものは世の人なりけり。自然に言ひ漏らしつつ、やうやう聞こえ出で来るを、かのさがな者の君聞きて、女御の御前に、中将、少将さぶらひたまふに出でて、

「殿は、御女まうけたまふべかなり。あな、めでたや。いかなる人、二方にもてなさるらむ。聞けば、かれも劣り腹なり」

と、あふなげにのたまへば、女御、かたはらいたしと思して、ものものたまはず。中将、

「しか、かしづかるべきゆるこそものしたまふらめ。さても、誰が言ひしことを、かくゆくりなくうち出でたまふぞ。もの言ひただならぬ女房などこそ、耳とどむれ」

とのたまへば、

「あなかま。皆聞きてはべり。尚侍になるべかなり。宮仕へにと急ぎ出で立ちはべりしことは、さやうの御かへりみもやとてこそ、なべての女房たちだけに仕うまつらぬことまで、おりたち仕うまつれ。御前のつらくおはしますなり」と、恨みかくれば、皆ほほ笑みて、

「尚侍あかば、なにがしこそ望まむと思ふを、非道にも思しかけるかな」

親王たち、次々、人びと残るなく集ひたまへり。御懸想人もあまた混じりたまへれば、この大臣、かく入りおはしてほど経るを、いかなることにかと疑ひたまへり。

かの殿の君達、中将、弁の君ばかりぞ、ほの知りたまへりける。人知れず思ひしことを、からうも、うれしうも思ひなりたまふ。弁は、

「よくぞうち出でざりける」とささめきて、「さま異なる大臣の御好みどもなめり。中宮の御類ひに仕立てたまはむとや思すらむ」

など、おのおの言ふよしを聞きたまへど、

「なほ、しばしは御心づかひしたまうて、世にそしりなきさまにもてなさせたまへ。何ごとも、心やすきほどの人こそ、乱りがはしう、ともかくもはべべかめれ、こなたをもそなたをも、さまざま人の聞こえ悩まさむ、ただならむよりはあぢきなきを、なだらかに、やうやう人目をも馴らすなむ、よきことにははべるべき」

と申したまへば、

「ただ御もてなしになむ従ひはべるべき。かうまで御覧ぜられ、ありがたき御育みに隠ろへはべりけるも、前の世の契りおろかならじ」

と申したまふ。

御贈物など、さらにもいはず、すべて引出物、禄ども、品々につけて、例あること限りあれど、またこと加へ、二なくせさせたまへり。大宮の御悩みにことづけたまうし名残もあれば、ことことしき御遊びなどはなし。

兵部卿宮、

「今はことづけやりたまふべき滞りもなきを」

と、おりたち聞こえたまへど、

「内より御けしきあること、かへさひ奏し、またまた仰せ言に従ひてなむ、異ぎまのことは、ともかくも思ひ定むべき」

ら、やう変はりて思さる。

亥の時にて、入れたてまつりたまふ。例の御まうけをばさるものにて、内の御座いと二なくしつらはせたまうて、御肴参らせたまふ。御殿油、例のかかる所よりは、すこし光見せて、をかしきほどにもてなしきこえたまへり。

いみじうゆかしう思ひきこえたまへど、今宵はいとゆくりかなべければ、引き結びたまふほど、え忍びたまはぬけしきなり。

主人の大臣、

「今宵は、いにしへぎまのことはかけはべらねば、何のあやめも分かせたまふまじくなむ。心知らぬ人目を飾りて、なほ世の常の作法に」

と聞こえたまふ。

「げに、さらに聞こえさせやるべき方はべらずなむ」

御土器参るほどに、

「限りなきかしこまりをば、世に例なきことと聞こえさせながら、今までかく忍びこめさせたまひける恨みも、いかが添へはべらざらむ」

と聞こえたまふ。

「恨めしや沖つ玉藻をかづくまで

磯がくれける海人の心よ」

とて、なほつつみもあへずしほたれたまふ。姫君は、いと恥づかしき御さまどものさし集ひ、つつましきに、え聞こえたまはねば、殿、

「よるべなみかかる渚にうち寄せて

海人も尋ねぬ藻屑とぞ見し

いとわりなき御うちつけごとになむ」

と聞こえたまへば、

「いとことわりになむ」

と、聞こえやる方なくて、出でたまひぬ。

なく思ひなむ。父親王の、いとかなしうしたまひける、思ひ出づれば、人に落さむはいと心苦しき人なり」

と聞こえたまふ。御小桂の袂に、例の、同じ筋の歌ありけり。

「わが身こそ恨みられけれ唐衣

君が袂に馴れずと思へば」

御手は、昔だにありしを、いとわりなうしじかみ、彫深う、強う、堅う書きたまへり。大臣、憎きものの、をかしさをばえ念じたまはで、

「この歌詠みつらむほどこそ。まして今は力なくて、所狭かりけむ」

と、いとほしがりたまふ。

「いで、この返りこと、騒がしうとも、われせむ」

とのたまひて、

「あやしう、人の思ひ寄るまじき御心ばへこそ、あらでもありぬべけれ」

と、憎さに書きたまうて、

「唐衣また唐衣唐衣

かへすがへすも唐衣なる」

とて、

「いとまめやかに、かの人の立てて好む筋なれば、ものしてはべるなり」

とて、見せたてまつりたまへば、君、いとにほひやかに笑ひたまひて、

「あな、いとほし。弄じたるやうにもはべるかな」

と、苦しがりたまふ。ようなしごといと多かりや。

内大臣は、さしも急がれたまふまじき御心なれど、めづらかに聞きたまうし後は、いつしかと御心にかかりたれば、疾く参りたまへり。

儀式など、あべい限りにまた過ぎて、めづらしきさまにしなさせたまへり。「げにわざと御心とどめたまうけること」と見たまふも、かたじけなきものか

手ふるひにけり」

など、うち返し見たまうて、

「よくも玉櫛笥にまつはれたるかな。三十一字の中に、異文字は少なく添へたることのかたきなり」

と、忍びて笑ひたまふ。

中宮より、白き御裳、唐衣、御装束、御髪上の具など、いと二なくて、例の、壺どもに、唐の薫物、心ことに香り深くてたてまつりたまへり。

御方々、皆心々に、御装束、人びとの料に、櫛扇まで、とりどりにし出でたまへるありさま、劣りまさらず、さまざまにつけて、かばかりの御心ばせどもに、挑み尽くしたまへれば、をかしう見ゆるを、東の院の人びとも、かかる御いそぎは聞きたまうけれども、訪らひきこえたまふべき数ならねば、ただ聞き過ぐしたるに、常陸の宮の御方、あやしうものうるはしう、さるべきことの折過ぐさぬ古代の御心にて、いかでかこの御いそぎを、よそのこととは聞き過ぐさむ、と思して、形のごとなむし出でたまうける。

あはれなる御心ざしなりかし。青鈍の細長一襲、落栗とかや、何とかや、昔の人のめでたうしける袷の袴一具、紫のしらきり見ゆる霰地の御小桂と、よき衣篋に入れて、包いとうるはしうて、たてまつれたまへり。

御文には、

「知らせたまふべき数にもはべらねば、つつましかれど、かかる折は思たまへ忍びがたくなむ。これ、いとあやしけれど、人にも賜はせよ」

と、おいらかなり。殿、御覧じつけて、いとあさましう、例の、と思すに、御顔赤みぬ。

「あやしき古人にこそあれ。かくものづつみしたる人は、引き入り沈み入るたるこそよけれ。さすがに恥ぢがましや」とて、「返りことはつかはせ。はした

と、よろづに思しけり。

かくのたまふは、二月朔日ころなりけり。十六日、彼岸の初めにて、いと吉き日なりけり。近うまた吉き日なしと勘へ申しけるうちに、宮よろしうおはしませば、いそぎ立ちたまうて、例の渡りたまうても、大臣に申しあらはししまなど、いとこまかにあべきことども教へきこえたまへば、

「あはれなる御心は、親と聞こえながらも、ありがたからむを」と思すものから、いとなむうれしかりける。

かくて後は、中将の君にも、忍びてかかることの心のたまひ知らせけり。

「あやしのことどもや。むべなりけり」  
と、思ひあはすることどもあるに、かのつれなき人の御ありさまよりも、なほもあらず思ひ出でられて、「思ひ寄らざりけることよ」と、しれじれしき心地す。されど、「あるまじう、ねじけたるべきほどなりけり」と、思ひ返すことこそは、ありがたきまめしきなめれ。

かくてその日になりて、三条の宮より、忍びやかに御使あり。御櫛の篋など、にはかなれど、ことどもいとよらにしたまうて、御文には、

「聞こえむにも、いまいましきありさまを、今日は忍びこめはべれど、さるかたにても、長き例ばかりを思し許すべうや、とてなむ。あはれにうけたまはり、あきらめたる筋をかけきこえむも、いかが。御けしきに従ひてなむ。

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛篋

わが身はなれぬ懸子なりけり」

と、いと古めかしうわななきたまへるを、殿もこなたにおはしまして、ことども御覧じ定むるほどなれば、見たまうて、

「古代なる御文書きなれど、いたしや、この御手よ。昔は上手にもものしたまひけるを、年に添へて、あやしく老いゆくものにこそありけれ。いとからく御

し用意なしと思しおきてければ、口入れむことも人悪く思しとどめ、かの大臣はた、人の御けしきなきに、さし過ぐしがたくて、さすがにむすぼほれたる心地したまうけり。

「今宵も御供にさぶらふべきを、うちつけに騒がしくもやとてなむ。今日のかしこまりは、ことさらになむ参るべくはべる」

と申したまへば、

「さらば、この御悩みもよろしう見えたまふを、かならず聞こえし日違へさせたまはず、渡りたまふべき」よし、聞こえ契りたまふ。

御けしきどもようて、おのおの出でたまふ響き、いとかめし。君達の御供の人びと、

「何ごとありつるならむ。めづらしき御対面に、いと御けしきよげなりつるは」

「また、いかなる御譲りあるべきにか」

など、ひが心を得つつ、かかる筋とは思ひ寄りざりけり。

大臣、うちつけにいといぶかしう、心もとなうおぼえたまへど、

「ふと、しか受けとり、親がらむも便なからむ。尋ね得たまへらむ初めを思ふに、定めて心きよう見放ちたまはじ。やむごとなき方々を憚りて、うけばりてその際にはもてなさず、さすがにわづらはしう、ものの聞こえを思ひて、かく明かしたまふなめり」

と思すは、口惜しけれど、

「それを疵とすべきことかは。ことさらにも、かの御あたりに触ればはせむに、などかおぼえの劣らむ。宮仕へざまにおもむきたまへらば、女御などの思さむこともあぢきなし」と思せど、」ともかくも、思ひ寄りのたまはむおきてを違ふべきことかは」

に隔つることなく御覽せられしを、朝廷に仕うまつりし際は、羽翼を並べたる数にも思ひはべらで、うれしき御かへりみをこそ、はかばかしからぬ身にて、かかる位に及びはべりて、朝廷に仕うまつりはべることに添へても、思うたまへ知らぬにははべらぬを、齡の積もりには、げにおのづからうちゆるぶことのみなむ、多くはべりける」

などかしこまり申したまふ。

そのついでに、ほのめかし出でたまひてけり。大臣、

「いとあはれに、めづらかなることにもはべるかな」と、まづうち泣きたまひて、「そのかみより、いかになりにけむと尋ね思うたまへしさまは、何のついでにかはべりけむ、愁へに堪へず、漏らし聞こしめさせし心地なむしはべる。今かく、すこし人数にもなりはべるにつけて、はかばかしからぬ者どもの、かたがたにつけてさまよひはべるを、かたくなしく、見苦しと見はべるにつけても、またさるさまにて、数々に連ねては、あはれに思うたまへらるる折に添へても、まづなむ思ひたまへ出でらるる」

とのたまふついでに、かのいにしへの雨夜の物語に、いろいろなりし御睦言の定めを思し出でて、泣きみ笑ひみ、皆うち乱れたまひぬ。

夜いたう更けて、おのおのあかれたまふ。

「かく参り来あひては、さらに、久しくなりぬる世の古事、思うたまへ出でられ、恋しきことの忍びがたきに、立ち出でむ心地もしはべらず」

とて、をさをさ心弱くおはしまさぬ六条殿も、酔ひ泣きにや、うちしほれたまふ。宮はたまいて、姫君の御ことを思し出づるに、ありしにまさる御ありさま、勢ひを見たてまつりたまふに、飽かず悲しくて、とどめがたく、しほしほと泣きたまふ尼衣は、げに心ことなりけり。

かかるついでなれど、中将の御ことをば、うち出でたまはずなりぬ。ひとふ

近衛の中、少将、弁官など、人柄はなやかにあるべかしき、十余人集ひたまへれば、いかめしう、次々のただ人も多くて、土器あまたたび流れ、皆酔ひになりて、おのおのかう幸ひ人にすぐれたまへる御ありさまを物語にしけり。

大臣も、めづらしき御対面に、昔のことと思し出でられて、よそよそにてこそ、はかなきことにつけて、挑ましき御心も添ふべかめれ、さし向かひきこえたまひては、かたみにいとあはれなることの数々思し出でつつ、例の、隔てなく、昔今のことも、年ごろの御物語に、日暮れゆく。御土器など勧め参りたまふ。

「さぶらはでは悪しかりぬべかりけるを、召しなきに憚りて。うけたまはり過ぐしてましかば、御勘事や添はまし」

と申したまふに、

「勘当は、こなたさまになむ。勘事と思ふこと多くはべる」

など、けしきばみたまふに、このことにやと思せば、わづらはしうて、かしこまりたるさまにてもものしたまふ。

「昔より、公私のことにつけて、心の隔てなく、大小のこと聞こえうけたまはり、羽翼を並ぶるやうにて、朝廷の御後見をも仕うまつるとなむ思うたまへしを、末の世となりて、そのかみ思うたまへし本意なきやうなること、うち交りはべれど、うちうちの私事にこそは。

おほかたの心ざしは、さらに移ろふことなくなむ。何ともなくて積もりはべる年齢に添へて、いにしへのことなむ恋しかりけるを、対面賜はることもいともまれにのみはべれば、こと限りありて、世だけき御ふるまひとは思うたまへながら、親しきほどには、その御勢ひをも、引きしじめたまひてこそは、訪らひものしたまはめとなむ、恨めしき折々はべる」

と聞こえたまへば、

「いにしへは、げに面馴れて、あやしくだいだいしきまで馴れさぶらひ、心

あらで、渡りたまひなむや。対面に聞こえまほしげなることもあなり」

と聞こえたまへり。

「何ごとにかはあらむ。この姫君の御こと、中將の愁へにや」と思しまはすに、「宮もかう御世残りなげにて、このことと切にのたまひ、大臣も憎からぬさまに一言うち出で恨みたまはむに、とかく申しかへさふことえあらじかし。つれなくて思ひ入れぬを見るにはやすからず、さるべきついであらば、人の御言になびき顔にて許してむ」と思す。

「御心をさしあはせてのたまはむこと」と思ひ寄りたまふに、「いとど否びどころなからむが、また、なかさしもあらむ」とやすらはるる、いとけしからぬ御あやにく心なりかし。「されど、宮かくのたまひ、大臣も対面すべく待ちおはするにや、かたがたにかたじけなし。参りてこそは、御けしきに従はめ」

など思ほしなりて、御装束心ことにひきつくろひて、御前などもことことしきさまにはあらで渡りたまふ。

君達いとあまた引きつれて入りたまふさま、ものものしう頼もしげなり。丈だちそぞろかにもものしたまふに、太さもあひて、いと宿徳に、面もち、歩まひ、大臣といはむに足らひたまへり。

葡萄染の御指貫、桜の下襲、いと長うは裾引きて、ゆるゆるとことさらびたる御もてなし、あなきらきらしと見えたまへるに、六条殿は、桜の唐の綺の御直衣、今様色の御衣ひき重ねて、しどけなき大君姿、いよいよたとへむものなし。光こそまさりたまへ、かうしたたかにひきつくろひたまへる御ありさまに、なずらへても見えたまはざりけり。

君達次々に、いとものきよげなる御仲らひにて、集ひたまへり。藤大納言、春宮大夫など、今は聞こゆる子どもも、皆なり出でつつものしたまふ。おのづから、わざともなきに、おぼえ高くやむごとなき殿上人、蔵人頭、五位の蔵人、

げに、折しも便なう思ひとまりはべるに、よろしうものせさせたまひければ、なほ、かう思ひおこせるついでにとなむ思うたまふる。さやうに伝へものせさせたまへ」

と聞こえたまふ。宮、

「いかに、いかに、はべりけることにか。かしこには、さまさまにかかる名のりする人を、厭ふことなく拾ひ集めらるるに、いかなる心にて、かくひき違へかこちきこえらるらむ。この年ごろ、うけたまはりて、なりぬるにや」

と、聞こえたまへば、

「さるやうはべることなり。詳しきさまは、かの大臣もおのづから尋ね聞きたまうてむ。くだくだしき直人の仲らひに似たることにはべれば、明かさむにつけても、らうがはしう人言ひ伝へはべらむを、中将の朝臣にだに、まだわきまへ知らせはべらず。人にも漏らさせたまふまじ」

と、御口かためきこえたまふ。

内の大殿、かく二条の宮に太政大臣渡りおはしまいたるよし、聞きたまひて、

「いかに寂しげにて、いつかしき御さまを待ちうけきこえたまふらむ。御前どももてはやし、御座ひきつくろふ人も、はかばかしうあらじかし。中将は、御供にこそものせられつらめ」

など、おどろきたまうて、御子ども君達、睦ましうさるべきまうち君たち、たてまつれたまふ。

「御くだもの、御酒など、さりぬべく参らせよ。みづからも参るべきを、かへりてもの騒がしきやうならむ」

などのたまふほどに、大宮の御文あり。

「六条の大臣の訪らひに渡りたまへるを、もの寂しげにはべれば、人目のいとほしうも、かたじけなうもあるを、ことことう、かう聞こえたるやうには

「さるは、かの知りたまふべき人をなむ、思ひまがふることはべりて、不意に尋ね取りてはべるを、その折は、さるひがわざとも明かしはべらずありしかば、あながちにことの心を尋ね返さふこともはべらで、たださるものの種の少なきを、かことにても、何かはと思うたまへ許して、をさをさ睦びも見はべらずして、年月はべりつるを、いかでか聞こしめしけむ、内に仰せらるるやうなむある。

尚侍、宮仕へする人なくては、かの所のまつりごとしどけなく、女官なども公事を仕うまつるに、たづきなく、こと乱るるやうになむありけるを、ただ今、主上にさぶらふ古老の典侍二人、またさるべき人びと、さまざまに申さするを、はかばかしう選ばせたまはむ尋ねに、類ふべき人なむなき。

なほ、家高う、人のおぼえ軽からで、家のいとなみたてたらぬ人なむ、いにしへより来にける。したたかにかしこきかたの選びにては、その人ならでも、年月の労になりのおぼる類ひあれど、しか類ふべきもなしとならば、おほかたのおぼえをだに選らせたまはむとなむ、うちうちに仰せられたりしを、似げなきこととしも、何かは思ひたまはむ。

宮仕へは、さるべき筋にて、上も下も思ひ及び、出で立つこそ心高きことなれ。公様にて、さる所のことをつかさどり、まつりごとのおもぶきをしたため知らむことは、はかばかしからず、あはつけきやうにおぼえたれど、などかまたさしもあらむ。ただ、わが身のありさまからこそ、よろづのことはべめれと、思ひ弱りはべりしついでになむ。

齢のほどなど問ひ聞きはべれば、かの御尋ねあべいことになむありけるを、いかなべいことぞとも、申しあきらめまほしうはべる。ついでなくては対面はべるべきにもはべらず。やがてかかることなむと、あらはし申すべきやうを思ひめぐらして、消息申ししを、御悩みにことづけて、もの憂げにすまひたまへりし。

りしかば、出で立ちいそぎをなむ、思ひもよほされはべるに、この中將の、いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、心を騒がいたまふ見はべるになむ、さまざまにかけとめられて、今まで長びきはべる」

と、ただ泣きに泣きて、御声のわななくも、をこがましけれど、さることどもなれば、いとあはれなり。

御物語ども、昔今のとり集め聞こえたまふついでに、

「内の大臣は、日隔てず参りたまふことしげからむを、かかるついでに對面のあらば、いかにうれしからむ。いかで聞こえ知らせむと思ふことのはべるを、さるべきついでなくては、對面もありがたければ、おぼつかなくてなむ」

と聞こえたまふ。

「公事のしげきにや、私の心ざしの深からぬにや、さしもとぶらひものしはべらず。のたまはずべからむことは、何さまのことにかは。中將の恨めしげに思はれたることもはべるを、『初めのことは知らねど、今はけに聞きにくくもてなすにつけて、立ちそめにし名の、取り返さるるものにもあらず、をこがましきやうに、かへりては世人も言ひ漏らすなるを』などものははれば、立てたるところ、昔よりいと解けがたき人の本性にて、心得ずなむ見たまふる」

と、この中將の御ことと思してのたまへば、うち笑ひたまひて、

「いふかひなきに、許し捨てたまふこともやと聞きはべりて、ここにさへなむかすめ申すやうありしかど、いと厳しう諫めたまふよしを見はべりし後、何にさまで言をもませはべりけむと、人悪う悔い思うたまへてなむ。

よろづのことにつけて、清めといふことはべれば、いかがは、さもとり返すすいたまはざらむとは思ふたまへながら、かう口惜しき濁りの末に、待ちとり深う住むべき水こそ出で来がたかべい世なれ。何ごとにつけても、末になれば、落ちゆくけぢめこそやすくはべめれ。いとほしう聞きたまふる」

など申したまうて、

中将の君も、夜昼、三条にぞさぶらひたまひて、心の隙なくものしたまうて、折悪しきを、いかにせましと思す。

「世も、いと定めなし。宮も亡せさせたまはば、御服あるべきを、知らず顔にてもものしたまはむ、罪深きこと多からむ。おはする世に、このこと表はしてむ」

と思し取りて、三条の宮に、御訪らひがてら渡りたまふ。

今はまして、忍びやかにふるまひたまへど、行幸に劣らずよそほしく、いよ光をのみ添へたまふ御容貌などの、この世に見えぬ心地して、めづらしう見たてまつりたまふには、いとど御心地の悩ましきも、取り捨てらるる心地して、起きゐたまへり。御脇息にかかりて、弱げなれど、ものなどいとよく聞こえたまふ。

「けしうはおはしまさざりけるを、なにがしの朝臣の心惑はして、おどろおどろしう嘆ききこえきすめれば、いかやうにもせさせたまふにかとなむ、おぼつかながりきこえさせつる。内などにも、ことなるついでなき限りは参らず、朝廷に仕ふる人ともなくて籠もりはべれば、よろづうひうひしう、よだけくなりにてはべり。齡など、これよりまさる人、腰堪へぬまで屈まりありく例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に、添ふもの憂さになむはべるべき」

など聞こえたまふ。

「年の積もりの悩みと思うたまへつつ、月ごろになりぬるを、今年となりては、頼み少なきやうにおぼえはべれば、今一度、かく見たてまつりきこえきすることもなくてやと、心細く思ひたまへつるを、今日こそ、またすこし延びぬる心地しはべれ。今は惜しみとむべきほどにもはべらず。さべき人びとにも立ち後れ、世の末に残りとまれる類ひを、人の上にて、いと心づきなしと見はべ

「あな、うたて。めでたしと見たてまつるとも、心もて宮仕ひ思ひ立たむこそ、いとさし過ぎたる心ならぬ」

とて、笑ひたまふ。

「いで、そこにしもぞ、めできこえたまはむ」

などのたまうて、また御返り、

「あかねさす光は空に曇らぬを

などて行幸に目をきらしけむ

なほ、思し立て」

など、絶えず勧めたまふ。

「とてもかうても、まづ御裳着のことをこそは」と思して、その御まうけの御調度の、こまかなるきよらども加へさせたまひ、何くれの儀式を、御心にはいとも思ほさぬことをだに、おのづからよだけいかめしくなるを、まして、「内の大臣にも、やがてこのついでにや知らせたてまつりてまし」と思し寄れば、いとめでたくなむ。「年返りて、二月に」と思す。

「女は、聞こえ高く、名隠したまふべきほどならぬも、人の御女とて、籠もりおはするほどは、かならずしも、氏神の御つとめなど、あらはならぬほどなればこそ、年月はまぎれ過ぐしたまへ、この、もし思し寄ることもあらむには、春日の神の御心違ひぬべきも、つひには隠れてやむまじきものから、あぢきなく、わぎとがましき後の名まで、うたたあるべし。なほなほしき人の際こそ、今様とては、氏改むることのたはやすきもあれ」など思しめぐらすに、「親子の御契り、絶ゆべきやうなし。同じくは、わが心許してを、知らせたてまつらむ」など思し定めて、この御腰結には、かの大臣をなむ、御消息聞こえたまうければ、大宮、去年の冬つ方より悩みたまふこと、さらにおこたりたまはねば、かかるに合はせて、便なかるべきよし、聞こえたまへり。

古き跡をも今日は尋ねよ」

太政大臣の、かかる野の行幸に仕うまつりたまへる例などやありけむ。大臣、御使をかしこまりもてなさせたまふ。

「小塩山深雪積もれる松原に

今日ばかりなる跡やなからむ」

と、そのころほひ聞きしことの、そばそば思ひ出でらるるは、ひがことにやあらむ。

またの日、大臣、西の対に、

「昨日、主上は見たてまつりたまひきや。かのことは、思しなびきぬらむや」と聞こえたまへり。白き色紙に、いとうちとけたる文、こまかにけしきばみてもあらぬが、をかしきを見たまうて、

「あいなのことや」

と笑ひたまふものから、「よくも推し量らせたまふものかな」と思す。御返りに、

「昨日は、

うちきらし朝ぐもりせし行幸には

さやかに空の光やは見し

おぼつかなき御ことどもになむ」

とあるを、上も見たまふ。

「ささのことをそそのかししかど、中宮かくておはす、ここながらのおぼえには、便なかるべし。かの大臣に知られても、女御かくてまたさぶらひたまへばなど、思ひ乱るめりし筋なり。若人の、さも馴れ仕うまつらむに、憚る思ひなからむは、主上をほの見たてまつりて、えかけ離れて思ふはあらじ」

とのたまへば、

と見えて、御輿のうちよりほかに、目移るべくもあらず。

まして、容貌ありや、をかしやなど、若き御達の消えかへり心うつす中少将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらに類ひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔さまは、異ものとも見えたまはぬを、思ひなしの今すこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。

さは、かかる類ひはおはしがたかりけり。あてなる人は、皆ものきよげにけはひ異なるべいものとのみ、大臣、中将などの御にほひに目馴れたまへるを、出で消えどものかたはなるにやあらむ、同じ目鼻とも見えず、口惜しうぞ圧されたるや。

兵部卿宮もおはす。右大将の、さばかり重りかによしめくも、今日によそひいとなまめきて、やなぐひなど負ひて、仕うまつりたまへり。色黒く鬚がちに見えて、いと心づきなし。いかでかは、女のつくろひたてたる顔の色あひには似たらむ。いとわりなきことを、若き御心地には、見おとしたまうてけり。

大臣の君の思し寄りてのたまふことを、「いかがはあらむ、宮仕へは、心にもあらで、見苦しきありさまにや」と思ひつつみたまふを、「馴れ馴れしき筋などをばもて離れて、おほかたに仕うまつり御覧ぜられむは、をかしうもありなむかし」とぞ、思ひ寄りたまうける。

かうて、野におはしまし着きて、御輿とどめ、上達部の平張にももの参り、御装束ども、直衣、狩のよそひなどに改めたまふほどに、六条院より、御酒、御くだものなどたてまつらせたまへり。今日仕うまつりたまふべく、かねて御けしきありけれど、御物忌のよしを奏せさせたまへりけるなりけり。

蔵人の左衛門尉を御使にて、雉一枝たてまつらせたまふ。仰せ言には何とかや、さやうの折のことまねぶに、わづらはしくなむ。

「雪深き小塩山にたつ雉の

かく思しいたらぬことなく、いかでよからむことはと、思し扱ひたまへど、この音無の滝こそ、うたていとほしく、南の上の御推し量りごとにかなひて、軽々しかるべき御名なれ。かの大い臣、何ごとにつけても、きはぎはしう、すこしもかたはなるさまのことを、思し忍ばずなどものしたまふ御心ぎさまを、「さて思ひ隈なく、けぎやかなる御もてなしなどのあらむにつけては、をこがましうもや」など、思し返さふ。

その師走に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐを、六条院よりも、御方々引き出でつつ見たまふ。卯の時に出でたまうて、朱雀より五条の大路を、西ぎまに折れたまふ。桂川のもとまで、物見車隙なし。

行幸といへど、かならずかうしもあらぬを、今日は親王たち、上達部も、皆心ことに、御馬鞍をととのへ、隨身、馬副の容貌丈だち、装束を飾りたまうつつ、めづらかにをかし。左右大臣、内大臣、納言より下はた、まして残らず仕うまつりたまへり。青色の袍、葡萄染の下襲を、殿上人、五位六位まで着たり。雪ただいささかづつうち散りて、道の空さへ艶なり。親王たち、上達部なども、鷹にかかづらひたまへるは、めづらしき狩の御よそひどもをまうけたまふ。近衛の鷹飼どもは、まして世に目馴れぬ摺衣を乱れ着つつ、けしきことなり。めづらしうをかしきことに競ひ出でつつ、その人ともなく、かすかなる足弱き車など、輪を押しひしがれ、あはれげなるもあり。浮橋のもとなどにも、好ましう立ちさまよふよき車多かり。

西の対の姫君も立ち出でたまへり。そこばく挑み尽くしたまへる人の御容貌ありさまを見たまふに、帝の、赤色の御衣たてまつりて、うるはしう動きなき御かたはらめに、なずらひきこゆべき人なし。

わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに、盛りにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人

行 幸

行

幸

「今このごろのほどに参らせむ。心づからもの思はしげにて、口惜しう衰へにてなむはべめる。女こそ、よく言はば、持ちはべるまじきものなりけれ。とあるにつけても、心のみなむ尽くされはべりける」

など、なほ心解けず思ひおきたるけしきしてのたまへば、心憂くて、切にも聞こえたまはず。そのついでにも、

「いと不調なる娘まうけはべりて、もてわづらひはべりぬ」

と、愁へきこえたまひて、笑ひたまふ。宮、

「いで、あやし。女といふ名はして、さがなかるやうやある」

とのたまへば、

「それなむ見苦しきことになむはべる。いかで、御覽せさせむ」

と、聞こえたまふとや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

隨身などに、うちささめきて取らするを、若き人びと、ただならずゆかしがる。

渡らせたまふとて、人びとうちそよめき、几帳引き直しなどす。見つる花の顔どもも、思ひ比べまほしうて、例はものゆかしからぬ心地に、あながちに、妻戸の御簾を引き着て、几帳のほころびより見れば、もののそばより、ただはひ渡りたまふほどぞ、ふとうち見えたる。

人のしげくまがへば、何のあやめも見えぬほどに、いと心もとなし。薄色の御衣に、髪はまだ丈にははづれたる末の、引き広げたるやうにて、いと細く小さき様体、らうたげに心苦し。

「一昨年ばかりは、たまさかにもほの見たてまつりしに、またこよなく生ひまさりたまふなめりかし。まして盛りいかならむ」と思ふ。「かの見つる先々の、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ。木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし」と思ひよそへらる。「かかる人びとを、心にまかせて明け暮れ見たてまつらばや。さもありぬべきほどながら、隔て隔てのけぎやかなるこそつらけれ」など思ふに、まめ心も、なまあくがる心地す。

祖母宮の御もとも参りたまへれば、のどやかにて御行なひしたまふ。よろしき若人など、ここにもさぶらへど、もてなしけはひ、装束どもも、盛りなるあたりには似るべくもあらず。容貌よき尼君たちの、墨染にやつれたるぞ、なかなかかかる所につけては、さるかたにてあはれなりける。

内の大臣も参りたまへるに、御殿油など参りて、のどやかに御物語など聞こえたまふ。

「姫君を久しく見たてまつらぬがあさましきこと」  
とて、ただ泣きに泣きたまふ。

「まだあなたになむおはします。風に懼ぢさせたまひて、今朝はえ起き上がりたまはざりつる」

と、御乳母ぞ聞こゆる。

「もの騒がしげなりしかば、宿直も仕うまつらむと思ひたまへしを、宮の、いとも心苦しう思いたりしかばなむ。雛の殿は、いかがおはすらむ」

と問ひたまへば、人びと笑ひて、

「扇の風だに参れば、いみじきことに思いたるを、ほとほとしくこそ吹き乱りはべりしか。この御殿あつかひに、わびにてはべり」など語る。

「ことごとしからぬ紙やはべる。御局の硯」

と乞ひたまへば、御厨子に寄りて、紙一卷、御硯の蓋に取りおろしてたてまつれば、

「いな、これはかたはらいたし」

とのたまへど、北の御殿のおぼえを思ふに、すこしなめなる心地して、文書きたまふ。

紫の薄様なりけり。墨、心とめておしすり、筆の先うち見つつ、こまやかに書きやすらひたまへる、いとよし。されど、あやしく定まりて、憎き口つきこそものしたまへ。

「風騒ぎむら雲まがふ夕べにも

忘るる間なく忘れぬ君」

吹き乱れたる菫萱につけたまへれば、人びと、

「交野の少将は、紙の色にこそとのへはべりけれ」と聞こゆ。

「さばかりの色も思ひ分かざりけりや。いづこの野辺のほとりの花」

など、かやうの人びとにも、言少なに見えて、心解くべくもてなさず、いとすくすくしう気高し。

またも書いたまうて、馬の助に賜へれば、をかしき童、またいと馴れたる御

しをれしぬべき心地こそすれ」

詳しくも聞こえぬに、うち誦じたまふをほの聞くに、憎きものをかしければ、なほ見果てまほしけれど、「近かりけりと見えたてまつらじ」と思ひて、立ち去りぬ。

御返り、

「下露になびかましかば女郎花

荒き風にはしをれざらまし

なよ竹を見たまへかし」

など、ひが耳にやありけむ、聞きよくもあらずぞ。

東の御方へ、これよりぞ渡りたまふ。今朝の朝寒なるうちとけわざにや、もの裁ちなどするねび御達、御前にあまたして、細櫃めくものに、綿引きかけてまさぐる若人どもあり。いとぎよらなる朽葉の羅、今様色の二なく擣ちたるなど、引き散らしたまへり。

「中将の下襲か。御前の壺前裁の宴も止まりぬらむかし。かく吹き散らしてむには、何事かせられむ。すさまじかるべき秋なめり」

などのたまひて、何にかあらむ、さまざまなるものの色どもの、いとぎよらなれば、「かやうなる方は、南の上にも劣らずかし」と思す。御直衣、花文綾を、このころ摘み出だしたる花して、はかなく染め出でたまへる、いとあらまほしき色したり。

「中将にこそ、かやうにては着せたまはめ。若き人のにてめやすかめり」  
などやうのことを聞こえたまひて、渡りたまひぬ。

むつかしき方々めぐりたまふ御供に歩いて、中将は、なま心やましよう、書かまほしき文など、日たけぬるを思ひつつ、姫君の御方に参りたまへり。

中将、いとこまやかに聞こえたまふを、「いかでこの御容貌見てしがな」と思ひわたる心にて、隅の間の御簾の、几帳は添ひながらしどけなきを、やをら引き上げて見るに、紛るるものどもも取りやりたれば、いとよく見ゆ。かく戯れたまふけしきのしるきを、

「あやしのわざや。親子と聞こえながら、かく懐離れず、もの近かべきほどかは」

と目とまりぬ。「見やつけたまはむ」と恐ろしけれど、あやしきに、心もおどろきて、なほ見れば、柱隠れにすこしそばみたまへりつるを、引き寄せたまへるに、御髪の並み寄りて、はらはらとこぼれかかりたるほど、女も、いとむつかしく苦しと思うたまへるけしきながら、さすがにいとなごやかなるさまして、寄りかかりたまへるは、

「ことと馴れ馴れしきにこそあめれ。いで、あなうたて。いかなることにかあらむ。思ひ寄らぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたてたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり。むべなりけりや。あな、疎まし」と思ふ心も恥づかし。「女の御さま、げに、はらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかし」など思はむは、「なか、心あやまりもせざらむ」とおぼゆ。

昨日見し御けはひには、け劣りたれど、見るに笑まるるさまは、立ちも並ぶぬべく見ゆる。八重山吹の咲き乱れたる盛りに、露のかかれる夕映えぞ、ふと思ひ出でらるる。折にあはぬよそへどもなれど、なほ、うちおぼゆるやうよ。花は限りこそあれ、そそけたるしべなどもまじるかし、人の御容貌のよきは、たとへむ方なきものなりけり。

御前に人も出で来ず、いとこまやかにうちささめき語らひ聞こえたまふに、いかがあらむ、まめだちてぞ立ちたまふ。女君、

「吹き乱る風のけしきに女郎花

ものあはれにおぼえけるままに、箏の琴を掻きまさぐりつつ、端近うみたまへるに、御前駆追ふ声のしければ、うちとけ萎えばめる姿に、小桂ひき落として、けぢめ見せたる、いといたし。端の方についゐたまひて、風の騒ぎばかりをとぶらひたまひて、つれなく立ち帰りたまふ、心やましげなり。

「おほかたに萩の葉過ぐる風の音も

憂き身ひとつにしむ心地して」

とひとりごちけり。

西の対には、恐ろしと思ひ明かしたまひける、名残に、寝過ぐして、今ぞ鏡なども見たまひける。

「ことごとしく前駆、な追ひそ」

とのたまへば、ことに音せで入りたまふ。屏風なども皆畳み寄せ、ものしどけなくしなしたるに、日はなやかにさし出でたるほど、けざけざと、ものきよげなるさましてゐたまへり。近くゐたまひて、例の、風につけても同じ筋に、むつかしう聞こえ戯れたまへば、堪へずうたてと思ひて、

「かう心憂ければこそ、今宵の風にもあくがれなまほしくはべりつれ」

と、むつかりたまへば、いとよくうち笑ひたまひて、

「風につきてあくがれたまはむや、軽々しからむ。さりとて、止まる方ありなむかし。やうやうかかる御心むけこそ添ひにけれ。ことわりや」

とのたまへば、

「げに、うち思ひのままに聞こえてけるかな」

と思して、みづからもうち笑ひたまへる、いとをかしき色あひ、つらつきなり。酸漿などいふめるやうにふくらかにて、髪のかかれる隙々うつくしうおぼゆ。まみのあまりわららかなるぞ、いとしも品高く見えざりける。その他は、つゆ難つくべうもあらず。

殿、御鏡など見たまひて、忍びて、

「中将の朝けの姿は、きよげなりな。ただ今は、きびはなるべきほどを、かたくなしからず見ゆるも、心の闇にや」

とて、わが御顔は、古りがたくよしと見たまふべかめり。いといたう心懸想したまひて、

「宮に見えたてまつるは、恥づかしうこそあれ。何ばかりあらはなるゆゑゆるしきも、見えたまはぬ人の、奥ゆかしく心づかひせられたまふぞかし。いとおほどかに女しきものから、けしきづきてぞおはするや」

とて、出でたまふに、中将ながめ入りて、とみにもおどろくまじきけしきにてみたまへるを、心疾き人の御目にはいかが見たまひけむ、立ちかへり、女君に、

「昨日、風の紛れに、中将は見たてまつりやしてけむ。かの戸の開きたりしによ」

とのたまへば、面うち赤みて、

「いかでか、さはあらむ。渡殿の方には、人の音もせざりしものと聞こえたまふ。」

「なほ、あやし」とひとりごちて、渡りたまひぬ。

御簾の内に入りたまひぬれば、中将、渡殿の戸口に人びとのけはひするに寄りて、ものなど言ひ戯るれど、思ふことの筋々嘆かしくて、例よりもしめりてみたまへり。

こなたより、やがて北に通りて、明石の御方を見やりたまへば、はかばかしき家司だつ人なども見えぬ、馴れたる下仕ひどもぞ、草の中にまじりて歩く。童女など、をかしき相姿うちとけて、心とどめ取り分き植ゑたまふ龍胆、朝顔のはひまじれる籬も、みな散り乱れたるを、とかく引き出で尋ぬるなるべし。

濃き薄き相どもに、女郎花の汗衫などやうの、時にあひたるさまにて、四、五人連れて、ここかしこの草むらに寄りて、色々の籠どもを持ってさまよひ、撫子などの、いとあはれげなる枝ども取り持て参る、霧のまよひは、いと艶にぞ見えける。

吹き来る追風は、紫苑ことごとくに匂ふ空も、香のかをりも、触ればひたまへる御けはひにやと、いと思ひやりめでたく、心懸想せられて、立ち出でにくけれど、忍びやかにうちおとなひて、歩み出でたまへるに、人びと、けぎやかにおどろき顔にはあらねど、皆すべり入りぬ。

御参りのほどなど、童なりしに、入り立ち馴れたまへる、女房なども、いとけうとくはあらず。御消息啓せさせたまひて、宰相の君、内侍など、けはひすれば、私事も忍びやかに語らひたまふ。これはた、さいへど、気高く住みたるけはひありさまを見るにも、さまざまにも思ひ出でらる。

南の御殿には、御格子参りわたして、昨夜、見捨てがたかりし花どもの、行方も知らぬやうにてしをれ伏したるを見たまひけり。中将、御階にゐたまひて、御返り聞こえたまふ。

「荒き風をも防がせたまふべくやと、若々しく心細くおぼえはべるを、今なむ慰みはべりぬる」

と聞こえたまへれば、

「あやしくあえかにおはする宮なり。女どちは、もの恐ろしく思しぬべかりつる夜のさまなれば、げに、おろかなりとも思いつらむ」

とて、やがて参りたまふ。御直衣などたてまつるとて、御簾引き上げて入りたまふに、「短き御几帳引き寄せて、はつかに見ゆる御袖口は、さにこそはあらめ」と思ふに、胸つぶつぶと鳴る心地するも、うたてあれば、他さまに見やりつ。

「いかにぞ。昨夜、宮は待ちよろこびたまひきや」

「しか。はかなきことにつけても、涙もろにものしたまへば、いと不便にこそはべれ」

と申したまへば、笑ひたまひて、

「今いくばくもおはせじ。まめやかに仕うまつり見えたてまつれ。内大臣は、こまかにしもあるまじうこそ、愁へたまひしか。人柄あやしうはなやかに、男々しき方によりて、親などの御孝をも、いかめしきさまをば立てて、人にも見おどろかさむの心あり、まことにしみて深きところはなき人になむ、ものせられける。さるは、心の隈多く、いとかしこき人の、末の世にあまるまで、才類ひなく、うるさながら。人として、かく難なきことはかたかりける」

などのたまふ。

「いとおどろおどろしかりつる風に、中宮に、はかばかしき宮司などさぶらひつらむや」

とて、この君して、御消息聞こえたまふ。

「夜の風の音は、いかが聞こし召しつらむ。吹き乱りはべりしに、おこりあひはべりて、いと堪へがたき、ためらひはべるほどになむ」

と聞こえたまふ。

中将下りて、中の廊の戸より通りて、参りたまふ。朝ぼらけの容貌、いとめでたくをかしげなり。東の対の南の側に立ちて、御前の方を見やりたまへば、御格子、まだ二間ばかり上げて、ほのかなる朝ぼらけのほどに、御簾巻き上げて人びとみたり。

高欄に押しかかりつつ、若やかなる限りあまた見ゆ。うちとけたるはいかがあらむ、さやかならぬ明けぼののほど、色々なる姿は、いづれともなくをかし。

童女下ろさせたまひて、虫の籠どもに露飼はせたまふなりけり。紫苑、撫子、

とおどろきたまひて、まだほのぼのとするに参りたまふ。

道のほど、横さま雨いと冷やかに吹き入る。空のけしきもすぎきに、あやし  
くあくがれたる心地して、

「何ごとぞや。またわが心に思ひ加はれるよ」と思ひ出づれば、「いと似げな  
きことなりけり。あな、もの狂ほし」

と、とぎまかうざまに思ひつつ、東の御方に、まづまうでたまへれば、懼ぢ  
極じておはしけるに、とかく聞こえ慰めて、人召して、所々つくるはすべきよ  
しなど言ひおきて、南の御殿に参りたまへれば、まだ御格子も参らず。

おはしますに当れる高欄に押しかかりて、見わたせば、山の木どもも吹きな  
びかして、枝ども多く折れ伏したり。草むらはさらにもいはず、桧皮、瓦、所々  
の立葩、透垣などやうのもの乱りがはし。

日のわづかにさし出でたるに、憂へ顔なる庭の露きらきらとして、空はいと  
すぐく霧りわたれるに、そこはかたなく涙の落つるを、おし拭ひ隠して、うち  
しはぶきたまへれば、

「中将の声づくるにぞあなる。夜はまだ深からむは」

とて、起きたまふなり。何ごとにかあらむ、聞こえたまふ声はせで、大臣う  
ち笑ひたまひて、

「いにしへだに知らせたてまつらずなりにし、暁の別れよ。今ならひたまは  
むに、心苦しからむ」

とて、とばかり語らひきこえたまふけはひども、いとをかし。女の御いらへ  
は聞こえねど、ほのぼの、かやうに聞こえ戯れたまふ言の葉の趣きに、「ゆるび  
なき御仲らひかな」と、聞きゐたまへり。

御格子を御手づから引き上げたまへば、気近きかたはらいたさに、立ち退き  
てさぶらひたまふ。

「ここのらの齡に、まだかく騒がしき野分にこそあはざりつれ」と、ただわななきにわななきたまふ。

「大きなる木の枝などの折るる音も、いとうたてあり。御殿の瓦さへ残るまじく吹き散らすに、かくてもものしたまへること」

と、かつはのたまふ。そこら所狭かりし御勢ひのしづまりて、この君を頼もし人に思したる、常なき世なり。今もおほかたのおぼえの薄らぎたまふことはなけれど、内の大殿の御けはひは、なかなかすこし疎くぞありける。

中将、夜もすがら荒き風の音にも、すずろにもあはれなり。心にかけて恋しと思ふ人の御ことは、さしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを、

「こは、いかにおぼゆる心ぞ。あるまじき思ひもこそ添へ。いと恐ろしきこと」と

と、みづから思ひ紛らはし、異事に思ひ移れど、なほ、ふとおぼえつつ、

「来し方行く末、ありがたくもものしたまひけるかな。かかる御仲らひに、いかで東の御方、さるものの数にて立ち並びたまひつらむ。たとしへなかりけりや。あな、いとほし」

とおぼゆ。大臣の御心ばへを、ありがたしと思ひ知りたまふ。

人柄のいとまめやかなれば、似げなきを思ひ寄らねど、「さやうならむ人をこそ、同じくは、見て明かし暮らさめ。限りあらむ命のほども、今すこしはかならず延びなむかし」と思ひ続けらる。

暁方に風すこししめりて、村雨のやうに降り出づ。

「六条院には、離れたる屋ども倒れたり」

など人びと申す。

「風の吹きまふほど、広くそこら高き心地する院に、人びと、おはします御殿のあたりにこそしげけれ、東の町などは、人少なに思されつらむ」

るかな」とおぼゆ。

人びと参りて、

「いといかめしう吹きぬべき風にはべり。良の方より吹きはべれば、この御前はのどけきなり。馬場の御殿、南の釣殿などは、危ふげになむ」

とて、とかくこと行なひのしる。

「中将は、いづこよりものしつるぞ」

「三条の宮にはべりつるを、『風いたく吹きぬべし』と、人びとの申しつれば、おぼつかなさに参りはべりつる。かしこには、まして心細く、風の音をも、今はかへりて、若き子のやうに懼ぢたまふめれば。心苦しさに、まかではべりなむ」

と申したまへば、

「げに、はや、まうでたまひね。老いもていきで、また若うなること、世にあるまじきことなれど、げに、さのみこそあれ」

など、あはれがりきこえたまひて、

「かく騒がしげにはべめるを、この朝臣さぶらへばと、思ひたまへ譲りてなむ」

と、御消息聞こえたまふ。

道すがらいりもみする風なれど、うるはしくものしたまふ君にて、三条宮と六条院とに参りて、御覧ぜられたまはぬ日なし。内の御物忌などに、えさらず籠もりたまふべき日より外は、いそがしき公事、節会などの、暇いるべく、ことしげきにあはせても、まづこの院に参り、宮よりぞ出でたまひければ、まして今日、かかる空のけしきにより、風のさきにあくがれありきたまふもあはれに見ゆ。

宮、いとうれしう、頼もしと待ち受けたまひて、

ほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。あぢきなく、見たてまつるわが顔にも移り来るやうに、愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。

御簾の吹き上げらるるを、人びと押へて、いかにしたるにかあらむ、うち笑ひたまへる、いといみじく見ゆ。花どもを心苦しがりて、え見捨てて入りたまはず。御前なる人びとも、さまざまにもきよげなる姿どもは見わたさるれど、目移るべくもあらず。

「大臣のいと気遠くはるかにもてなしたまへるは、かく見る人ただにはえ思ふまじき御ありさまを、いたり深き御心にて、もし、かかることもやと思すなりけり」

と思ふに、けはひ恐ろしうて、立ち去るにぞ、西の御方より、内の御障子引き開けて渡りたまふ。

「いとうたて、あわたたしき風なめり。御格子下ろしてよ。男どもあるらむを、あらはにもこそあれ」

と聞こえたまふを、また寄りて見れば、もの聞こえて、大臣もほほ笑みて見たてまつりたまふ。親とおおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。

女もねびととのひ、飽かぬことなき御さまもなるを、身にしむばかりおぼゆれど、この渡殿の格子も吹き放ちて、立てる所のあらはになれば、恐ろしうて立ち退きぬ。今参れるやうにうち声づくりて、簀子の方に歩み出でたまへれば、

「さればよ。あらはなりつらむ」

とて、「かの妻戸の開きたりけるよ」と、今ぞ見咎めたまふ。

「年ごろかかることのつゆなかりつるを。風こそ、げに巖も吹き上げつべきものなりけれ。さばかりの御心どもを騒がして。めづらしくうれしき目を見つ

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見所多く、色種を尽くして、よしある黒木赤木の籬を結びませつつ、同じき花の枝ざし、姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉かとかかやきて作りわたせる野辺の色を見るに、はた、春の山も忘れられて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり。

春秋の争ひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名立たる春の御前の花園に心寄せし人びと、また引きかへし移ろふけしき、世のありさまに似たり。

これを御覧じつきて、里居したまふほど、御遊びなどもあらまほしけれど、八月は故前坊の御忌月なれば、心もとなく思しつつ明け暮るるに、この花の色まさるけしきどもを御覧ずるに、野分、例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて吹き出づ。

花どものしをるるを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひ騒がるるを、まして、草むらの露の玉の緒乱るるままに、御心惑ひもしぬべく思したり。おほふばかりの袖は、秋の空にしもこそ欲しげなりけれ。暮れゆくままに、ものも見えず吹きまよはして、いとむくつけければ、御格子など参りぬるに、うしろめたくいみじと、花の上を思し嘆く。

南の御殿にも、前栽つくろはせたまひける折にしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩、はしたなく待ちえたる風のけしきなり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。

大臣は、姫君の御方におはしますほどに、中將の君参りたまひて、東の渡殿の小障子の上より、妻戸の開きたる隙を、何心もなく見入れたまへるに、女房のあまた見ゆれば、立ちとまりて、音もせで見る。

御屏風も、風のいたく吹きければ、押し畳み寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとに

野 分

野

分

二返りばかり歌はせたまひて、御琴は中将に譲らせたまひつ。げに、かの父大臣の御爪音に、をさをさ劣らず、はなやかにおもしろし。

「御簾のうちに、物の音聞き分く人ものしたまふらむかし。今宵は、盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔ひ泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」

とのたまへば、姫君もげにあはれと聞きたまふ。

絶えせぬ仲の御契り、おろかなるまじきものなればにや、この君たちを人知れず目にも耳にもとどめたまへど、かけてさだに思ひ寄らず、この中将は、心の限り尽くして、思ふ筋にぞ、かかるついでにも、え忍び果つまじき心地すれど、さまよくもてなして、をさをさ心とけても掻きわたさず。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

いと涼しくをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。御髪の手あたりなど、いと冷やかにあてはかなる心地して、うちとけぬさまにものをつつましと思したるけしき、いとらうたげなり。帰り憂く思しやすらふ。

「絶えず人さぶらひて、灯しつけよ。夏の月なきほどは、庭の光なき、いとものむつかしく、おぼつかなしや」

とのたまふ。

「篝火にたちそふ恋の煙こそ

世には絶えせぬ炎なりけれ

いつまでとかや。ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり」

と聞こえたまふ。女君、「あやしのありさまや」と思すに、

「行方なき空に消ちてよ篝火の

たよりにたぐふ煙とならば

人のあやしと思ひはべらむこと」

とわびたまへば、「くはや」とて、出でたまふに、東の対の方に、おもしろき

笛の音、箏に吹きあはせたり。

「中将の、例のあたり離れぬどち遊ぶにぞあなる。頭中将にこそあなれ。い

とわざとも吹きなる音かな」

とて、立ちとまりたまふ。

御消息、「こなたになむ、いと影涼しき篝火に、とどめられてものする」

とのたまへれば、うち連れて三人参りたまへり。

「風の音秋になりけりと、聞こえつる笛の音に、忍ばれでなむ」

とて、御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将は、「盤渉調」

にいとおもしろく吹きたり。頭中将、心づかひして出だし立てがたうす。「遅し」

とあれば、弁少将、拍子打ち出でて、忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり。

このごろ、世の人の言種に、「内の大殿の今姫君」と、ことに触れつつ言ひ散らすを、源氏の大臣聞こしめして、

「ともあれ、かくもあれ、人見るまじくて籠もりみたらむ女子を、なほざりのかことにても、さばかりにもめかし出でて、かく、人に見せ、言ひ伝へらるるこそ、心得ぬことなれ。いと際々しうものしたまふあまりに、深き心をも尋ねずもて出でて、心にもかなはねば、かくはしたなきなるべし。よろづのこゝと、もてなしからにこそ、なだらかなるものなめれ」

と、いとほしがりたまふ。

かかるにつけても、「げによくこそと、親と聞こえながらも、年ごろの御心を知りきこえず、馴れたてまつらましに、恥ぢがましきことやあらまし」と、対の姫君思し知るを、右近もいとよく聞こえ知らせけり。

憎き御心こそ添ひたれど、さりとて、御心のままに押したちてなどもてなしたまはず、いとど深き御心のみまさりたまへば、やうやうなつかしううちとけきこえたまふ。

秋になりぬ。初風涼しく吹き出でて、背子が衣もうらさびしき心地したまふに、忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、おはしまし暮らし、御琴なども習はしきこえたまふ。

五、六日の夕月夜は疾く入りて、すこし雲隠るるけしき、荻の音もやうやうあはれなるほどになりにけり。御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。かかる類ひあらむやと、うち嘆きがちにて夜更かしたまふも、人の咎めたてまつらむことを思せば、渡りたまひなむとて、御前の篝火のすこし消えがたなるを、御供なる右近の大夫を召して、灯しつけさせたまふ。

いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広がり臥したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置いて、さし退きて灯したれば、御前の方は、

篝火

篝

火

ち笑ひぬ。御返り乞へば、

「をかしきことの筋にのみまつはれてはべめれば、聞こえさせにくこそ。宣旨書きめきては、いとほしからむ」

とて、ただ、御文めきて書く。

「近きしるしなき、おぼつかなきは、恨めしく、

常陸なる駿河の海の須磨の浦に

波立ち出でよ宮崎の松」

と書きて、読みきこゆれば、

「あな、うたて。まことにみづからのにもこそ言ひなせ」

と、かたはらいたげに思したれど、

「それは聞かむ人わかまへはべりなむ」

とて、おし包みて出だしつ。

御方見て、

「をかしの御口つきや。待つとのたまへるを」

とて、いとあまえたる薰物の香を、返す返す薰きしめりたまへり。紅といふもの、いと赤らかにかいつけて、髪けづりつくろひたまへる、さる方ににぎははしく、愛敬づきたり。御対面のほど、さし過ぐしたることもあらむかし。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

や、いでや、あやしきは水無川にを」

とて、また端に、かくぞ、

「草若み常陸の浦のいかが崎

いかであひ見む田子の浦波

大川水の」

と、青き色紙一重ねに、いと草がちに、いかれる手の、その筋とも見えず、ただよひたる書きざまも下長に、わりなくゆゑばめり。行のほど、端ざまに筋交ひて、倒れぬべく見ゆるを、うち笑みつつ見て、さすがにいと細く小さく巻き結びて、撫子の花につけたり。

樋洗童しも、いと馴れてきよげなる、今参りなりけり。女御の御方の台盤所に寄りて、

「これ、参らせたまへ」

と言ふ。下仕へ見知りて、

「北の対にさぶらふ童なりけり」

とて、御文取り入る。大輔の君といふ、持て参りて、引き解きて御覽ぜさす。

女御、ほほ笑みてうち置かせたまへるを、中納言の君といふ、近くゐて、そばそば見けり。

「いと今めかしき御文のけしきにもはべめるかな」

と、ゆかしげに思ひたれば、

「草の文字は、え見知らねばにやあらむ、本末なくも見ゆるかな」

とて、賜へり。

「返りこと、かくゆゑゆゑしく書かずは、悪ろしと思ひおとされむ。やがて書きたまへ」

と、譲りたまふ。もて出でてこそあらね、若き人は、ものをかしくて、皆う

葉な交ぜられそ。あるやうあるべき身にこそあめれ」

と、腹立ちたまふ顔やう、気近く、愛敬づきて、うちそぼれたるは、さる方にをかしく罪許されたり。

ただ、いと鄙び、あやしき下人の中に生ひ出でたまへれば、もの言ふさまも知らず。ことなるゆゑなき言葉をも、声のどやかに押ししづめて言ひ出だしたるは、打ち聞き、耳異におぼえ、をかしからぬ歌語りをするも、声づかひつきづきしくて、残り思はせ、本末惜しみたるさまにてうち誦じたるは、深き筋思ひ得ぬほどの打ち聞きには、をかしかなりと、耳もとまるかし。

いと心深くよしあることを言ひゐたりとも、よろしき心地あらむと聞こゆべくもあらず、あはつけき声ざまにのたまひ出づる言葉こはごはしく、言葉たみて、わがままに誇りならひたる乳母の懐にならひたるさまに、もてなしいとあやしきに、やつるるなりけり。

いといふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あはぬ歌、口疾くうち続けなどしたまふ。

「さて、女御殿に参れとのたまひつるを、しぶしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。夜さりまうでむ。大臣の君、天下に思すとも、この御方々のすげなくしたまはむには、殿のうちには立てりなむはや」

とのたまふ。御おぼえのほど、いと軽らかなりや。

まづ御文たてまつりたまふ。

「葦垣のま近きほどにはさぶらひながら、今まで影踏むばかりのしるしもはべらぬは、勿来の関をや据ゑさせたまへらむとなむ。知らねども、武蔵野といへばかしこけれども。あなかしこや、あなかしこや」

と、点がちにて、裏には、

「まことや、暮にも参り来むと思うたまへ立つは、厭ふにはゆるにや。いで

「いとうれしきことにこそはべるなれ。ただ、いかでもいかでも、御方々に数まへしろしめされむことをなむ、寝ても覚めても、年ごろ何ごとを思ひたまへつるにもあらず。御許しだにはべらば、水を汲みいただきても、仕うまつりなむ」

と、いとよげに、今すこしきへづれば、いふかひなしと思して、

「いとしか、おりたちて薪拾ひたまはずとも、参りたまひなむ。ただかのあえものにしけむ法の師だに遠くは」

と、をこごとにしたまひなすをも知らず、同じき大臣と聞こゆるなかにも、いとよげにもものしく、はなやかなるさまして、おぼろけの人見えにくき御けしきをも見知らず、

「さて、いつか女御殿には参りはべらむずる」と聞こゆれば、

「よろしき日などやいふべからむ。よし、ことごとしくは何かは。さ思はれば、今日にても」

とのたまひ捨てて渡りたまひぬ。

よき四位五位たちの、いつききこえて、うち身じろきたまふにも、いといかめしき御勢ひなるを見送りきこえて、

「いで、あな、めでたのわが親や。かかりける胤ながら、あやしき小家に生ひ出でけること」

とのたまふ。五節、

「あまりことごとしく、恥づかしげにぞおはする。よろしき親の、思ひかしづかむにぞ、尋ね出でられたまはまし」

と言ふも、わりなし。

「例の、君の、人の言ふこと破りたまひて、めざまし。今は、ひとつ口に言

人の女、かの人の子と知らるる際になれば、親兄弟の面伏せなる類ひ多かめり。まして」

とのたまひきしつる、御けしきの恥づかしきも知らず、

「何か、そは、ことごとしく思ひたまひて交らひはべらばこそ、所狭からめ。大御大壺取りにも、仕うまつりなむ」

と聞こえたまへば、え念じたまはで、うち笑ひたまひて、

「似つかはしからぬ役ななり。かくたまさかに会へる親の孝せむの心あらば、このものたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ。さらば、命も延びなむかし」

と、をこめいたまへる大臣にて、ほほ笑みてのたまふ。

「舌の本性にこそははべらめ。幼くはべりし時だに、故母の常に苦しがり教へはべりし。妙法寺の別当大徳の、産屋にはべりける、あえものとなむ嘆きはべりたうびし。いかでこの舌疾さやめはべらむ」

と思ひ騒ぎたるも、いと孝養の心深く、あはれなりと見たまふ。

「その、気近く入り立ちたりけむ大徳こそは、あぢきなかりけれ。ただその罪の報いななり。唾、言吃とぞ、大乘誹りたる罪にも、数へたるかし」

とのたまひて、「子ながら恥づかしくおはする御さまに、見えたてまつらむこそ恥づかしけれ。いかに定めて、かくあやしきけはひも尋ねず迎へ寄せけむ」と思し、「人びともあまた見つき、言ひ散らさむこと」と、思ひ返したまふものから、

「女御里にもしたまふ時々、渡り参りて、人のありさまなども見ならひたまへかし。ことなることなき人も、おのづから人に交じらひ、さる方になれば、さてもありぬかし。さる心して、見えたてまつりたまひなむや」

とのたまへば、

おし張りて、五節の君とて、されたる若人のあると、双六をぞ打ちたまふ。手をいと切におしもみて、

「せうさい、せうさい」

とこふ声ぞ、いと舌疾きや。「あな、うたて」と思して、御供の人の前駆追ふをも、手かき制したまうて、なほ、妻戸の細目なるより、障子の開きあひたるを見入れたまふ。

この従姉妹も、はた、けしきはやれる、

「御返しや、御返しや」

と、筒をひねりて、とみに打ち出でず。中に思ひはありやすらむ、いとあさへたるさまでもしたり。

容貌はひちちかに、愛敬づきたるさまして、髪うるはしく、罪軽げなるを、額のいと近やかなると、声のあはつけさとにそこなはれたるなめり。取りたててよしとはなけれど、異人とあらがふべくもあらず、鏡に思ひあはせられたまふに、いと宿世心づきなし。

「かくてもものしたまふは、つきなくうひうひしくなどやある。ことしげくのみありて、訪らひまうでずや」

とのたまへば、例の、いと舌疾にて、

「かくてさぶらふは、何のもの思ひかはべらむ。年ごろ、おぼつかなく、ゆかしく思ひきこえさせし御顔、常にえ見たてまつらぬばかりこそ、手打たぬ心地しはべれ」

と聞こえたまふ。

「げに、身に近く使ふ人もさをさなきに、さやうにても見ならしたてまつらむと、かねては思ひしかど、えさしもあるまじきわざなりけり。なべての仕うまつり人こそ、とあるもかかるも、おのづから立ち交らひて、人の耳をも目を、かならずしもとどめぬものなれば、心やすかべかめれ。それだに、その

大宮よりも、常におぼつかなきことを恨みきこえたまへど、かくのたまふるがつつましくて、え渡り見たてまつりたまはず。

大臣、この北の対の今姫君を、

「いかにせむ。さかしらに迎へ率て来て。人かく誹るとて、返し送らむも、いと軽々しく、もの狂ほしきやうなり。かくて籠めおきたれば、まことにかしづくべき心あるかと、人の言ひなすなるもねたし。女御の御方などに交じらはせて、さるをこのものにないてむ。人のいとかたはなるものに言ひおとすなる容貌、はた、いとき言ふばかりにやはある」

など思して、女御の君に、

「かの人参らせむ。見苦しからむことなどは、老いしらへる女房などして、つつまず言ひ教へさせたまひて御覧ぜよ。若き人びとの言種には、な笑はせさせたまひそ。うたてあはつけきやうなり」

と、笑ひつつ聞こえたまふ。

「などか、いときことのほかにははべらむ。中将などの、いと二なく思ひはべりけむかね言に足らずといふばかりにこそははべらめ。かくのたまひ騒ぐを、はしたなう思はるるにも、かたへはかかやかしきにや」

と、いと恥づかしげにて聞こえさせたまふ。この御ありさまは、こまかにをかしげさはなくて、いとあてに澄みたるものの、なつかしきさま添ひて、おもしろき梅の花の開けさしたる朝ぼらけおぼえて、残り多かりげにほほ笑みたまへるぞ、人に異なりける、と見たてまつりたまふ。

「中将の、いとき言へど、心若きたどり少なきに」

など申したまふも、いとほしげなる人の御おぼえかな。

やがて、この御方のたよりに、たたずみおはして、のぞきたまへば、簾高く

扇を鳴らしたまへるに、何心もなく見上げたまへるまみ、らうたげにて、つらつき赤めるも、親の御目にはうつくしくのみ見ゆ。

「うたた寝はいさめきこゆるものを。などか、いとものはかなきさまにては大殿籠もりける。人びとも近くさぶらはで、あやしや。

女は、身を常に心づかひして守りたらむなむよかるべき。心やすくうち捨てざまにもてなしたる、品なきことなり。

さりとして、いときかしく身かためて、不動の陀羅尼誦みて、印つくりてみたらむも憎し。うつつの人にもあまり気遠く、もの隔てがましきなど、気高きやうとても、人にくく、心うつくしくはあらぬわざなり。

太政大臣の、后がねの姫君ならはしたまふなる教へは、よろづのことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおぼめくこともあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。

げに、さもあることなれど、人として、心にもするわざにも、立ててなびく方は方とあるものなれば、生ひ出でたまふさまあらむかし。この君の人となり、宮仕へに出だし立てたまはむ世のけしきこそ、いとゆかしけれ」

などのたまひて、

「思ふやうに見たてまつらむと思ひし筋は、難うなりにたる御身なれど、いかで人笑はれならずしなしたてまつらむとなむ、人の上のさまざまなるを聞くごとに、思ひ乱れはべる。

試み事にねむごろがらむ人のねぎごとに、なしばしなびきたまひそ。思ふさまはべり」

など、いとらうたしと思ひつつ聞こえたまふ。

「昔は、何ごとも深くも思ひ知らで、なかなか、さしあたりていとほしかりしことの騒ぎにも、おもなくて見えたてまつりけるよ」と、今ぞ思ひ出づるに、胸ふたがりて、いみじく恥づかしき。

あたたら、大臣の、塵もつかず、この世には過ぎたまへる御身のおぼえありさまに、おもだたしき腹に、女かしづきて、げに疵なからむと、思ひやりめでたきがものしたまはぬは。

おほかたの、子の少なくて、心もとなきなめりかし。劣り腹なれど、明石の御許の産み出でたるはしも、さる世になき宿世にて、あるやうあらむとおぼゆかし。

その今姫君は、ようせずは、実の御子にもあらじかし。さすがにいとけしきあるところつきたまへる人にて、もてないたまふならむ」

と、言ひおとしたまふ。

「さて、いかが定めらるなる。親王こそまつはし得たまはむ。もとより取り分きて御仲よし、人柄も警策なる御あはひどもならむかし」

などのたまひては、なほ、姫君の御こと、飽かず口惜し。「かやうに、心にくくもてなして、いかにしなきむなど、やすからずいぶかしがらせましものを」とねたければ、位さばかりと見ざらむ限りは、許しがたく思すなりけり。

大臣なども、ねむごろに口入れかへさひたまはむにこそは、負くるやうにてもなびかめと思すに、男方は、さらに焦られきこえたまはず、心やましくなむ。

とかく思しめぐらすままに、ゆくりもなく軽らかにはひ渡りたまへり。少将も御供に参りたまふ。

姫君は、昼寝したまへるほどなり。羅の単衣を着たまひて臥したまへるさま、暑かはしくは見えず、いとらうたげにささやかなり。透きたまへる肌つきなど、いとうつくしげなる手つきして、扇を持たまへりけるながら、かひなを枕にて、うちやられたる御髪のほど、いと長くこちたくはあらねど、いとをかしき末つきなり。

人びともの後に寄り臥しつうち休みたれば、ふともおどろいたまはず。

疎みきこえたまはず、さるべき御応へも、馴れ馴れしからぬほどに聞こえかはしなどして、見るままにいと愛敬づき、薫りまさりたまへれば、なほさてもえ過ぐしやるまじく思り返す。

「さはまた、さて、ここながらかしづき据ゑて、さるべき折々に、はかなくうち忍び、ものをも聞こえて慰みなむや。かくまだ世馴れぬほどの、わづらはしさにこそ、心苦しくはありけれ、おのづから関守強くとも、ものの心知りそめ、いとほしき思ひなくて、わが心も思ひ入りなば、しげくとも障はらじかし」と思し寄る、いとけしからぬことなりや。

いよいよ心やすからず、思ひわたらむ苦しからむ。なのめに思ひ過ぐさむことの、とぎまかくさまにもかたきぞ、世づかずむつかしき御語らひなりける。

内の大殿は、この今の御女のことを、「殿の人も許さず、軽み言ひ、世にもほきたることと誹りきこゆ」と、聞きたまふに、少将の、ことのついでに、太政大臣の「さることや」ととぶらひたまひしこと、語りきこゆれば、

「さかし。そこにこそは、年ごろ、音にも聞こえぬ山賤の子迎へ取りて、ものめかしたつれ。をさをさ人の上もどきたまはぬ大臣の、このわたりのことは、耳とどめてぞおとしめたまふや。これぞ、おぼえある心地しける」

とのたまふ。少将の、

「かの西の対に据ゑたまへる人は、いとこともなきけはひ見ゆるわたりになむはべるなる。兵部卿宮など、いたう心とどめてのたまひわづらふとか。おぼろけにはあらじとなむ、人びと推し量りはべめる」

と申したまへば、

「いで、それは、かの大臣の御女と思ふばかりのおぼえのいといみじきぞ。人の心、皆さこそある世なめれ。かならずさしもすぐれじ。人びとしきほどならば、年ごろ聞こえなまし。」

「山賤の垣ほに生ひし撫子の

もとの根ざしを誰れか尋ねむ」

はかなげに聞こえないたまへるさま、げにいとなつかしく若やかなり。

「来ざらましかば」

とうち誦じたまひて、いとどしき御心は、苦しきまで、なほえ忍び果つまじく思さる。

渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり咎むべきほどは、心の鬼に思しとどめて、さるべきことをし出でて、御文の通はぬ折なし。ただこの御ことのみ、明け暮れ御心にはかかりたり。

「なぞ、かくあいなきわざをして、やすからぬもの思ひをすらむ。さ思はじとて、心のままにもあらば、世の人のそしり言はむことの軽々しさ、わがためをばさるものにて、この人の御ためいとほしかるべし。限りなき心ざしといふとも、春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじく」思し知りたり。「さて、その劣りの列にては、何ばかりかはあらむ。わが身ひとつこそ、人よりは異なれ、見む人のあまたが中に、かかづらはむ末にては、何のおぼえかはたけからむ。異なることなき納言の際の、二心なくて思はむには、劣りぬべきことぞ」

と、みづから思し知るに、いといとほしくて、「宮、大将などにや許してまし。さてもて離れ、いざなひ取りては、思ひも絶えなむや。いふかひなきにて、さもしてむ」と思す折もあり。

されど、渡りたまひて、御容貌を見たまひ、今は御琴教へたてまつりたまふにさへことづけて、近やかに馴れ寄りたまふ。

姫君も、初めこそむくつけく、うたてとも思ひたまひしか、「かくても、なだらかに、うしろめたき御心はあらざりけり」と、やうやう目馴れて、いとしも

まへり。

「貫河の瀬々のやはらた」と、いとなつかしく謡ひたまふ。「親避くるつまは、すこしうち笑ひつつ、わざともなく搔きなしたまひたる菅搔きのほど、いひ知らずおもしろく聞こゆ。」

「いで、弾きたまへ。才は人になむ恥ぢぬ。「想夫恋」ばかりこそ、心のうちに思ひて、紛らはす人もありけめ、おもなくて、かれこれに合はせつるなむよき」

と、切に聞こえたまへど、さる田舎の隈にて、ほのかに京人と名のりける、古大君女教へきこえければ、ひがことにもやとつつましくて、手触れたまはず。

「しばしも弾きたまはなむ。聞き取ることもや」と心もとなきに、この御琴によりぞ、近くゐざり寄りて、

「いかなる風の吹き添ひて、かくは響きはべるぞとよ」

とて、うち傾きたまへるさま、火影にいとうつくしげなり。笑ひたまひて、

「耳固からぬ人のためには、身にしむ風も吹き添ふかし」

とて、押しやりたまふ。いと心やまし。

人びと近くさぶらへば、例の戯れごともえ聞こえたまはで、

「撫子を飽かでも、この人びとの立ち去りぬるかな。いかで、大臣にも、この花園見せたてまつらむ。世もいと常なきをと思ふに、いにしへも、ものついでに語り出でたまへりしも、ただ今のこととぞおぼゆる」

とて、すこしのたまひ出でたるにも、いとあはれなり。

「撫子のとこなつかしき色を見ば

もとの垣根を人や尋ねむ

このことのわづらはしきにこそ、繭ごもりも心苦しう思ひきこゆれ」  
とのたまふ。君、うち泣きて、

こき。大和琴とはかなく見せて、際もなくしおきたることなり。広く異国のことを知らぬ女のためとなむおぼゆる。

同じくは、心とどめて物などに掻き合はせて習ひたまへ。深き心とて、何ばかりもあらずながら、またまことに弾き得ることはかたきにやあらむ、ただ今は、この内大臣にならずらふ人なしかし。

ただはかなき同じ菅搔きの音に、よろづのものの音、籠もり通ひて、いふかたもなくこそ、響きのぼれ」

と語りたまへば、ほのぼの心得て、いかでと思すことなれば、いとどいぶかしくて、

「このわたりにて、さりぬべき御遊びの折など、聞きはべりなむや。あやしき山賤などのなかにも、まねぶものあまはべるることなれば、おしなべて心やすくやとこそ思ひたまへつれ。さは、すぐれたるは、さまことにやはらむ」

と、ゆかしげに、切に心に入れて思ひたまへれば、

「さかし。あづまとぞ名も立ち下りたるやうなれど、御前の御遊びにも、まづ書司を召すは、人の国は知らず、ここにはこれをものの親としたるにこそあめれ。

そのなかにも、親としつべき御手より弾き取りたまへらむは、心ことなりなむかし。ここになども、さるべからむ折にはものしたまひなむを、この琴に、手惜しまずなど、あきらかに掻き鳴らしたまはむことやかたからむ。ものの上手は、いづれの道も心やすからずのみぞあめる。

さりとも、つひには聞きたまひてむかし」

とて、調べすこし弾きたまふ。ことつひいとなく、今めかしくをかし。「これにもまされる音や出づらむ」と、親の御ゆかしさたち添ひて、このことにてさへ、「いかならむ世に、さてうちとけ弾きたまはむを聞かむ」など、思ひゐた

中将の君は、かくよきなかに、すぐれてをかしげになまめきたまへり。

「中将を厭ひたまふこそ、大臣は本意なけれ。交じりものなく、きらきらしかめるなかに、大君だつ筋にて、かたくななりとにや」

とのたまへば、

「来まさば、といふ人もはべりけるを」

と聞こえたまふ。

「いで、その御肴もてはやされむさまは願はしからず。ただ、幼きどちの結びおきけむ心も解けず、年月、隔てたまふ心むけのつらきなり。まだ下臈なり、世の聞き耳軽しと思はれば、知らず顔にて、ここに任せたまへらむに、うしろめたくはありなましや」

など、うめきたまふ。「さは、かかる御心の隔てある御仲なりけり」と聞きたまふにも、親に知られたてまつらむことのいつとなきは、あはれにいぶせく思す。

月もなきころなれば、燈籠に御殿油参れり。

「なほ、気近くて暑かはしや。篝火こそよけれ」

とて、人召して、

「篝火の台一つ、こなたに」

と召す。をかしげなる和琴のある、引き寄せたまひて、掻き鳴らしたまへば、律にいとよく調べられたり。音もいとよく鳴れば、すこし弾きたまひて、

「かやうのことは御心に入らぬ筋にやと、月ごろ思ひおとしきこえけるかな。秋の夜の月影涼しきほど、いと奥深くはあらで、虫の声に掻き鳴らし合はせたるほど、気近く今めかしきものの音なり。ことごとしき調べ、もてなししどけなしや。」

このものよ、さながら多くの遊び物の音、拍子を調べとりたるなむいとかし

「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中に、厭はれぬべき齡にもなりにけりや」

とて、西の対に渡りたまへば、君達、皆御送りに参りたまふ。

たそかれ時のおぼおぼしきに、同じ直衣どもなれば、何ともわきまへられぬに、大臣、姫君を、

「すこし外出でたまへ」

とて、忍びて、

「少将、侍従など率てまうで来たり。いと翔けり来まほしげに思へるを、中将の、いと実法の人にて率て来ぬ、無心なめりかし。

この人びとは、皆思ふ心なきならじ。なほなほしき際をだに、窓の内なるほどは、ほどに従ひて、ゆかしく思ふべかめるわぎなれば、この家のおぼえ、うちうちのくだくだしきほどよりは、いと世に過ぎて、ことことしくなむ言ひ思ひなすべかめる。かたがたものすめれど、さすがに人の好きごと言ひ寄らむにつきなしかし。

かくてものしたまふは、いかでさやうならむ人のけしきの、深さ浅さをも見むなど、さうざうしきままに願ひ思ひしを、本意なむ叶ふ心地しける」

など、ささめきつつ聞こえたまふ。

御前に、乱れがはしき前裁なども植ゑさせたまはず、撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつかしく結ひなして、咲き乱れたる夕ばえ、いみじく見ゆ。皆、立ち寄りて、心のままにも折り取らぬを、飽かず思ひつつやすらふ。

「有職どもなりな。心もちるなども、とりどりにつけてこそめやすけれ。右の中将は、ましてすこし静まりて、心恥づかしき気まさりたり。いかにぞや、おとづれ聞こゆや。はしたなくも、なさし放ちたまひそ」

などのたまふ。

る。詳しくさまは、え知りはべらず。げに、このころ珍しき世語りになむ、人びともしはべるなる。かやうのことにぞ、人のため、おのづから家損なるわざにはべりけれ」

と聞こゆ。「まことなりけり」と思して、

「いと多かめる列に、離れたらむ後る雁を、強ひて尋ねたまふが、ふくつけきぞ。いともしきに、さやうならむものくさはひ、見出でまほしけれど、名のりももの憂き際とや思ふらむ、さらにこそ聞こえね。さても、もて離れたることにはあらじ。らうがはしくとかく紛れたまふめりしほどに、底清く澄まぬ水にやどる月は、曇りなきやうのいかでかあらむ」

と、ほほ笑みてのたまふ。中将の君も、詳しく聞きたまふことなれば、えしもまめだたず。少将と藤侍従とは、いとからしと思ひたり。

「朝臣や、さやうの落葉をだに拾へ。人悪ろき名の後の世に残らむよりは、同じかざしにて慰めむに、なでふことかあらむ」

と、弄じたまふやうなり。かやうのことにてぞ、うはべはいとよき御仲の、昔よりさすがに隙ありける。まいて、中将をいたくはしたなめて、わびさせたまふつらさを思しあまりて、「なまねたしとも、漏り聞きたまへかし」と思すなりけり。

かく聞きたまふにつけても、

「対の姫君を見せたらむ時、またあなづらはしからぬ方にもてなされなむはや。いとものきらきらしく、かひあるところつきたまへる人にて、善し悪しきけぢめも、けぎやかにもてはやし、またもて消ち軽むることも、人に異なる大臣なれば、いかにものしと思ふらむ。おぼえぬさまにて、この君をさし出でたらむに、え軽くは思さじ。いとぎびしくもてなしてむ」など思す。

夕つけゆく風、いと涼しくて、帰り憂く若き人びとは思ひたり。

いと暑き日、東の釣殿に出でたまひて涼みたまふ。中將の君もさぶらひたまふ。親しき殿上人あまたさぶらひて、西川よりたてまつれる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調べて参らす。例の大殿の君達、中將の御あたり尋ねて参りたまへり。

「さうざうしくねぶたかりつる、折よくものしたまへるかな」

とて、大御酒参り、氷水召して、水飯など、とりどりにさうどきつつ食ふ。風はいとよく吹けども、日のどかに曇りなき空の、西日になるほど、蝉の声などもいと苦しげに聞こゆれば、

「水の上無徳なる今日の暑かはしきかな。無礼の罪は許されなむや」  
とて、寄り臥したまへり。

「いとかかるころは、遊びなどもすさまじく、さすがに、暮らしがたきこそ苦しけれ。宮仕へする若き人びと堪へがたからむな。帯も解かぬほどよ。ここにてだにうち乱れ、このころ世にあらむことの、すこし珍しく、ねぶたさ覚めぬべからむ、語りて聞かせたまへ。何となく翁びたる心地して、世間のこともおぼつかなしや」

などのたまへど、珍しきこととて、うち出で聞こえむ物語もおぼえねば、かしまりたるやうにて、皆いと涼しき高欄に、背中押しつつさぶらひたまふ。

「いかで聞きしことぞや、大臣のほか腹の娘尋ね出でて、かしづきたまふなるとまねぶ人ありしかば、まことにや」

と、弁少將に問ひたまへば、

「ことごとしく、さまで言ひなすべきことにもはげらざりけるを。この春のころほひ、夢語りしたまひけるを、ほの聞き伝へはべりける女の、『われなむかこつべきことある』と、名のり出ではべりけるを、中將の朝臣なむ聞きつけて、『まことにさやうに触ればひぬべきしるしやある』と、尋ねとぶらひはべりけ

常 夏

常

夏

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

内の大臣は、御子ども腹々いと多かるに、その生ひ出でたるおぼえ、人柄に従ひつつ、心にまかせたるやうなるおぼえ、御勢にて、皆なし立てたまふ。女はあまたもおはせぬを、女御も、かく思ししことのとどこほりたまひ、姫君も、かくこと違ふさまにてものしたまへば、いと口惜しと思す。

かの撫子を忘れたまはず、ものの折にも語り出でたまひしことなれば、

「いかになりにけむ。ものはかなかりける親の心に引かれて、らうたげなりし人を、行方知らずなりにたること。すべて女子といはむものなむ、いかにもいかにも目放つまじかりける。さかしらにわが子と言ひて、あやしきさまにてはふれやすらむ。とてもかくても、聞こえ出で来ば」

と、あはれに思しわたる。君達にも、

「もし、さやうなる名のりする人あらば、耳とどめよ。心のすさびにまかせて、さるまじきことも多かりしなかに、これは、いとしか、おしなべての際にも思はざりし人の、はかなきもの倦むじをして、かく少なかりけるもののくさはひ一つを、失ひたることの口惜しきこと」

と、常にのたまひ出づ。中ごろなどはさしもあらず、うち忘れたまひけるを、人の、さまさまにつけて、女子かしづきたまへるたぐひどもに、わが思ほすにしもかなはぬが、いと心憂く、本意なく思すなりけり。

夢見たまひて、いとよく合はする者召して、合はせたまひけるに、

「もし、年ごろ御心に知られたまはぬ御子を、人のものになして、聞こしめし出づることや」

と聞こえたりければ、

「女子の人の子になることは、をさをさなしかし。いかなることにかあらむ」  
など、このころぞ、思しのたまふべかめる。

中將の君を、こなたには氣遠くもてなしきこえたまへれど、姫君の御方には、さしもさし放ちきこえたまはずならはしたまふ。

「わが世のほどは、とてもかくても同じことなれど、なからむ世を思ひやるに、なほ見つき、思ひしみぬることどもこそ、取り分きてはおぼゆべけれ」

とて、南面の御簾の内は許したまへり。台盤所、女房のなかは許したまはず。あまたおはせぬ御仲らひにて、いとやむごとなくかしづききこえたまへり。

おほかたの心もちみなども、いとものものしく、まめやかにものしたまふ君なれば、うしろやすく思し譲れり。まだいはけたる御雛遊びなどのけはひの見ゆれば、かの人の、もろともに遊びて過ぐしし年月の、まづ思ひ出でらるれば、雛の殿の宮仕へ、いとよくしたまひて、折々にうちしほたれたまひけり。

さもありぬべきあたりには、はかなしごとものたまひ触るるはあまたあれど、頼みかくべくもしなさず。さる方になどかは見ざらむと、心とまりぬべきをも、強ひてなほざりごとにしなして、なほ「かの、緑の袖を見え直してしがな」と思ふ心のみぞ、やむごとなき節にはとまりける。

あながちになどかかづらひまどはば、倒ふるる方に許したまひもしつべかれど、「つらしと思ひし折々、いかで人にもことわらせたてまつらむ」と思ひおきし、忘れがたくて、正身ばかりには、おろかならぬあはれを尽くし見せて、おほかたには焦られ思へらず。

兄の君達なども、なまねたしなどのみ思ふこと多かり。対の姫君の御ありさまを、右中將は、いと深く思ひしみて、言ひ寄るたよりもいとはかなければ、この君をぞかこち寄りけれど、

「人の上にては、もどかしきわぎなりけり」

と、つれなく応へてぞものしたまひける。昔の父大臣たちの御仲らひに似たり。

りけりかし。

「姫君の御前にて、この世馴れたる物語など、な読み聞かせたまひそ。みそか心つきたるものの娘などは、をかしとにはあらねど、かかること世にはありけりと、見馴れたまはむぞ、ゆゆしきや」

とのたまふも、こよなしと、対の御方聞きたまはば、心置きたまひつべくなむ。

上、

「心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。『宇津保』の藤原君の女こそ、いと重りかにはかばかしき人にて、過ちなかめれど、すぐよかに言ひ出でたることもしわざも、女しきところなかめるぞ、一樣なめる」

とのたまへば、

「うつつの人も、さぞあるべかめる。人びとしく立てたる趣きことにて、よきほどにかまへぬや。よしなからぬ親の、心とどめて生ほしたてたる人の、子めかしきを生けるしるしにて、後れたること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、親のしわざさへ思ひやらるこそ、いとほしけれ。

げに、さいへど、その人のけはひよと見えたるは、かひあり、おもだたしかし。言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることのなかに、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。

すべて、善からぬ人に、いかで人ほめさせじ」

など、ただ「この姫君の、点つかれたまふまじく」と、よろづに思しのたまふ。

継母の腹ぎたなき昔物語も多かるを、このころ、「心見えに心づきなし」と思せば、いみじく選りつつなむ、書きとのへさせ、絵などにも描かせたまひける。

みじく気遠きものの姫君も、御心のやうにつれなく、そらおぼめきたるは世にあらじな。いぎ、たぐひなき物語にして、世に伝へさせむ」

と、さし寄りて聞こえたまへば、顔を引き入れて、

「さらずとも、かく珍かなることは、世語りにこそはなりはべりぬべかめれ」  
とのたまへば、

「珍かにやおぼえたまふ。げにこそ、またなき心地すれ」

とて、寄りゐたまへるさま、いとあざれたり。

「思ひあまり昔の跡を訪ぬれど

親に背ける子ぞたぐひなき

不孝なるは、仏の道にもいみじくこそ言ひたれ」

とのたまへど、顔ももたげたまはねば、御髪をかきやりつつ、いみじく怨みたまへば、からうして、

「古き跡を訪ぬれどげになかりけり

この世にかかる親の心は」

と聞こえたまふも、心恥づかしければ、いといたくも乱れたまはず。

かくして、いかなるべき御ありさまならむ。

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は捨てがたく思したり。『くまのの物語』の絵にてあるを、

「いとよく描きたる絵かな」

とて御覧ず。小さき女君の、何心もなくて昼寝したまへるところを、昔のありさま思し出でて、女君は見たまふ。

「かかる童どちだに、いかにされたりけり。まろこそ、なほ例にしつべく、心のどけさは人に似ざりけれ」

と聞こえ出でたまへり。げに、たぐひ多からぬことどもは、好み集めたまへ

とのたまへば、

「げに、偽り馴れたる人や、さまざまにさも汲みはべらむ。ただいと真のこ  
ととこそ思うたまへられけれ」

とて、硯をおしやりたまへば、

「こちなくも聞こえ落としてけるかな。神代より世にあることを、記しおき  
けるななり。『日本紀』などは、ただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しく詳  
しきことはあらめ」

とて、笑ひたまふ。

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、善きも悪しき  
も、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず、聞くにもあまることを、後の  
世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心に籠めがたくて、言ひおき始めたるな  
り。善きさまに言ふとては、善きことの限り選り出でて、人に従はむとては、  
また悪しきさまの珍しきことを取り集めたる、皆かたがたにつけたる、この世  
の他のことならずかし。

人の朝廷の才、作りやう変はる、同じ大和の国のことなれば、昔今の変は  
るべし、深きこと浅きことのけぢめこそあらめ、ひたぶるに虚言と言ひ果てむ  
も、ことの心違ひてなむありける。

仏の、いとうるはしき心にて説きおきたまへる御法も、方便といふことあり  
て、悟りなきものは、ここかしこ違ふ疑ひを置きつべくなむ。『方等経』の中  
多かれど、言ひもてゆけば、ひとつ旨にありて、菩提と煩惱との隔たりなむ、  
この、人の善き悪しきばかりのことは変はりける。

よく言へば、すべて何ごとも空しからずなりぬや」

と、物語をいとわざとのことにのたまひなしつ。

「さて、かかる古言の中に、まろがやうに実法なる痴者の物語はありや。い

語などのすきびにて、明かし暮らしたまふ。明石の御方は、さやうのことをもよしありてしなしたまひて、姫君の御方にたてまつりたまふ。

西の対には、ましてめづらしくおぼえたまふことの筋なれば、明け暮れ書き読みとなみおはす。つきなからぬ若人あまたあり。さまさまにめづらかなる人の上などを、真にや偽りにや、言ひ集めたるなかにも、「わがありさまのやうなるはなかりけり」と見たまふ。

『住吉』の姫君の、さしあたりけむ折はさるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思しなずらへたまふ。

殿も、こなたかなたにかかるものどもの散りつつ、御目に離れねば、

「あな、むつかし。女こそ、ものうるさがらず、人に欺かれむと生まれたるものなれ。ここらのなかに、真はいと少なからむを、かつ知る知る、かかるすずろごとに心移し、はかられたまひて、暑かはしき五月雨の、髪の乱るるも知らで、書きたまふよ」

とて、笑ひたまふものから、また、

「かかる世の古言ならでは、げに、何をか紛るることなきつれづれを慰めまし。さて、この偽りどものなかに、げにさもあらむとあはれを見せ、つきづきしく続けたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君のもの思へる見るに、かた心つかし。

また、いとあるまじきことかなと見る見る、おどろおどろしくとりなしけるが目おどろきて、静かにまた聞きたびぞ、憎けれど、ふとをかしき節、あらはなるなどもあるべし。

このころ、幼き人の女房などに時々読まするを立ち聞けば、ものよく言ふものの世にあるべきかな。虚言をよくしなれたる口つきよりぞ言ひ出だすらむとおぼゆれど、さしもあらじや」

人の上を難つけ、落としめぎまのこと言ふ人をば、いとほしきものにしたまへば、

「右大将などをだに、心にききにすめるを、何ばかりかはある。近きよすがにて見むは、飽かぬことにやあらむ」

と、見たまへど、言に表はしてもなたまはず。

今はただおほかたの御睦びにて、御座なども異々にて大殿籠もる。「などてかく離れそめしぞ」と、殿は苦しがりたまふ。おほかた、何やかやともそばみきこえたまはで、年ごろかく折ふしにつけたる御遊びどもを、人伝てに見聞きたまひけるに、今日めづらしかりつることばかりをぞ、この町のおぼえきらきらしと思したる。

「その駒もすさめぬ草と名に立てる

汀の菖蒲今日や引きつる」

とおほどかに聞こえたまふ。何ばかりのことにもあらねど、あはれと思したり。

「鴉鳥に影をならぶる若駒は

いつか菖蒲に引き別るべき」

あいだちなき御ことどもなりや。

「朝夕の隔てあるやうなれど、かくて見たてまつるは、心やすくこそあれ」  
戯れごとなれど、のどやかにおはする人ざまなれば、静まりて聞こえなしたまふ。

床をば譲りきこえたまひて、御几帳引き隔てて大殿籠もる。気近くなどあらむ筋をば、いと似げなかるべき筋に、思ひ離れ果てきこえたまへれば、あながちにも聞こえたまはず。

長雨例の年よりもいたくして、晴るる方なくつれづれなれば、御方々、絵物

る唐衣、今日のよそひどもなり。

こなたのは、濃き一襲に、撫子襲の汗衫などおほどかにて、おのおの挑み顔なるもてなし、見所あり。

若やかなる殿上人などは、目をたててけしきばむ。未の時に、馬場の御殿に出でたまひて、げに親王たちおはし集ひたり。手結ひの公事にはさま変りて、次將たちかき連れ参りて、さまことに今めかしく遊び暮らしたまふ。

女は、何のあやめも知らぬことなれど、舎人どもさへ艶なる装束を尽くして、身を投げたる手まどはしなどを見るぞ、をかしかりける。

南の町も通して、はるばるとあれば、あなたにもかやうの若き人どもは見けり。「打毬楽」「落蹲」など遊びて、勝ち負けの乱声どものしるも、夜に入り果てて、何事も見えずなり果てぬ。舎人どもの禄、品々賜はる。いたく更けて、人びと皆あかれたまひぬ。

大臣は、こなたに大殿籠もりぬ。物語など聞こえたまひて、

「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意けしきなど、よしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」

とのたまふ。

「御弟にこそものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろ、かく折過ぐさず渡り、睦びきこえたまふと聞きはべれど、昔の内わたりにてほの見たてまつりしのち、おぼつかなしかし。いとよくこそ、容貌などねびまさりたまひにけれ。帥の親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」

とのたまへば、「ふと見知りたまひにけり」と思せど、ほほ笑みて、なほあるを、良しとも悪しともかけたまはず。

かしおきて、出でたまひぬ。これかれも、「なほ」と聞こゆれば、御心にもいかが申しけむ、

「あらはれていとど浅くも見ゆるかな

菖蒲もわかず泣かれける根の

若々しく」

とばかり、ほのかにぞあめる。「手を今すこしゆるづけたらば」と、宮は好ましき御心に、いささか飽かぬことと見たまひけむかし。

楽玉など、えならぬさまにて、所々より多かり。思し沈みつる年ごろの名残なき御ありさまにて、心ゆるびたまふことも多かるに、「同じくは、人の疵つくばかりのことなくてもやみにしがな」と、いかが思さざらむ。

殿は、東の御方にもさしのぞきたまひて、

「中将の、今日の司の手結ひのついでに、男ども引き連れてものすべきさまに言ひしを、さる心したまへ。まだ明きほどに來なむものぞ。あやしく、ここにはわざとならず忍ぶることをも、この親王たちの聞きつけて、訪らひものしたまへば、おのづからことごとしくなむあるを、用意したまへ」  
など聞こえたまふ。

馬場の御殿は、こなたの廊より見通すほど遠からず。

「若き人びと、渡殿の戸開けて物見よや。左の司に、いとよしある官人多かるころなり。少々の殿上人に劣るまじ」

とのたまへば、物見むことをいとをかしと思へり。

対の御方よりも、童女など、物見に渡り来て、廊の戸口に御簾青やかに掛けわたして、今めきたる裾濃の御几帳ども立てわたし、童、下仕へなどさまよふ。  
菖蒲襲の相、二藍の羅の汗衫着たる童女ぞ、西の対のなめる。

好ましく馴れたる限り四人、下仕へは、棟の裾濃の裳、撫子の若葉の色した

さまにて、かやうなる御心ばへならましかば、などかはいと似げなくもあらまし。人に似ぬありさまこそ、つひに世語りにやならむ」

と、起き臥し思しなやむ。さるは、「まことにゆかしげなきさまにはもてなし果てじ」と、大臣は思しけり。なほ、さる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくや思ひきこえたまへる、ことに触れつつ、ただならず聞こえ動かしなごしたまへど、やむごとなき方の、およびなくわづらはしきに、おり立ちあらはし聞こえ寄りたまはぬを、この君は、人の御さまも、気近く今めきたるに、おのづから思ひ忍びがたきに、折々、人見たてまつりつけば疑ひ負ひぬべき御もてなしなどは、うち交じるわざなれど、ありがたく思し返しつつ、さすがなる御仲なりけり。

五日には、馬場の御殿に出でたまひけるついでに、渡りたまへり。

「いかにぞや。宮は夜や更かしたまひし。いたくも馴らしきこえじ。わづらはしき気添ひたまへる人ぞや。人の心破り、ものの過ちすまじき人は、かたくこそありけれ」

など、活けみ殺しみ戒めおはする御さま、尽きせず若くきよげに見えたまふ。艶も色もこぼるばかりなる御衣に、直衣はかなく重なれるあはひも、いづこに加はれるきよらにかあらむ、この世の人の染め出だしたると見えず、常の色も変へぬ文目も、今日はめづらかに、をかしくおぼゆる薫りなども、「思ふことなくは、をかしかりぬべき御ありさまかな」と姫君思す。

宮より御文あり。白き薄様にて、御手はいとよしありて書きなしたまへり。見るほどこそをかしけれ、まねび出づれば、ことなることなしや。

「今日さへや引く人もなき水隠れに

生ふる菖蒲の根のみ泣かれむ」

例にも引き出でつべき根に結びつけたまへれば、「今日の御返り」などそその

宮は、人のおはするほど、さばかりと推し量りたまふが、すこし気近きけはひするに、御心ときめきせられたまひて、えならぬ羅の帷子の隙より見入れたまへるに、一間ばかり隔てたる見わたしに、かくおぼえなき光のうちほのめくを、をかしと見たまふ。

ほどもなく紛らはして隠しつ。されどほのかなる光、艶なることをつまにもしつべく見ゆ。ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを、飽かず思して、げに、このこと御心にしみにけり。

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに

人の消つには消ゆるものかは

思ひ知りたまひぬや」

と聞こえたまふ。かやうの御返しを、思ひまはさむもねぢけたれば、疾きばかりをぞ。

「声はせで身をのみ焦がす螢こそ

言ふよりまさる思ひなるらめ」

など、はかなく聞こえなして、御みづからは引き入りたまひにければ、いとほるかにもてなしたまふ愁はしきを、いみじく怨みきこえたまふ。

好き好きしきやうなれば、ゐたまひも明かさで、軒の雫も苦しさに、濡れ濡れ夜深く出でたまひぬ。時鳥などかならずうち鳴きけむかし。うるさければこそ聞きも止めぬ。

「御けはひなどのなまめかしきは、いとよく大臣の君に似たてまつりたまへり」と、人びともめできこえけり。昨夜、いと女親だちてつくろひたまひし御けはひを、うちうちは知らで、「あはれにかたじけなし」と皆言ふ。

姫君は、かくさすがなる御けしきを、

「わがみづからの憂さぞかし。親などに知られたてまつり、世の人めきたる

ほの聞きおはす。

姫君は、東面に引き入りて大殿籠もりにけるを、宰相の君の御消息伝へに、  
みざり入りたるにつけて、

「いとあまり暑かはしき御もてなしなり。よろづのこと、さまに従ひてこそ  
めやすけれ。ひたぶるに若びたまふべきさまにもあらず。この宮たちをさへ、  
さし放ちたる人伝てに聞こえたまふまじきことなりかし。御声こそ惜しみたま  
ふとも、すこし気近くだにこそ」

など、諫めきこえたまへど、いとわりなくて、ことづけてもはひ入りたまひ  
ぬべき御心ばへなれば、とぎまかうぎまにわびしければ、すべり出でて、母屋  
の際なる御几帳のもとに、かたはら臥したまへる。

何くれと言長き御応へ聞こえたまふこともなく、思しやすらふに、寄りたま  
ひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの。紙燭を  
さし出でたるかとあきれたり。

螢を薄きかたに、この夕つ方いと多く包みおきて、光をつつみ隠したまへり  
けるを、さりげなく、とかくひきつくろふやうにて。

にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたは  
ら目、いとをかしげなり。

「おどろかしき光見えば、宮も覗きたまひなむ。わが女と思すばかりのおぼ  
えに、かくまでのたまふなめり。人ざま容貌など、いとかくしも具したらむと  
は、え推し量りたまはじ。いとよく好きたまひぬべき心、惑はさむ」

と、かまへありきたまふなりけり。まことのわが姫君をば、かくしも、もて  
騒ぎたまはじ、うたてある御心なりけり。

こと方より、やをらすべり出でて、渡りたまひぬ。

り心地悪し」とて、聞こえたまはず。

人びとも、ことにやむごとく寄せ重きなども、をさをさなし。ただ、母君の御叔父なりける、宰相ばかりの人の娘にて、心ばせなど口惜しからぬが、世に衰へ残りたるを、尋ねとりたまへる、宰相の君とて、手などもよろしく書き、おほかたも大人びたる人なれば、さるべき折々の御返りなど書かせたまへば、召し出でて、言葉などのたまひて書かせたまふ。

ものなどのたまふさまを、ゆかしと思すなるべし。

正身は、かくうたてあるもの嘆かしきの後は、この宮などは、あはれげに聞こえたまふ時は、すこし見入れたまふ時もありけり。何かと思ふにはあらず、「かく心憂き御けしき見ぬわざもがな」と、さすがにされたところつきて思しけり。

殿は、あいなくおのれ心懸想して、宮を待ちきこえたまふも知りたまはで、よろしき御返りのあるをめづらしがりて、いと忍びやかにおはしましたり。

妻戸の間に御茵参らせて、御几帳ばかりを隔てにて、近きほどなり。

いといたう心して、空薫物心にくきほどに匂はして、つくろひおはするさま、親にはあらで、むつかしきさかしら人の、さすがにあはれに見えたまふ。宰相の君なども、人の御いらへ聞こえむこともおぼえず、恥づかしくてゐたるを、「埋もれたり」と、ひきつみたまへば、いとわりなし。

夕闇過ぎて、おぼつかなき空のけしきの曇らはしきに、うちしめりたる宮の御けはひも、いと艶なり。うちよりほのめく追風も、いとどしき御匂ひのたち添ひたれば、いと深く薫り満ちて、かねて思ししよりもをかしき御けはひを、心とどめたまひけり。

うち出でて、思ふ心のほどをのたまひ続けたる言の葉、おとなおとなしく、ひたぶるに好き好きしくはあらで、いとけはひことなり。大臣、いとをかしと、

今はかく重々しきほどに、よろづのどやかに思ししづめたる御ありさまなれば、頼みきこえさせたまへる人びと、さまざまにつけて、皆思ふさまに定まり、ただよはしからで、あらまほしくて過ぐしたまふ。

対の姫君こそ、いとほしく、思ひのほかなる思ひ添ひて、いかにせむと思し乱るめれ。かの監が憂かりしさまには、なずらふべきけはひならねど、かかる筋に、かけても人の思ひ寄りきこゆべきことならねば、心ひとつに思しつつ、「様ことに疎まし」と思ひきこえたまふ。

何ごとをも思し知りにたる御齡なれば、とぎまかうぎまに思し集めつつ、母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとりかへし惜しく悲しくおぼゆ。

大臣も、うち出でそめたまひては、なかなか苦しく思せど、人目を憚りたまひつつ、はかなきことをもえ聞こえたまはず、苦しくも思さるるままに、しげく渡りたまひつつ、御前の人遠く、のどやかなる折は、ただならずけしきばみきこえたまふごとに、胸つぶれつつ、けぎやかにはしたなく聞こゆべきにはあらねば、ただ見知らぬさまにもてなしきこえたまふ。

人ぎまのわららかに、気近くものしたまへば、いたくまめだち、心したまへど、なほをかしく愛敬づきたるけはひのみ見えたまへり。

兵部卿宮などは、まめやかにせめきこえたまふ。御労のほどはいくばくならぬに、五月雨になりぬる愁へをしたまひて、

「すこし気近きほどをだに許したまはば、思ふことをも、片端はるけてしかな」

と、聞こえたまへるを、殿御覧じて、

「なにかは。この君達の好きたまはむは、見所ありなむかし。もて離れてな聞こえたまひそ。御返り、時々聞こえたまへ」

とて、教へて書かせたてまつりたまへど、いとどうたておぼえたまへば、「乱

蚩

蚩

ち恨みきこえまごひありくめり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyra/index.html>)

またの朝、御文とくあり。悩ましがりて臥したまへれど、人びと御硯など参りて、「御返りとく」と聞こゆれば、しぶしぶに見たまふ。白き紙の、うはべはおいらかに、すすくしきに、いとめでたう書いたまへり。

「たぐひなかりし御けしきこそ、つらきしも忘れがたう。いかに人見たてまつりけむ。

うちとけて寝も見ぬものを若草の

ことあり顔にむすぼほるらむ

幼くこそものしたまひけれ」

と、さすがに親がりたる御言葉も、いと憎しと見たまひて、御返り事聞こえざらむも、人目あやしければ、ふくよかなる陸奥紙に、ただ、

「うけたまはりぬ。乱り心地の悪しうはべれば、聞こえさせぬ」

とのみあるに、「かやうのけしきは、さすがにすぐよかなり」とほほ笑みて、恨みどころある心地したまふ、うたてある心かな。

色に出でたまひてのちは、「太田の松の」と思はせたることなく、むつかしう聞こえたまふこと多かれば、いとど所狭き心地して、おきどころなきもの思ひつきて、いと悩ましうさへしたまふ。

かくて、ことの心知る人は少なうて、疎きも親しきも、むげの親さまに思ひきこえたるを、

「かうやうのけしきの漏り出でば、いみじう人笑はれに、憂き名にもあるべきかな。父大臣などの尋ね知りたまふにても、まめまめしき御心ばへにもあらざらむものから、ましていとあはつけう、待ち聞き思さむこと」

と、よろづにやすげなう思し乱る。

宮、大将などは、殿の御けしき、もて離れぬさまに伝へ聞きたまうて、いとねむごろに聞こえたまふ。この岩漏る中將も、大臣の御許しを見てこそ、かたよりにほの聞きて、まことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、おりた

けはひは、ただ昔の心地して、いみじうあはれなり。

わが御心ながらも、「ゆくりかにはあはつけきこと」と思し知らるれば、いとよく思し返しつつ、人もあやしと思ふべければ、いたう夜も更かきで出でたまひぬ。

「思ひ疎みたまはば、いと心憂くこそあるべけれ。よその人は、かうほればれしうはあらぬものぞよ。限りなく、そこひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。ただ昔恋しき慰めに、はかなきことをも聞こえむ。同じ心に応へなどしたまへ」

と、いとこまかに聞こえたまへど、我にもあらぬさまして、いといと憂しと思いたれば、

「いとさばかりには見たてまつらぬ御心ばへを、いとこよなくも憎みたまふべかめるかな」

と嘆きたまひて、

「ゆめ、けしきなくてを」

とて、出でたまひぬ。

女君も、御年こそ過ぐしたまひにたるほどなれ、世の中を知りたまはぬなかに、すこしうち世馴れたる人のありさまをだに見知りたまはねば、これより気近きさまにも思し寄らず、「思ひの外にもありける世かな」と、嘆かしきに、いとけしきも悪しければ、人びと、御心地悩ましげに見えたまふと、もて悩まきこゆ。

「殿の御けしきの、こまやかに、かたじけなくもおはしますかな。まことの御親と聞こゆとも、さらにかばかり思し寄らぬことなくは、もてなしきこえたまはじ」

など、兵部なども、忍びて聞こゆるにつけて、いとど思はずに、心づきなき御心のありさまを、疎ましう思ひ果てたまふにも、身ぞ心憂かりける。

なかなるもの思ひ添ふ心地したまて、今日はすこし思ふこと聞こえ知らせたまひける。

女は、心憂く、いかにせむとおぼえて、わななかるけしきもしるけれど、「何か、かく疎ましとは思いたる。いとよくも隠して、人に咎めらるべくもあらぬ心のほどぞよ。さりげなくてをもて隠したまへ。浅くも思ひきこえさせぬ心ざしに、また添ふべければ、世にたぐひあるまじき心地なむするを、この訪づれきこゆる人びとには、思し落とすべくやはある。いとかう深き心ある人は、世にありがたかるべきわざなれば、うしろめたくのみこそ」とのたまふ。いとさかしらなる御親心なりかし。

雨はやみて、風の竹に生るほど、はなやかにさし出でたる月影、をかしき夜のさまもしめやかなるに、人びとは、こまやかなる御物語にかしこまりおきて、気近くもさぶらはず。

常に見たてまつりたまふ御仲なれど、かくよき折しもありがたければ、言に出でたまへるついで、御ひたぶる心にや、なつかしいほどなる御衣どものけはひは、いとよう紛らはしすべしたまひて、近やかに臥したまへば、いと心憂く、人の思はむこともめづらかに、いみじうおぼゆ。

「まことの親の御あたりならましかば、おろかには見放ちたまふとも、かかさまの憂きことはあらまじや」と悲しきに、つつむとすれどこぼれ出でつつ、いと心苦しき御けしきなれば、

「かう思すこそつらけれ。もて離れ知らぬ人だに、世のことわりにて、皆許すわざなめるを、かく年経ぬる睦ましさに、かばかり見えたてまつるや、何の疎ましかるべきぞ。これよりあながちなる心は、よも見せたてまつらじ。おぼろけに忍ぶるにあまるほどを、慰むるぞや」

とて、あはれげになつかしう聞こえたまふこと多かり。まして、かやうなる

雨のうち降りたる名残の、いとものしめやかなる夕つ方、御前の若楓、柏木などの、青やかに茂りあひたるが、何となく心地よげなる空を見出したまひて、

「和してまた清し」

とうち誦じたまうて、まづ、この姫君の御さまの、匂ひやかげさを思し出でられて、例の、忍びやかに渡りたまへり。

手習などして、うちとけたまへりけるを、起き上がりたまひて、恥ぢらひたまへる顔の色あひ、いとをかし。なごやかなるけはひの、ふと昔思し出でらるるにも、忍びがたくて、

「見そめたてまつりしは、いとかうしもおぼえたまはずと思ひしを、あやしう、ただそれかと思ひまがへらるる折々こそあれ。あはれなるわざなりけり。中将の、さらに昔さまの匂ひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに、かかる人もものしたまうけるよ」

とて、涙ぐみたまへり。箱の蓋なる御果物の中に、橘のあるをまさぐりて、

「橘の薫りし袖によそふれば

変はれる身とも思ほえぬかな

世ととももの心にかけて忘れがたきに、慰むことなく過ぎつる年ごろを、かくて見たてまつるは、夢にやとのみ思ひなすを、なほえこそ忍ぶまじけれ。思し疎むなよ」

とて、御手をとらへたまへれば、女、かやうにもならひたまはざりつるを、いとうたておぼゆれど、おほどかなるさまにてもものしたまふ。

「袖の香をよそふるからに橘の

身さへはかなくなりもこそすれ」

むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつかしう、手つきのつづつと肥えたまへる、身なり、肌つきのこまやかにうつくしげなるに、なか

や」

と、昔物語を見たまふにも、やうやう人のありさま、世の中のあるやうを見知りたまへば、いとつつましく、心と知られたてまつらむことはかたかるべう、思す。

殿は、いとどらうたしと思ひきこえたまふ。上にも語り申したまふ。

「あやしうなつかしき人のありさまにもあるかな。かのいにしへのは、あまりはるけどころなくぞありし。この君は、もののありさまも見知りぬべく、気近き心ざま添ひて、うしろめたからずこそ見ゆれ」

など、ほめたまふ。ただにしも思すまじき御心ざまを見知りたまへれば、思し寄りて、

「ものの心得つべくはものしたまふめるを、うらなくしもうちとけ、頼みきこえたまふらむこそ、心苦しけれ」

とのたまへば、

「など、頼もしげなくやはあるべき」

と聞こえたまへば、

「いでや、われにても、また忍びがたう、もの思はしき折々ありし御心ざまの、思ひ出でらるるふしぶしなくやは」

と、ほほ笑みて聞こえたまへば、「あな、心疾」とおぼいて、

「うたても思し寄るかな。いと見知らずしもあらじ」

とて、わづらはしければ、のたまひさして、心のうちに、「人のかう推し量りたまふにも、いかがはあべからむ」と思し乱れ、かつは、ひがひがしう、けしからぬ我が心のほども、思ひ知られたまうけり。

心にかかれるままに、しばしば渡りたまひつつ見たてまつりたまふ。

御心に飽かざらむことは、心苦しく」

など、いとまめやかにて聞こえたまへば、苦しうて、御応へ聞こえむともおぼえたまはず。いと若々しきもうたておぼえて、

「何ごとも思ひ知りはべらざりけるほどより、親などは見ぬものにならひはべりて、ともかくも思うたまへられずなむ」

と、聞こえたまふさまのいとおいらかなれば、げにと思いて、

「さらば世のたとひの、後の親をそれと思いて、おろかならぬ心ぎしのほども、見あらはし果てたまひてむや」

など、うち語らひたまふ。思すさまのことは、まばゆければ、えうち出でたまはず。けしきある言葉は時々混ぜたまへど、見知らぬさまなれば、すずろにうち嘆かれて渡りたまふ。

御前近き呉竹の、いと若やかに生ひたちて、うちなびくさまのなつかしきに、立ちとまりたまうて、

「ませのうちに根深く植ゑし竹の子の

おのが世々にや生ひわかるべき

思へば恨めしかべいことぞかし」

と、御簾を引き上げて聞こえたまへば、ゐざり出でて、

「今さらにいかならむ世か若竹の

生ひ始めけむ根をば尋ねむ

なかなかにこそはべらめ」

と聞こえたまふを、いとあはれと思しけり。さるは、心のうちにはさも思はずかし。いかならむ折聞こえ出でむとすらむと、心もとなくあはれなれど、この大臣の御心ばへのいとありがたきを、

「親と聞こゆとも、もとより見馴れたまはぬは、えかうしもこまやかならず

見入るる人もはべらざりしにこそ」

と聞こゆれば、

「いとらうたきことかな。下臈なりとも、かの主たちをば、いかがいときははしたなめむ。公卿といへど、この人のおぼえに、かならずしも並ぶまじきこそ多かれ。さるなかにも、いとしづまりたる人なり。おのづから思ひあはする世もこそあれ。掲焉にはあらでこそ、言ひ紛らはさめ。見所ある文書きかな」  
など、とみにもうち置きたまはず。

「かう何やかやと聞こゆるをも、思すところやあらむと、ややましきを、かの大臣に知られたてまつりたまはむことも、まだ若々しう何となきほどに、こころ年経たまへる御仲にさし出でたまはむことは、いかがと思ひめぐらしはべる。なほ世の人のあめる方に定まりてこそは、人びとしう、さるべきついでもものしたまはめと思ふを。

宮は、独りものしたまふやうなれど、人柄いといたうあだめいて、通ひたまふ所あまた聞こえ、召人とか、憎げなる名のりする人どもなむ、数あまた聞こゆる。

さやうならむことは、憎げなうて見直いたまはむ人は、いとよなだらかにもて消ちてむ。すこし心に癖ありては、人に飽かれぬべきことなむ、おのづから出で来ぬべきを、その御心づかひなむあべき。

大将は、年経たる人の、いたうねび過ぎたるを、厭ひがてにと求むなれど、それも人びとわづらはしがなるなり。さもあべいことなれば、さまさまになむ、人知れず思ひ定めかねはべる。

かうさまのことは、親などにも、さはやかに、わが思ふさまとて、語り出でがたきことなれど、さばかりの御齡にもあらず。今は、などか何ごとをも御心に分いたまはざらむ。まろを、昔さまになずらへて、母君と思ひないたまへ。

たまふべきにもあらず、またあまりもののほど知らぬやうならむも、御ありさまに違へり。

その際より下は、心ざしのおもむきに従ひて、あはれをも分きたまへ。労をも数へたまへ」

など聞こえたまへば、君はうち背きておはする、側目いとをかしげなり。撫子の細長に、このころの花の色なる御小桂、あはひ気近う今めきて、もてなしなども、さはいへど、田舎びたまへりし名残こそ、ただありに、おほどかなる方にのみは見えたまひけれ、人のありさまをも見知りたまふままに、いとさまよう、なよびかに、化粧なども、心してもてつけたまへれば、いとど飽かぬところなく、はなやかにうつくしげなり。他人と見なさむは、いと口惜しかべう思さる。

右近も、うち笑みつつ見たてまつりて、「親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり。さし並びたまへらむはしも、あはひめでたしかし」と、思ひおたり。

「さらに人の御消息などは、聞こえ伝ふことはべらず。先々も知らしめし御覧じたる三つ、四つは、引き返し、はしたなめきこえむもいかかとて、御文ばかり取り入れなどしはべるめれど、御返りは、さらに。聞こえさせたまふ折ばかりなむ。それをだに、苦しいことに思いたる」

と聞こゆ。

「さて、この若やかに結ばほれたるは誰がぞ。いといたう書いたるけしきかな」

と、ほほ笑みて御覧ずれば、

「かれは、執念うとどめてまかりにけるにこそ。内の大殿の中將の、このさぶらふみるこそぞ、もとより見知りたまへりける、伝へにてはべりける。また

たり。

右大将の、いとまめやかに、ことごとしきさましたる人の、「恋の山には孔子の倒ふれ」まねびつべきけしきに愁へたるも、さる方にをかしと、皆見比べたまふ中に、唐の縹の紙の、いとなつかしう、しみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり。

「これは、いかなれば、かく結ばほれたるにか」

とて、引き開けたまへり。手いとをかしうて、

「思ふとも君は知らじなわきかへり

岩漏る水に色し見えねば」

書きざま今めかしうそぼれたり。

「これはいかなるぞ」

と問ひきこえたまへど、はかばかしうも聞こえたまはず。

右近を召し出でて、

「かやうに訪づれきこえむ人をば、人選りして、応へなどはせさせよ。好き好きしうあざれがましき今やうの人の、便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬことなり。

我にて思ひしにも、あな情けな、恨めしうもと、その折にこそ、無心なるにや、もしはめざましかるべき際は、けやけうなどもおぼえけれ、わざと深からで、花蝶につけたる便りごとは、心ねたうもてないたる、なかなか心立つやうにもあり。また、さて忘れぬるは、何の咎かはあらむ。

ものの便りばかりのなほざりごとに、口疾う心得たるも、さらでありぬべかりける、後の難とありぬべきわざなり。すべて、女のものつつみせず、心のまに、もののはれも知り顔づくり、をかしきことを見知らむなむ、その積もりあぢきなかるべきを、宮、大将は、おほなおほななほざりごとをうち出で

「父大臣にも知らせやしてまし」など、思し寄る折々もあり。

殿の中将は、すこし気近く、御簾のもとなどにも寄りて、御応へみづからなごするも、女はつつましく思せど、さるべきほどと人びとも知りきこえたれば、中將はすすくしく思ひも寄らず。

内の大殿の君たちは、この君に引かれて、よろづにけしきばみ、わびありくを、その方のあはれにはあらで、下に心苦しう、「まことの親にさも知られたてまつりにしがな」と、人知れぬ心にかけてたまへれど、さやうにも漏らしきこえたまはず、ひとへにうちとけ頼みきこえたまふ心むけなど、らうたげに若やかなり。似るとはなけれど、なほ母君のけはひにいとよくおぼえて、これはかどめいたるところぞ添ひたる。

更衣の今めかしう改まれるころほひ、空のけしきなどさへ、あやしうそこはかとなくをかしきを、のどやかにおはしませば、よろづの御遊びにて過ぐしたまふに、対の御方に、人びとの御文しげくなりゆくを、「思ひしこと」とをかしう思いて、ともすれば渡りたまひつつ御覧じ、さるべきには御返りそそのかしきこえたまひなどするを、うちとけず苦しいことに思いたり。

兵部卿宮の、ほどなく焦られがましきわびごとどもを書き集めたまへる御文を御覧じつけて、こまやかに笑ひたまふ。

「はやうより隔つることなう、あまたの親王たちの御中に、この君をなむ、かたみに取り分きて思ひしに、ただかやうの筋のことなむ、いみじう隔て思うたまひてやみにしを、世の末に、かく好きたまへる心ばへを見るが、をかしうもあはれにもおぼゆるかな。なほ、御返りなど聞こえたまへ。すこしもゆゑあらむ女の、かの親王よりほかに、また言の葉を交はすべき人こそ世におぼえね。いとけしきある人の御さまぞや」

と、若き人はめでたまひぬべく聞こえ知らせたまへど、つつましくのみ思い

と、花におれつつ聞こえあへり。鶯のうららかなる音に、「鳥の楽」はなやかに聞きわたされて、池の水鳥もそこはかとなくさへづりわたるに、「急」になり果つるほど、飽かずおもしろし。「蝶」は、ましてはかなきさまに飛び立ちて、山吹の籬のもとに、咲きこぼれたる花の蔭に舞ひ出づる。

宮の亮をはじめて、さるべき上人ども、禄取り続きで、童べに賜ふ。鳥には桜の細長、蝶には山吹襲賜はる。かねてしも取りあへたるやうなり。物の師どもは、白き一襲、腰差など、次ぎ次ぎに賜ふ。中将の君には、藤の細長添へて、女の装束かづけたまふ。御返り、

「昨日は音に泣きぬべくこそは。

胡蝶にも誘はれなまし心ありて

八重山吹を隔てざりせば」

とぞありける。すぐれたる御労どもに、かやうのことは堪へぬにやありけむ、思ふやうにこそ見えぬ御口つきどもなめれ。

まことや、かの見物の女房たち、宮のには、皆けしきある贈り物どもせさせたまうけり。さやうのこと、くはしければむつかし。

明け暮れにつけても、かやうのはかなき御遊びしげく、心をやりて過ぎたまへば、さぶらふ人も、おのづからもの思ひなき心地してなむ、こなたかなたにも聞こえ交はしたまふ。

西の対の御方は、かの踏歌の折の御対面の後は、こなたにも聞こえ交はしたまふ。深き御心もちるや、浅くもいかにもあらむ、けしきいと労あり、なつかしき心ばへと見えて、人の心隔つべくものしたまはぬ人ざまなれば、いづ方にも皆心寄せきこえたまへり。

聞こえたまふいとあまたものしたまふ。されど、大臣、おぼろげに思し定むべくもあらず、わが御心にも、すくよかに親がり果つまじき御心や添ふらむ、

と切にとどめたまへば、え立ちあかれたまはで、今朝の御遊び、ましていと  
おもしろし。

今日は、中宮の御読経の初めなりけり。やがてまかでたまはで、休み所とり  
つつ、日の御よそひに替へたまふ人びとも多かり。障りあるは、まかでなども  
したまふ。

午の時ばかりに、皆あなたに参りたまふ。大臣の君をはじめたてまつりて、  
皆着きわたりたまふ。殿上人なども、残るなく参る。多くは、大臣の御勢ひに  
もてなされたまひて、やむごとなく、いつくしき御ありさまなり。

春の上の御心ざしに、仏に花たてまつらせたまふ。鳥蝶に装束き分けたる童  
べ八人、容貌などことに整へさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶  
は、金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になき匂ひを尽くさせたま  
へり。

南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこ  
しうち散りまがふ。いとうらかに晴れて、霞の間より立ち出でたるは、いと  
あはれになまめきて見ゆ。わざと平張なども移されず、御前に渡れる廊を、楽  
屋のさまにして、仮に胡床どもを召したり。

童べども、御階のもとに寄りて、花どもたてまつる。行香の人びと取り次ぎ  
て、闕伽に加へさせたまふ。

御消息、殿の中将の君して聞こえたまへり。

「花園の胡蝶をさへや下草に

秋待つ虫はうとく見るらむ」

宮、「かの紅葉の御返りなりけり」と、ほほ笑みて御覧ず。昨日の女房たちも、

「げに、春の色は、え落とさせたまふまじかりけり」

びと思し分くらむかし。夜もすがら遊び明かしたまふ。返り声に「喜春楽」立ちそひて、兵部卿宮、「青柳」折り返しおもしろく歌ひたまふ。主人の大臣も言加へたまふ。

夜も明けぬ。朝ぼらけの鳥のさへづりを、中宮はもの隔てて、ねたう聞こし召しけり。いつも春の光を籠めたまへる大殿なれど、心をつくるよすがのまたなきを、飽かぬことに思す人びともありけるに、西の対の姫君、こともなき御ありさま、大臣の君も、わざと思しあがめきこえたまふ御けしきなど、皆世に聞こえ出でて、思ししもしるく、心なびかしたまふ人多かるべし。

わが身さばかりと思ひ上がりたまふ際の人こそ、便りにつつ、けしきばみ、言出で聞こえたまふもありけれ、えしもうち出でぬ中の思ひに燃えぬべき若君達などもあるべし。そのうちに、ことの心を知らで、内の大殿の中将などは、好きぬべかめり。

兵部卿宮はた、年ごろおはしける北の方も亡せたまひて、この三年ばかり、独り住みにてわびたまへば、うけばりて今はけしきばみたまふ。

今朝も、いといたうそら乱れして、藤の花をかぎして、なよびさうどきたまへる御さま、いとをかし。大臣も、思ししさまかなふと、下には思せど、せめて知らず顔をつくりたまふ。

御土器のついでに、いみじうもて悩みたまうて、

「思ふ心はべらずは、まかり逃げはべりなまし。いと堪へがたしや」とすまひたまふ。

「紫のゆゑに心をしめたれば

淵に身投げむ名やは惜しけき」

とて、大臣の君に、同じかぎしを参りたまふ。いといたうほほ笑みたまひて、

「淵に身を投げつべしやとこの春は

花のあたりを立ち去らで見よ」

日を暮らす。

「風吹けば波の花さへ色見えて

こや名に立てる山吹の崎」

「春の池や井手の川瀬にかよふらむ

岸の山吹そこも匂へり」

「亀の上の山も尋ねじ舟のうちに

老いせぬ名をばここに残さむ」

「春の日のうららにさしてゆく舟は

棹のしづくも花ぞ散りける」

などやうの、はかなごとどもを、心々に言ひ交はしつつ、行く方も帰らむ里も忘れぬべう、若き人びとの心を移すに、ことわりなる水の面になむ。

暮れかかるほどに、「皇じやう」といふ楽、いとおもしろく聞こゆるに、心にもあらず、釣殿にさし寄せられて下りぬ。ここのしつらひ、いとこと削ぎたるさまに、なまめかしきに、御方々の若き人どもの、われ劣らじと尽くしたる装束、容貌、花をこき交ぜたる錦に劣らず見えわたる。世に目馴れずめづらかなる楽ども仕うまつる。舞人など、心ことに選ばせたまひて。

夜に入りぬれば、いと飽かぬ心地して、御前の庭に篝火ともして、御階のものと苔の上に、楽人召して、上達部、親王たちも、皆おのおの弾きもの、吹きものとりどりにしたまふ。

物の師ども、ことにすぐれたる限り、双調吹きて、上に待ちとる御琴どもの調べ、いとはなやかにかき立てて、「安名尊」遊びたまふほど、「生けるかひあり」と、何のあやめも知らぬ賤の男も、御門のわたり隙なき馬、車の立処に混じりて、笑みさかえ聞きにけり。

空の色、物の音も、春の調べ、響きは、いとことにまさりけるけぢめを、人

弥生の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くして匂ふ花の色、鳥の声、ほかの里には、まだ古りぬにやと、めづらしう見え聞こゆ。山の木立、中島のわたり、色まさる苔のけしきなど、若き人びとのほつかに心もとなく思ふべかめるに、唐めいたる舟造らせたまひける、急ぎ装束かせたまひて、下ろし始めさせたまふ日は、雅楽寮の人召して、舟の楽せらる。親王たち上達部など、あまた参りたまへり。

中宮、このころ里におはします。かの「春待つ園は」と励ましきこえたまへりし御返りもこのころやと思し、大臣の君も、いかでこの花の折、御覽ぜさせむと思しのたまへど、ついでなくて軽らかにはひわたり、花をもてあそびたまふべきならねば、若き女房たちの、ものめでしぬべきを舟に乗せたまうて、南の池の、こなたに通しかよはしなさせたまへるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山の崎より漕ぎまひて、東の釣殿に、こなたの若き人びと集めさせたまふ。

龍頭鷁首を、唐のよそひにことごとしうしつらひて、楫取の棹さす童べ、皆みづら結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に來たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。

中島の入江の岩蔭にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。こなたかなた霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方ははるばると見やられて、色をましたる柳、枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。ほかには盛り過ぎたる桜も、今盛りにはほほ笑み、廊をめぐれる藤の色も、こまやかに開けゆきにけり。まして池の水に影を写したる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。水鳥どもの、つがひを離れず遊びつつ、細き枝どもを食ひて飛びちがふ、鴛鴦の波の綾に紋を交じへたるなど、ものの絵やうにも描き取らまほしき、まことに斧の柄も朽たいつべう思ひつつ、

胡 蝶

胡

蝶

ひいたくしつ、心懸想を尽くしたまふらむかし。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuyra/index.html>)

命延ぶるほどなり。

殿の中将の君、内の大殿の君達ぞ、ことにすぐれてめやすくはなやかなる。

ほのぼのと明けゆくに、雪やや散りて、そぞろ寒きに、「竹河」謡ひて、かよれる姿、なつかしき声々の、絵にも描きとどめがたからむこそ口惜しけれ。

御方々、いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、こぼれ出でたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に、春の錦たち出でにける霞のうちか見えわたさる。あやしく心のうちゆく見物にぞありける。

さるは、高中子の世離れたるさま、寿詞の乱りがはしき、をこめきたることを、ことごとしくとりなしたる、なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬものを。例の、綿かづきわたりてまかでぬ。

夜明け果てぬれば、御方々帰りわたりたまひぬ。大臣の君、すこし御殿籠もりて、日高く起きたまへり。

「中将の声は、弁少将にをさをさ劣らざめるは。あやしう有職ども生ひ出づるころほひにこそあれ。いにしへの人は、まことにかしこき方やすぐれたることも多かりけむ、情けだちたる筋は、このころの人にえしもまさらざりけむかし。中将などをば、すすくしき朝廷人にしなしてむとなむ思ひおきてし、みづからのいとあざればみたるかたくなしさを、もて離れよと思ひしかども、なほ下にはほの好きたる筋の心をこそとどむべかめれ。もてしづめ、すくよかなるうはべばかりは、うるさかめり」

など、いとうつくしと思したり。「万春楽」と、御口ずさみにのたまひて、「人びとのこなたに集ひたまへるついでに、いかで物の音こころみてしがな。私の後宴すべし」

とのたまひて、御琴どもの、うるはしき袋どもして秘めおかせたまへる、皆引き出でて、おし拭ひ、ゆるべる緒、調べさせたまひなす。御方々、心づか

をのたまひかくべくもあらず、おほかたの昔今の物語をしたまひて、「かばかりの言ふかひだにあれかし」と、あなたを見やりたまふ。

かやうにても、御蔭に隠れたる人びと多かり。皆さしのぞきわたしたまひて、「おぼつかなき日数つもる折々あれど、心のうちはおこたらずなむ。ただ限りある道の別れのみこそうしろめたけれ。『命を知らぬ』」

など、なつかしくのたまふ。いづれをも、ほどほどにつけてあはれと思したり。我はと思しあがりぬべき御身のほどなれど、さしもことごとしくもてなしたまはず、所につけ、人のほどにつけつつ、さまざまあまなくなつかしくおはしませば、ただかばかりの御心にかかりてなむ、多くの人びと年を経ける。

今年は男踏歌あり。内より朱雀院に参りて、次にこの院に参る。道のほど遠くなどして、夜明け方になりけり。月の曇りなく澄みまさりて、薄雪すこし降れる庭のえならぬに、殿上人なども、物の上手多かるころほひにて、笛の音もいとおもしろう吹き立てて、この御前はことに心づかひしたり。御方々物見に渡りたまふべく、かねて御消息どもありければ、左右の対、渡殿などに、御局しつとおはさす。

西の対の姫君は、寢殿の南の御方に渡りたまひて、こなたの姫君に御対面ありけり。上も一所におはしませば、御几帳ばかり隔てて聞こえたまふ。

朱雀院の後の御方などめぐりけるほどに、夜もやうやう明けゆけば、水駅にてこと削がせたまふべきを、例あることより、ほかにさまことに加へて、いみじくもてはやさせたまふ。

影すさまじき暁月夜に、雪はやうやう降り積む。松風木高く吹きおろし、ものすさまじくもありぬべきほどに、青色のなえばめるに、白襲の色あひ、何の飾りかは見ゆる。

挿頭の綿は、何の匂ひもなきものなれど、所からにやおもしろく、心ゆき、

世の常ならぬ花を見るかな」

と独りごちたまへど、聞き知りたまはざりけむかし。

空蟬の尼衣にも、さしのぞきたまへり。うけばりたるさまにはあらず、かごやかに局住みにしなして、仏ばかりに所得させたまつりて、行なひ勤めけるさまあはれに見えて、経、仏の御飾り、はかなくしたる闕伽の具なども、をかしげになまめかしう、なほ心ばせありと見ゆる人のけはひなり。

青鈍の几帳、心ばへをかしきに、いたくみ隠れて、袖口ばかりぞ色ことなるしもなつかしければ、涙ぐみたまひて、

「『松が浦島』をはるかに思ひてぞやみぬべかりける。昔より心憂かりける御契りかな。さすがにかばかりの御睦びは、絶ゆまじかりけるよ」

などのたまふ。尼君も、ものあはれなるけはひにて、

「かかる方に頼みきこえさするしもなむ、浅くはあらず思ひたまへ知らればべりける」

と聞こゆ。

「つらき折々重ねて、心惑はしたまひし世の報いなどを、仏にかしこまりきこゆるこそ苦しけれ。思し知るや。かくいと素直にもあらぬものをと、思ひ合はせたまふこともあらじやはとなむ思ふ」

と

のたまふ。「かのあさましかりし世の古事を聞き置きたまへるなめり」と、恥づかしく、

「かかるありさまを御覧じ果てらるるよりほかの報いは、いづくにかはべらむ」

とて、まことにうち泣きぬ。いにしへよりももの深く恥づかしげさまさりて、かくもて離れたること、と思すしも、見放ちがたく思さるれど、はかなきこと

しも思したらず、今は、かくあはれに長き御心のほどを、おだしきものにうちとけ頼みきこえたまへる御さま、あはれなり。

かかる方にも、おしなべての人ならず、いとほしく悲しき人の御さまに思せば、あはれに、我だにこそはと、御心とどめたまへるも、ありがたきぞかし。御声なども、いと寒げに、うちわななきつつ語らひきこえたまふ。見わづらひたまひて、

「御衣どもの事など、後見きこゆる人ははべりや。かく心やすき御住まひは、ただいとうちとけたるさまに、含みなえたるこそよけれ。うはべばかりつくろひたる御よそひは、あいなくなむ」

と聞こえたまへば、こちごちしくさすがに笑ひたまひて、

「醍醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべるとて、衣どももえ縫ひはべらでなむ。皮衣をさへ取られにし後、寒くはべる」

と聞こえたまふは、いと鼻赤き御兄なりけり。心うつくしといひながら、あまりうちとけ過ぎたりと思せど、ここにては、いとまめにきすくの人にておはす。

「皮衣はいとよし。山伏の蓑代衣に譲りたまひてあへなむ。さて、このいたはりなき白妙の衣は、七重にも、などか重ねたまはざらむ。さるべき折々は、うち忘れたらむこともおどろかしたまへかし。もとよりおれおれしく、たゆき心のおこたりに。まして方々の紛らはしき競ひにも、おのづからなむ」

とのたまひて、向かひの院の御倉開けさせたまひて、絹、綾などたてまつらせたまふ。

荒れたる所もなけれど、住みたまはぬ所のけはひは静かにて、御前の木立ばかりぞいとおもしろく、紅梅の咲き出でたる匂ひなど、見はやす人もなきを見わたしたまひて、

「ふるさとの春の梢に訪ね来て

上達部などは、思ふ心などものしたまひて、すずろに心懸想したまひつつ、常の年よりもことなり。

花の香誘ふ夕風、のどやかにうち吹きたるに、御前の梅やうやうひもときて、あれは誰れ時なるに、物の調べどもおもしろく、「この殿」うち出でたる拍子、いとほなやかなり。大臣も時々声うち添へたまへる「さき草」の末つ方、いとなつかしくめでたく聞こゆ。何ごとも、さしいらへしたまふ御光にはやされて、色をも音をも増すけぢめ、ことになむ分かれける。

かうののしる馬車の音を、もの隔てて聞きたまふ御方々は、蓮の中の世界に、まだ開けざらむ心地もかくやと、心やましげなり。まして、東の院に離れたまへる御方々は、年月に添へて、つれづれの数のみまされど、「世の憂き見えぬ山路」に思ひなずらへて、つれなき人の御心をば、何とかは見たてまつりがめむ、その他の心もとなく寂しきことはたなければ、行なひの方の人は、その紛れなく勤め、仮名のよろづの草子の学問、心に入れたまはむ人は、また願ひに従ひ、ものまめやかにはかばかしきおきてにも、ただ心の願ひに従ひたる住まひなり。騒がしき日ごろ過ぐして渡りたまへり。

常陸宮の御方は、人のほどあれば、心苦しく思して、人目の飾りばかりは、いとよくもてなしきこえたまふ。いにしへ、盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰ひゆき、まして、滝の淀み恥づかしげなる御かたはらめなどを、いとほしと思せば、まほにも向かひたまはず。

柳は、げにこそすさまじかりけれと見ゆるも、着なしたまへる人からなるべし。光もなく黒き搔練の、さるさるしく張りたる一襲、さる織物の桂着たまへる、いと寒げに心苦し。襲の衣などは、いかにしなしたるにかあらむ。

御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじうはなやかなるに、御心にもあらずうち嘆かれたまひて、ことさらに御几帳引きつくりろひ隔てたまふ。なかなか、女はさ

「咲ける岡辺に家しあれば」

など、ひき返し慰めたる筋など書きませつつあるを、取りて見たまひつつほほ笑みたまへる、恥づかしげなり。

筆さし濡らして書きすさみたまふほどに、みざり出でて、さすがにみづからのもてなしは、かしこまりおきて、めやすき用意なるを、「なほ、人よりはことなり」と思す。白きに、けぎやかなる髪のかかりの、すこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしき添ひて、なつかしければ、「新しき年の御騒がれもや」と、つつましかれど、こなたに泊りたまひぬ。「なほ、おぼえことなりかし」と、方々に心おきて思す。

南の御殿には、ましてめざましがる人びとあり。まだ曙のほどに渡りたまひぬ。かうしもあるまじき夜深さぞかしと思ふに、名残もただならず、あはれに思ふ。

待ちとりたまへるはた、なまげやけしと思すべかめる心のうち、量られたまひて、

「あやしきうたた寝をして、若々しかりけるいぎたなさを、さしもおどろかしたまはで」

と、御けしきとりたまふもをかく見ゆ。ことなる御いらへもなければ、わづらはしくて、そら寝をしつつ、日高く御殿籠もり起きたり。

今日は、臨時客のことに紛らはしてぞ、面隠したまふ。上達部、親王たちなど、例の、残りなく参りたまへり。御遊びありて、引出物、禄など、二なし。そこら集ひたまへるが、我も劣らじともてなしたまへるなかにも、すこしなずらひなるだにも見えたまはぬものかな。とり放ちては、いと有職多くものしたまふころなれど、御前にては気圧されたまふも、悪しかし。何の数ならぬ下部どもなどだに、この院に参る日は、心づかひことなりけり。まして若やかなる

つけても、えしも見過ぐしたまふまじ。

かくいと隔てなく見たてまつりなれたまへど、なほ思ふに、隔たり多くあやしきが、うつつの心地もしたまはねば、まほならずもてなしたまへるも、いとをかし。

「年ごろになりぬる心地して、見たてまつるにも心やすく、本意かなひぬるを、つつみなくもてなしたまひて、あなたなどにも渡りたまへかし。いはけなき初琴習ふ人もあめるを、もろともに聞きならしたまへ。うしろめたく、あはつけき心持たる人なき所なり」

と聞こえたまへば、

「のたまはせむままにこそは」

と聞こえたまふ。さもあることぞかし。

暮れ方になるほどに、明石の御方に渡りたまふ。近き渡殿の戸押し開くるより、御簾のうちの追風、なまめかしく吹き匂はして、ものよりことに気高く思さる。正身は見えず。いづらと見まはしたまふに、硯のあたりにぎははしく、草子どもなど取り散らしたるなど取りつつ見たまふ。唐の東京錦のこととしき端さしたる茵に、をかしげなる琴うち置き、わざとめきよしある火桶に、侍従をくゆらかして、物ごとにしめたるに、衣被香の香のまがへる、いと艶なり。手習どもの乱れうちとけたるも、筋変はり、ゆるある書きざまなり。ことごとしう草がちなどにもされ書かず、めやすく書きすましたり。

小松の御返りを、めづらしと見けるままに、あはれなる古事ども書きまぜて、  
「めづらしや花のねぐらに木づたひて

谷の古巢を訪へる鶯

声待ち出でたる」

なども、

幼き御心にまかせて、くだくだしくぞあめる。

夏の御住まひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わぎと好ましきこともなくて、あてやかに住みたるけはひ見えわたる。

年月に添へて、御心の隔てもなく、あはれなる御仲なり。今は、あながちに近やかなる御ありさまも、もてなしきこえたまはざりけり。いと睦ましくありがたからむ妹背の契りばかり、聞こえ交はしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。

「縹は、げに、にほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり。やさしき方にあらぬと、葡萄鬘してぞつくろひたまふべき。我ならざらむ人は、見醒めしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ。心軽き人の列にて、われに背きたまひなましかば」など、御対面の折々は、まづ、「わが心の長きも、人の御心の重きをも、うれしく、思ふやうなり」

と思しけり。こまやかに、ふる年の御物語など、なつかしう聞こえたまひて、西の対へ渡りたまひぬ。

まだいたくも住み馴れたまはぬほどよりは、けはひをかしくしなして、をかしげなる童女の姿なまめかしく、人影あまたして、御しつらひ、あるべき限りなれど、こまやかなる御調度は、いとしも調へたまはぬを、さる方にものきよげに住みなしたまへり。

正身も、あなをかしげと、ふと見えて、山吹にもてはやしたまへる御容貌など、いとほなやかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく、隈なく匂ひきらきらしく、見まほしきさまぞしたまへる。もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪の裾すこし細りて、さはらかにかけられるしも、いともものきよげに、ここかしこいとけぎやかなるさましたまへるを、「かくて見ざらましかば」と思すに

とて、乱れたる事どもすこしうち混ぜつつ、祝ひきこえたまふ。

「薄氷解けぬる池の鏡には

世に曇りなき影ぞ並べる」

げに、めでたき御あはひどもなり。

「曇りなき池の鏡によろづ代を

すむべき影ぞしるく見えける」

何事につけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえ交はしたまふ。今日は子の日なりけり。げに、千年の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり。

姫君の御方に渡りたまへれば、童女、下仕へなど、御前の山の小松引き遊ぶ。

若き人びとの心地ども、おきどころなく見ゆ。北の御殿より、わざとがましくし集めたる鬚籠ども、破籠などたてまつれたまへり。えならぬ五葉の枝に移る鶯も、思ふ心あらむかし。

「年月を松にひかれて経る人に

今日鶯の初音聞かせよ

『音せぬ里の』

と聞こえたまへるを、「げに、あはれ」と思し知る。言忌もえしあへたまはぬけしきなり。

「この御返りは、みづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべき方にもあらずかし」

とて、御硯取りまかなひ、書かせたてまつりたまふ。いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりにけるも、「罪得がましう、心苦し」と思す。

「ひき別れ年は経れども鶯の

巢立ちし松の根を忘れめや」

年立ちかへる朝の空のけしき、名残なく曇らぬうららかなげさには、数ならぬ垣根のうちだに、雪間の草若やかに色づきはじめ、いつしかとけしきだつ霞に、木の芽もうちけぶり、おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。まして、いとど玉を敷ける御前の、庭よりはじめ見所多く、磨きましたまへる御方々のありさま、まねびたてむも言の葉足るまじくなむ。

春の御殿の御前、とりわきて、梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひ、生ける仏の御国とおぼゆ。さすがにうちとけて、やすらかに住みなしたまへり。さぶらふ人びとも、若やかにすぐれたるは、姫君の御方にと選りたまひて、すこし大人びたる限り、なかなかよししく、装束ありさまよりはじめて、めやすくもてつけて、ここかしこに群れみつ、齒固めの祝ひして、餅鏡をさへ取り混ぜて、千年の蔭にしるき年のうちの祝ひ事どもして、そばれあへるに、大臣の君さしのぞきたまへれば、懐手ひきなほしつつ、「いとはしたなきわざかな」と、わびあへり。

「いとたたかなるみづからの祝ひ事どもかな。皆おのおの思ふことの道々あらむかし。すこし聞かせよや。われことぶきせむ」

とうち笑ひたまへる御ありさまを、年のはじめの栄えに見たてまつる。われはと思ひあがれる中将の君ぞ、

「『かねてぞ見ゆる』などこそ、鏡の影にも語らひはんべりつれ。私の祈りは、何ばかりのことをか」

など聞こゆ。

朝のほどは人びと参り混みて、もの騒がしかりけるを、夕つ方、御方々の参座したまはむとて、心ことにひきつくろひ、化粧じたまふ御影こそ、げに見るかひあめれ。

「今朝、この人びとの戯れ交はしつる、いとうらやましく見えつるを、上にはわれ見せたてまつらむ」

初 音

初

音

などのたまひて、返しは思しもかけねば、

「返しやりてむ、とあめるに、これよりおし返したまはざらむも、ひがひがしからむ」

と、そのかきこえたまふ。情け捨てぬ御心にて、書きたまふ。いと心やすげなり。

「返さむと言ふにつけても片敷の

夜の衣を思ひこそやれ

ことわりなりや」

とぞあめる。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

わづらひぬべう思す。恥づかしきまみなり。

「古代の歌詠みは、『唐衣』、『袂濡るる』かことこそ離れねな。まろも、その列ぞかし。さらに一筋にまつはれて、今めきたる言の葉にゆるぎたまはぬこそ、ねたきことは、はたあれ。人の中なることを、をりふし、御前などのわざとある歌詠みのなかにては、『円居』離れぬ三文字ぞかし。昔の懸想のをかしき挑みには、『あだ人』といふ五文字を、やすめどころにうち置きて、言の葉の続きたよりある心地すべかめり」

など笑ひたまふ。

「よろづの草子、歌枕、よく案内知り見尽くして、そのうちの言葉を取り出づるに、詠みつきたる筋こそ、強うは変はらざるべけれ。

常陸の親王の書き置きたまへりける紙屋紙の草子をこそ、見よとておこせたりしか。和歌の髓脳いと所狭う、病去るべきところ多かりしかば、もとよりおくれたる方の、いとどなかなか動きすべくも見えざりしかば、むつかしくて返してき。よく案内知りたまへる人の口つきにては、目馴れてこそあれ」

とて、をかしく思いたるさまぞ、いとほしきや。

上、いとまめやかにて、

「などで、返したまひけむ。書きとどめて、姫君にも見せたてまつりたまふべかりけるものを。ここにも、ものなかなりしも、虫みな損なひてければ。

見ぬ人はた、心ことにこそは遠かりけれ」

とのたまふ。

「姫君の御学問に、いと用なからむ。すべて女は、立てて好めることまうけてしみぬるは、さまよからぬことなり。何ごとも、いとつきなからむは口惜しからむ。ただ心の筋を、漂はしからずもてしづめおきて、なだらかならむのみなむ、めやすかるべかりける」

がら、なまめかしう見えたる方のまじらぬに似たるなめり」と、げに推し量らるるを、色には出だしたまはねど、殿見やりたまへるに、ただならず。

「いで、この容貌のよそへは、人腹立ちぬべきことなり。よきとても、物の色は限りあり、人の容貌は、おくれたるも、またなほ底ひあるものを」

とて、かの末摘花の御料に、柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなまめきたれば、人知れずほほ笑まれたまふ。

梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に、濃きがつややかなる重ねて、明石の御方に。思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。

空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梶子の御衣、聴し色なる添へたまひて、同じ日着たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。げに、似ついたる見むの御心なりけり。

皆、御返りどもただならず。御使の祿、心々なるに、末摘、東の院におはすれば、今すこしさし離れ、艶なるべきを、うるはしくものしたまふ人にて、あるべきことは違へたまはず、山吹の桂の、袖口いたくすすけたるを、うつほにてうち掛けたまへり。御文には、いとかうばしき陸奥紙の、すこし年経、厚きが黄ばみたるに、

「いでや、賜へるは、なかなかこそ。

着てみれば恨みられけり唐衣

返しやりてむ袖を濡らして」

御手の筋、ことに奥よりにたり。いといたくほほ笑みたまひて、とみにもうち置きたまはねば、上、何ごとならむと見おこせたまへり。

御使にかづけたる物を、いと侘しくかたはらいたしと思して、御けしき悪しければ、すべりまかでぬ。いみじく、おのおのはささめき笑ひけり。かやうにわりなう古めかしう、かたはらいたきところのつきたまへるさかしらに、もて

「いと多かりけるものどもかな。方々に、うらやみなくこそものすべかりけれ」

と、上に聞こえたまへば、御匣殿に仕うまつれるも、こなたにせさせたまへるも、皆取う出させたまへり。

かかる筋はた、いとすぐれて、世になき色あひ、匂ひを染めつけたまへば、ありがたしと思ひきこえたまふ。

ここかしこの擣殿より参らせたる擣物ども御覧じ比べて、濃き赤きなど、さまざまを選らせたまひつつ、御衣櫃、衣篋どもに入れさせたまうて、おとなびたる上臈どもさぶらひて、「これは、かれは」と取り具しつつ入る。上も見たまひて、

「いづれも、劣りまさるけぢめも見えぬものどもなめるを、着たまはむ人の御容貌に思ひよそへつつたてまつれたまへかし。着たる物のさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」

とのたまへば、大臣うち笑ひて、

「つれなくて、人の御容貌推し量らむの御心なめりな。さては、いづれをとか思す」

と聞こえたまへば、

「それも鏡にては、いかでか」

と、さすが恥ぢらひておはす。

紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとすぐれたるとは、かの御料。桜の細長に、つややかなる搔練取り添へては、姫君の御料なり。

浅縹の海賦の織物、織りざまなまめきたれど、匂ひやかならぬに、いと濃き搔練具して、夏の御方に。

曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の対にたてまつれたまふを、上は見ぬやうにて思しあはず。「内の大臣の、はなやかに、あなきよげとは見えな

中将の君にも、

「かかる人を尋ね出でたるを、用意して睦び訪らへ」

とのたまひければ、こなたに参うでたまひて、

「人数ならずとも、かかる者さぶらふと、まづ召し寄すべくなむはべりける。

御渡りのほどにも、参り仕うまつらざりけること」

と、いとまめまめしう聞こえたまへば、かたはらいたきまで、心知れる人は思ふ。

心の限り尽くしたりし御住まひなりしかど、あきましう田舎びたりしも、たとしへなくぞ思ひ比べらるるや。御しつらひよりはじめ、今めかしう気高くて、親、はらからと睦びきこえたまふ御さま、容貌よりはじめ、目もあやにおぼゆるに、今ぞ、三条も大式をあなづらはしく思ひける。まして、監が息ざしけはひ、思ひ出づるもゆゆしきこと限りなし。

豊後介の心ばへをありがたきものに君も思し知り、右近も思ひ言ふ。「おほぞうなるは、ことも怠りぬべし」とて、こなたの家司ども定め、あるべきことどもおきてさせたまふ。豊後介もなりぬ。

年ごろ田舎び沈みたりし心地に、にはかに名残もなく、いかでか、仮にても立ち出で見るべきよすがなくおぼえし大殿のうちを、朝夕に出で入りならし、人を従へ、事行なふ身となれば、いみじき面目と思ひけり。大臣の君の御心おきての、こまかにありがたうおはしますこと、いとかたじけなし。

年の暮に、御しつらひのこと、人びとの装束など、やむごとなき御列に思しておきてたる、「かかりとも、田舎びたることや」と、山賤の方にあなづり押し量りきこえたまひて調じたるも、たてまつりたまふついでに、織物どもの、我も我もと、手を尽くして織りつつ持て参れる細長、小桂の、色々さまざまなるを御覧ずるに、

「脚立たず沈みそめはべりにけるのち、何ごともあるかなきかになむ」

と、ほのかに聞こえたまふ声ぞ、昔人にいとよくおぼえて若びたりける。ほほ笑みて、

「沈みたまひけるを、あはれとも、今は、また誰れかは」

とて、心ばへいふかひなくはあらぬ御応へと思す。右近に、あるべきことこのたまはせて、渡りたまひぬ。

めやすくものしたまふを、うれしく思して、上にも語りきこえたまふ。

「さる山賤のなかに年経たれば、いかにいとほしげならむとあなづりしを、かへりて心恥づかしきまでなむ見ゆる。かかる者ありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬のうち好ましうしたまふ心乱りにしかな。好き者ども、いとうるはしだちてのみ、このわたりに見ゆるも、かかる者のくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしかな。なほうちあはぬ人のけしき見集めむ」  
とのたまへば、

「あやしの人の親や。まづ人の心励まさむことを先に思すよ。けしからず」  
とのたまふ。

「まことに君をこそ、今の心ならましかば、さやうにもてなして見つべかりけれ。いと無心にしなしてしわざぞかし」

とて、笑ひたまふに、面赤みておはする、いと若くをかしげなり。硯引き寄せたまうて、手習に、

「恋ひわたる身はそれなれど玉かつら

いかなる筋を尋ね来つらむ

あはれ」

と、やがて独りごちたまへば、「げに、深く思しける人の名残なめり」と見たまふ。

その夜、やがて大臣の君渡りたまへり。昔、光る源氏などいふ御名は、聞きわたりたてまつりしかど、年ごろのうひうひしきに、さしも思ひきこえざりけるを、ほのかなる大殿油に、御几帳のほころびよりはつかに見たてまつる、いと恐ろしくさへぞおぼゆるや。

渡りたまふ方の戸を、右近かい放てば、

「この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」

と笑ひたまひて、廂なる御座についゐたまひて、

「燈こそ、いと懸想びたる心地すれ。親の顔はゆかしきものところ聞け。さも思さぬか」

とて、几帳すこし押しやりたまふ。わりなく恥づかしければ、そばみておはする様体など、いとめやすく見ゆれば、うれしくて、

「今すこし、光見せむや。あまり心にくし」

とのたまへば、右近、かかげてすこし寄す。

「おもなの人や」

とすこし笑ひたまふ。げにとおぼゆる御まみの恥づかしげさなり。いささかも異人と隔てあるさまにもたまひなさず、いみじく親めきて、

「年ごろ御行方を知らで、心にかけぬ隙なく嘆きはべるを、かうて見たてまつるにつけても、夢の心地して、過ぎにし方のことども取り添へ、忍びがたきに、えなむ聞こえられざりける」

とて、御目おし拭ひたまふ。まことに悲しう思し出でらる。御年のほど、数へたまひて、

「親子の仲の、かく年経たるたぐひあらじものを。契りつらくもありけるかな。今は、ものうひうひしく、若びたまふべき御ほどにもあらじを、年ごろの御物語など聞こえまほしきに、などかおぼつかなくは」

と恨みたまふに、聞こえむこともなく、恥づかしければ、

東ととのへなどして、十月にぞ渡りたまふ。

大臣、東の御方に聞こえつけたてまつりたまふ。

「あはれと思ひし人の、ものうじして、はかなき山里に隠れるにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども、え聞き出ででなむ、女になるまで過ぎにけるを、おぼえぬかたよりなむ、聞きつけたる時にだにて、移ろはしはべるなり」とて、「母も亡くなりけり。中将を聞こえつけたるに、悪しくやはある。同じごと後見たまへ。山賤めきて生ひ出でたれば、鄙びたること多からむ。さるべく、ことにふれて教へたまへ」

と、いとこまやかに聞こえたまふ。

「げに、かかる人のおはしけるを、知りきこえざりけるよ。姫君の一所ものしたまふがさうざうしきに、よきことかな」

と、おいらかにのたまふ。

「かの親なりし人は、心なむありがたきまでよかりし。御心もうしろやすく思ひきこゆれば」

などのたまふ。

「つきづきしく後む人なども、こと多からで、つれづれにはべるを、うれしかるべきこと」

になむのたまふ。

殿のうちの人は、御女とも知らで、

「何人、また尋ね出でたまへるならむ」

「むつかしき古者扱ひかな」

と言ひけり。

御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば、田舎びず仕立てたり。

殿よりぞ、綾、何くれとたてまつれたまへる。

上にも、今ぞ、かのありし昔の世の物語聞こえ出でたまひける。かく御心に籠めたまふことありけるを、恨みきこえたまふ。

「わりなしや。世にある人の上とてや、問はず語りは聞こえ出でむ。かかるついでに隔てぬこそは、人にはことには思ひきこゆれ」とて、いとあはれげに思し出でたり。

「人の上にてあまた見しに、いと思はぬなかも、女といふものの心深きをあまた見聞きしかば、さらに好き好きしき心はつかはじとなむ思ひしを、おのづからさるまじきをもあまた見しなかに、あはれとひたぶるにらうたきかたは、またたぐひなくなむ思ひ出でらる。世にあらましかば、北の町にもする人の列には、などか見ざらまし。人のありさま、とりどりになむありける。かどかどしう、をかしき筋などはおくれたりしかども、あてはかにらうたくもありしかな」

などのたまふ。

「さりとも、明石の列には、立ち並べたまはざらまし」とのたまふ。なほ北の御殿をば、めざましと心置きたまへり。姫君の、いとうつくしげにて、何心もなく聞きたまふが、らうたければ、また、「ことわりぞかし」と思し返さる。

かくいふは、九月のことなりけり。渡りたまはむこと、すがすがしくもいかでかはあらむ。よろしき童女、若人など求めさす。筑紫にては、口惜しからぬ人びとも、京より散りばひ来たるなどを、たよりにつけて呼び集めなどしてさぶらはせしも、にはかに惑ひ出でたまひし騒ぎに、皆おくらしてければ、また人もなし。京はおのづから広き所なれば、市女などやうのもの、いとよく求めつつ、率て来。その人の御子などは知らせざりけり。

右近が里の五条に、まづ忍びて渡したてまつりて、人びと選りとのへ、装

いかでか知らぬ人の御あたりには交じらはむ」

と、おもむけて、苦しげに思したれど、あるべきさまを、右近聞こえ知らせ、人びとも、

「おのづから、さて人だちたまひなば、大臣の君も尋ね知りきこえたまひなむ。親子の御契りは、絶えて止まぬものなり」

「右近が、数にもはべらず、いかでか御覧じつけられむと思ひたまへしだに、仏神の御導きはべらざりけりや。まして、誰れも誰れもたひらかにだにおはしまさば」

と、皆聞こえ慰む。

「まづ御返りを」と、責めて書かせたてまつる。

「いとこよなく田舎びたらむものを」

と恥づかしく思いたり。唐の紙のいと香ばしきを取り出でて、書かせたてまつる。

「数ならぬ三稜や何の筋なれば

憂きにしもかく根をとどめけむ」

とのみ、ほのかなり。手は、はかなだち、よろぼはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心落ちるにけり。

住みたまふべき御かた御覧ずるに、

「南の町には、いたづらなる対どもなどなし。勢ひことに住み満ちたまへれば、顕証に人しげくもあるべし。中宮おはします町は、かやうの人も住みぬべく、のどやかなれど、さてさぶらふ人の列にや聞きなさむ」と思して、「すこし埋れたれど、丑寅の町の西の対、文殿にてあるを、異方へ移して」と思す。

「あひ住みにも、忍びやかに心よくものしたまふ御方なれば、うち語らひてもありなむ」

と思しおきつ。

したまはむ。いたづらに過ぎものしたまひし代はりには、ともかくも引き助けさせたまはむことこそは、罪輕ませたまはめ」

と聞こゆ。

「いたうもかこちなすかな」

と、ほほ笑みながら、涙ぐみたまへり。

「あはれに、はかなかりける契りとなむ、年ごろ思ひわたる。かくて集へる方々のなかに、かの折の心ざしばかり思ひとどむる人なかりしを、命長くて、わが心長さをも見はべるたぐひ多かめるなかに、いふかひなくて、右近ばかりを形見に見るは、口惜しくなむ。思ひ忘るる時なきに、さてもものしたまはば、いとこそ本意かなふ心地すべけれ」

とて、御消息たてまつれたまふ。かの末摘花のいふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて、まづ、文のけしきゆかしく思さるるなりけり。ものまめやかに、あるべかしく書きたまひて、端に、

「かく聞こゆるを、

知らずとも尋ねて知らむ三島江に

生ふる三稜の筋は絶えじを」

となむありける。

御文、みづからまかでて、のたまふさまなど聞こゆ。御装束、人びとの料などさまざまあり。上にも語らひきこえたまへるなるべし、御匣殿などにも、設けの物召し集めて、色あひ、しぎまなど、ことなるをと、選らせたまへれば、田舎びたる目どもには、まして珍らしきまでなむ思ひける。

正身は、

「ただかことばかりにても、まことの親の御けはひならばこそうれしからめ、

と、隠しきこえたまへば、上、

「あな、わづらはし。ねぶたきに、聞き入るべくもあらぬものを」  
とて、御袖して御耳塞ぎたまひつ。

「容貌などは、かの昔の夕顔と劣らじや」  
などのたまへば、

「かならずさしもいかでかものしたまはむと思ひたまへりしを、こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」

と聞こゆれば、

「をかしのことや。誰ばかりとおぼゆ。この君と」

とのたまへば、

「いかでか、さまでは」

と聞こゆれば、

「したり顔にこそ思ふべけれ。我に似たらばしも、うしろやすしかし」  
と、親めきてのたまふ。

かく聞きそめてのちは、召し放ちつつ、

「さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらむ。年ごろ、ものついでごとに、口惜しう惑はしつることを思ひ出でつるに、いとうれしく聞き出でながら、今までおぼつかなきも、かひなきことになむ。

父大臣には、何か知られむ。いとあまたもて騒がるめるが、数ならで、今はじめ立ち交じりたらむが、なかなかなることこそあらめ。我は、かうさうざうしきに、おぼえぬ所より尋ね出だしたるとも言はむかし。好き者どもの心尽くさするくさはひにて、いといたうもてなさむ」

など語らひたまへば、かつがついとうれしく思ひつつ、

「ただ御心になむ。大臣に知らせたてまつらむとも、誰れかは伝へほのめか

「若き人は、苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心交はして睦びよかりけれ」

とのたまへば、人びと忍びて笑ふ。

「さりや。誰か、その使ひならいたまはむをば、むつからむ」

「うるさき戯れ事言ひかかりたまふを、わづらはしきに」

など言ひあへり。

「上も、年経ぬるどちうちとけ過ぎ、はた、むつかりたまはむとや。さるまじき心と見ねば、危ふし」

など、右近に語らひて笑ひたまふ。いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり。

今は朝廷に仕へ、忙しき御ありさまにもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるるままに、ただはかなき御戯れ事をのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞ戯れたまふ。

「かの尋ね出でたりけむや、何さまの人ぞ。尊き修行者語らひて、率て来たるか」

と問ひたまへば、

「あな、見苦しや。はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ、見たまへつたりし」

と聞こゆ。

「げに、あはれなりけることかな。年ごろはいづくにか」

とのたまへば、ありのままには聞こえにくくて、

「あやしき山里になむ。昔人もかたへは変はらではべりければ、その世の物語し出ではべりて、堪へがたく思ひたまへりし」

など聞こえりたり。

「よし、心知りたまはぬ御あたりに」

右近は、大殿に参りぬ。このことをかすめ聞こゆるついでもやとて、急ぐなりけり。御門引き入るるより、けはひことに広々として、まかで参りする車多くまよふ。数ならで立ち出づるも、まばゆき心地する玉の台なり。その夜は御前にも参らで、思ひ臥したり。

またの日、昨夜里より参れる上臈、若人どものなかに、取り分きて右近を召し出づれば、おもだたくおぼゆ。大臣も御覧じて、

「などか、里居は久しくしつるぞ。例ならず、やまめ人の、引き違へ、こまがへるやうもありかし。をかしきことなどありつらむかし」  
 など、例の、むつかしう、戯れ事などのたまふ。

「まかでて、七日に過ぎはべりぬれど、をかしきことははべりがたくなむ。山踏しはべりて、あはれなる人をなむ見たまへつれたりし」

「何人ぞ」

と問ひたまふ。「ふと聞こえ出でむも、まだ上に聞かせたてまつらで、取り分き申したらむを、のちに聞きたまうては、隔てきこえけりとや思さむ」など、思ひ乱れて、

「今聞こえさせはべらむ」

とて、人びと参れば、聞こえさしつ。

大殿油など参りて、うちとけ並びおはします御ありさまども、いと見るかひ多かり。女君は、二十七八にはなりたまひぬらむかし、盛りにきよらにねびまさりたまへり。すこしほど経て見たてまつるは、「また、このほどにこそ、にほひ加はりたまひにけれ」と見えたまふ。

かの人をいとめでたし、劣らじと見たてまつりしかど、思ひなしにや、なほこよなきに、「幸ひのなきとあるとは、隔てあるべきわざかな」と見合はせらる。

大殿籠もるとて、右近を御脚参りに召す。

参り集ふ人のありさまども、見下さるる方なり。前より行く水をば、初瀬川といふなりけり。右近、

「二本の杉のたちどを尋ねずは

古川野辺に君を見ましや

うれしき瀬にも」

と聞こゆ。

「初瀬川はやくのことは知らねども

今日の逢ふ瀬に身さへ流れぬ」

と、うち泣きておはするさま、いとめやすし。

「容貌はいとかくめでたくきよげながら、田舎び、こちこちしうおはせましかば、いかに玉の瑕ならまし。いで、あはれ、いかでかく生ひ出でたまひけむ」と、おとどをうれしく思ふ。

母君は、ただいと若やかにおほどかにて、やはやはとぞ、たをやぎたまへりし。これは気高く、もてなしなど恥づかしげに、よしめきたまへり。筑紫を心にくく思ひなすに、皆、見し人は里びにたるに、心得がたくなむ。

暮るれば、御堂に上りて、またの日も行なひ暮らしたまふ。

秋風、谷より遙かに吹きのぼりて、いと肌寒きに、ものいとあはれなる心どもには、よろづ思ひ続けられて、人並々ならむこともありがたきことと思ひ沈みつるを、この人の物語のついでに、父大臣の御ありさま、腹々の何ともあるまじき御子ども、皆ものめかしなしたてたまふを聞けば、かかる下草頼もしくぞ思しなりぬる。

出づとても、かたみに宿る所も問ひ交はして、もしまた追ひ惑はしたらむ時と、危ふく思ひけり。右近が家は、六条の院近きわたりなりければ、ほど遠からで、言ひ交はすもたつき出で来ぬる心地しけり。

たらしく悲しうて、家かまどをも捨て、男女の頼むべき子どもにも引き別れてなむ、かへりて知らぬ世の心地する京にまうで来し。

あが御許、はやくよきさまに導ききこえたまへ。高き宮仕へしたまふ人は、おのづから行き交じりたるたよりものしたまふらむ。父大臣に聞こしめされ、数まへられたまふべきたばかり、思し構へよ」

と言ふ。恥づかしう思いて、うしろ向きたまへり。

「いでや、身こそ数ならねど、殿も御前近く召し使ひたまへば、ものの折ごとくに、『いかにならせたまひにけむ』と聞こえ出づるを、聞こしめし置きて、『われいかで尋ねきこえむと思ふを、聞き出でたてまつりたらば』となむ、のたまはする」

と言へば、

「大臣の君は、めでたくおはしますとも、さるやむごとなき妻どもおはしますなり。まづまことの親とおはする大臣にを知らせたてまつりたまへ」  
など言ふに、ありしさまなど語り出でて、

「世に忘れがたく悲しきことになむ思して、『かの御代はりに見たてまつらむ。子も少なきがさうざうしきに、わが子を尋ね出でたると人には知らせて』と、そのかみよりのたまふなり。

心の幼かりけることは、よろづにもものつつましかりしほどにて、え尋ねても聞こえで過ごししほどに、少式になりたまへるよしは、御名にて知りなき。まかり申しに、殿に参りたまへりし日、ほの見たてまつりしかども、え聞こえで止みにき。

さりととも、姫君をば、かのありし夕顔の五条にぞとどめたてまつりたまへらむとぞ思ひし。あな、いみじや。田舎人にておはしまさましょ」

など、うち語らひつつ、日一日、昔物語、念誦などしつつ。

「いとかしこきことかな。たゆみなく祈り申しはべる験にこそはべれ」と言ふ。いと騒がしう、夜一夜行なふなり。

明けぬれば、知れる大徳の坊に下りぬ。物語、心やすくとなるべし。姫君のいたくやつれたまへる、恥づかしげに思したるさま、いとめでたく見ゆ。

「おぼえぬ高き交じらひをして、多くの人をなむ見集むれど、殿の上の御容貌に似る人おはせじとなむ、年ごろ見たてまつるを、また、生ひ出でたまふ姫君の御さま、いとことわりにめでたくおはします。かしづきたてまつりたまふさまも、並びなかめるに、かうやつれたまへる御さまの、劣りたまふまじく見えたまふは、ありがたうなむ。

大臣の君、父帝の御時より、そこらの女御、后、それより下は残るなく見たてまつり集めたまへる御目にも、当代の御母后と聞こえしと、この姫君の御容貌とをなむ、『よき人とはこれを言ふにやあらむとおぼゆる』と聞こえたまふ。見たてまつり並ぶるに、かの後の宮をば知りきこえず、姫君はきよらにおはしませど、まだ、片なりにて、生ひ先ぞ推し量られたまふ。

上の御容貌は、なほ誰か並びたまはむと、なむ見えたまふ。殿も、すぐれたりと思しためるを、言に出でては、何かは数へのうちには聞こえたまはむ。『我に並びたまへるこそ、君はおほけなけれ』となむ、戯れきこえたまふ。

見たてまつるに、命延ぶる御ありさまどもを、またさるたぐひおはしましたなむやとなむ思ひはべるに、いづくか劣りたまはむ。ものは限りあるものなれば、すぐれたまへりとて、頂きを離れたる光やおはする。ただ、これを、すぐれたりとは聞こゆべきなめりかし」

と、うち笑みて見たてまつれば、若い人もうれしと思ふ。

「かかる御さまを、ほとほとあやしき所に沈めたてまつりぬべかりしに、あ

たてまつれば、今は思ひのごと、大臣の君の、尋ねたてまつらむの御心ざし深かめるに、知らせたてまつりて、幸ひあらせたてまつりたまへ」  
など申しけり。

国々より、田舎人多く詣でたりけり。この国の守の北の方も、詣でたりけり。いかめしく勢ひたるをうらやみて、この三条が言ふやう、

「大悲者には、異事も申さじ。あが姫君、大弐の北の方、ならずは、当国の受領の北の方になしたてまつらむ。三条らも、随分に榮えて、返り申しは仕うまつらむ」

と、額に手を当てて念じ入りてをり。右近、「いとゆゆしくも言ふかな」と聞きて、

「いと、いたくこそ田舎びにけれな。中将殿は、昔の御おぼえだにいかがおはしましたし。まして、今は、天の下を御心にかけたまへる大臣にて、いかばかりいつかしき御仲に、御方しも、受領の妻にて、品定まりておはしまさむよ」と言へば、

「あなかま。たまへ。大臣たちもしばし待て。大弐の御館の上の、清水の御寺、観世音寺に参りたまひし勢ひは、帝の行幸にやは劣れる。あな、むくつけ」とて、なほさらに手をひき放たず、拝み入りてをり。

筑紫人は、三日籠もらむと心ざしたまへり。右近は、さしも思はざりけれど、かかるついで、のどかに聞こえむとて、籠もるべきよし、大徳呼びて言ふ。御あかし文など書きたる心ばへなど、さやうの人はくくださうわきまへければ、常のことにて、

「例の藤原の瑠璃君といふが御ためにたてまつる。よく祈り申したまへ。その人、このころなむ見たてまつり出でたる。その願も果たしたてまつるべし」と言ふを聞くも、あはれなり。法師、

づらはしと思へども、

「いでや、聞こえてもかひなし。御方は、はや亡せたまひにき」

と言ふままに、二、三人ながらむせかへり、いとむつかしく、せきかねたり。

日暮れぬと、急ぎたちて、御燈明の事どもしたため果てて、急がせば、なかないと心あわたたしく立ち別る。「もろともにや」と言へど、かたみに供の人のあやしと思ふべければ、この介にも、ことのさままだに言ひ知らせあへず。われも人もことに恥づかしくはあらで、皆下り立ちぬ。

右近は、人知れず目とどめて見るに、なかにうつくしげなるうしろでの、いといたうやつれて、卯月の単衣めくものに着こめたまへる髪の透影、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しう悲しと見たてまつる。

すこし足なれたる人は、とく御堂に着きにけり。この君をもてわづらひきこえつつ、初夜行なふほどにぞ上りたまへる。いと騒がしく人詣で混みてののしる。右近が局は、仏の右の方に近き間にしたり。この御師は、まだ深からねばにや、西の間に遠かりけるを、

「なほ、ここにおはしませ」

と、尋ね交はし言ひたれば、男どもをばとどめて、介にかうかうと言ひあはせて、こなたに移したてまつる。

「かくあやしき身なれど、ただ今の大殿になむさぶらひはべれば、かくかすかなる道にても、らうがはしきことははべらじと頼みはべる。田舎びたる人ならば、かやうの所には、よからぬ生者どもの、あなづらはしうするも、かたじけなきことなり」

とて、物語いとせまほしけれど、おどろおどろしき行なひの紛れ、騒がしきにもよほされて、仏拝みたてまつる。右近は心のうちに、

「この人を、いかで尋ねきこえむと申しわたりつるに、かつがつ、かくて見

とて、寄り来たり。田舎びたる搔練に衣など着て、いといたう太りにけり。わが齢もいとどおぼえて恥づかしけれど、

「なほ、さし覗け。われをば見知りたりや」

とて、顔さし出でたり。この女の手を打ちて、

「あが御許にこそおはしましたけれ。あな、うれしともうれし。いづくより参りたまひたるぞ。上はおはしますや」

と、いとおどろおどろしく泣く。若き者にて見なれし世を思ひ出づるに、隔て来にける年月数へられて、いとあはれなり。

「まづ、おとどはおはすや。若君は、いかがなりたまひにし。あてきと聞こえしは」

とて、君の御ことは、言ひ出でず。

「皆おはします。姫君も大人になりておはします。まづ、おとどに、かくなむと聞こえむ」

とて入りぬ。

皆、驚きて、

「夢の心地もするかな」

「いとつらく、言はむかたなく思ひきこゆる人に、対面しぬべきことよ」

とて、この隔てに寄り来たり。氣遠く隔てつる屏風だつもの、名残なくおし開けて、まづ言ひやるべき方なく泣き交はす。若い人は、ただ、

「わが君は、いかがなりたまひにし。ここらの年ごろ、夢にてもおはします。む所を見むと、大願を立つれど、遙かなる世界にて、風の音にても聞き伝へたてまつらぬを、いみじく悲しと思ふに、老いの身の残りにとどまりたるも、いと心憂けれど、うち捨てたてまつりたまへる若君の、らうたくあはれにておはしますを、冥途のほだしにもてわづらひきこえてなむ、またたきはべる」

と言ひ続ければ、昔その折、いふかひなかりしことよりも、応へむ方なくわ

さるは、かの世とともに恋ひ泣く右近なりけり。年月に添へて、はしたなき  
交じらひのつきなくなりゆく身を思ひなやみて、この御寺になむたびたび詣で  
ける。

例ならひにければ、かやすく構へたりけれど、徒歩より歩み堪へがたくて、  
寄り臥したるに、この豊後介、隣の軟障のもとに寄り来て、参り物なるべし、  
折敷手づから取りて、

「これは、御前に参らせたまへ。御台などうちあはで、いとかたはらいたし  
や」

と言ふを聞くに、「わが並の人にはあらじ」と思ひて、物のはさまより覗けば、  
この男の顔、見し心地す。誰とはえおぼえず。いと若かりしほどを見しに、太  
り黒みてやつれたれば、多くの年隔てたる目には、ふとしも見分かぬなりけり。

「三条、ここに召す」

と呼び寄する女を見れば、また見し人なり。

「故御方に、下人なれど、久しく仕うまつりなれて、かの隠れたまへりし御  
住みかまでありし者なりけり」

と見なして、いみじく夢のやうなり。主とおぼしき人は、いとゆかしけれど、  
見ゆべくも構へず。思ひわびて、

「この女に問はむ。兵藤太といひし人も、これにこそあらめ。姫君のおはす  
るにや」

と思ひ寄るに、いと心もとなくて、この中隔てなる三条を呼ばすれど、食ひ  
物に心入れて、とみにも来ぬ、いと憎しとおぼゆるも、うちつけなりや。

からうして、

「おぼえずこそはべれ。筑紫の国に、二十年ばかり経にける下衆の身を、知  
らせたまふべき京人よ。人違へにやはべらむ」

「いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ。わが親、世に亡くなりたまへりとも、われをあはれと思さば、おはすらむ所に誘ひたまへ。もし、世におはせば、御顔見せたまへ」

と、仏を念じつつ、ありけむさまをだにおぼえねば、ただ、「親おはせましかば」と、ばかりの悲しきを、嘆きわたりたまへるに、かくさしあたりて、身のわりなきままに、取り返しいみじくおぼえつつ、からうして、椿市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせで、行き着きたまへり。

歩むともなく、とかくつくろひたれど、足のうら動かれず、わびしければ、せむかたなくて休みたまふ。この頼もし人なる介、弓矢持ちたる人二人、さては下なる者、童など三、四人、女ばらある限り三人、壺装束して、樋洗めく者、古き下衆女二人ばかりとぞある。

いとかすかに忍びたり。大御燈明のことなど、ここにてし加へなどするほどに日暮れぬ。家主人の法師、

「人宿したてまつらむとする所に、何人のものしたまふぞ。あやしき女ども、心にまかせて」

とむつかるを、めざましく聞くほどに、げに、人びと来ぬ。

これも徒歩よりなめり。よろしき女二人、下人どもぞ、男女、数多かむめる。馬四つ、五つ牽かせて、いみじく忍びやつしたれど、きよげなる男どもなどあり。

法師は、せめてここに宿さまほしくして、頭搔きありく。いとほしけれど、また、宿り替へむもさま悪しくわづらはしければ、人びとは奥に入り、他に隠しなどして、かたへは片つ方に寄りぬ。軟障などひき隔てておはします。

この来る人も恥づかしげもなし。いたうかいひそめて、かたみに心づかひしたり。

九条に、昔知れりける人の残りたりけるを訪らひ出でて、その宿りを占め置きて、都のうちといへど、はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女、商人のなかにて、いぶせく世の中を思ひつつ、秋にもなりゆくままに、来し方行く先、悲しきこと多かり。

豊後介といふ頼もし人も、ただ水鳥の陸に惑へる心地して、つれづれにならはぬありさまのたづきなきを思ふに、帰らむにもはしたなく、心幼く出で立ちにけるを思ふに、従ひ来たりし者どもも、類に触れて逃げ去り、本の国に帰り散りぬ。

住みつくべきやうもなきを、母おとど、明け暮れ嘆きいとほしがれば、

「何か。この身は、いとやすくはべり。人一人の御身に代へたてまつりて、いづちもいづちもまかり失せなむに咎あるまじ。我らいみじき勢ひになりても、若君をさるものの中にはふらしたてまつりては、何心地かせまし」

と語らひ慰めて、

「神仏こそは、さるべき方にも導き知らせたてまつりたまはめ。近きほどに、八幡の宮と申すは、かしこにても参り祈り申したまひし松浦、筥崎、同じ社なり。かの国を離れたまふとても、多くの願立て申したまひき。今、都に帰りて、かくなむ御験を得てまかり上りたると、早く申したまへ」

とて、八幡に詣でさせたてまつる。そののわたり知れる人に言ひ尋ねて、五師とて、早く親の語らひし大徳残れるを呼びとりて、詣でさせたてまつる。

「うち次ぎては、仏の御なかには、初瀬なむ、日本のうちには、あらたなる験現したまふと、唐土にだに聞こえあむなり。まして、わが国のうちにこそ、遠き国の境とても、年経たまへれば、若君をば、まして恵みたまひてむ」

とて、出だし立てたてまつる。ことさらに徒歩よりと定めたり。ならばぬ心地に、いとわびしく苦しけれど、人の言ふままに、ものもおぼえで歩みたまふ。

「憂きことに胸のみ騒ぐ響きには

響の灘もさはらざりけり」

「川尻といふ所、近づきぬ」

と言ふにぞ、すこし生き出づる心地する。例の、舟子ども、

「唐泊より、川尻おすほどは」

と歌ふ声の、情けなきも、あはれに聞こゆ。

豊後介、あはれになつかしう歌ひすさみて、

「いとかなしき妻子も忘れぬ」

とて、思へば、

「げにぞ、皆うち捨ててける。いかなりぬらむ。はかばかしく身の助けと思ふ郎等どもは、皆率て来にけり。我を悪しと思ひて、追ひまどはして、いかがしなすらむ」と思ふに、「心幼くも、顧みせで、出でにけるかな」

と、すこし心のどまりてぞ、あさましき事を思ひ続けるに、心弱くうち泣かれぬ。

「胡の地の妻児をば虚しく棄て捐てつ」

と誦ずるを、兵部の君聞きて、

「げに、あやしのわざや。年ごろ従ひ来つる人の心にも、にはかに違ひて逃げ出でにしを、いかに思ふらむ」

と、さまざま思ひ続けらるる。

「帰る方とて、そこ所と行き着くべき故里もなし。知れる人と言ひ寄るべき頼もしき人もおぼえず。ただ一所の御ためにより、ここの年つき住み馴れつる世界を離れて、浮べる波風にただよひて、思ひめぐらす方なし。この人も、いかにしたてまつらむとするぞ」

と、あきれておぼゆれど、「いかがはせむ」とて、急ぎ入りぬ。

は、この監に同じ心ならずとて、仲違ひにたり。この監にあたまれては、いささかの身じろきせむも、所狭くなむあるべき。なかなかなる目をや見む」

と、思ひわづらひにたれど、姫君の人知れず思いたるさまの、いと心苦しくて、生きたらじと思ひ沈みたまへる、ことわりとおぼゆれば、いみじきことを思ひ構へて出で立つ。妹たちも、年ごろ経ぬるよるべを捨てて、この御供に出で立つ。

あてきと言ひしは、今は兵部の君といふぞ、添ひて、夜逃げ出でて舟に乗りける。大夫の監は、肥後に帰り行きて、四月二十日のほどに、日取りて来むとするほどに、かくて逃ぐるなりけり。

姉のおもとは、類広くなりて、え出で立たず。かたみに別れ惜しみて、あひ見むことの難きを思ふに、年経つる故里とて、ことに見捨てがたきこともなし。ただ、松浦の宮の前の渚と、かの姉おもとの別るるをなむ、顧みせられて、悲しかりける。

「浮島を漕ぎ離れても行く方や

いづく泊りと知らずもあるかな」

「行く先も見えぬ波路に舟出して

風にまかする身こそ浮きたれ」

いとあとはかなき心地して、うつぶし臥したまへり。

「かく、逃げぬるよし、おのづから言ひ出で伝へば、負けじ魂にて、追ひ来なむ」と思ふに、心も惑ひて、早舟といひて、さまことになむ構へたりければ、思ふ方の風さへ進みて、危ふきまで走り上りぬ。響の灘もなだらかに過ぎぬ。

「海賊の舟にやあらむ。小さき舟の、飛ぶやうにて来る」

など言ふ者あり。海賊のひたぶるならむよりも、かの恐ろしき人の追ひ来るにやと思ふに、せむかたなし。

下りて行く際に、歌詠ままほしかりければ、やや久しう思ひめぐらして、  
「君にもし心違はば松浦なる

鏡の神をかけて誓はむ

この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひたまふる」

と、うち笑みたるも、世づかずうひうひしや。あれにもあらねば、返すべくも思はねど、娘どもに詠ますれど、

「まろは、ましてものもおぼえず」

とてゐたれば、いと久しきに思ひわびて、うち思ひけるままに、

「年を経て祈る心の違ひなば

鏡の神をつらしとや見む」

とわななかし出でたるを、

「待てや。こはいかに仰せらるる」

と、ゆくりかに寄り来たるけはひに、おびえて、おとど、色もなくなりぬ。  
娘たち、さはいへど、心強く笑ひて、

「この人の、さまことにものしたまふを、引き違へ、いづらは思はれむを、  
なほ、ほけほけしき人の、神かけて、聞こえひがめたまふなめりや」

と解き聞かす。

「おい、さり、さり」とうなづきて、

「をかしき御口つきかな。なにがしら、田舎びたりといふ名こそはべれ、口  
惜しき民にははべらず。都の人とても、何ばかりかあらむ。みな知りてはべり。  
な思しあなづりそ」

とて、また、詠まむと思へれども、堪へずやありけむ、往ぬめり。

次郎が語らひ取られたるも、いと恐ろしく心憂くて、この豊後介を責むれば、  
「いかがは仕まつるべからむ。語らひあはすべき人もなし。まれまれの兄弟

三十ばかりなる男の、丈高くものしく太りて、きたなげなけれど、思ひなし疎ましく、荒らかなる振る舞ひなど、見るもゆゆしくおぼゆ。色あひ心地よげに、声いたう嗔れてさへづりゐたり。懸想人は夜に隠れたるをこそ、よばひとは言ひけれ、さまかへたる春の夕暮なり。秋ならねども、あやしかりけりと見ゆ。

心を破らじとて、祖母おとど出で会ふ。

「故少弐のいと情けび、きらきらしくものしたまひしを、いかでかあひ語らひ申さむと思ひたまへしかども、さる心ざしをも見せ聞こえずはべりしほどに、いと悲しくて、隠れたまひにしを、その代はりに、一向に仕うまつるべくなむ、心ざしを励まして、今日は、いとひたぶるに、強ひてさぶらひつる。

このおはしますらむ女君、筋ことにうけたまはれば、いとかたじけなし。ただ、なにがしらが私の君と思ひ申して、いただきになむささげたてまつるべき。おとどもしぶしぶにおはしげなることは、よからぬ女どもあまたあひ知りてはべるを聞こしめし疎むななり。さりととも、すやつばらを、人並みにはしはべりなむや。わが君をば、後の位に落としたてまつらじものをや」

など、いとよげに言ひ続く。

「いかがは。かくのたまふを、いと幸ひありと思ひたまふるを、宿世つたなき人にやはべらむ、思ひ憚ることはべりて、いかでか人に御覧ぜられむと、人知れず嘆きはべるめれば、心苦しう見たまへわづらひぬる」

と言ふ。

「さらに、な思し憚りそ。天下に、目つぶれ、足折れたまへりとも、なにがしは仕うまつりやめてむ。国のうちの仏神は、おのれになむ靡きたまへる」  
など、誇りゐたり。

「その日ばかり」と言ふに、「この月は季の果てなり」など、田舎びたることを言ひ逃る。

「いかで、かかることを聞かで、尼になりなむとす」

と、言はせられたれば、いよいよあやふがりて、おしてこの国に越え来ぬ。この男子どもを呼びとりて、語らふことは、

「思ふさまになりなば、同じ心に勢ひを交はすべきこと」  
など語らふに、二人は赴きにけり。

「しばしこそ、似げなくあはれと思ひきこえけれ、おのおの我が身のよるべと頼まむに、いと頼もしき人なり。これに悪しくせられては、この近き世界にはめぐらひなむや」

「よき人の御筋といふとも、親に数まへられたてまつらず、世に知らでは、何のかひかはあらむ。この人のかくねむごろに思ひきこえたまへるこそ、今は御幸ひなれ」

「さるべきにてこそは、かかる世界にもおはしけめ。逃げ隠れたまふとも、何のたけきことかはあらむ」

「負けじ魂に、怒りなば、せぬことどもしてむ」

と言ひ脅せば、「いといみじ」と聞きて、中の兄なる豊後介なむ、

「なほ、いとたいだいしく、あたらしきことなり。故少弐ののたまひしこともあり。とかく構へて、京に上げたてまつりてむ」

と言ふ。娘どもも泣きまどひて、

「母君のかひなくてさすらへたまひて、行方をだに知らぬかはりに、人なみなみにて見たてまつらむとこそ思ふに」

「さるものの中に混じりたまひなむこと」

と思ひ嘆くをも知らで、「我はいとおぼえ高き身」と思ひて、文など書きおこす。手などきたなげなう書いて、唐の色紙、香ばしき香に入れしめつつ、をかしく書きたりと思ひたる言葉ぞ、いとたみたりける。みづからも、この家の次郎を語らひとりて、うち連れて来たり。

聞きついつつ、好いたる田舎人ども、心かけ消息がる、いと多かり。ゆゆしくめざましくおぼゆれば、誰も誰も聞き入れず。

「容貌などは、さてもありぬべけれど、いみじきかたはのあれば、人にも見せで尼になして、わが世の限りは持たらむ」

と言ひ散らしたれば、

「故少弐の孫は、かたはなむあんなる」

「あたらしものを」

と、言ふなるを聞くもゆゆしく、

「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。

いときなきほどを、いとらうたしと思ひきこえたまへりしかば、さりともおろかには思ひ捨てきこえたまはじ」

など言ひ嘆くほど、仏神に願を立ててなむ念じける。

娘どもも男子どもも、所につけたるよすがども出で来て、住みつきにたり。

心のうちにこそ急ぎ思へど、京のことはいや遠ざかるやうに隔たりゆく。もの思し知るままに、世をいと憂きものに思して、年三などしたまふ。二十ばかりになりたまふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。

この住む所は、肥前国とぞいひける。そのわたりにもいささか由ある人は、まづこの少弐の孫のありさまを聞き伝えて、なほ、絶えず訪れ来るも、いとみじう、耳かしかましきまでなむ。

大夫監とて、肥後国に族広くて、かしこにつけてはおぼえあり、勢ひいかめしき兵ありけり。むくつけき心のなかに、いささか好きたる心混じりて、容貌ある女を集めて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、

「いみじきかたはありとも、我は見隠して持たらむ」

と、いとねむごろに言ひかかるを、いとむくつけく思ひて、

夢などに、いとたまさかに見えたまふ時などもあり。同じさまなる女など、添ひたまうて見えたまへば、名残心地悪しく悩みなどしければ、

「なほ、世に亡くなりたまひにけるなめり」

と思ひなるも、いみじくのみなむ。

少弐、任果てて上りなどするに、遙けきほどに、ことなる勢ひなき人は、たゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して、死なむとする心地にも、この君の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて、

「我さへうち捨てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらむ。

あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、いつしかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかせて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと、思ひいそぎつるを、ここながら命堪へずなりぬること」

と、うしろめたがる。男子三人あるに、

「ただこの姫君、京に率てたてまつるべきことを思へ。わが身の孝をば、な思ひそ」

となむ言ひ置きける。

その人の御子とは、館の人にも知らせず、ただ「孫のかしづくべきゆゑある」とぞ言ひなしければ、人に見せず、限りなくかしづききこゆるほどに、にはかに亡せぬれば、あはれに心細くて、ただ京の出で立ちをすれど、この少弐の仲悪しかりける国の人多くなどして、とぎまかうさまに、懼ぢ憚りて、われにもあらで年を過ぐすに、この君、ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。心ばせおほどかにあらまほしうものしたまふ。

「まだ、よくも見なれたまはぬに、幼き人をとどめたてまつりたまはむも、うしろめたかるべし」

「知りながら、はた、率て下りねと許したまふべきにもあらず」

など、おのがじし語らひあはせて、いとうつくしう、ただ今から気高きよらなる御さまを、ことなるしつらひなき舟に乗せて漕ぎ出づるほどは、いとあはれになむおぼえける。

幼き心地に、母君を忘れず、折々に、

「母の御もとへ行くか」

と問ひたまふにつけて、涙絶ゆる時なく、娘どもも思ひこがるるを、「舟路ゆゆし」と、かつは諫めけり。

おもしろき所々を見つつ、

「心若うおはせしものを、かかる路をも見せたてまつるものにもがな」

「おはせましかば、われらは下らざらまし」

と、京の方を思ひやらるるに、帰る浪もうらやましく、心細きに、舟子どもの荒々しき声にて、

「うらがなしくも、遠く来にけるかな」

と、歌ふを聞くままに、二人さし向ひて泣きけり。

「舟人もたれを恋ふとか大島の

うらがなしげに声の聞こゆる」

「来し方も行方も知らぬ沖に出でて

あはれいづくに君を恋ふらむ」

鄙の別れに、おのがじし心をやりて言ひける。

金の岬過ぎて、「われは忘れず」など、世ともの言種になりて、かしこに到り着きては、まいて遙かなるほどを思ひやりて、恋ひ泣きて、この君をかしづきものにて、明かし暮らす。

年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず、心々なる人のありさまどもを、見たまひ重ねるにつけても、「あらましかば」と、あはれに口惜しくのみ思し出づ。

右近は、何の人数ならねど、なほ、その形見と見たまひて、らうたきものに思したれば、古人の数に仕うまつり馴れたり。須磨の御移ろひのほどに、対の上の御方に、皆人びと聞こえ渡したまひしほどより、そなたにさぶらふ。心よくかいひそめたるものに、女君も思したれど、心のうちには、

「故君ものしたまはましかば、明石の御方ばかりのおぼえには劣りたまはざらまし。さしも深き御心ざしなかりけるをだに、落としあぶさず、取りしたためたまふ御心長さなりければ、まいて、やむごとなき列にこそあらざらめ、この御殿移りの数のうちには交じらひたまひなまし」

と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。

かの西の京にとまりし若君をだに行方も知らず、ひとへにものを思ひつつみ、また、「今さらにかひなきことによりて、我が名漏らすな」と、口がためたまひしを憚りきこえて、尋ねても訪づれきこえざりしほどに、その御乳母の男、少式になりて、行きければ、下りにけり。かの若君の四つになる年ぞ、筑紫へは行きける。

母君の御行方を知らむと、よろづの神仏に申して、夜昼泣き恋ひて、さるべき所々を尋ねきこえけれど、つひにえ聞き出でず。

「さらばいかかはせむ。若君をだにこそは、御形見に見たてまつらめ。あやしき道に添へたてまつりて、遙かなるほどにおはせむことの悲しきこと。なほ、父君にほのめかさむ」

と思ひけれど、さるべきたよりもなきうちに、

「母君のおはしけむ方も知らず、尋ね問ひたまはば、いかが聞こえむ」

玉 鬘

玉

鬘

へず思ひ寄りたまひつるゆゑゆゑしきなどを、をかしく御覧ず。御前なる人びともめであへり。大臣、

「この紅葉の御消息、いとねたげなめり。春の花盛りに、この御応へは聞こえたまへ。このころ紅葉を言ひ朽さむは、龍田姫の思はむこともあるを、さし退きて、花の蔭に立ち隠れてこそ、強きことは出で来ぬ」

と聞こえたまふも、いと若やかに尽きせぬ御ありさまの見どころ多かるに、いとど思ふやうなる御住まひにて、聞こえ通はしたまふ。

大堰の御方は、「かう方々の御移ろひ定まりて、数ならぬ人は、いつとなく紛らはさむ」と思して、神無月になむ渡りたまひける。御しつらひ、ことのありさま劣らずして、渡したてまつりたまふ。姫君の御ためを思せば、おほかたの作法も、けぢめこよなからず、いとものものしくもてなさせたまへり。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

今一方の御けしきも、をさをさ落としたまはで、侍従君添ひて、そなたはもてかしづきたまへば、げにかうもあるべきことなりけりと見えたり。

女房の曹司町ども、当て当てのこまけぞ、おほかたのことよりもめでたかりける。

五、六日過ぎて、中宮まかでさせたまふ。この御けしきはた、さは言へど、いと所狭し。御幸ひのすぐれたまへりけるをばさるものにて、御ありさまの心にくく重りかにおはしませば、世に重く思はれたまへること、すぐれてなむおはしましける。

この町々の中の隔てには、塀ども廊などを、とかく行き通はして、気近くをかしきあはひにしなしたまへり。

長月になれば、紅葉むらむら色づきて、宮の御前えも言はずおもしろし。風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、色々の花紅葉をこき混ぜて、こなたにたてまつらせたまへり。

大きやかなる童女の、濃き袷、紫苑の織物重ねて、赤朽葉の羅の汗衫、いといたうなれて、廊、渡殿の反橋を渡りて参る。うるはしき儀式なれど、童女のをかしきをなむ、え思し捨てざりける。さる所にさぶらひなれたれば、もてなし、ありさま、他のには似ず、このましうをかし。御消息には、

「心から春まつ園はわが宿の

紅葉を風につてにだに見よ」

若き人びと、御使もてはやすさまどもをかし。

御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、

「風に散る紅葉は軽し春の色を

岩根の松にかけてこそ見ぬ」

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬ作りごとどもなりけり。とりあ

めて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。

南の東は、山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑで、秋の前栽をば、むらむらほのかに混ぜたり。

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを添へて、泉の水遠く澄ましやり、水の音まさるべき巖立て加へ、滝落として、秋の野をはるかに作りたる、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の大堰のわたり野山、無徳にけおされたる秋なり。

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、山里めきて、卯の花の垣根ことさらにしわたして、昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、苦丹などやうの花、草々を植ゑて、春秋の本草、そのなかにうち混ぜたり。東面は、分けて馬場の御殿作り、埒結ひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑ茂らせて、向かひに御厩して、世になき上馬どもをととのへ立てさせたまへり。

西の町は、北面築き分けて、御倉町なり。隔ての垣に松の木茂く、雪をもてあそびむたよりによせたり。冬のはじめの朝、霜むすぶべき菊の籬、われは顔なる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの、木深きなどを移し植ゑたり。

彼岸のころほひ渡りたまふ。ひとたびにと定めさせたまひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせたまふ。例のおいらかにけしきばまぬ花散里ぞ、その夜、添ひて移ろひたまふ。

春の御しつらひは、このころに合はねど、いと心ことなり。御車十五、御前四位五位がちにて、六位殿上人などは、さるべき限りを選らせたまへり。こちたきほどにはあらず、世のそしりもやと省きたまへれば、何事もおどろおどろしういかめしきことはなし。

るに、大臣も、「げに、過ぐしがたきことどもなり」と思して、「さやうの御いそぎも、同じくめづらしからむ御家居にて」と、いそがせたまふ。

年返りて、ましてこの御いそぎのこと、御としみのこと、楽人、舞人の定めなどを、御心に入れていとなみたまふ。経、仏、法事の日の装束、禄などをなむ、上はいそがせたまひける。

東の院に、分けてしたまふことどもあり。御なからひ、ましていとみやびかに聞こえ交はしてなむ、過ぐしたまひける。

世の中響きゆすれる御いそぎなるを、式部卿宮にも聞こしめして、

「年ごろ、世の中にはあまねき御心なれど、このわたりをばあやにくに情けなく、事に触れてはしたなめ、宮人をも御用意なく、愁はしきことのみ多かるに、つらしと思ひ置きたまふことこそはありけめ」

と、いとほしくもからくも思しけるを、かくあまたかかづらひたまへる人びと多かるなかに、取りわきたる御思ひすぐれて、世に心にくくめでたきことに、思ひかしづかれたまへる御宿世をぞ、わが家まではにほひ来ねど、面目に思すに、また、

「かくこの世にあまるまで、響かし営みたまふは、おぼえぬ齡の末の栄えにもあるべきかな」

と喜びたまふを、北の方は、「心ゆかず、ものし」とのみ思したり。女御、御まじらひのほどなどにも、大臣の御用意なきやうなるを、いよいよ恨めしと思ひしみたまへるなるべし。

八月にぞ、六条院造り果てて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御古宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩し変へて、水の趣き、山のおきてを改

「ことさらにさぶらひてなむ」

と聞こえたまふ。のどやかならで帰らせたまふ響きにも、后は、なほ胸うち騒ぎて、

「いかに思し出づらむ。世をたもちたまふべき御宿世は、消たれぬものこそ」

と、いにしへを悔い思す。

尚侍の君も、のどやかに思し出づるに、あはれなること多かり。今もさるべき折、風のつてにもほのめききこえたまふこと絶えざるべし。

后は、朝廷に奏せさせたまふことある時々ぞ、御たうばりの年官年爵、何くれのことに触れつつ、御心のかなはぬ時ぞ、「命長くてかかる世の末を見ること」と、取り返さまほしう、よろづ思しむつかりける。

老いもおはするままに、さがなさまさりて、院もくらべ苦しう、たとへがたくぞ思ひきこえたまひける。

かくて、大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。年積もれるかしこき者どもを選らばせたまひしかど、及第の人、わづかに三人なむありける。

秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりたまひぬ。かの人の御こと、忘るる世なけれど、大臣の切にまもりきこえたまふもつらければ、わりなくてなども対面したまはず。御消息ばかり、さりぬべきたよりに聞こえたまひて、かたみに心苦しき御仲なり。

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見どころありて、ここかしこにておぼつかなき山里人などをも、集へ住ませむの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御古き宮のほとりを、四町をこめて造らせたまふ。

式部卿宮、明けむ年ぞ五十になりたまひける御賀のこと、対の上思しまうく

あざやかに奏しなしたまへる、用意ことにめでたし。取らせたまひて、

「鶯の昔を恋ひてさへづるは

木伝ふ花の色やあせたる」

とのたまはする御ありさま、こよなくゆゑゆゑしくおはします。これは御私さまに、うちうちのことなれば、あまたにも流れずやなりにけむ、また書き落してけるにやあらむ。

楽所遠くておぼつかなければ、御前に御琴ども召す。兵部卿宮、琵琶。内大臣、和琴。箏の御琴、院の御前に参りて、琴は、例の太政大臣に賜はりたまふ。せめきこえたまふ。さるいみじき上手のすぐれたる御手づかひどもの、尽くしたまへる音は、たとへむかたなし。唱歌の殿上人あまたさぶらふ。「安名尊」遊びて、次に「桜人」。月おぼろにさし出でてをかしきほどに、中島のわたりに、ここかしこ篝火ども灯して、大御遊びはやみぬ。

夜更けぬれど、かかるついでに、大後の宮おはします方を、よきて訪らひきこえさせたまはざらむも、情けなければ、帰さに渡らせたまふ。大臣もろともにさぶらひたまふ。

后待ち喜びたまひて、御対面あり。いといたうさだ過ぎたまひにける御けはひにも、故宮を思ひ出できこえたまひて、「かく長くおはしますたぐひもおはしけるものを」と、口惜しう思ほす。

「今はかく古りぬる齢に、よろづのこと忘れはべりにけるを、いとかたじけなく渡りおはしまいたるになむ、さらに昔の御世のこと思ひ出でられはべる」と、うち泣きたまふ。

「さるべき御蔭どもに後れはべりてのち、春のけぢめも思うたまへわかれぬを、今日なむ慰めはべりぬる。またまたも」

と聞こえたまふ。大臣もさるべきさまに聞こえて、

人びとみな、青色に、桜襲を着たまふ。帝は、赤色の御衣たてまつれり。召しありて、太政大臣参りたまふ。おなじ赤色を着たまへれば、いよいよひとつものとかかやきて見えまがはせたまふ。人びとの装束、用意、常にことなり。院も、いときよらにねびまさらせたまひて、御さまの用意、なまめきたる方に進ませたまへり。

今日は、わざとの文人も召さず、ただその才かしこしと聞こえたる学生十人を召す。式部の司の試みの題をなずらへて、御題賜ふ。大殿の太郎君の試みたまふべきなめり。臆だかき者どもは、ものもおぼえず、繋がぬ舟に乗りて池に放れ出でて、いと術なげなり。

日やうやうくだりて、楽の舟ども漕ぎまひて、調子ども奏するほどの、山風の響きおもしろく吹きあはせたるに、冠者の君は、

「かう苦しき道ならでも交じらひ遊びぬべきものを」

と、世の中恨めしうおぼえたまひけり。

「春鶯囀」舞ふほどに、昔の花の宴のほど思し出でて、院の帝も、

「また、さばかりのこと見てむや」

とのたまはするにつけて、その世のことあはれに思し続けらる。舞ひ果つるほどに、大臣、院に御土器参りたまふ。

「鶯のさへづる声は昔にて

睦れし花の蔭ぞ変はれる」

院の上、

「九重を霞隔つるすみかにも

春と告げくる鶯の声」

帥の宮と聞こえし、今は兵部卿にて、今の上に御土器参りたまふ。

「いにしへを吹き伝へたる笛竹に

さへづる鳥の音さへ変はらぬ」

とのたまふも、

「何かは。六位など人のあなづりはべるめれば、しばしのこととは思うたまふれど、内へ参るもの憂くてなむ。故大臣おはしまさしかば、戯れにても、人にはあなづられはべらざらまし。もの隔てぬ親におはすれど、いとけけしうさし放ちて思いたれば、おはしますあたりにも、たやすくも参り馴れはべらず。東の院にてのみなむ、御前近くはべる。対の御方こそ、あはれにものしたまへ、親今一所おはしまさしかば、何ごとを思ひはべらまし」

とて、涙の落つるを紛らはいたまへるけしき、いみじうあはれなるに、宮は、いとどほろほろと泣きたまひて、

「母にも後るる人は、ほどほどにつけて、さのみこそあはれなれど、おのづから宿世宿世に、人と成りたちぬれば、おろかに思ふもなきわぎなるを、思ひ入れぬさまにてもものしたまへ。故大臣の今しばしだにものしたまへかし。限りなき蔭には、同じことと頼みきこゆれど、思ふにかなはぬことの多かるかな。内大臣の心ばへも、なべての人にはあらずと、世人もめで言ふなれど、昔に變はることのみまさりゆくに、命長さも恨めしきに、生ひ先遠き人さへ、かくいささかにても、世を思ひしめりたまへれば、いとなむよろづ恨めしき世なる」  
とて、泣きおはします。

朔日にも、大殿は御ありきしなければ、のどやかにておはします。良房の大  
臣と聞こえける、いにしへの例になずらへて、白馬ひき、節会の日、内の儀式  
をうつして、昔の例よりも事添へて、いつかしき御ありさまなり。

如月の二十日あまり、朱雀院に行幸あり。花盛りはまだしきほどなれど、弥  
生は故宮の御忌月なり。とく開けたる桜の色もいとおもしろければ、院にも御  
用意ことにつくろひ磨かせたまひ、行幸に仕うまつりたまふ上達部、親王たち  
よりははじめ、心づかひしたまへり。

ふもあぢきなしや。心ばへのかやうにやはらかならむ人をこそあひ思はめ」  
と思ふ。また、

「向ひて見るかひなからむいとほしげなり。かくて年経たまひにけれど、  
殿の、さやうなる御容貌、御心と見たまうて、浜木綿ばかりの隔てさし隠しつ  
つ、何くれともてなし紛らはしたまふめるも、むべなりけり」

と思ふ心のうちぞ、恥づかしかりける。

大宮の容貌ことにおはしませど、まだいときよらにおはし、ここにもかしこ  
にも、人は容貌よきものとのみ目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御  
容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ痩せに御髪少ななるなどが、かくそ  
しらはしきなりけり。

年の暮には、睦月の御装束など、宮はただ、この君一所の御ことを、まじる  
ことなういそぎたまふ。あまた領、いときよらに仕立てたまへるを見るも、も  
の憂くのみおぼゆれば、

「朔日などには、かならずしも内へ参るまじう思ひたまふるに、何にかくい  
そがせたまふらむ」

と聞こえたまへば、

「などてか、さもあらむ。老いくづほれたらむ人のやうにもものたまふかな」  
とのたまへば、

「老いねど、くづほれたる心地ぞするや」  
と独りごちて、うち涙ぐみてゐたまへり。

「かのことを思ふならむ」と、いと心苦しうて、宮もうちひそみたまひぬ。

「男は、口惜しき際の人だに、心を高うこそつかふなれ。あまりしめやかに、  
かくなものしたまひそ。何とか、かう眺めがちに思ひ入れたまふべき。ゆゆし  
う」

「誰がぞ」

と問へば、

「殿の冠者の君の、しかしかのたまうて賜へる」

と言へば、名残なくうち笑みて、

「いかにうつくしき君の御され心なり。きむぢらは、同じ年なれど、いふかひなくはかなかめりかし」

など誉めて、母君にも見す。

「この君達の、すこし人数に思しぬべからましかば、宮仕へよりは、たてまつりてまし。殿の御心おきて見るに、見そめたまひてむ人を、御心とは忘れたまふまじきところ、いと頼もしけれ。明石の入道の例にやならまし」

など言へど、皆急ぎ立ちにたり。

かの人は、文をだにえやりたまはず、立ちまさる方のごとし心にかかりて、ほど経るままに、わりなく恋しき面影にまたあひ見でやと思ふよりほかのことなし。宮の御もとへ、あいなく心憂くて参りたまはず。おはせしかた、年ごろ遊び馴れし所のみ、思ひ出でらるることまされば、里さへ憂くおぼえたまひつつ、また籠もりみたまへり。

殿は、この西の対にぞ、聞こえ預けたてまつりたまひける。

「大宮の御世の残り少なげなるを、おはせずなりなむのちも、かく幼きほどより見ならして、後見おぼせ」

と聞こえたまへば、ただのたまふままの御心にて、なつかしうあはれに思ひ扱ひたてまつりたまふ。

ほのかになど見たてまつるにも、

「容貌のまほならずもおはしけるかな。かかる人をも、人は思ひ捨てたまはざりけり」など、「わが、あながちに、つらき人の御容貌を心にかけて恋しと思

と、わぎとのことにはあらねど、うち添へて涙ぐまるる折々あり。

兄弟の童殿上する、常にこの君に参り仕うまつるを、例よりもなつかしう語らひたまひて、

「五節はいつか内へ参る」

と問ひたまふ。

「今年とこそは聞きはべれ」

と聞こゆ。

「顔のいとよかりしかば、すずろにこそ恋しけれ。ましが常に見るらむも羨ましきを、また見せてむや」

とのたまへば、

「いかでかさははべらむ。心にまかせてもえ見はべらず。男兄弟とて、近くも寄せはべらねば、まして、いかでか君達には御覽せさせむ」

と聞こゆ。

「さらば、文をだに」

とて賜へり。「先々かやうのことは言ふものを」と苦しけれど、せめて賜へば、いとほしうて持て往ぬ。

年のほどよりは、されてやありけむ、をかしと見けり。緑の薄様の、好ましき重ねなるに、手はまだいと若けれど、生ひ先見えて、いとをかしげに、

「日影にもしるかりけめや少女子が

天の羽袖にかけし心は」

二人見るほどに、父主ふと寄り来たり。恐ろしうあきれて、え引き隠さず。

「なぞの文ぞ」

とて取るに、面赤みてゐたり。

「よからぬわざしけり」

と憎めば、せうと逃げて行くを、呼び寄せて、

りがたうをかしげなるを、かう誉めらるるなめり。例の舞姫どもよりは、皆すこしおとなびつつ、げに心ことなる年なり。

殿参りたまひて御覧するに、昔御目とまりたまひし少女の姿思し出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文のうち思ひやるべし。

「乙女子も神さびぬらし天つ袖

古き世の友よはひ経ぬれば」

年月の積もりを数へて、うち思しけるままのあはれを、え忍びたまはぬばかりの、をかしうおぼゆるも、はかなしや。

「かけて言へば今日のこととぞ思ほゆる

日蔭の霜の袖にとけしも」

青摺りの紙よくとりあへて、紛らはし書いたる、濃墨、薄墨、草がちにうち交ぜ乱れたるも、人のほどにつけてはをかしと御覧ず。

冠者の君も、人の目とまるにつけても、人知れず思ひありきたまへど、あたり近くだに寄せず、いとけけしうもてなしたれば、ものつつましきほどの心には、嘆かしうてやみぬ。容貌はしも、いと心につきて、つらき人の慰めにも、見るわざしてむやと思ふ。

やがて皆とめさせたまひて、宮仕へすべき御けしきありけれど、このたびはまかでさせて、近江のは辛崎の祓へ、津の守は難波と、挑みてまかでぬ。大納言もことさらに参らすべきよし奏せさせたまふ。左衛門督、その人ならぬをたてまつりて、咎めありけれど、それもとどめさせたまふ。

津の守は、「典侍あきたるに」と申させたれば、「さもや劳らまし」と大殿も思いたるを、かの人は聞きたまひて、いと口惜しと思ふ。

「わが年のほど、位など、かくものげなからずは、乞ひ見てましものを。思ふ心ありとだに知られでやみなむこと」

房などは、いとをかしと見たてまつる。

上の御方には、御簾の前にだに、もの近うもてなしたまはず。わが御心ならひ、いかに思すにかありけむ、疎々しければ、御達なども氣遠きを、今日はものの紛れに、入り立ちたまへるなめり。

舞姫かしづき下ろして、妻戸の間に屏風など立てて、かりそめのしつらひなるに、やをら寄りてのぞきたまへば、悩ましげにて添ひ臥したり。

ただ、かの人の御ほどと見えて、今すこしそびやかに、様体などのことさらび、をかしきところはまさりてさへ見ゆ。暗ければ、こまかには見えねど、ほどのいとよく思ひ出でらるるさまに、心移るとはなけれど、ただにもあらで、衣の裾を引き鳴らいたまふに、何心もなく、あやしと思ふに、

「天にます豊岡姫の宮人も

わが心ざすしめを忘るな

乙女子が袖振る山の瑞垣の」

とのたまふぞ、うちつけなりける。

若うをかしき声なれど、誰ともえ思ひたどられず、なまむつかしきに、化粧じ添ふとて、騒ぎつる後見ども、近う寄りて人騒がしうなれば、いと口惜しうて、立ち去りたまひぬ。

浅葱の心やましければ、内へ参ることもせず、もの憂がりたまふを、五節にことつけて、直衣など、さま変はれる色聴されて参りたまふ。きびはにきよなるものから、まだきにおよすけて、されありきたまふ。帝よりはじめたてまつりて、思したるさまなべてならず、世にめづらしき御おぼえなり。

五節の参る儀式は、いづれともなく、心々に二なくしたまへるを、「舞姫の容貌、大殿と大納言とはすぐれたり」とめでののしる。げに、いとをかしげなれど、ここしうつくしげなることは、なほ大殿のには、え及ぶまじかりけり。

ものきよげに今めきて、そのものとも見ゆまじう仕立てたる様体などの、あ

東の院には、参りの夜の人びとの装束せさせたまふ。殿には、おほかたのこども、中宮よりも、童、下仕への料など、えならでたてまつれたまへり。

過ぎにし年、五節など止まれりしが、さうごうしかりし積もり取り添へ、上人の心地も、常よりもはなやかに思ふべかめる年なれば、所々挑みて、いといみじくよろづを尽くしたまふ聞こえあり。

按察使大納言、左衛門督、上の五節には、良清、今は近江守にて左中弁なるなむ、たてまつりける。皆止めさせたまひて、宮仕へすべく、仰せ言ことなる年なれば、女をおのおのたてまつりたまふ。

殿の舞姫は、惟光朝臣の、津守にて左京大夫かけたるが女、容貌などいとかしげなる聞こえあるを召す。からいことに思ひたれど、

「大納言の、外腹の女をたてまつらるるに、朝臣のいつき女出だし立てたらむ、何の恥かあるべき」

と苛めば、わびて、同じくは宮仕へやがてせさすべく思ひおきてたり。

舞習はしなどは、里にていとよう仕立てて、かしづきなど、親しう身に添ふべきは、いみじう選り整へて、その日の夕つけて参らせたり。

殿にも、御方々の童女、下仕へのすぐれたるをと、御覧じ比べ、選り出でらるる心地どもは、ほどほどにつけて、いとおもだたしげなり。

御前に召して御覧ぜむうちならしに、御前を渡らせてと定めたまふ。捨つべうもあらず、とりどりなる童女の様体、容貌を思しわづらひて、

「今一所の料を、これよりたてまつらばや」  
など笑ひたまふ。ただもてなし用意によりてぞ選びに入りける。

大学の君、胸のみふたがりて、物なども見入れられず、屈じいたくて、書も読まで眺め臥したまへるを、心もや慰むと立ち出でて、紛れありきたまふ。

さま、容貌はめでたくをかしげにて、静やかになまめいたまへれば、若き女

男君、「我をば位なしとて、はしたなむるなりけり」と思すに、世の中恨めしければ、あはれもすこしきむる心地して、めざまし。

「かれ聞きたまへ。」

くれなるの涙に深き袖の色を

浅緑にや言ひしをるべき

恥づかし」

とのたまへば、

「いろいろに身の憂きほどの知らるるは

いかに染めける中の衣ぞ」

と、物のたまひ果てぬに、殿入りたまへば、わりなくて渡りたまひぬ。

男君は、立ちとまりたる心地も、いと人悪く、胸ふたがりて、わが御方に臥したまひぬ。

御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出でたまふけはひを聞くも、静心なければ、宮の御前より、「参りたまへ」とあれど、寝たるやうにて動きもしたまはず。

涙のみ止まらねば、嘆きあかして、霜のいと白きに急ぎ出でたまふ。うちはれたるまみも、人に見えむが恥づかしきに、宮はた、召しまつはすべかめれば、心やすき所にとて、急ぎ出でたまふなりけり。

道のほど、人やりならず、心細く思ひ続けるに、空のけしきもいたう雲りて、まだ暗かりけり。

「霜氷うたてむすべる明けぐれの

空かきくらし降る涙かな」

大殿には、今年、五節たてまつりたまふ。何ばかりの御いそぎならねど、童女の装束など、近うなりぬとて、急ぎせさせたまふ。

いと心苦しう見て、宮にとかく聞こえたばかりで、夕まぐれの人のまよひに、  
対面せさせたまへり。

かたみにももの恥づかしく胸つぶれて、物も言はで泣きたまふ。

「大臣の御心のいとつらければ、さはれ、思ひやみなむと思へど、恋しうお  
はせむこそわりなかるべけれ。などて、すこし隙ありぬべかりつる日ごろ、よ  
そに隔てつらむ」

とのたまふさまも、いと若うあはれげなれば、

「まろも、さこそはあらめ」

とのたまふ。

「恋しとは思しなむや」

とのたまへば、すこしうなづきたまふさまも、幼げなり。

御殿油参り、殿まかだたまふけはひ、こちたく追ひののしる御前駆の声に、  
人びと、

「そそや」

など懼ぢ騒げば、いと恐ろしと思してわななきたまふ。さも騒がればと、ひ  
たぶる心に、許しきこえたまはず。御乳母参りてもとめたてまつるに、けしき  
を見て、

「あな、心づきなや。げに、宮知らせたまはぬことにはあらざりけり」

と思ふに、いとつらく、

「いでや、憂かりける世かな。殿の思しのたまふことは、さらにも聞こえず、  
大納言殿にもいかに聞かせたまはむ。めでたくとも、もののはじめの六位宿世  
よ」

少女

と、つぶやくもほの聞こゆ。ただこの屏風のうしろに尋ね来て、嘆くなりけ  
り。

と思せば、女御の御つれづれにことつけて、ここにもかしこにもおいらかに言ひなして、渡したまふなりけり。

宮の御文にて、

「大臣こそ、恨みもしたまはめ、君は、さりとも心ざしのほども知りたまふらむ。渡りて見えたまへ」

と聞こえたまへれば、いとをかしげにひきつくろひて渡りたまへり。十四になむおはしける。かたなりに見えたまへど、いと子めかしう、しめやかに、うつくしきさましたまへり。

「かたはらさけたてまつらず、明け暮れのもてあそびものに思ひきこえつるを、いとさうざうしくもあるべきかな。残りすくなき齡のほどにて、御ありさまを見果つまじきことと、命をこそ思ひつれ、今さらに見捨てて移ろひたまふや、いづちならむと思へば、いとこそあはれなれ」

とて泣きたまふ。姫君は、恥づかしきことを思せば、顔ももたげたまはで、ただ泣きにのみ泣きたまふ。男君の御乳母、宰相の君出で来て、

「同じ君とこそ頼みきこえさせつれ、口惜しくかく渡らせたまふこと。殿はことざまに思しなることおはしますとも、さやうに思しなびかせたまふな」

など、ささめき聞こゆれば、いよいよ恥づかしと思して、物ものたまはず。

「いで、むつかしきことな聞こえられそ。人の御宿世宿世、いと定めがたくとのたまふ。

「いでや、ものげなしとあなづりきこえさせたまふにはべるめりかし。さりとも、げに、わが君人に劣りきこえさせたまふと、聞こしめし合はせよ」

と、なま心やましきままに言ふ。

冠者の君、物のうしろに入りみて見たまふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、いと心細くて、涙おし拭ひつつおはするけしきを、御乳母、

かりけることよ。また、さもこそあらめ、大臣の、ものの心を深う知りたまひながら、われを怨じて、かく率て渡したまふこと。かしこにて、これよりうしろやすきこともあらじ」

と、うち泣きつつのたまふ。

折しも冠者の君参りたまへり。「もしいささかの隙もや」と、このころはしげうほのめきたまふなりけり。内大臣の御車のあれば、心の鬼にはしたなくて、やをら隠れて、わが御方に入りゐたまへり。

内大殿の君達、左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参り集ひたれど、御簾の内は許したまはず。

左兵衛督、権中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのままに、今も参り仕うまつりたまふことねむごろなれば、その御子どももさまさま参りたまへど、この君に似るにほひなく見ゆ。

大宮の御心ざしも、なずらひなく思したるを、ただこの姫君をぞ、気近うらうたきものと思しかしづきて、御かたはらさけず、うつくしきものに思したりつるを、かくて渡りたまひなむが、いとさうざうしきことを思す。

殿は、

「今のほどに、内に参りはべりて、夕つ方迎へに参りはべらむ」

とて、出でたまひぬ。

「いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、さてもやあらまし」と思せど、なほ、いと心やましければ、「人の御ほどのすこしものものしくなりなむに、かたはならず見なして、そのほど、心ざしの深さ浅さのおもむきをも見定めて、許すとも、ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ。制し諫むとも、一所にては、幼き心のままに、見苦しうこそあらめ。宮も、よもあながちに制したまふことあらじ」

したまふを、心苦しう胸いたきに、まかでさせたてまつりて、心やすくうち休ませたてまつらむ。さすがに、主上につとさぶらはせたまひて、夜昼おはしますめれば、ある人びとも心ゆるびせず、苦しうのみわぶめるに」

とのたまひて、にはかにまかでさせたてまつりたまふ。御暇も許されがたきを、うちむつかりたまて、主上はしぶしぶに思し召したるを、しひて御迎へしたまふ。

「つれづれに思されむを、姫君渡して、もろともに遊びなどしたまへ。宮に預けたてまつりたる、うしろやすけれど、いとさくじりおよすけたる人立ちまじりて、おのづから気近きも、あいなきほどになりたればなむ」

と聞こえたまひて、にはかに渡しきこえたまふ。

宮、いとあへなしと思して、

「ひとりものせられし女亡くなりたまひてのち、いとさうざうしく心細かりしに、うれしうこの君を得て、生ける限りのかしづきものと思ひて、明け暮れにつけて、老いのむつかしさも慰めむところ思ひつれ、思ひのほかに隔てありて思しなすも、つらく」

など聞こえたまへば、うちかしこまりて、

「心に飽かず思うたまへらるることは、しかなむ思うたまへらるるとばかり聞こえさせしになむ。深く隔て思ひたまふることは、いかでかはべらむ。

内にさぶらふが、世の中恨めしげにて、このころまかでてはべるに、いとつれづれに思ひて屈しはべれば、心苦しう見たまふるを、もろともに遊びわざをもして慰めよと思うたまへてなむ、あからさまにものしはべる」とて、「育み、人となさせたまへるを、おろかにはよも思ひきこえさせじ」

と申したまへば、かう思し立ちにたれば、止めきこえさせたまふとも、思し返すべき御心ならぬに、いと飽かず口惜しう思されて、

「人の心こそ憂きものはあれ。とかく幼き心どもにも、われに隔てて疎まし

いみじう心もとなければ、

「これ、開けさせたまへ。小侍従やさぶらふ」

とのたまへど、音もせず。御乳母子なりけり。独り言を聞きたまひけるも恥づかしうて、あいなく御顔も引き入れたまへど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母たちなど近く臥して、うちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。

「さ夜中に友呼びわたる雁が音に

うたて吹き添ふ荻の上風」

「身にしみけるかな」と思ひ続けて、宮の御前に帰りて嘆きがちなるも、「御目覚めてや聞かせたまふらむ」とつつましく、みじろき臥したまへり。

あいなくもの恥づかしうて、わが御方にとく出でて、御文書きたまへれど、小侍従もえ逢ひたまはず、かの御方さまにもえ行かず、胸つぶれておぼえたまふ。

女はた、騒がれたまひしことのみ恥づかしうて、「わが身やいかがあらむ、人やいかが思はむ」とも深く思し入れず、をかしうらうたげにて、うち語らふさまなどを、疎ましも思ひ離れたまはざりけり。

また、かう騒がるべきこととも思さざりけるを、御後見どもいみじうあはめきこゆれば、え言も通はしたまはず。おとなびたる人や、さるべき隙をも作り出づらむ、男君も、今すこしものはかなき年のほどにて、ただいと口惜しとのみ思ふ。

大臣は、そのままに参りたまはず、宮をいとつらしと思ひきこえたまふ。北の方には、かかることなむと、けしきも見せたてまつりたまはず、ただおほかた、いとむつかしき御けしきにて、

「中宮のよそほひことにて参りたまへるに、女御の世の中思ひしめりてもの

かく騒がるらむとも知らで、冠者の君参りたまへり。一夜も人目しげうて、思ふことをもえ聞こえずなりにしかば、常よりもあはれにおぼえたまひければ、夕つ方おはしたるなるべし。

宮、例は是非知らず、うち笑みて待ちよろこびきこえたまふを、まめだちて物語など聞こえたまふついでに、

「御ことにより、内大臣の怨じてものしたまひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしげなきことをしも思ひそめたまひて、人にも思はせたまひつべきが心苦しきこと。かうも聞こえじと思へど、さる心も知りたまはでやと思へばなむ」

と聞こえたまへば、心にかかれることの筋なれば、ふと思ひ寄りぬ。面赤みて、

「何ごとにかはべらむ。静かなる所に籠もりはべりにしのち、ともかくも人に交じる折なければ、恨みたまふべきことはべらじとなむ思ひたまふる」

とて、いと恥づかしと思へるけしきを、あはれに心苦しうて、

「よし。今よりだに用意したまへ」

とばかりにて、異事に言ひなしたまうつ。

「いとど文なども通はむことのかたきなめり」と思ふに、いと嘆かしう、物参りなどしたまへど、さらに参らで、寝たまひぬるやうなれど、心も空にて、人静まるほどに、中障子を引けど、例はことに鎖し固めなどもせぬを、つと鎖して、人の音もせず。いと心細くおぼえて、障子に寄りかかりてゐたまへるに、女君も目を覚まして、風の音の竹に待ちとられて、うちそよめくに、雁の鳴きわたる声の、ほのかに聞こゆるに、幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、

「雲居の雁もわがごとや」

と、独りごちたまふけはひ、若うらうたげなり。

さらに思ひ寄らざりけること」

と、おのがどち嘆く。

「よし、しばし、かかること漏らさじ。隠れあるまじきことなれど、心をやりて、あらぬこととだに言ひなされよ。今かしこに渡したてまつりてむ。宮の御心のいとつらきなり。そこたちは、さりとも、いとかがれとしても、思はれざりけむ」

とのたまへば、「いとほしきなかにも、うれしくのたまふ」と思ひて、

「あな、いみじや。大納言殿に聞きたまはむことをさへ思ひはべれば、めでたきにて、ただ人の筋は、何のめづらしさにか思ひたまへかけむ」

と聞こゆ。

姫君は、いと幼げなる御さまにて、よろづに申したまへども、かひあるべきにもあらねば、うち泣きたまひて、

「いかにしてか、いたづらになりたまふまじきわざはすべからむ」

と、忍びてさるべきどちのたまひて、大宮をのみぞ恨みきこえたまふ。

宮は、いといとほしと思すなかにも、男君の御かなしきはすぐれたまふにやあらむ、かかる心のありけるも、うつくしう思さるるに、情けなく、こよなきことのやうに思しのたまへるを、

「などかさしもあるべき。もとよりいたう思ひつきたまふことなくて、かくまでかしづかむとも思し立たざりしを、わがかくもてなしそめたればこそ、春宮の御ことをも思しかけたためれ。とりはづして、ただ人の宿世あらば、この君よりほかにまさるべき人やはある。容貌、ありさまよりはじめて、等しき人のあるべきかは。これより及びなからむ際にもとこそ思へ」

と、わが心ざしのまさればにや、大臣を恨めしう思ひきこえたまふ。御心のうちを見せたてまつりたらば、ましていかに恨みきこえたまはむ。

はべれ。もろともに罪をおほせたまふは、恨めしきことになむ。

見たてまつりしより、心ことに思ひはべりて、そこに思いたらぬことをも、すぐれたるさまにもてなきむとこそ、人知れず思ひはべれ。ものげなきほどを、心の闇に惑ひて、急ぎものせむとは思ひ寄らぬことになむ。

さて、誰かはかかることは聞こえけむ。よからぬ世の人の言につきて、きはだけく思しのたまふも、あぢきなく、むなしきことにて、人の御名や汚れむとのたまへば、

「何の、浮きたることにかはべらむ。さぶらふめる人びとも、かつは皆もどき笑ふべかめるものを、いと口惜しく、やすからず思うたまへらるるや」とて、立ちたまひぬ。

心知れるどちは、いみじういとほしく思ふ。一夜のしりう言の人びとは、まして心地も違ひて、「何にかかる睦物語をしけむ」と、思ひ嘆きあへり。

姫君は、何心もなくしておはするに、さしのぞきたまへれば、いとらうたげなる御さまを、あはれに見たてまつりたまふ。

「若き人といひながら、心幼くものしたまひけるを知らで、いとかく人なみなみに思ひける我こそ、まさりてはかなかりけれ」

とて、御乳母どもをさいなみたまふに、聞こえむ方なし。

「かやうのことは、限りなき帝の御いつき女も、おのづから過つ例、昔物語にもあめれど、けしきを知り伝ふる人、さるべき隙にてこそあらめ」

「これは、明け暮れ立ちまじりたまひて年ごろおはしましつるを、何かは、いはけなき御ほどを、宮の御もてなしよりさし過ぐしても、隔てきこえさせむと、うちとけて過ぐしきこえつるを、一昨年ばかりよりは、けぎやかなる御もてなしになりてはべるめるに、若き人とても、うち紛ればみ、いかにぞや、世づきたる人もおはすべかめるを、夢に乱れたるところおはしまさざめれば、

り。はかばかしき身にはべらねど、世にはべらむ限り、御目離れず御覽ぜられ、おぼつかなき隔てなくとこそ思ひたまふれ。

よからぬものうへにて、恨めしと思ひきこえさせつべきことの出でまうで来たるを、かうも思うたまへじとかつは思ひたまふれど、なほ静めがたくおぼえはべりてなむ」

と、涙おし拭ひたまふに、宮、化粧じたまへる御顔の色違ひて、御目も大きになりぬ。

「いかやうなることにてか、今さらの齡の末に、心置きては思さるらむ」と聞こえたまふも、さすがにいとほしけれど、

「頼もしき御蔭に、幼き者をたてまつりおきて、みづからをばなかなか幼くより見たまへもつかず、まづ目に近きが、交じらひなどはかばかしからぬを、見たまへ嘆きいとなみつ、さりとも人となさせたまひてむと頼みわたりはべりつるに、思はずなることのはべりければ、いと口惜しうなむ。

まことに天の下並ぶ人なき有職にはものせらるめれど、親しきほどにかかるは、人の聞き思ふところも、あはつけきやうになむ、何ばかりのほどにもあらぬ仲らひにだにしはべるを、かの人の御ためにも、いとかたはなることなり。さし離れ、きらきらしうめづらしげあるあたりに、今めかしうもてなさるるこそ、をかしけれ。ゆかりむつび、ねぢけがましきさまにて、大臣も聞き思すところはべりなむ。

さるにても、かかることなむと、知らせたまひて、ことさらにもてなし、すこしゆかしげあることをませてこそはべらめ。幼き人びとの心にまかせて御覽じ放ちけるを、心憂く思うたまふ」

など聞こえたまふに、夢にも知りたまはぬことなれば、あさましう思して、

「げに、かうのたまふもことわりなれど、かけてもこの人びとの下の心なむ知りはべらざりける。げに、いと口惜しきことは、ここにこそまして嘆くべく

「今さへかかるあだけこそ」

と言ひあへり。ささめき言の人びとは、

「いとかうばしき香のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしつるところ  
そ思ひつれ」

「あな、むくつけや。しりう言や、ほの聞こしめしつらむ。わづらはしき御  
心を」

と、わびあへり。

殿は、道すがら思すに、

「いと口惜しく悪しきことにはあらねど、めづらしげなきあはひに、世人も  
思ひ言ふべきこと。大臣の、しひて女御をおし沈めたまふもつらきに、わくら  
ばに、人にまさることもやとこそ思ひつれ、ねたくもあるかな」

と思す。殿の御仲の、おほかたには昔も今もいとよくおはしながら、かやう  
の方にては、挑みきこえたまひし名残も思し出でて、心憂ければ、寢覚がちに  
て明かしたまふ。

「大宮をも、さやうのけしきには御覧ずらむものを、世になくかなしくした  
まふ御孫にて、まかせて見たまふならむ」

と、人びとの言ひしけしきを、ねたしと思すに、御心動きて、すこし男々し  
くあざやぎたる御心には、静めがたし。

二日ばかりありて、参りたまへり。しきりに参りたまふ時は、大宮もいと御  
心ゆき、うれしきものに思いたり。御尼額ひきつくろひ、うるはしき御小桂な  
どたてまつり添へて、子ながら恥づかしげにおはする御人ざまなれば、まほな  
らずぞ見えたてまつりたまふ。

大臣御けしき悪しくて、

「ここにさぶらふもはしたなく、人びといかに見はべらむと、心置かれにた

「萩が花摺り」

など歌ひたまふ。

「大殿も、かやうの御遊びに心止めたまひて、いそがしき御政事どもをば逃れたまふなりけり。げに、あぢきなき世に、心のゆくわぎをしてこそ、過ぐしはべりなまほしけれ」

などのたまひて、御土器参りたまふに、暗うなれば、御殿油参り、御湯漬、くだものなど、誰も誰もきこしめす。

姫君はあなたに渡したてまつりたまひつ。しひて気遠くもてなしたまひ、「御琴の音ばかりをも聞かせたてまつらじ」と、今はこよなく隔てきこえたまふを、  
「いとほしきことありぬべき世なるこそ」

と、近う仕うまつる大宮の御方のねび人ども、ささめきけり。

大臣出でたまひぬるやうにて、忍びて人にもものたまふとて立ちたまへりけるを、やをらかい細りて出でたまふ道に、かかるささめき言をするに、あやしうなりたまひて、御耳とどめたまへば、わが御うへをぞ言ふ。

「かしこがりたまへど、人の親よ。おのづから、おれたることこそ出で来べかめれ」

「子を知るといふは、虚言なめり」  
などぞ、つきしろふ。

「あさましくもあるかな。さればよ。思ひ寄らぬことにはあらねど、いはけなきほどにうちたゆみて。世は憂きものにもありけるかな」

と、けしきをつぶつぶと心得たまへど、音もせで出でたまひぬ。

御前駆追ふ声のいかめしきにぞ、

「殿は、今こそ出でさせたまひけれ」

「いづれの隈におはしましたらむ」

姫君の御さまの、いときびはにうつくしうて、箏の御琴弾きたまふを、御髪  
のさがり、髪ざしなどの、あてになまめかしきをうちまもりたまへば、恥ぢら  
ひて、すこしそばみたまへるかたはらめ、つらつきうつくしげにて、取由の手  
つき、いみじう作りたる物の心地するを、宮も限りなくかなしと思したり。搔  
きあはせなど弾きすさびたまひて、押しやりたまひつ。

大臣、和琴ひき寄せたまひて、律の調べのなかなか今めきたるを、さる上手  
の乱れて掻い弾きたまへる、いとおもしろし。御前の梢ほろほろと残らぬに、  
老い御達など、ここかしこの御几帳のうしろに、かしらを集へたり。

「風の力蓋し寡し」

と、うち誦じたまひて、

「琴の感ならねど、あやしくものあはれなる夕べかな。なほ、あそばさむや」  
とて、「秋風楽」に掻きあはせて、唱歌したまへる声、いとおもしろければ、  
皆さまさま、大臣をもいとうつくしと思ひきこえたまふに、いとど添へむとに  
やあらむ、冠者の君参りたまへり。

「こなたに」とて、御几帳隔てて入れたてまつりたまへり。

「をさをさ対面もえ賜はらぬかな。などかく、この御学問のあながちならむ。  
才のほどよりあまり過ぎぬるもあぢきなきわざと、大臣も思し知れることなる  
を、かくおきてきこえたまふ、やうあらむとは思ひたまへながら、かう籠もり  
おはすることなむ、心苦しうはべる」

と聞こえたまひて、

「時々は、ことわざしたまへ。笛の音にも古事は、伝はるものなり」  
とて、御笛たてまつりたまふ。

いと若うをかしげなる音に吹きたてて、いみじうおもしろければ、御琴ども  
をばしばし止めて、大臣、拍子おどろおどろしからずうち鳴らしたまひて、

きはべれ。物の上手の後にはべれど、末になりて、山賤にて年経たる人の、いかでさしも弾きすぐれけむ。かの大臣、いと心ことにこそ思ひてのたまふ折々はべれ。こと事よりは、遊びの方の才はなほ広う合はせ、かれこれに通はしはべるこそ、かしこけれ、独り事にて、上手となりけむこそ、珍しきことなれ」などのたまひて、宮にそそのかしきこえたまへば、

「柱さすことうひうひしくなりにけりや」

とのたまへど、おもしろう弾きたまふ。

「幸ひにうち添へて、なほあやしうめでたかりける人なりや。老いの世に、持たまへらぬ女子をまうけさせたてまつりて、身に添へてもやつしゐたらず、やむごとなきに譲れる心おきて、こともなかるべき人なりとぞ聞きはべる」など、かつ御物語聞こえたまふ。

「女はただ心ばせよりこそ、世に用ゐらるるものにはべりけれ」など、人の上のたまひ出でて、

「女御を、けしうはあらず、何ごとも人に劣りては生ひ出でずかしと思ひたまへしかど、思はぬ人におされぬる宿世になむ、世は思ひのほかなるものと思ひはべりぬる。この君をだに、いかで思ふさまに見なしはべらむ。春宮の御元服、ただ今のことになりぬるをと、人知れず思うたまへ心ぎしたるを、かういふ幸ひ人の腹の后がねこそ、また追ひ次ぎぬれ。立ち出でたまへらむに、ましてきしろふ人ありがたくや」

とうち嘆きたまへば、

「などか、さしもあらむ。この家にさる筋の人出でものしたまはで止むやうあらじと、故大臣の思ひたまひて、女御の御ことをも、ゐたちいそぎたまひしものを。おはせましかば、かくもてひがむることもなからまし」

など、この御ことにてぞ、太政大臣をも恨めしげに思ひきこえたまへる。

「むつまじき人なれど、男子にはうちとくまじきものなり」

と、父大臣聞こえたまひて、けどほくなりたるを、幼心地に思ふことなきにしもあらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊びの追従をも、ねむごろにまつはれありきて、心ざしを見えきこえたまへば、いみじう思ひ交はして、けざやかには今も恥ぢきこえたまはず。

御後見どもも、

「何かは、若き御心どちなれば、年ごろ見ならひたまへる御あはひを、にはかにも、いかがはもて離れはしたなめはきこえむ」

と見るに、女君こそ何心なくおはすれど、男は、さこそものげなきほどと見きこゆれ、おほけなく、いかなる御仲らひにかありけむ、よそよそになりては、これをぞ静心なく思ふべき。

まだ片生ひなる手の生ひ先うつくしきにて、書き交はしたまへる文どもの、心幼くて、おのづから落ち散る折あるを、御方の人びとは、ほのぼの知れるもありけれど、「何かは、かくこそ」と、誰にも聞こえむ。見隠しつつあるなるべし。

所々の大饗どもも果てて、世の中の御いそぎもなく、のどやかになりぬるころ、時雨うちして、萩の上風もただならぬ夕暮に、大宮の御方に、内大臣参りたまひて、姫君渡しきこえたまひて、御琴など弾かせたてまつりたまふ。宮は、よろづのもののお手におはすれば、いづれも伝へたてまつりたまふ。

「琵琶こそ、女のしたるに憎きやうなれど、らうらうじきものにはべれ。今の世にまことしう伝へたる人、をさをさはべらずなりにたり。何の親王、くれの源氏」

など数へたまひて、

「女の中には、太政大臣の、山里に籠め置きたまへる人こそ、いと上手と聞

「弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかが」  
など、うちうちに、こなたかなたに心寄せきこゆる人びと、おぼつかながり  
きこゆ。

兵部卿宮と聞こえしは、今は式部卿にて、この御時にはましてやむごとなき  
御おぼえにておはする、御女、本意ありて参りたまへり。同じごと、王女御に  
てさぶらひたまふを、

「同じくは、御母方にて親しくおはすべきにこそは、母后のおはしまさぬ御  
代はりの後見に」

とことよせて、似つかはしかるべく、とりどりに思し争ひたれど、なほ梅壺  
ゐたまひぬ。御幸ひの、かく引きかへすぐれたまへりけるを、世の人おどろき  
きこゆ。

大臣、太政大臣に上がりたまひて、大将、内大臣になりたまひぬ。世の中の  
ことども政りごちたまふべく譲りきこえたまふ。人がら、いとすくよかに、き  
らきらしくて、心もちるなどもかしこくものしたまふ。学問を立ててしたまひ  
ければ、韻塞には負けたまひしかど、公事にかしこくなむ。

腹々に御子ども十余人、おとなびつつものしたまふも、次々になり出でつつ、  
劣らず栄えたる御家のうちなり。女は、女御と今一所なむおはしける。わかむ  
どほり腹にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察使大納言の北の  
方になりて、さしむかへる子どもの数多くなりて、「それに混ぜて後の親に譲ら  
む、いとあいなし」とて、とり放ちきこえたまひて、大宮にぞ預けきこえたま  
へりける。女御にはこよなく思ひおとしきこえたまひつれど、人がら、容貌な  
ど、いとうつくしくぞおはしける。

冠者の君、一つにて生ひ出でたまひしかど、おのおの十に余りたまひて後は、  
御方ことにて、

大将、盃さしたまへば、いたう酔ひ痴れてをる顔つき、いと痩せ瘦せなり。世のひがものにて、才のほどよりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありけるを、御覧じ得るところありて、かくとりわき召し寄せたるなりけり。身に余るまで御顧みを賜はりて、この君の御徳に、たちまちに身を変へたると思へば、まして行く先は、並ぶ人なきおぼえにぞあらむかし。

大学に参りたまふ日は、寮門に、上達部の御車ども数知らず集ひたり。おほかた世に残りたるあらじと見えたるに、またなくもてかしづかれて、つくろはれ入りたまへる冠者の君の御さま、げに、かかる交じらひには堪へず、あてにうつくしげなり。

例の、あやしき者どもの立ちまじりつつ来るたる座の末をからしと思すぞ、いとことわりなるや。

ここにてもまた、おろしののしる者どもありて、めざましけれど、すこしも臆せず読み果てたまひつ。

昔おぼえて大学の栄ゆるころなれば、上中下の人、我も我もと、この道に志し集れば、いよいよ、世の中に、才ありはかばかしき人多くなむありける。文人擬生などいふなることどもよりうちはじめ、すがすがしう果てたまへれば、ひとへに心に入れて、師も弟子も、いとど励みましたまふ。

殿にも、文作りしげく、博士、才人ども所得たり。すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現はるる世になむありける。

かくて、后ゐたまふべきを、

「斎宮女御をこそは、母宮も、後見と譲りきこえたまひしかば」

と、大臣もことづけたまふ。源氏のうちしきり后にゐたまはむこと、世の人許しきこえず。

「一月に三度ばかりを参りたまへ」

とぞ、許しきこえたまひける。

つと籠もりゐたまひて、いぶせきままに、殿を、

「つらくもおはしますかな。かく苦しからでも、高き位に昇り、世に用ゐらるる人はなくやはある」

と思ひきこえたまへど、おほかたの人がら、まめやかに、あだめきたるところなくおはすれば、いとよく念じて、

「いかでさるべき書どもとく読み果てて、交じらひもし、世にも出でたらむ」と思ひて、ただ四、五月のうちに、『史記』などいふ書、読み果てたまひてけり。

今は寮試受けさせむとて、まづ我が御前にて試みさせたまふ。

例の、大将、左大弁、式部大輔、左中弁などばかりして、御師の大内記を召して、『史記』の難き巻々、寮試受けむに、博士のかへさふべきふしぶしを引き出でて、一わたり読ませたてまつりたまふに、至らぬ句もなく、かたがたに通はし読みたまへるさま、爪じるし残らず、あさましきまでありがたければ、

「さるべきにこそおはしけれ」

と、誰も誰も、涙落としたまふ。大将は、まして、

「故大臣おはせましかば」

と、聞こえ出でて泣きたまふ。殿も、え心強うもてなしたまはず、

「人のうへにて、かたくななりと見聞きはべりしを、子のおとなぶるに、親の立ちかはり痴れゆくことは、いくばくならぬ齢ながら、かかる世にこそはべりけれ」

などのたまひて、おし拭ひたまふを見る御師の心地、うれしく面目ありと思へり。

数定まれる座に着きあまりて、帰りまかづる大学の衆どもあるを聞こしめして、釣殿の方に召しとどめて、ことに物など賜はせけり。

事果ててまかづる博士、才人も召して、またまた詩文作らせたまふ。上達部、殿上人も、さるべき限りをば、皆とどめさぶらはせたまふ。博士の人びとは、四韻、ただの人は、大臣をはじめたてまつりて、絶句作りたまふ。興ある題の文字選りて、文章博士たてまつる。短きころの夜なれば、明け果ててぞ講ずる。左中弁、講師仕うまつる。容貌いときよげなる人の、声づかひものものしく、神さびて読み上げたるほど、おもしろし。おぼえ心ことなる博士なりけり。

かかる高き家に生まれたまひて、世界の栄花にのみ戯れたまふべき御身もちて、窓の螢をむつび、枝の雪を馴らしたまふ心ざしのすぐれたるよしを、よろづのことによそへなずらへて、心々に作り集めたる句ごとにおもしろく、「唐土にも持て渡り伝へまほしげなる夜の詩文どもなり」となむ、そのころ世にめでゆすりける。

大臣の御はさらなり。親めきあはれなることさへすぐれたるを、涙おとして誦じ騒ぎしかど、女のえ知らぬことまねぶは憎きことをと、うたてあれば漏らしつ。

うち続き、入学といふことせさせたまひて、やがて、この院のうちに御曹司作りて、まめやかに才深き師に預けきこえたまひてぞ、学問せさせたてまつりたまひける。

大宮の御もにも、をさをさ参うでたまはず。夜昼うつくしみて、なほ稚児のやうにのみもてなしきこえたまへれば、かしこにては、えもの習ひたまはじとて、静かなる所に籠めたてまつりたまへるなりけり。

「憚るところなく、例あらむにまかせて、なだむることなく、厳しう行なへ」と仰せたまへば、しひてつれなく思ひなして、家より他に求めたる装束どもの、うちあはず、かたくなしき姿などをも恥なく、面もち、声づかひ、むべむべしくもてなしつつ、座に着き並びたる作法よりはじめ、見も知らぬさまどもなり。

若き君達は、え堪へずほほ笑まれぬ。さるは、もの笑ひなどすまじく、過ぐしつつ静まれる限りをと、選り出だして、瓶子なども取らせたまへるに、筋異なりけるまじらひにて、右大将、民部卿などの、おほなおほな土器とりたまへるを、あさましく咎め出でつつおろす。

「おほし、垣下あるじ、はなはだ非常にはべりたうぶ。かくばかりのしるしとあるなにかしを知らずしてや、朝廷には仕うまつりたうぶ。はなはだをこなり」

など言ふに、人びと皆ほころびて笑ひぬれば、また、

「鳴り高し。鳴り止まむ。はなはだ非常なり。座を引きて立ちたうびなむ」など、おどし言ふも、いとをかし。

見ならひたまはぬ人びとは、珍しく興ありと思ひ、この道より出で立ちたまへる上達部などは、したり顔にうちほほ笑みなどしつつ、かかる方さまを思ひ好みて、心ざしたまふがめでたきことと、いとど限りなく思ひきこえたまへり。いささかもの言ふをも制す。無礼げなりとても咎む。かしかましようのしりを顔どもも、夜に入りては、なかなか今すこし掲焉なる火影に、猿樂がましくわびしげに、人悪げなるなど、さまざまに、げにいとなべてならず、さまざまなるわぎなりけり。

大臣は、

「いとあざれ、かたくななる身にて、けうさうしまどはかさねなむ」

とのたまひて、御簾のうちに隠れてぞ御覧じける。

みて、心のままなる官爵に昇りぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、けしきとりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえて、やむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれて、世衰ふる末には、人に軽めあなづらるるに、取るところなきことになむはべる。

なほ、才をもととしてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強うはべらめ。さしあたりては、心もとなきやうにはべれども、つひの世の重鎮となるべき心おきてを習ひなば、はべらずなりなむ後も、うしろやすかるべきによりなむ。ただ今は、はかばかしからずながらも、かくて育みはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひあなづる人もよもはべらじと思うたまふる」

など、聞こえ知らせたまへば、うち嘆きたまひて、

「げに、かくも思し寄るべかりけることを。この大将なども、あまり引き違へたる御ことなりと、かたぶけはべるめるを、この幼心地にも、いと口惜しく、大将、左衛門の督の子どもなどを、我よりは下臈と思ひおとしたりしだに、皆おのおの加階し昇りつつ、およすげあへるに、浅葱をいとからしと思はれたるに、心苦しくはべるなり」

と聞こえたまへば、うち笑ひたまひて、

「いとおよすげても恨みはべるななりな。いとはかなしや。この人のほどよ」とて、いとうつくしと思したり。

「学問などして、すこしものの心得はべらば、その恨みはおのづから解けはべりなむ」

と聞こえたまふ。

字つくることは、東の院にてしたまふ。東の対をしつらはれたり。上達部、殿上人、珍しくいぶかしきことにして、我も我もと集ひ参りたまへり。博士どもももなかなか臆しぬべし。

右大将をはじめきこえて、御伯父の殿ばら、みな上達部のやむごとなき御おぼえことにてのみものしたまへば、主人方にも、我も我もと、さるべきことどもは、とりどりに仕うまつりたまふ。おほかた世ゆすりて、所狭き御いそぎの勢なり。

四位になしてむと思し、世人も、さぞあらむと思へるを、

「まだいときびはなるほどを、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりなからむも、なかなか目馴れたることなり」

と思しとどめつ。

浅葱にて殿上に帰りたまふを、大宮は、飽かずあさましきことと思したるぞ、ことわりにいとほしかりける。

御対面ありて、このこと聞こえたまふに、

「ただ今、かうあながちにしも、まだきに老いつかすまじうはべれど、思ふやうはべりて、大学の道にしぼし習はさむの本意はべるにより、今二、三年をいたづらの年に思ひなして、おのづから朝廷にも仕うまつりぬべきほどにならば、今、人となりはべりなむ。

みづからは、九重のうちに生ひ出ではべりて、世の中のありさまも知りはず、夜昼、御前にさぶらひて、わづかになむはかなき書なども習ひはべりし。ただ、かしこき御手より伝へはべりしだに、何ごとも広き心を知らぬほどは、文の才をまねぶにも、琴笛の調べにも、音耐へず、及ばぬところの多くなむはべりける。

はかなき親に、かしこき子のまさる例は、いとかたきことになむはべれば、まして、次々伝はりつつ、隔たりゆかむほどの行く先、いとうしろめたなきによりなむ、思ひたまへおきてはべる。

高き家の子として、官位爵位心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好

へれ」

と、ほめきこえたまふを、若き人びとは笑ひきこゆ。

こなたにも対面したまふ折は、

「この大臣の、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、今始めたる御心ざしにもあらず。故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひては、思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひしことなど、のたまひ出でつつ、悔しげにこそ思したりし折々ありしか。

されど、故大殿の姫君ものせられし限りは、三の宮の思ひたまはむことのとほしさに、とかく言添へきこゆることもなかりしなり。今は、そのやむごとくなくえさらぬ筋にてもせられし人さへ、亡くなられにしかば、げに、などてかは、さやうにておはせましも悪しかるまじとうちおぼえはべるにも、さらがへりてかくねむごろに聞こえたまふも、さるべきにもあらむとなむ思ひはべる」  
など、いと古代に聞こえたまふを、心づきなしと思して、

「故宮にも、しか心ごはきものに思はれたてまつりて過ぎはべりにしを、今さらに、また世になびきはべらむも、いとつきなきことになむ」

と聞こえたまひて、恥づかしげなる御けしきなれば、しひてもえ聞こえおもむけたまはず。

宮人も、上下、みな心かけきこえたれば、世の中いとうしろめたくのみ思さるれど、かの御みづからは、わが心を尽くし、あはれを見えきこえて、人の御けしきのうちもゆるばむほどをこそ待ちわたりたまへ、さやうにあながちなるさまに、御心破りきこえむなどは、思さざるべし。

大殿腹の若君の御元服のこと、思しいそぐを、二条の院にてと思せど、大宮のいとゆかしげに思したるもことわりに心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせたてまつりたまふ。

年変はりて、宮の御果ても過ぎぬれば、世の中色改まりて、更衣のほどなども今めかしきを、まして祭のころは、おほかたの空のけしき心地よげなるに、前齋院はつれづれと眺めたまふを、前なる桂の下風、なつかしきにつけても、若き人びとは思ひ出づることどもあるに、大殿より、

「御禊の日は、いかにのどやかに思さるらむ」

と、訪らひきこえさせたまへり。

「今日は、

かけきやは川瀬の波もたちかへり

君が禊の藤のやつれを」

紫の紙、立文すくよかにて、藤の花につけたまへり。折のあはれなれば、御返りあり。

「藤衣着しは昨日と思ふまに

今日は禊の瀬にかはる世を

はかなく」

とばかりあるを、例の、御目止めたまひて見おはす。

御服直しのほどなどにも、宣旨のもとに、所狭きまで、思しやれることどもあるを、院は見苦しきことに思しのたまへど、

「をかしやかに、けしきばめる御文などのあらばこそ、とかくも聞こえ返さめ、年ごろも、おほやけぎまの折々の御訪らひなどは聞こえならはしたまひて、いとまめやかなれば、いかがは聞こえも紛らはすべからむ」

と、もてわづらふべし。

女五の宮の御方にも、かやうに折過ぐさず聞こえたまへば、いとあはれに、

「この君の、昨日今日の稚児と思ひしを、かくおとなびて、訪らひたまふこと。容貌のいともきよらなるに添へて、心さへこそ人にはことに生ひ出でたま

少 女

少

女

むすぼほれつる夢の短き」

なかなか飽かず、悲しと思すに、とく起きたまひて、さとはなくて、所々に御誦経などせさせたまふ。

「苦しき目見せたまふと、恨みたまへるも、さぞ思さるらむかし。行なひをしたまひ、よろづに罪軽げなりし御ありさまながら、この一つことにてぞ、この世の濁りをすすいたまはざらむ」

と、ものの心を深く思したるに、いみじく悲しければ、

「何わざをして、知る人なき世界におはすらむを、訪らひきこえに参うでて、罪にも代はりきこえばや」

など、つくづくと思す。

「かの御ために、とり立てて何わざをもしたまはむは、人とがめきこえつべし。内にも、御心の鬼に思すところやあらむ」

と、思しつ々むほどに、阿弥陀仏を心にかけて念じたてまつりたまふ。「同じ蓮に」とこそは、

「亡き人を慕ふ心にまかせても

影見ぬ三つの瀬にや惑はむ」

と思すぞ、憂かりけるとや。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

すぐれたるは、かたき世なりや。

東の院にながむる人の心ばへこそ、古りがたくらうたけれ。さはた、さらにえあらぬものを、さる方につけての心ばせ、人にとりつつ見そめしより、同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ。今はた、かたみに背くべくもあらず、深うあはれと思ひはべる」

など、昔今の御物語に夜更けゆく。

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女君、

「氷閉ぢ石間の水は行きなやみ

空澄む月の影ぞ流るる」

外を見出だして、すこし傾きたまへるほど、似るものなくうつくしげなり。髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえて、めでたければ、いささか分くる御心もとり重ねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

「かきつめて昔恋しき雪もよに

あはれを添ふる鴛鴦の浮寝か」

入りたまひても、宮の御ことを思ひつつ大殿籠もれるに、夢ともなくほのかに見たてまつる、いみじく恨みたまへる御けしきにて、

「漏らさじとのたまひしかど、憂き名の隠れなかりければ、恥づかしう、苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」

とのたまふ。御応へ聞こゆと思すに、襲はるる心地して、女君の、  
「こは、など、かくは」

とのたまふに、おどろきて、いみじく口惜しく、胸のおきどころなく騒げば、抑へて、涙も流れ出でにけり。今も、いみじく濡らし添へたまふ。

女君、いかなることにかと思すに、うちもみじろかで臥したまへり。

「とけて寝ぬ寝覚さびしき冬の夜に

きかし。

うち頼みきこえて、とあることかか折につけて、何ごとも聞こえかよひしに、もて出でてらうらうじきことも見えたまはざりしかど、いふかひあり、思ふさまに、はかなきことわざをもしなしたまひしはや。世にまた、さばかりのたぐひありなむや。

やはらかにおびれたるものから、深うよしづきたるところの、並びなくものしたまひしを、君こそは、さいへど、紫のゆゑ、こよなからずものしたまふめれど、すこしわづらはしき気添ひて、かどかどしきのすすみたまへるや、苦しからむ。

前齋院の御心ばへは、またさまことにぞ見ゆる。さうぎうしきに、何とはなくとも聞こえあはせ、われも心づかひせらるべきあたり、ただこの一所や、世に残りたまへらむ」

とのたまふ。

「尚侍こそは、らうらうじくゆゑゆゑしき方は、人にまさりたまへれ。浅はかなる筋など、もて離れたまへりける人の御心を、あやしくもありけることどもかな」

とのたまへば、

「さかし。なまめかしう容貌よき女の例には、なほ引き出でつべき人ぞかし。さも思ふに、いとほしく悔しきことの多かるかな。まいて、うちあだけ好きたる人の、年積もりゆくままに、いかに悔しきこと多からむ。人よりはことなき静けさ、と思ひしだに」

などの、のたまひ出でて、尚侍の君の御ことににも、涙すこしは落したまひつ。

「この、数にもあらずおとしめたまふ山里の人こそは、身のほどにはややうち過ぎ、ものの心など得つべけれど、人よりことなべきものなれば、思ひ上されるさまをも、見消ちてはべるかな。いふかひなき際の人はまだ見ず。人は、

など、日一日慰めきこえたまふ。

雪のいたう降り積もりたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光まさりて見ゆ。

「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきものの、身にしみて、この世のほかのことまで思ひ流され、おもしろさもあはれさも、残らぬ折なれ。すさまじき例に言ひ置きけむ人の心浅さよ」

とて、御簾巻き上げさせたまふ。

月は隈なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、しをれたる前栽の蔭心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の水もえもいはずすぎきに、童女下ろして、雪まろばしせさせたまふ。

をかしげなる姿、頭つきども、月に映えて、大きやかに馴れたるが、さまざまの相乱れ着、帯しどけなき宿直姿、なまめいたるに、こよなうあまれる髪の毛、白きにはましてもてはやしたる、いとけぎやかなり。

小さきは、童げてよろこび走るに、扇なども落して、うちとけ顔をかしげなり。

いと多うまろばさらむと、ふくつけがれど、えも押し動かさでわぶめり。かたへは、東のつまなどに出でて、心もとなげに笑ふ。

「一年、中宮の御前に雪の山作られたりし、世に古りたることなれど、なほめづらしくもはかなきことをしなしたまへりしかな。何の折々につけても、口惜しう飽かずもあるかな。

いとけどほくもてなしたまひて、くはしき御ありさまを見ならしたてまつりしことはなかりしかど、御交じらひのほどに、うしろやすきものには思したり

ことに、あらまほしく、ものを深く思し知り、世の人の、とあるかかるけぢめも聞き集めたまひて、昔よりもあまた経まさりて思さるれば、今さらの御あだけも、かつは世のもどきをも思しながら、

「むなしからむは、いよいよ人笑へなるべし。いかにせむ」

と、御心動きて、二条院に夜離れ重ねたまふを、女君は、たはぶれにくくのみ思す。忍びたまへど、いかがうちこぼるる折もなからむ。

「あやしく例ならぬ御けしきこそ、心得がたけれ」

とて、御髪をかきやりつつ、いとほしと思したるさまも、絵に描かまほしき御あはひなり。

「宮亡せたまひて後、主上のいとさうぎうしげにのみ世を思したるも、心苦しう見たてまつり、太政大臣もものしたまはで、見譲る人なきことしげさになむ。このほどの絶え間などを、見ならはぬことに思すらむも、ことわりに、あはれなれど、今はさりととも、心のどかに思せ。おとなびたまひためれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまにもものしたまふこそ、らうたけれ」

など、まろがれたる御額髪、ひきつくろひたまへど、いよいよ背きてものも聞こえたまはず。

「いといたく若びたまへるは、誰がならはしきこえたるぞ」

とて、「常なき世に、かくまで心置かるるもあぢきなわぎや」と、かつはうち眺めたまふ。

「齋院にはかなしごと聞こゆるや、もし思しひがむる方ある。それは、いともて離れたることぞよ。おのづから見たまひてむ。昔よりこよなうけどほき御心ばへなるを、さうぎうしき折々、ただならで聞こえ悩ますに、かしこもつれづれにもものしたまふ所なれば、たまさかの応へなどしたまへど、まめまめしきさまにもあらぬを、かくなむあるとしも、愁へきこゆべきことにやは。うしろめたうはあらじとを、思ひ直したまへ」

心地したまへば、

「いとかく、世の例になりぬべきありさま、漏らしたまふなよ。ゆめゆめ。いさら川などもなれなれしや」

とて、せちにうちささめき語らひたまへど、何ごとにかあらむ。人びとも、  
「あな、かたじけな。あながちに情けおくれても、もてなしきこえたまふらむ」

「軽らかにおし立ちてなどは見えたまはぬ御けしきを。心苦しう」と言ふ。

げに、人のほどの、をかしきにも、あはれにも、思し知らぬにはあらねど、  
「もの思ひ知るさまに見えたてまつるとて、おしなべての世の人のめできこゆるむ列にや思ひなされむ。かつは、軽々しき心のほども見知りたまひぬべく、恥づかしげなめる御ありさまを」と思せば、「なつかしからむ情けも、いとあいなし。よその御返りなどは、うち絶えで、おぼつかかなかるまじきほどに聞こえたまひ、人伝ての御応へ、はしたなからで過ぐしてむ。年ごろ、沈みつる罪失ふばかり御行なひを」とは思し立てど、「にはかにかかる御ことをしも、もて離れ顔にあらむも、なかなか今めかしきやうに見え聞こえて、人のとりなさじやは」と、世の人の口さがなさを思し知りにしかば、かつ、さぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ、やうやう御行なひをのみしたまふ。

御兄弟の君達あまたものしたまへど、ひとつ御腹ならねば、いとうとうとしく、宮のうちいとかすかになり行くままに、さばかりめでたき人の、ねむごろに御心を尽くしきこえたまへば、皆人、心を寄せきこゆるも、ひとつ心と見ゆ。

大臣は、あながちに思しいらるるにしもあらねど、つれなき御けしきのうれたきに、負けてやみなむも口惜しく、げにはた、人の御ありさま、世のおぼえ

と思し出でられて、をかしくなむ。今宵は、いとまめやかに聞こえたまひて、  
「一言、憎しなども、人伝てならでのたまはせむを、思ひ絶ゆるふしにもせむ」

と、おり立ちて責めきこえたまへど、

「昔、われも人も若やかに、罪許されたりし世にだに、故宮などの心寄せ思したりしを、なほあるまじく恥づかしと思ひきこえてやみにしを、世の末に、さだすぎ、つきなきほどにて、一声もいとまばゆからむ」

と思して、さらに動きなき御心なれば、「あさましよう、つらし」と思ひきこえたまふ。

さすがに、はしたなくさし放ちてなどはあらぬ人伝ての御返りなどぞ、心やましきや。夜もいたう更けゆくに、風のけはひ、はげしくて、まことにいとも心細くおぼゆれば、さまよきほど、おし拭ひたまひて、

「つれなさを昔に懲りぬ心こそ

人のつらきに添へてつらけれ

心づからの」

とのたまひすさぶるを、

「げに」

「かたはらいたし」

と、人びと、例の、聞こゆ。

「あらためて何かは見えむ人のうへに

かかりと聞きし心変はりを

昔に変はることは、ならはず」

など聞こえたまへり。

いふかひなくて、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも、いと若々しき

「その世のことは、みな昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも、心細きに、うれしき御声かな。親なしに臥せる旅人と、育みたまへかし」

とて、寄りゐたまへる御けはひに、いとど昔思ひ出でつつ、古りがたくなまめかしきさまにもてなして、いたうすげみにたる口つき、思ひやらるる声づかひの、さすがに舌つきにて、うちされむとはなほ思へり。

「言ひこしほどに」など聞こえかかる、まばゆきよ。「今しも来たる老いのやうに」など、ほほ笑まれたまふものから、ひきかへ、これもあはれなり。

「この盛りに挑みたまひし女御、更衣、あるはひたすら亡くなりたまひ、あはかひなくて、はかなき世にさすらへたまふもあべかめり。入道の宮などの御齢よ。あさましとのみ思さるる世に、年のほど身の残り少なげさに、心ばへなども、ものはかなく見えし人の、生きとまりて、のどやかに行なひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なり」

と思すに、ものあはれなる御けしきを、心ときめきに思ひて、若やぐ。

「年経れどこの契りこそ忘れね

親の親とか言ひし一言」

と聞こゆれば、疎ましくて、

「身を変へて後も待ち見よこの世にて

親を忘るるためしありやと

頼もしき契りぞや。今のどかにぞ、聞こえさすべき」

とて、立ちたまひぬ。

西面には御格子参りたれど、厭ひきこえ顔ならむもいかがとて、一間、二間は下ろさず。月さし出でて、薄らかに積もれる雪の光りあひて、なかなかいとおもしろき夜のさまなり。

「ありつる老いらくの心げさうも、良からぬものの世のたとひとか聞きし」

るがこととしきを、人入れさせたまひて、宮の御方に御消息あれば、「今日しも渡りたまはじ」と思しけるを、驚きて開けさせたまふ。

御門守、寒げなるけはひ、うすすき出で来て、とみにもえ開けやらず。これより他の男はたなきなるべし。ごほごほと引きて、

「錠のいといたく錆びにければ、開かず」

と愁ふるを、あはれと聞こし召す。

「昨日今日と思すほどに、三年のあなたにもなりにける世かな。かかるを見つつ、かりそめの宿りをえ思ひ捨てず、本草の色にも心を移すよ」と、思し知らるる。口ずさびに、

「いつのまに蓬がもととむすぼほれ

雪降る里と荒れし垣根ぞ」

やや久しう、ひこしらひ開けて、入りたまふ。

宮の御方に、例の、御物語聞こえたまふに、古事どものそこはかとなきうちはじめ、聞こえ尽くしたまへど、御耳もおどろかず、ねぶたきに、宮も欠伸うちしたまひて、

「宵まどひをしはべれば、ものもえ聞こえやらす」

とのたまふほどもなく、軒とか、聞き知らぬ音すれば、よろこびながら立ち出でたまはむとするに、またいと古めかしきしはぶきうちして、参りたる人あり。

「かしこけれど、聞こし召したらむと頼みきこえさするを、世にある者とも数まへさせたまはぬになむ。院の上は、祖母殿と笑はせたまひし」

など、名のり出づるにぞ、思し出づる。

源典侍といひし人は、尼になりて、この宮の御弟子にてなむ行なふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知りたまはざりつるを、あさましうなりぬ。

しはた、聞こえたまふ。

「女五の宮の悩ましくしたまふなるを、訪らひきこえになむ」

とて、ついゐたまへれど、見もやりたまはず、若君をもてあそび、紛らはしおはする側目の、ただならぬを、

「あやしく、御けしきの変はれるべきころかな。罪もなしや。塩焼き衣のあまり目馴れ、見だてなく思さるるにやとて、とだえ置くを、またいかが」  
など聞こえたまへば、

「馴れゆくこそ、げに、憂きこと多かりけれ」

とばかりにて、うち背きて臥したまへるは、見捨てて出でたまふ道、もの憂けれど、宮に御消息聞こえたまひてければ、出でたまひぬ。

「かかりけることもありける世を、うらなくて過ぐしけるよ」

と思ひ続けて、臥したまへり。鈍びたる御衣どもなれど、色合ひ重なり、好ましくなかなか見えて、雪の光にしみじく艶なる御姿を見出だして、

「まことに離れまさりたまはば」

と、忍びあへず思さる。

御前など忍びやかなる限りして、

「内より他の歩きは、もの憂きほどになりにけりや。桃園宮の心細きさまにてもものしたまふも、式部卿宮に年ごろは譲りきこえつるを、今は頼むなど思いのたまふも、ことわりに、いとほしければ」

など、人びとにもものたまひなせど、

「いでや。御好き心の古りがたきぞ、あたら御疵なめる」

「軽々しきことも出で来なむ」

など、つぶやきあへり。

宮には、北面の人しげき方なる御門は、入りたまはむも軽々しければ、西な

ばへを、世の人に変はり、めづらしくもねたくも思ひきこえたまふ。

世の中に漏り聞こえて、

「前齋院を、ねむごろに聞こえたまへばなむ、女五の宮などもよろしく思したなり。似げなからぬ御あはひならむ」

など言ひけるを、対の上は伝へ聞きたまひて、しばしは、

「さりとも、さやうならむこともあらば、隔てては思したらじ」

と思しけれど、うちつけに目とどめきこえたまふに、御けしきなども、例ならずあくがれたるも心憂く、

「まめまめしく思しなるらむことを、つれなく戯れに言ひなしたまひけむよと、同じ筋にはものしたまへど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなば、はしたなくもあべいかな。年ごろの御もてなしなどは、立ち並ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれむこと」

など、人知れず思し嘆かる。

「かき絶え名残なきさまにはもてなしたまはずとも、いとものはかなきさまにて見馴れたまへる年ごろの睦び、あなづらはしき方にこそはあらめ」

など、さまざまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそ、うち怨じなど憎からず聞こえたまへ、まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず。

端近う眺めがちに、内住みしげくなり、役とは御文を書きたまへば、

「げに、人の言葉むなしかるまじきなめり。けしきをだにかすめたまへかし」と、疎ましくのみ思ひきこえたまふ。

夕つ方、神事なども止まりてさうぎうしきに、つれづれと思しあまりて、五の宮に例の近づき参りたまふ。雪うち散りて艶なるたそかれ時に、なつかしきほどに馴れたる御衣どもを、いよいよたきしめたまひて、心ことに化粧じ暮らしたまへれば、いとど心弱からむ人はいかがと見えたり。さすがに、まかり申

どいかが御覧じけむと、ねたく。されど、

見し折のつゆ忘れぬ朝顔の

花の盛りは過ぎやしぬらむ

年ごろの積もりも、あはれとばかりは、さりとも、思し知るらむやとなむ、  
かつは」

など聞こえたまへり。おとなびたる御文の心ばへに、「おぼつかかなからむも、  
見知らぬやうにや」と思し、人びとも御硯とりまかなひて、聞こゆれば、

「秋果てて霧の籬にむすぼほれ

あるかなきかに移る朝顔

似つかはしき御よそへにつけても、露けく」

とのみあるは、何のをかきふしもなきを、いかなるにか、置きがたく御覧  
ずめり。青鈍の紙の、なよびかなる墨つきはしも、をかしく見ゆめり。人の御  
ほど、書きざまなどに繕はれつつ、その折は罪なきことも、つきづきしくまね  
びなすには、ほほゆがむこともあめればこそ、さかしらに書き紛らはしつつ、  
おぼつかなきことも多かりけり。

立ち返り、今さらに若々しき御文書きなども、似げなきこと、と思せども、  
なほかく昔よりも離れぬ御けしきながら、口惜しくて過ぎぬるを思ひつつ、  
えやむまじくて思さるれば、さらがへりて、まめやかに聞こえたまふ。

東の対に離れおはして、宣旨を迎へつつ語らひたまふ。さぶらふ人びとの、  
さしもあらぬ際のことをだに、なびきやすなるなどは、過ちもしつべく、めで  
きこゆれど、宮は、そのかみだにこよなく思し離れたりしを、今は、まして、  
誰も思ひなかるべき御齡、おぼえにて、「はかなき本草につけたる御返りなどの、  
折過ぎさぬも、軽々しくや、とりなさるらむ」など、人の物言ひを憚りたまひ  
つつ、うちとけたまふべき御けしきもなければ、古りがたく同じさまなる御心

きけさへ添ひたまひにけり。さるは、いといたう過ぐしたまへど、御位のほどには合はざめり。

「なべて世のあはればかりを問ふからに

誓ひしことと神やいさめむ」

とあれば、

「あな、心憂。その世の罪は、みな科戸の風にたぐへてき」

とのたまふ愛敬も、こよなし。

「みそぎを、神は、いかがはべりけむ」

など、はかなきことを聞こゆるも、まめやかには、いとかたはらいたし。世づかぬ御ありさまは、年月に添へても、もの深くのみ引き入りたまひて、え聞こえたまはぬを、見たてまつり惱めり。

「好き好きしきやうになりぬるを」

など、浅はかならずうち嘆きて立ちたまふ。

「齢の積もりには、面なくこそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを、今ぞ、とだに聞こえさすべくやは、もてなしたまひける」

とて、出でたまふ名残、所狭きまで、例の聞こえあへり。

おほかたの、空もをかしきほどに、木の葉の音なひにつけても、過ぎにしものあはれとり返しつつ、その折々、をかしくもあはれにも、深く見えたまひし御心ばへなども、思ひ出できこえさす。

心やましくて立ち出でたまひぬるは、まして、寢覚がちに思し続けらる。とく御格子参らせたまひて、朝霧を眺めたまふ。枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれにはひまつはれて、あるかなきかに咲きて、匂ひもことに変はれるを、折らせたまひてたてまつれたまふ。

「けぎやかなりし御もてなしに、人悪ろき心地しはべりて、うしろでもいと

と、恨めしげにけしきばみきこえたまふ。

あなたの御前を見やりたまへば、枯れ枯れなる前裁の心ばへもことに見渡されて、のどやかに眺めたまふらむ御ありさま、容貌も、いとゆかしくあはれて、え念じたまはで、

「かくさぶらひたるついでを過ぐしはべらむは、心ざしなきやうなるを、あなたの御訪らひ聞こゆべかりけり」

とて、やがて簀子より渡りたまふ。

暗うなりたるほどなれど、鈍色の御簾に、黒き御几帳の透影あはれに、追風なまめかしく吹き通し、けはひあらまほし。簀子はかたはらいたければ、南の廂に入れたてまつる。

宣旨、対面して、御消息は聞こゆ。

「今さらに、若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月の労数へらはべるに、今は内外も許させたまひてむとぞ頼みはべりける」

とて、飽かず思したり。

「ありし世は皆夢に見なして、今なむ、覚めてはかなきにやと、思ひたまへ定めがたくはべるに、労などは、静かにやと定めきこえさすべうはべらむ」

と、聞こえ出だしたまへり。「げにこそ定めがたき世なれ」と、はかなきことにつけても思し続けらる。

「人知れず神の許しを待ちし間に

ここらつれなき世を過ぐすかな

今は、何のいさめにか、かこたせたまはむとすらむ。なべて、世にわづらはしきことさへはべりしのち、さまざまに思ひたまへ集めしかな。いかで片端をだに」

と、あながちに聞こえたまふ、御用意なども、昔よりも今すこしなまめかし

「いともいともあさましく、いづ方につけても定めなき世を、同じさまにて見たまへ過ぐす命長きの恨めしきこと多くはべれど、かくて、世に立ち返りたまへる御よろこびになむ、ありし年ごろを見たてまつりさしてましかば、口惜しからましとおぼえはべり」

と、うちわななきたまひて、

「いときよらにねびまさりたまひにけるかな。童にもものしたまへりしを見てまつりそめし時、世にかかる光の出でおはしたることと驚かれはべりしを、時々見たてまつるごとに、ゆゆしくおぼえはべりてなむ。内の上なむ、いとよく似たてまつらせたまへりと、人びと聞こゆるを、さりとも、劣りたまへらむとこそ、推し量りはべれ」

と、長々と聞こえたまへば、

「ことにかくさし向かひて人のほめぬわざかな」と、をかしく思す。

「山賤になりて、いたう思ひくづほれはべりし年ごろののち、こよなく衰へてはべるものを。内の御容貌は、いにしへの世にも並ぶ人なくやとこそ、ありがたく見たてまつりはべれ。あやしき御推し量りになむ」

と聞こえたまふ。

「時々見たてまつらば、いとどしき命や延びはべらむ。今日は老いも忘れ、憂き世の嘆きみな去りぬる心地なむ」

とても、また泣いたまふ。

「三の宮うらやましく、さるべき御ゆかり添ひて、親しく見たてまつりたまふを、うらやみはべる。この亡せたまひぬるも、さやうにこそ悔いたまふ折々ありしか」

とのたまふにぞ、すこし耳とまりたまふ。

「さも、さぶらひ馴れなましかば、今に思ふさまにはべらまし。皆さし放たせたまひて」

齋院は、御服にて下りゐたまひにきかし。大臣、例の、思しそめつること、絶えぬ御癖にて、御訪らひなどいとしげう聞こえたまふ。宮、わづらはしかりしことを思せば、御返りもうちとけて聞こえたまはず。いと口惜しと思しわたる。

長月になりて、桃園宮に渡りたまひぬるを聞きて、女五の宮のそこにおはすれば、そなたの御訪らひにことづけて参うでたまふ。故院の、この御子たちをば、心ことにやむごとなく思ひきこえたまへりしかば、今も親しく次々に聞こえ交はしたまふめり。同じ寝殿の西東にぞ住みたまひける。ほどもなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり。

宮、対面したまひて、御物語聞こえたまふ。いと古めきたる御けはひ、しはぶきがちにおはす。年長におはすれど、故大殿の宮は、あらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつつかに、こちごちしくおぼえたまへるも、さるかたなり。

「院の上、隠れたまひてのち、よろづ心細くおぼえはべりつるに、年の積もるままに、いと涙がちにて過ぐしはべるを、この宮さへかくうち捨てたまへれば、いよいよあるかなきかに、とまりはべるを、かく立ち寄り訪はせたまふになむ、もの忘れしぬべくはべる」

と聞こえたまふ。

「かしこくも古りたまへるかな」と思へど、うちかしこまりて、

「院隠れたまひてのちは、さまざまにつけて、同じ世のやうにもはべらず、おぼえぬ罪に当たりはべりて、知らぬ世に惑ひはべりしを、たまたま、朝廷に数まへられたてまつりては、またとり乱り暇なくなとして、年ごろも、参りていにしへの御物語をだに聞こえうけたまはらぬを、いぶせく思ひたまへわたりつつなむ」

など聞こえたまふを、

朝 顏

朝

顏

と聞こゆれば、

「浅からぬしたの思ひを知らねばや

なほ篝火の影は騒げる

誰れ憂きもの」

と、お返し恨みたまへる。

おほかたもの静かに思さるるころなれば、尊きことどもに御心とまりて、例よりは日ごろ経たまふにや、すこし思ひ紛れけむ、とぞ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

御心ひとつにもものむつかしうて、悩ましげにさへしたまふを、いとすぐよかに  
つれなくて、常よりも親がりありきたまふ。

女君に、

「女御の、秋に心を寄せたまへりしもあはれに、君の、春の曙に心しめたま  
へるもことわりにこそあれ。時々につけたる木草の花によせても、御心とまる  
ばかりの遊びなどしてしがなと、公私のいとなみしげき身こそふさはしからね、  
いかで思ふこととしてしがなと、ただ、御ためさうぎうしくやと思ふこそ、心苦  
しけれ」

など語らひきこえたまふ。

「山里の人も、いかに」など、絶えず思しやれど、所狭さのみまさる御身に  
て、渡りたまふこと、いとかたし。

「世の中をあぢきなく憂しと思ひ知るけしき、などかさしも思ふべき。心や  
すぐ立ち出でて、おほぞうの住まひはせじと思へる」を、「おほけなし」とは思  
すものから、いとほしくて、例の、不断の御念仏にことつけて渡りたまへり。

住み馴るるままに、いと心すぐげなる所のさまに、いと深からざらむことに  
てだに、あはれ添ひぬべし。まして、見たてまつるにつけても、つらかりける  
御契りの、さすがに、浅からぬを思ふに、なかなかにて慰めがたきけしきなれ  
ば、こしらへかねたまふ。

いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし。

「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」

とのたまふに、

「漁りせし影忘れぬ篝火は

身の浮舟や慕ひ来にけむ

思ひこそ、まがへられはべれ」

と聞こえたまふに、「いづこの御応へかはあらむ。心得ず」と思したる御けしきなり。このついでに、え籠めたまはで、恨みきこえたまふことどもあるべし。今すこし、ひがこともしたまひつべけれども、いとうたてと思いたるも、こわりに、わが御心も、「若々しうけしからず」と思し返して、うち嘆きたまへるさまの、もの深うなまめかしきも、心づきなうぞ思しなりぬる。やをらづつひき入りたまひぬるけしきなれば、

「あさましようも、疎ませたまひぬるかな。まことに心深き人は、かくこそあらざなれ。よし、今よりは、憎ませたまふなよ。つらからむ」とて、渡りたまひぬ。

うちしめりたる御匂ひのとまりたるさへ、疎ましく思さる。人びと、御格子など参りて、

「この御茵の移り香、言ひ知らぬものかな」

「いかでかく取り集め、柳の枝に咲かせたる御ありさまならむ」

「ゆゆしう」

と聞こえあへり。

対に渡りたまひて、とみにも入りたまはず、いたう眺めて、端近う臥したまへり。燈籠遠くかけて、近く人びとさぶらはせたまひて、物語などせさせたまふ。

「かうあながちなることに胸ふたがる癖の、なほありけるよ」

と、わが身ながら思し知らる。

「これはいと似げなきことなり。恐ろしう罪深き方は多うまさりけめど、いにしへの好きは、思ひやりすくなきほどの過ちに、仏神も許したまひけむ」と、思しきまますも、「なほ、この道は、うしろやすく深き方のまさりけるかな」と、思し知られたまふ。

女御は、秋のあはれを知り顔に応へ聞こえてけるも、「悔しう恥づかし」と、

はべる、生ひ先いと待ち遠なりや。かたじけなくとも、なほ、この門広げさせたまひて、はべらずなりなむ後にも、数まへさせたまへ」  
など聞こえたまふ。

御応へは、いとおほどかなるさまに、からうして一言ばかりかすめたまへるけはひ、いとなつかしげなるに聞きつきて、しめじめと暮るるまでおはす。

「はかばかしき方の望みはさるものにて、年のうち行き交はる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心の行くこともしはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人争ひはべりける、そのころの、げにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらぎなれ。

唐土には、春の花の錦に如くものなしと言ひはべめり。大和言の葉には、秋のあはれを取り立てて思へる。いづれも時々につけて見たまふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。

狭き垣根のうちなりとも、その折の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたり、秋の草をも堀り移して、いたづらなる野辺の虫をも棲ませて、人に御覽ぜさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」

と聞こえたまふに、いと聞こえにくきことと思せど、むげに絶えて御応へ聞こえたまはざらむうたてあれば、

「まして、いかが思ひ分きはべらむ。げに、いつとなきなかに、あやしと聞きし夕べこそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも、思ひたまへられぬべけれ」

と、しどけなげにのたまひ消つも、いとらうたげなるに、え忍びたまはで、  
「君もさはあはれを交はせ人知れず

わが身にしむる秋の夕風

忍びがたき折々もはべりかし」

ち身じろきたまふほども、あさましくやはらかななまめきておはすべかめる。「見たてまつらぬこそ、口惜しけれ」と、胸のうちつぶるるぞ、うたてあるや。

「過ぎにし方、ことに思ひ悩むべきこともなくてはべりぬべかりし世の中にも、なほ心から、好き好きしきことにつけて、もの思ひの絶えずもはべりけるかな。さるまじきことどもの、心苦しきが、あまたはべりし中に、つひに心も解けず、むすぼほれて止みぬること、二つなむはべる。

一つは、この過ぎたまひにし御ことよ。あさましうのみ思ひつめて止みたまひにしが、長き世の愁はしきふしと思ひたまへられしを、かうまでも仕うまつり、御覽ぜらるるをなむ、慰めに思うたまへなせど、燃えし煙の、むすぼほれたまひけむは、なほいぶせうこそ思ひたまへらるれ」

とて、今一つはのたまひさしつ。

「中ごろ、身のなきに沈みはべりしほど、方々に思ひたまへしことは、片端づつかなひにたり。東の院にもものする人の、そこはかとなくて、心苦しうおぼえわたりはべりしも、おだしう思ひなりにてはべり。心ばへの憎からぬなど、我も人も見たまへあきらめて、いとこそさはやかなれ。

かく立ち返り、朝廷の御後見仕うまつるよろこびなどは、さしも心に深く染まず、かやうなる好きがましき方は、静めがたうのみはべるを、おぼろげに思ひ忍びたる御後見とは、思し知らせたまふらむや。あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」

とのたまへば、むつかしうて、御応へもなければ、

「さりや。あな心憂」

とて、異事に言ひ紛らはしたまひつ。

「今は、いかでのどやかに、生ける世の限り、思ふこと残さず、後の世の勤めも心にまかせて、籠もりるなむと思ひはべるを、この世の思ひ出にしつべきふしのはべらぬこそ、さすがに口惜しうはべりぬべけれ。かならず、幼き人の

とやありし」

と案内したまへど、

「さらに。かけても聞こし召さむことを、いみじきことに思し召して、かつは、罪得ることにやと、主上の御ためを、なほ思し召し嘆きたりし」

と聞こゆるにも、ひとかたならず心深くおはせし御ありさまなど、尽きせず恋ひきこえたまふ。

齋宮の女御は、思しもしるき御後見にて、やむごとなき御おぼえなり。御用意、ありさまなども、思ふさまにあらまほしう見えたまへれば、かたじけなきものにもてかしづききこえたまへり。

秋のころ、二条院にまかだたまへり。寝殿の御しつらひ、いとど輝くばかりしたまひて、今はむげの親さまにもてなして、扱ひきこえたまふ。

秋の雨いと静かに降りて、御前の前裁の色々乱れたる露のしげさに、いにしへのことどもかき続け思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。こまやかなる鈍色の御直衣姿にて、世の中の騒がしきなどことつけたまひて、やがて御精進なれば、数珠ひき隠して、さまよくもてなしたまへる、尽きせすなまめかしき御ありさまにて、御簾の内に入りたまひぬ。

御几帳ばかりを隔てて、みづから聞こえたまふ。

「前裁どもこそ残りなく紐解きはべりにけれ。いとものすさまじき年なるを、心やりて時知り顔なるも、あはれにこそ」

とて、柱に寄りゐたまへる夕ばえ、いとめでたし。昔の御ことども、かの野の宮に立ちわづらひし曙などを、聞こえ出でたまふ。いとものあはれと思したり。

宮も、「かくれば」とにや、すこし泣きたまふけはひ、いとらうたげにて、う

など、よろづにぞ思しける。

秋の司召に、太政大臣になりたまふべきこと、うちうちに定め申したまふついでになむ、帝、思し寄する筋のこと、漏らしきこえたまひけるを、大臣、いとまばゆく、恐ろしう思して、さらにあるまじきよしを申し返したまふ。

「故院の御心ざし、あまたの皇子たちの御中に、とりわきて思し召しながら、位を譲らせたまはむことを思し召し寄らずなりにけり。何か、その御心改めて、及ばぬ際には昇りはべらむ。ただ、もとの御おきてのままに、朝廷に仕うまつりて、今すこしの齢かさなりはべりなば、のどかなる行なひに籠もりはべりなむと思ひたまふる」

と、常の御言の葉に変はらず奏したまへば、いと口惜しうなむ思しける。

太政大臣になりたまふべき定めあれど、しばし、と思すところありて、ただ御位添ひて、牛車聴されて参りまかでしたまふを、帝、飽かず、かたじけなきものに思ひきこえたまひて、なほ親王になりたまふべきよしを思しのたまはずれど、

「世の中の御後見したまふべき人なし。権中納言、大納言になりて、右大将かけたまへるを、今一際あがりなむに、何ごとも譲りてむ。さて後に、ともかくも、静かなるさまに」

とぞ思しける。なほ思しめぐらすに、

「故宮の御ためにもいとほしう、また主上のかく思し召し悩めるを見たてまつりたまふもかたじけなきに、誰れかかかすることを漏らし奏しけむ」

と、あやしう思さる。

命婦は、御匣殿の替はりたる所に移りて、曹司たまはりて参りたり。大臣、対面したまひて、

「このことを、もし、ものついでに、露ばかりにても漏らし奏したまふこ

が国にもさなむはべる。まして、ことわりの齡どもの、時至りぬるを、思し嘆くべきことにもはべらず」

など、すべて多くのことどもを聞こえたまふ。片端まねぶも、いとかたはらいたしや。

常よりも黒き御装ひに、やつしたまへる御容貌、違ふところなし。主上も、年ごろ御鏡にも、思しよることなれど、聞こし召ししことの後は、またこまかに見たてまつりたまひつつ、ことにいとあはれに思し召さるれば、「いかで、このことをかすめ聞こえばや」と思せど、さすがに、はしたなくも思しぬべきことなれば、若き御心地につつましくて、ふともえうち出できこえたまはぬほどは、ただおほかたのことどもを、常よりことになつかしう聞こえさせたまふ。

うちかしまりたまへるさまにて、いと御けしきことなるを、かしこき人の御目には、あやしと見たてまつりたまへど、いとかく、さださだと聞こし召したらむとは思さざりけり。

主上は、王命婦に詳しきことは、問はまほしう思し召せど、

「今さらに、しか忍びたまひけむこと知りけりと、かの人にも思はれじ。

ただ、大臣にいかでほのめかし問ひきこえて、先々のかかる事の例はありけりやと問ひ聞かむ」

とぞ思せど、さらについてでもなければ、いよいよ御学問をせさせたまひつつ、さまざまの書どもを御覧するに、

「唐土には、現はれても忍びても、乱りがはしき事いと多かりけり。日本には、さらに御覧じ得るところなし。たとひあらむにても、かやうに忍びたらむことをば、いかでか伝へ知るやうのあらむとする。一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、さらに親王にもなり、位にも即きたまひつるも、あまたの例ありけり。人柄のかしこきにごとよせて、さもや譲りきこえまし」

なれ。何の罪とも知らし召さぬが恐ろしきにより、思ひたまへ消ちてしことを、さらに心より出しはべりぬること」

と、泣く泣く聞こゆるほどに、明け果てぬれば、まかでぬ。

主上は、夢のやうにいみじきことを聞かせたまひて、いろいろに思し乱れさせたまふ。

「故院の御ためもうしろめたく、大臣のかくただ人にて世に仕へたまふも、あはれにかたじけなかりける事」

かたがた思し悩みて、日たくるまで出でさせたまはねば、「かくなむ」と聞きたまひて、大臣も驚きて参りたまへるを、御覧するにつけても、いとど忍びがたく思し召されて、御涙のこぼれさせたまひぬるを、

「おほかた故宮の御事を、干る世なく思し召したるころなればなめり」と見たてまつりたまふ。

その日、式部卿の親王亡せたまひぬるよし奏するに、いよいよ世の中の騒がしきことを嘆き思したり。かかるころなれば、大臣は里にもえまかでたまはで、つとさぶらひたまふ。

しめやかなる御物語のついでに、

「世は尽きぬるにやあらむ。もの心細く例ならぬ心地なむするを、天の下もかくのどかならぬに、よろづあわたたしくなむ。故宮の思さむところによりてこそ、世間のことも思ひ憚りつれ、今は心やすきさまにても過ぐさまほしくなむ」

と語らひきこえたまふ。

「いとあるまじき御ことなり。世の静かならぬことは、かならず政事の直く、ゆがめるにもよりはべらず。さかしき世にしもなむ、よからぬことどももはべりける。聖の帝の世にも、横様の乱れ出で来ること、唐土にもはべりける。わ

べらむ。

これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院、後の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御ため、すべて、かへりてよからぬ事にや漏り出ではべらむ。かかる老法師の身には、たとひ愁へはべりとも、何の悔かはべらむ。仏天の告げあるによりて奏しはべるなり。

わが君は生まれおはしましたりし時より、故宮の深く思し嘆くことありて、御祈り仕うまつらせたまふゆゑなむはべりし。詳しくは法師の心にえ悟りはべらず。事の違ひめありて、大臣横様の罪に当たりたまひし時、いよいよ懼ぢ思し召して、重ねて御祈りども承はりはべりしを、大臣も聞こし召してなむ、またさらに言加へ仰せられて、御位に即きおはしましまで仕うまつることどもはべりし。

その承りしさま」

とて、詳しく奏するを聞こし召すに、あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さまざまに御心乱れたり。

とばかり、御応へもなければ、僧都、「進み奏しつるを便なく思し召すにや」と、わづらはしく思ひて、やをらかしこまりてまかづるを、召し止めて、

「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけることを、今まで忍び籠められたりけるをなむ、かへりてはうしろめたき心なりと思ひぬる。またこの事を知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ」

とのたまはず。

「さらに、なにがしと王命婦とより他の人、この事のけしき見たるはべらず。さるによりなむ、いと恐ろしうはべる。天変しきりにさとし、世の中静かならぬは、このけなり。いときなく、ものの心知ろし召すまじかりつるほどこそはべりつれ、やうやう御齡足りおはしまして、何事もわきまへさせたまふべき時に至りて、咎をも示すなり。よろづのこと、親の御世より始まるにこそはべる

の宮の御母後の御世より伝はりて、次々の御祈りの師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやむごとなく親しきものに思したりしを、朝廷にも重き御おぼえにて、いかめしき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、今は終りの行なひをせむとて籠もりたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて、常にさぶらはせたまふ。

このごろは、なほもとのごとく参りさぶらはるべきよし、大臣も勧めのたまへば、

「今は、夜居など、いと堪へがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」

とて、さぶらふに、静かなる暁に、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬるほどに、古代にうちしはぶきつつ、世の中のことも奏したまふついでに、

「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろし召さぬに、罪重くて、天眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ、命終りはべりなば、何の益かははべらむ。仏も心ぎたなしとや思し召さむ」

とばかり奏しきして、えうち出でぬことあり。

主上、「何事ならむ。この世に恨み残るべく思ふことやあらむ。法師は、聖といへども、あるまじき横様の嫉み深く、うたてあるものを」と思して、

「いはけなかりし時より、隔て思ふことなきを、そこには、かく忍び残されたることありけるをなむ、つらく思ひぬる」

とのたまはすれば、

「あなかしこ。さらに、仏の諫め守りたまふ真言の深き道をだに、隠しとどむることなく広め仕うまつりはべり。まして、心に隈あること、何ごとにかは

よろづに心乱れはべりて、世にはべらむことも、残りなき心地なむしはべる」  
など聞こえたまふほどに、燈火などの消え入るやうにて果てたまひぬれば、  
いふかひなく悲しきことを思し嘆く。

かしこき御身のほどと聞こゆるなかにも、御心ばへなどの、世のためしにも  
あまねくあはれにおはしまして、豪家にことよせて、人の愁へとあることなど  
もおのづからうち混じるを、いささかもさやうなる事の乱れなく、人の仕うま  
つることをも、世の苦しみとあるべきことをば、止めたまふ。

功德の方とても、勧むるによりたまひて、いかめしうめづらしうしたまふ人  
なども、昔のさかしき世に皆ありけるを、これは、さやうなることなく、ただ  
もとよりの宝物、得たまふべき年官、年爵、御封の物のさるべき限りして、ま  
ことに心深きことどもの限りをし置かせたまへれば、何とわくまじき山伏など  
まで惜しみきこゆ。

をさめたてまつるにも、世の中響きて、悲しと思はぬ人なし。殿上人など、  
なべてひとつ色に黒みわたりて、ものの栄なき春の暮なり。二条院の御前の桜  
を御覧じても、花の宴の折など思し出づ。「今年ばかりは」と、一人ごちたまひ  
て、人の見とがめつべければ、御念誦堂に籠もりゐたまひて、日一日泣き暮ら  
したまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれる  
が、鈍色なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど、いともものあはれに思さ  
る。

「入り日さす峰にたなびく薄雲は

もの思ふ袖に色やまがへる」

人聞かぬ所なれば、かひなし。

御わぎなども過ぎて、事ども静まりて、帝、もの心細く思したり。この入道

も人にまさりける身」と思し知らる。主上の、夢のうちにも、かかる事の心を知らせたまはぬを、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて、これのみぞ、うしろめたくむすぼはれたることに、思し置かるべき心地したまひける。

大臣は、朝廷方ざまにても、かくやむごとなき人の限り、うち続き亡せたまひなむことを思し嘆く。人知れぬあはれ、はた、限りなくて、御祈りなど思し寄らぬことなし。年ごろ思し絶えたりつる筋さへ、今一度、聞こえずなりぬるが、いみじく思さるれば、近き御几帳のもとに寄りて、御ありさまなども、さるべき人びとに問ひ聞きたまへば、親しき限りさぶらひて、こまかに聞こゆ。

「月ごろ悩ませたまへる御心地に、御行なひを時の間もたゆませたまはずせさせたまふ積もりの、いとどいたうくづほれさせたまふに、このころとなりては、柑子などをだに、触れさせたまはずなりにたれば、頼みどころなくならせたまひにたること」

と、泣き嘆く人びと多かり。

「院の御遺言にかなひて、内裏の御後見仕うまつりたまふこと、年ごろ思ひ知りはべること多かれど、何につけてかは、その心寄せことなるさまをも、漏らしきこえむとのみ、のどかに思ひはべりけるを、今なむあはれに口惜しく」と、ほのかにのたまはするも、ほのぼの聞こゆるに、御応へも聞こえやりたまはず、泣きたまふさま、いといみじ。「などかうしも心弱きさまに」と、人目を思し返せど、いにしへよりの御ありさまを、おほかたの世につけても、あたらしく惜しき人の御さまを、心になふわぎならねば、かけとどめきこえむ方なく、いふかひなく思さるること限りなし。

「はかばかしからぬ身ながらも、昔より、御後見仕うまつるべきことを、心のいたる限り、おろかならず思ひたまふるに、太政大臣の隠れたまひぬるをだに、世の中、心あわたたしく思ひたまへらるるに、また、かくおはしませば、

やしく世になべてならぬことども混じりたり。内の大臣のみなむ、御心のうちに、わづらはしく思し知らるることありける。

入道後の宮、春のはじめより悩みわたらせたまひて、三月にはいと重くならせたまひぬれば、行幸などあり。院に別れたてまつらせたまひしほどは、いといはけなくて、もの深くも思されざりしを、いみじう思し嘆きたる御けしきなれば、宮もいと悲しく思し召さる。

「今年は、かならず逃るまじき年と思ひたまへつれど、おどろおどろしき心地にもはべらざりつれば、命の限り知り顔にはべらむも、人やうたて、ことごとしう思はむと憚りてなむ、功德のことなども、わざと例よりも取り分きてしもはべらずなりにける。

参りて、心のどかに昔の御物語もなど思ひたまへながら、うつしぎまなる折少くはべりて、口惜しく、いぶせて過ぎはべりぬること」

と、いと弱げに聞こえたまふ。

三十七にぞおはしましける。されど、いと若く盛りにおはしますさまを、惜しく悲しと見たてまつらせたまふ。

「慎ませたまふべき御年なるに、晴れ晴れしからで、月ごろ過ぎさせたまふことをだに、嘆きわたりはべりつるに、御慎みなどをも、常よりことにせさせたまはざりけること」

と、いみじう思し召したり。ただこのころぞ、おどろきて、よろづのことせさせたまふ。月ごろは、常の御悩みとのみうちたゆみたりつるを、源氏の大臣も深く思し入りたり。限りあれば、ほどなく帰らせたまふも、悲しきこと多かり。

宮、いと苦しうて、はかばかしうものも聞こえさせたまはず。御心のうちに思し続けるに、「高き宿世、世の栄えも並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふこと

おぼろげにやむごとなき所にてだに、かばかりもうちとけたまふことなく、  
気高き御もてなしを聞き置きたれば、

「近きほどに交じらひては、なかなかいと目馴れて、人あなづられなること  
どももぞあらまし。たまさかにて、かやうにふりはへたまへるこそ、たけき心  
地すれ」

と思ふべし。

明石にも、さこそ言ひしか、この御心おきて、ありさまをゆかしがりて、お  
ぼつかなからず、人は通はしつつ、胸つぶるることもあり、また、おもだたし  
く、うれしと思ふことも多くなむありける。

そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。世の重しとおはしつる人なれば、朝廷に  
も思し嘆く。しばし、籠もりたまひしほどをだに、天の下の騒ぎなりしかば、  
まして、悲しと思ふ人多かり。源氏の大臣も、いと口惜しく、よろづこと、お  
し譲りきこえてこそ、暇もありつるを、心細く、事しげくも思されて、嘆きお  
はす。

帝は、御年よりはこよなう大人大人しうねびさせたまひて、世の政事も、う  
しろめたく思ひきこえたまふべきにはあらねども、またとりたてて御後見した  
まふべき人もなきを、「誰れに譲りてかは、静かなる御本意もかなはむ」と思す  
に、いと飽かず口惜し。

後の御わぎなどにも、御子ども孫に過ぎてなむ、こまやかに弔らひ、扱ひた  
まひける。

その年、おほかた世の中騒がしくて、朝廷ぎまに、もののさとししげく、の  
どかならで、

「天つ空にも、例に違へる月日星の光見え、雲のたたずまひあり」

とのみ、世の人おどろくこと多くて、道々の勘文どもたてまつれるにも、あ

と、うちまもりつつ、ふところに入れて、うつくしげなる御乳をくくめたまひつつ、戯れぬたまへる御さま、見どころ多かり。御前なる人びとは、

「などか、同じくは」

「いでや」

など、語らひあへり。

かしこには、いとのだやかに、心ばせあるけはひに住みなして、家のありさまも、やう離れめづらしきに、みづからのけはひなどは、見るたびごとに、やむごとなき人びとなどに劣るけぢめこよなからず、容貌、用意あらまほしうねびまさりゆく。

「ただ、世の常のおぼえにかき紛れたらば、さるたぐひなくやはと思ふべきを、世に似ぬひがものなる親の聞こえなどこそ、苦しけれ。人のほどなどは、さてもあるべきを」など思す。

はつかに、飽かぬほどにのみあればにや、心のどかならず立ち降りたまふも苦しくて、「夢のわたりの浮橋か」とのみ、うち嘆かれて、箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて、小夜更けたりし音も、例の思し出でらるれば、琵琶をわりなく責めたまへば、すこし掻き合はせたる、「いかで、かうのみひき具しけむ」と思さる。若君の御ことなど、こまやかに語りたまひつつおはす。

ここは、かかる所なれど、かやうに立ち泊りたまふ折々あれば、はかなき果物、強飯ばかりはきこしめす時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつつ、いとまほには乱れたまはねど、また、いとけぎやかにはしたなく、おしなべてのさまにはもてなしたまはぬなどこそは、いとおぼえことには見ゆめれ。

女も、かかる御心のほどを見知りきこえて、過ぎたりと思すばかりのことはし出でず、また、いたく卑下せずなどして、御心おきてにもて違ふことなく、いとめやすくぞありける。

ど、夜たち泊りなどやうに、わざとは見えたまはず。

ただ御心ぎまのおいらかにこめきて、「かばかりの宿世なりける身にこそあらめ」と思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどかにものしたまへば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御ありさまに劣るけぢめこよなからずもてなしたまひて、あなづりきこゆべうはあらねば、同じごと、人参り仕うまつりて、別当どもも事おこたらず、なかなか乱れたるところなく、目やすき御ありさまなり。

山里のつれづれをも絶えず思しやれば、公私もの騒がしきほど過ぐして、渡りたまふとて、常よりことにうち化粧じたまひて、桜の御直衣に、えならぬ御衣ひき重ねて、たきしめ、装束きたまひて、まかり申したまふさま、隈なき夕日に、いとどしくきよらに見えたまふ。女君、ただならず見たてまつり送りたまふ。

姫君は、いはけなく御指貫の裾にかかりて、慕ひきこえたまふほどに、外にも出でたまひぬべければ、立ちとまりて、いとあはれと思したり。こしらへおきて、「明日帰り来む」と、口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

「舟とむる遠方人のなくはこそ

明日帰り来む夫と待ち見め」

いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

「行きて見て明日もさね来むなかなか

遠方人は心置くとも」

何事とも聞き分かでされありきたまふ人を、上はうつくしと見たまへば、遠方人のめざましきも、こよなく思しゆるされにたり。

「いかに思ひおこすらむ。われにて、いみじう恋しかりぬべきさまを」

乳ある、添へて参りたまふ。

御袴着は、何ばかりわざと思しいそぐことはなけれど、けしきことなり。御しつらひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。参りたまへる客人ども、ただ明け暮れのけぢめしなれば、あながちに目も立たざりき。ただ、姫君の襷引き結ひたまへる胸つきぞ、うつくしげき添ひて見えたまひつる。

大堰には、尽きせず恋しきにも、身のおこたりを嘆き添へたり。さこそ言ひしか、尼君もいとど涙もろなれど、かくもてかしづかれたまふを聞くはうれしかりけり。何ごとをか、なかなか訪らひきこえたまはむ、ただ御方の人びとに、乳母よりはじめて、世になき色あひを思ひいそぎてぞ、贈りきこえたまひける。

「待ち遠ならむも、いとどさればよ」と思はむに、いとほしければ、年の内に忍びて渡りたまへり。

いとどさびしき住まひに、明け暮れのかしづきぐさをさへ離れきこえて、思ふらむことの心苦しければ、御文なども絶え間なく遣はす。

女君も、今はことに怨じきこえたまはず、うつくしき人に罪ゆるしきこえたまへり。

年も返りぬ。うららかなる空に、思ふことなき御ありさまは、いとどめでたく、磨き改めたる御よそひに、参り集ひたまふめる人の、おとなしきほどの、七日、御よろこびなどしたまふ、ひき連れたまへり。

若やかなるは、何ともなく心地よげに見えたまふ。次々の人も、心のうちには思ふこともやあらむ、うはべは誇りかに見ゆる、ころほひなりかし。

東の院の対の御方も、ありさまは好ましよう、あらまほしきさまに、さぶらふ人びと、童女の姿など、うちとけず、心づかひしつ過ぐしたまふに、近きしるしはこよなくて、のどかなる御暇の隙などには、ふとはひ渡りなどしたまへ

「さりや。あな苦し」と思して、

「生ひそめし根も深ければ武隈の

松に小松の千代をならべむ

のどかにを」

と、慰めたまふ。さることとは思ひ静むれど、えなむ堪へざりける。乳母の少将とて、あてやかなる人ばかり、御佩刀、天児やうの物取りて乗る。人だまひによろしき若人、童女など乗せて、御送りに参らす。

道すがら、とまりつる人の心苦しさを、「いかに。罪や得らむ」と思す。

暗うおはし着きて、御車寄するより、はなやかにけはひことなるを、田舎びたる心地どもは、「はしたなくてや交じらはむ」と思ひつれど、西表をことにしつらはせたまひて、小さき御調度ども、うつくしげに調へさせたまへり。乳母の局には、西の渡殿の、北に当れるをせさせたまへり。

若君は、道にて寝たまひにけり。抱き下ろされて、泣きなどはしたまはず。こなたにて御くだもの参りなどしたまへど、やうやう見めぐらして、母君の見えぬをもとめて、らうたげにうちひそみたまへば、乳母召し出でて、慰め紛らはしきこえたまふ。

「山里のつれづれ、ましていかに」と思しやるはいとほしけれど、明け暮れ思すさまにかしづきつつ、見たまふは、ものあひたる心地したまふらむ。

「いかにぞや、人の思ふべき瑕なきことは、このわたりに出でおはせで」と、口惜しく思さる。

しばしは、人びともとめて泣きなどしたまひしかど、おほかた心やすくをかしき心ざまなれば、上にいとよくつき睦びきこえたまへれば、「いみじううつくしきもの得たり」と思しけり。こと事なく抱き扱ひ、もてあそびきこえたまひて、乳母も、おのづから近う仕うまつり馴れにけり。また、やむごとなき人の

「雪深み深山の道は晴れずとも  
なほ文かよへ跡絶えずして」

とのたまへば、乳母、うち泣きて、

「雪間なき吉野の山を訪ねても

心のかよふ跡絶えめやは」

と言ひ慰む。

この雪すこし解けて渡りたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならず、おぼゆ。

「わが心にこそあらめ。いなびきこえむをしひてやは、あぢきな」とおぼゆれど、「軽々しきやうなり」と、せめて思ひ返す。

いとうつくしげにて、前にみたまへるを見たまふに、

「おろかには思ひがたかりける人の宿世かな」

と思ほす。この春より生ふす御髪、尼削ぎのほどにて、ゆらゆらとめでたく、つらつき、まみの薫れるほどなど、言へばさらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇、推し量りたまふに、いと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。

「何か。かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」

と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひ、あはれなり。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、「乗りたまへ」と引くも、いみじうおぼえて、

「末遠き二葉の松に引き別れ

いつか木高きかげを見るべき」

えも言ひやらす、いみじう泣けば、

「よろづのこと、かひなき身にたぐへきこえては、げに生ひ先もいとほしかるべくおぼえはべるを、たち交じりても、いかに人笑へにや」

と聞こえたるを、いとどあはれに思す。

日など取らせたまひて、忍びやかに、さるべきことなどのたまひおきてさせたまふ。放ちきこえむことは、なほいとあはれにおぼゆれど、「君の御ためによるべきことをこそは」と念ず。

「乳母をもひき別れなむこと。明け暮れのもの思はしき、つれづれをもうち語らひて、慰めならひつるに、いとどたつきなきことさへ取り添へ、いみじくおぼゆべきこと」と、君も泣く。

乳母も、

「さるべきにや、おぼえぬさまにて、見たてまつりそめて、年ごろの御心ばへの、忘れがたう恋しうおぼえたまふべきを、うち絶えきこゆることはよもはべらじ。つひにはと頼みながら、しばしにても、よそよそに、思ひのほかの交じらひしはべらむが、安からずもはべるべきかな」

など、うち泣きつつ過ぐすほどに、師走にもなりぬ。

雪、霰がちに、心細さまさりて、「あやしくさまさまに、もの思ふべかりける身かな」と、うち嘆きて、常よりもこの君を撫でつくろひつつ見たり。

雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと、残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出で居などもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよよかなるあまた着て、眺めたる様体、頭つき、うしろでなど、「限りなき人と聞こゆとも、かうこそはおはすらめ」と人びとも見る。落つる涙をかき払ひて、

「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」と、らうたげにうち嘆きて、

また、「手を放ちて、うしろめたからむこと。つれづれも慰む方なくては、い  
かが明かし暮らすべからむ。何につけてか、たまさかの御立ち寄りもあらむ」  
など、さまざまに思ひ乱るるに、身の憂きこと、限りなし。

尼君、思ひやり深き人にて、

「あぢきなし。見たてまつらざらむことは、いと胸いたかりぬべけれど、つ  
ひにこの御ためによかるべからむことをこそ思はめ。浅く思してのたまふこと  
にはあらじ。ただうち頼みきこえて、渡したてまつりたまひてよ。母方からこ  
そ、帝の御子も際々におはすめれ。この大臣の君の、世に二つなき御ありさま  
ながら、世に仕へたまふは、故大納言の、今ひときぎみなり劣りたまひて、更  
衣腹と言はれたまひし、けぢめにこそはおはすめれ。まして、ただ人はなずら  
ふべきことにもあらず。また、親王たち、大臣の御腹といへど、なほさし向か  
ひたる劣りの所には、人も思ひ落とし、親の御もてなしも、え等しからぬもの  
なり。まして、これは、やむごとなき御方々にかかる人、出でものしたまはば、  
こよなく消たれたまひなむ。ほどほどにつけて、親にもひとふしもてかしづか  
れぬる人こそ、やがて落としめられぬはじめとはなれ。御袴着のほども、いみ  
じき心を尽くすとも、かかる深山隠れにては、何の栄かあらむ。ただ任せきこ  
えたまひて、もてなしきこえたまはむありさまをも、聞きたまへ」

と教ふ。

さかしき人の心の占どもにも、もの問はせなどするにも、なほ「渡りたまひ  
てはまさるべし」とのみ言へば、思ひ弱りにたり。

殿も、しか思しながら、思はむところのいとほしさに、しひてもえのたまは  
で、

「御袴着のことは、いかやうにか」

とのたまへる御返りに、

冬になりゆくままに、川づらの住まひ、いとど心細さまさりて、うはの空なる心地のみしつ々明かし暮らすを、君も、

「なほ、かくては、え過ぐさじ。かの、近き所に思ひ立ちね」

と、すすめたまへど、「つらき所多く心見果てむも、残りなき心地すべきを、いかに言ひてか」などいふやうに思ひ乱れたり。

「さらば、この若君を。かくてのみは、便なきことなり。思ふ心あれば、かたじけなし。対に聞き置きて、常にゆかしがるを、しばし見ならはさせて、袴着の事なども、人知れぬさまならずしなさむとなむ思ふ」

と、まめやかに語らひたまふ。「さ思すらむ」と思ひわたることなれば、いとど胸つぶれぬ。

「改めてやむごとなき方にもてなされたまふとも、人の漏り聞かむことは、なかなかや、つくろひがたく思されむ」

とて、放ちがたく思ひたる、ことわりにはあれど、

「うしろやすからぬ方にやなどは、な疑ひたまひそ。かしこには、年経ぬれど、かかる人もなきが、さうさうしくおぼゆるままに、前斎宮のおとなびものしたまふをだにこそ、あながちに扱ひきこゆめれば、まして、かく憎みがたげなめるほどを、おろかには見放つまじき心ばへに」

など、女君の御ありさまの思ふやうなることも語りたまふ。

「げに、いにしへは、いかばかりのことに定まりたまふべきにかと、つてにもほの聞こえし御心の、名残なく静まりたまへるは、おぼろけの御宿世にもあらず、人の御ありさまも、ここらの御なかにすぐれたまへるにこそは」と思ひやられて、「数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、さすがに、立ち出でて、人もめざましと思すことやあらむ。わが身は、とてもかくても同じこと。生ひ先遠き人の御うへも、つひには、かの御心にかかるべきにこそあめれ。さりとならば、げにかう何心なきほどにや譲りきこえまし」と思ふ。

薄 雲

薄

雲

まへかし」

と聞こえたまふ。

「思はずにのみとりなしたまふ御心の隔てを、せめて見知らず、うらなくやはとてこそ。いはけなからむ御心には、いとよやかなひぬべくなむ。いかにうつくしきほどに」

とて、すこしうち笑みたまひぬ。稚児をわりなうらうたきものにしたまふ御心なれば、「得て、抱きかしづかばや」と思す。

「いかにせまし。迎へやせまし」と思し乱る。渡りたまふこといとかたし。嵯峨野の御堂の念仏など待ち出でて、月に二度ばかりの御契りなめり。年のわたりには、立ちまさりぬべかめるを、及びなきことと思へども、なほいかかぬの思はしからぬ。

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文

(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

いといたう強ひとどめしに、引かされて。今朝は、いとなやまし」

とて、大殿籠もれり。例の、心とけず見えたまへど、見知らぬやうにて、

「なずらひならぬほどを、思し比ぶるも、悪きわざなめり。我は我と思ひなしたまへ」

と、教へきこえたまふ。

暮れかかるほどに、内へ参りたまふに、ひきそばめて急ぎ書きたまふは、かしこへなめり。側目こまやかに見ゆ。うちささめきて遣はすを、御達など、憎みきこゆ。

その夜は、内にもさぶらひたまふべけれど、解けざりつる御けしきとりに、夜更けぬれど、まかでたまひぬ。ありつる御返り持て参れり。え引き隠したまはで、御覧ず。ことに憎かるべきふしも見えねば、

「これ、破り隠したまへ。むつかしや。かかるものの散らむも、今はつきなきほどになりにつけり」

とて、御脇息に寄りゐたまひて、御心のうちには、いとあはれに恋しう思しやられるれば、燈をうち眺めて、ことにものものたまはず。文は広がりながらあれど、女君、見たまはぬやうなるを、

「せめて、見隠したまふ御目尻こそ、わづらはしけれ」

とて、うち笑みたまへる御愛敬、所狭きまでこぼれぬべし。

さし寄りたまひて、

「まことは、らうたげなるものを見しかば、契り浅くも見えぬを、さりとて、ものめかさむほども憚り多かるに、思ひなむわづらひぬる。同じ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定めたまへ。いかがすべき。ここにて育みたまひてむや。蛭の子が齢にもなりにけるを、罪なきさまなるも思ひ捨てがたうこそ。いはけなげなる下つ方も、紛らはさむなど思ふを、めざましと思さずは、引き結ひた

朝夕霧も晴れぬ山里」

行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし。「中に生ひたる」と、うち誦んじたまふついでに、かの淡路島を思し出でて、躬恒が「所からか」とおぼめきけむことなど、のたまひ出でたるに、ものあはれなる酔ひ泣きどもあるべし。

「めぐり来て手に取るばかりさやけきや

淡路の島のあはと見し月」

頭中将、

「浮雲にしばしまがひし月影の

すみはつる夜ぞのどけかるべき」

左大弁、すこしおとなびて、故院の御時にも、むつまじう仕うまつりなれし人なりけり。

「雲の上のすみかを捨てて夜半の月

いづれの谷にかげ隠しけむ」

心々にあまたあめれど、うるさくてなむ。

気近うち静まりたる御物語、すこしうち乱れて、千年も見聞かまほしき御ありさまなれば、斧の柄も朽ちぬべけれど、今日さへはとて、急ぎ帰りたまふ。

物ども品々にかづけて、霧の絶え間に立ち混じりたるも、前栽の花に見えまがひたる色あひなど、ことにめでたし。近衛府の名高き舎人、物の節どもなどさぶらふに、さうぎうしければ、「其駒」など乱れ遊びて、脱ぎかけたまふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと思ゆ。

ののしりて帰らせたまふ響き、大堰にはもの隔てて聞きて、名残さびしう眺めたまふ。「御消息をだにせで」と、大臣も御心にかかれり。

殿におはして、とばかりうち休みたまふ。山里の御物語など聞こえたまふ。

「暇聞こえしほど過ぎつれば、いと苦しうこそ。この好き者どもの尋ね来て、

応と騒ぎて、鵜飼ども召したるに、海人のさへづり思し出でらる。

野に泊りぬる君達、小鳥しるしばかりひき付けさせたる荻の枝など、苞にして参れり。大御酒あまたたび順流れて、川のわたり危ふげなれば、酔ひに紛れておはしまし暮らしつ。

おのおの絶句など作りわたして、月はなやかにさし出づるほどに、大御遊び始まりて、いと今めかし。

弾きもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども上手の限りして、折に合ひたる調子吹き立つるほど、川風吹き合はせておもしろきに、月高くさし上がり、よろづのこと澄める夜のやや更くるほどに、殿上人、四、五人ばかり連れて参れり。

上にさぶらひけるを、御遊びありけるついでに、

「今日は、六日の御物忌明日にて、かならず参りたまふべきを、いかなれば」

と仰せられければ、ここに、かう泊らせたまひにけるよし聞こし召して、御消息あるなりけり。御使は、蔵人弁なりけり。

「月のすむ川のをちなる里なれば

桂の影はのどけかるらむ

うらやましよう」

とあり。かしこまりきこえさせたまふ。

上の御遊びよりも、なほ所からの、すごさ添へたるものの音をめでて、また酔ひ加はりぬ。ここにはまうけの物もさぶらはざりければ、大堰に、

「わざとならぬまうけの物や」

と、言ひつかはしたり。取りあへたるに従ひて参らせたり。衣櫃二荷にてあるを、御使の弁はとく帰り参れば、女の装束かづけたまふ。

「久方の光に近き名のみして

御指貫の裾まで、なまめかしう愛敬のこぼれ出づるぞ、あながちなる見なしなるべき。

かの、解けたりし蔵人も、還りなりにけり。鞆負尉にて、今年かうぶり得てけり。昔に改め、心地よげにて、御佩刀取りに寄り来たり。人影を見つけて、「来し方のもの忘れしはべらねど、かしこければえこそ。浦風おぼえはべりつる暁の寢覚にも、おどろかしきこえさすべきよすがだになくて」

と、けしきばむを、

「八重立つ山は、さらに島隠れにも劣らざりけるを、松も昔のと、たどられつるに、忘れぬ人もものしたまひけるに、頼もし」

など言ふ。

「こよなしや。我も思ひなきにしもあらざりしを」  
など、あさましうおぼゆれど、

「今、ことさらに」  
と、うちけぎやぎて、参りぬ。

いとよそほしくさし歩みたまふほど、かしかましう追ひ払ひて、御車の尻に、頭中将、兵衛督乗せたまふ。

「いと軽々しき隠れ家、見あらはされぬるこそ、ねたう」  
と、いたうからがりたまふ。

「昨夜の月に、口惜しう御供に後れはべりにけると思ひたまへられしかば、今朝、霧を分けて参りはべりつる。山の錦は、まだしうはべりけり。野辺の色こそ、盛りにはべりけれ。なにがしの朝臣の、小鷹にかかづらひて、立ち後れはべりぬる、いかがなりぬらむ」  
など言ふ。

「今日は、なほ桂殿に」とて、そなたさまにおはしましたぬ。にはかなる御饗

これより出でたまふべきを、桂の院に人びと多く参り集ひて、ここにも殿上人あまた参りたり。御装束などしたまひて、

「いとほしたなきわざかな。かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」

とて、騒がしきに引かれて出でたまふ。心苦しければ、さりげなく紛らはして立ちとまりたまへる戸口に、乳母、若君抱きてさし出でたり。あはれなる御けしきに、かき撫でたまひて、

「見では、いと苦しかりぬべきこそ、いとうちつけなれ。いかがすべき。いと里遠しや」

と

のたまへば、

「遙かに思ひたまへ絶えたりつる年ごろよりも、今からの御もてなしの、おぼつかなうはべらむは、心尽くしに」

など聞こゆ。若君、手をさし出でて、立ちたまへるを慕ひたまへば、ついゐたまひて、

「あやしう、もの思ひ絶えぬ身にこそありけれ。しばしにても苦しや。いづら。など、もろともに出でては、惜しみたまはぬ。さらばこそ、人心地もせめ」  
とのたまへば、うち笑ひて、女君に「かくなむ」と聞こゆ。

なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。人びともかたはらいたがれば、しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、たをやぎたるけはひ、皇女たちといはむにも足りぬべし。

帷子引きやりて、こまやかに語らひたまふとて、とばかり返り見たまへるに、さこそ静めつれ、見送りきこゆ。

いはむかたなき盛りの御容貌なり。いたうそびやぎたまへりしが、すこしなりあふほどになりたまひにける御姿など、「かくてこそものものしかりけれ」と、

と、うち眺めて、立ちたまふ姿、にほひ、世に知らず、とのみ思ひきこゆ。

御寺に渡りたまうて、月ごとの十四、五日、晦日の日、行はるべき普賢講、阿弥陀、釈迦の念仏の三昧をばさるものにて、またまた加へ行はせたまふべきことなど、定め置かせたまふ。堂の飾り、仏の御具など、めぐらし仰せらる。月の明きに帰りたまふ。

ありし夜のこと、思し出でらるる、折過ぐさず、かの琴の御琴さし出でたり。そこはかたなくものあはれなるに、え忍びたまはで、搔き鳴らしたまふ。まだ調べも変はらず、ひきかへし、その折今の心地したまふ。

「契りしに変はらぬ琴の調べにて

絶えぬ心のほどは知りきや」

女、

「変はらじと契りしことを頼みにて

松の響きに音を添へしかな」

と聞こえ交はしたるも、似げなからぬこそは、身にあまりたるありさまなめれ。こよなうねびまさりにける容貌、けはひ、え思ほし捨つまじう、若君、はた、尽きもせずまぼられたまふ。

「いかにせまし。隠ろへたるさまにて生ひ出でむが、心苦しう口惜しきを、二条の院に渡して、心のゆく限りもてなさば、後のおぼえも罪免れなむかし」

と思ほせど、また、思はむこといとほしくて、えうち出でたまはで、涙ぐみて見たまふ。幼き心地に、すこし恥ぢらひたりしが、やうやううちとけて、もの言ひ笑ひなどして、むつれたまふを見るままに、匂ひまさりてうつくし。抱きておはするさま、見るかひありて、宿世こよなしと見えたり。

またの日は京へ帰らせたまふべければ、すこし大殿籠もり過ぐして、やがて

尼君、のぞきて見たてまつるに、老いも忘れ、もの思ひも晴るる心地してうち笑みぬ。

東の渡殿の下より出づる水の心ばへ、繕はせたまふとて、いとなまめかしき桂姿うちとけたまへるを、いとめでたううれしと見たてまつるに、闕伽の具などのあるを見たまふに、思し出でて、

「尼君は、こなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」

とて、御直衣召し出でて、たてまつる。几帳のもとに寄りたまひて、

「罪軽く生ほし立てたまへる、人のゆゑは、御行なひのほどあはれにこそ、思ひなしきこゆれ。いといたく思ひ澄ましたまへりし御住みかを捨てて、憂き世に帰りたまへる心ざし、浅からず。またかしこには、いかにとまりて、思ひおこせたまふらむと、さまざまになむ」

と、いとなつかしうのたまふ。

「捨てはべりし世を、今さらにたち帰り、思ひたまへ乱るるを、推し量らせたまひければ、命長さのしるしも、思ひたまへ知られぬる」と、うち泣きて、「荒磯蔭に、心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今は頼もしき御生ひ先と、祝ひきこえさするを、浅き根ざしゆゑや、いかがと、かたがた心尽くされはべる」

など聞こゆるけはひ、よしなからねば、昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど、語らせたまふに、繕はれたる水の音なひ、かことがましう聞こゆ。

「住み馴れし人は帰りてたどれども

清水は宿の主人顔なる」

わざとはなくて、言ひ消つさま、みやびかによし、と聞きたまふ。

「いさらるはやくのことも忘れじを

もとの主人や面変はりせる

あはれ」

まして、さる御心してひきつくろひたまへる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、思ひむせべる心の闇も晴るるやうなり。

めづらしう、あはれにて、若君を見たまふも、いかが浅く思されむ。今まで隔てける年月だに、あさましく悔しきまで思ほす。

「大殿腹の君をうつくしげなりと、世人もて騒ぐは、なほ時世によれば、人の見なすなりけり。かくこそは、すぐれたる人の山口はしるかりけれ」

と、うち笑みたる顔の何心なきが、愛敬づき、匂ひたるを、いみじうらうたしと思す。

乳母の、下りしほどは衰へたりし容貌、ねびまさりて、月ごろの御物語など、馴れ聞こゆるを、あはれに、さる塩屋のかたはらに過ぐしつらむことを、思しのたまふ。

「ここにも、いと里離れて、渡らむこともかたきを、なほ、かの本意ある所に移ろひたまへ」

とのたまへど、

「いとうひうひしきほど過ぐして」

と聞こゆるも、ことわりなり。夜一夜、よろづに契り語らひ、明かしたまふ。

繕ふべき所、所の預かり、今加へたる家司などに仰せらる。桂の院に渡りたまふべしとありければ、近き御荘の人びと、参り集まりたりけるも、皆尋ね参りたり。前裁どもの折れ伏したるなど、繕はせたまふ。

「ここかしこの立石どもも皆転び失せたるを、情けありてしなさば、をかしかりぬべき所かな。かかる所をわざと繕ふも、あいなきわざなり。さても過ぐし果てねば、立つ時もの憂く、心とまる、苦しかりき」

など、来し方のことものたまひ出でて、泣きみ笑ひみ、うちとけのたまへる、いとめでたし。

御形見の琴を掻き鳴らす。折の、いみじう忍びがたければ、人離れたる方にうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君、もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起き上がりて、

「身を変へて一人帰れる山里に  
聞きしに似たる松風ぞ吹く」

御方、

「故里に見し世の友を恋ひわびて  
さへづることを誰れか分くらむ」

かやうにものはかなくて明かし暮らすに、大臣、なかなか静心なく思さるれば、人目をもえ憚りあへたまはで、渡りたまふを、女君は、かくなむとたしかに知らせたてまつりたまはざりけるを、例の、聞きもや合はせたまふとて、消息聞こえたまふ。

「桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり。訪らはむと言ひし人さへ、かのわたり近く来るて、待つなれば、心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にも、飾りなき仏の御訪らひすべければ、二、三日ははべりなむ」と聞こえたまふ。

「桂の院といふ所、にはかに造らせたまふと聞くは、そこに据ゑたまへるにや」と思すに、心づきなければ、「斧の柄さへ改めたまはむほどや、待ち遠にと、心ゆかぬ御けしきなり。」

「例の、比べ苦しき御心、いにしへのありさま、名残なしと、世人も言ふなるものを、何やかやと御心とりたまふほどに、日たけぬ。」

忍びやかに、御前疎きは混ぜで、御心づかひして渡りたまひぬ。たそかれ時におはし着きたり。狩の御衣にやつれたまへりしだに世に知らぬ心地せしを、

らぬ別れに、御心動かしたまふな」と言ひ放つものから、「煙ともならむ夕べまで、若君の御ことをなむ、六時の勤めにも、なほ心ぎたなく、うち交ぜはべりぬべき」

とて、これにぞ、うちひそみぬる。

御車は、あまた続けむも所狭く、片へづつ分けむもわづらはしとて、御供の人びとも、あながちに隠ろへ忍ぶれば、舟にて忍びやかにと定めたり。辰の時に舟出したまふ。昔の人もあはれと言ひける浦の朝霧隔たりゆくままに、いともの悲しくて、入道は、心澄み果つまじく、あくがれ眺めたり。ここら年を経て、今さらに帰るも、なほ思ひ尽きせず、尼君は泣きたまふ。

「かの岸に心寄りにし海人舟の

背きし方に漕ぎ帰るかな」

御方、

「いくかへり行きかふ秋を過ぐしつつ

浮木に乗りてわれ帰るらむ」

思ふ方の風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。人に見咎められじの心もあれば、路のほども軽らかにしなしたり。

家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所変へたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。造り添へたる廊など、ゆゑあるさまに、水の流れもをかしうしなしたり。まだこまやかなるにはあらねども、住みつかばさてもありぬべし。

親しき家司に仰せ賜ひて、御まうけのことせさせたまひけり。渡りたまはむことは、とかう思したばかりほどに、日ごろ経ぬ。

なかなかも思ひ続けられて、捨てし家居も恋しう、つれづれなれば、かの

「いきてまたあひ見むことをいつとてか  
限りも知らぬ世をば頼まむ

送りにだに」

と切にのたまへど、方々につけて、えさるまじきよしを言ひつつ、さすがに道のほども、いとうしろめたなきけしきなり。

「世の中を捨てはじめしに、かかる人の国に思ひ下りはべりしことども、ただ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心になふやうもやと、思ひたまへ立ちしかど、身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば、さらに、都に帰りて、古受領の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬蘽、元のありさま改むることもなきものから、公私に、をこがましき名を広めて、親の御なき影を恥づかしめむことのいみじきになむ、やがて世を捨てつる門出なりけりと人にも知られにしを、その方につけては、よう思ひ放ちてけりと思ひはべるに、君のやうやう大人びたまひ、もの思ほし知るべきに添へては、など、かう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆらむと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、仏神を頼みきこえて、さりとも、かうつたなき身に引かれて、山賤の庵には混じりたまはじ、と思ふ心一つを頼みはべりしに、思ひ寄りかたくて、うれしきことどもを見たてまつりそめても、なかなか身のほどを、とぎまかうぎまに悲しう嘆きはべりつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしきに、かかる渚に月日を過ぐしたまはむも、いとかたじけなう、契りことにおぼえたまへば、見たてまつらざらむ心惑ひは、静めがたけれど、この身は長く世を捨てし心はべり。君達は、世を照らしたまふべき光しるければ、しばし、かかる山賤の心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ。天に生まるる人の、あやしき三つの途に帰るらむ一時に思ひなずらへて、今日、長く別れたてまつりぬ。命尽きぬと聞こしめすとも、後のこと思しいとなむな。さ

はかなる語らひだに、見なれそなれて、別るるほどは、ただならざめるを、まして、もてひがめたる頭つき、心おきてこそ頼もしげなけれど、またさるかたに、「これこそは、世を限るべき住みかなれ」と、あり果てぬ命を限りに思ひて、契り過ぐし来つるを、にはかに行き離れなむも心細し。

若き人びとの、いぶせう思ひ沈みつるは、うれしきものから、見捨てがたき浜のさまを、「または、えしも帰らじかし」と、寄する波に添へて、袖濡れがちなり。

秋のころほひなれば、もののはれ取り重ねたる心地して、その日とある暁に、秋風涼しくて、虫の音もとりあへぬに、海の方を見出だしてゐたるに、入道、例の、後夜より深く起きて、鼻すすりうちして、行なひいましたり。いみじう言忌すれど、誰も誰もいとしのびがたし。

若君は、いともいともうつくしげに、夜光りけむ玉の心地して、袖よりほかに放ちきこえざりつるを、見馴れてまつはしたまへる心ざまなど、ゆゆしきままで、かく、人に違へる身をいまいまして思ひながら、「片時見たてまつらでは、いかでか過ぐさむとすらむ」と、つつみあへず。

「行く先をはるかに祈る別れ路に

堪へぬは老いの涙なりけり

いともゆゆしや」

とて、おしのごひ隠す。尼君、

「もろともに都は出で来このたびや

ひとり野中の道に惑はむ」

とて、泣きたまふさま、いとことわりなり。ここら契り交はして積もりぬる年月のほどを思へば、かう浮きたることを頼みて、捨てし世に帰るも、思へばはかなしや。御方、

ず思し、「若君の、さてつくづくともものしたまふを、後の世に人の言ひ伝へむ、今一際、人悪ろき疵にや」と思ほすに、造り出でてぞ、「しかしかの所をなむ思ひ出でたる」と聞こえさせける。「人に交じらはむことを苦しげにのみものするは、かく思ふなりけり」と心得たまふ。「口惜しからぬ心の用意かな」と思しなりぬ。

惟光朝臣、例の忍ぶる道は、いつとなくいろひ仕うまつる人なれば、遣はして、さるべきさまに、ここかしこの用意などせさせたまひけり。

「あたり、をかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、「さやうの住まひに、よしなからずはありぬべし」と思す。

造らせたまふ御堂は、大覚寺の南にあたりて、滝殿の心ばへなど、劣らずおもしろき寺なり。

これは、川面に、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寝殿のこそぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまで思し寄る。

親しき人びと、いみじう忍びて下し遣はす。逃れがたくて、今はと思ふに、年経つる浦を離れなむこと、あはれに、入道の心細くて一人止まらむことを思ひ乱れて、よろづに悲し。「すべて、など、かく、心尽くしになりはじめけむ身にか」と、露のかからぬたぐひうらやましくおぼゆ。

親たちも、かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝ても覚めても、願ひわたりし心ざしのかなふと、いとうれしけれど、あひ見で過ぐさむいぶせさの堪へがたう悲しければ、夜昼思ひほれて、同じことをのみ、「さらば、若君をば見たてまつらでは、はべるべきか」と言ふよりほかのことなし。

母君も、いみじうあはれなり。年ごろだに、同じ庵にも住まずかけ離れつれば、まして誰れによりてかは、かけ留まらむ。ただ、あだにうち見る人のあさ

となむ思ひ寄る。さるべき物は上げ渡さむ。修理などして、かたのごと人住みぬべくは繕ひなされなむや」

と言ふ。預り、

「この年ごろ、領ずる人もものしたまはず、あやしきやうになりてはべれば、下屋にぞ繕ひて宿りはべるを、この春のころより、内の大殿の造らせたまふ御堂近くて、かのわたりなむ、いと気騒がしうなりにてはべる。いかめしき御堂ども建てて、多くの人なむ、造りいとなみはべるめる。静かなる御本意ならば、それや違ひはべらむ」

「何か。それも、かの殿の御蔭に、かたかけてと思ふことありて。おのづから、おひおひに内のことどもはしてむ。まづ、急ぎておほかたのことどもをものせよ」

と言ふ。

「みづから領ずる所にはべらねど、また知り伝へたまふ人もなければ、かごかなるならひにて、年ごろ隠ろへはべりつるなり。御荘の田畠などいふことの、いたづらに荒れはべりしかば、故民部大輔の君に申し賜はりて、さるべき物などたてまつりてなむ、領じ作りはべる」

など、そのあたりの貯へのことどもを危ふげに思ひて、髭がちにつなしくき顔を、鼻などうち赤めつつ、はちぶき言へば、

「さらに、その田などやうのことは、ここに知るまじ。ただ年ごろのやうに思ひてものせよ。券などはここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年ごろともかくも尋ね知らぬを、そのことも今詳しくしたためむ」

など言ふにも、大殿のけはひをかくれば、わづらはしくて、その後、物など多く受け取りてなむ、急ぎ造りける。

かやうに思ひ寄るらむとも知りたまはで、上らむことをもの憂がるも、心得

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の対、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにし置かせたまふ。東の対は、明石の御方と思しおきてたり。北の対は、ことに広く造らせたまひて、かりにても、あはれと思して、行く末かけて契り頼めたまひし人びと集ひ住むべきさまに、隔て隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう見所ありてこまかなる。寝殿は塞げたまはず、時々渡りたまふ御住み所にして、さるかたなる御しつらひどもし置かせたまへり。

明石には御消息絶えず、今はなほ上りたまひぬべきことをばのたまへど、女は、なほ、わが身のほどを思ひ知るに、

「こよなくやむごとなき際の人びとだに、なかなかかけて離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして、何ばかりのおぼえなりとてか、さし出でまじらはむ。この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそ現はれぬ。たまさかにはひ渡りたまふついでを待つことにて、人笑へに、はしたなきこと、いかにあらむ」

と思ひ乱れても、また、さりとして、かかる所に生ひ出で、数まへられたまはざらむも、いとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。親たちも、「げに、ことわり」と思ひ嘆くに、なかなか、心も尽き果てぬ。

昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後、はかばかしうあひ継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人を呼び取りて語らふ。

「世の中を今はと思ひ果てて、かかる住まひに沈みそめしかども、末の世に、思ひかけぬこと出で来てなむ、さらに都の住みか求むるを、にはかにまばゆき人中、いとはしたなく、田舎びにける心地も静かなるまじきを、古き所尋ねて、

松 風

松

風

出典 渋谷栄一「源氏物語の世界」に掲載の本文  
(<http://www.sainet.or.jp/~eshibuya/index.html>)

そのころのことには、この絵の定めをしたまふ。

「かの浦々の巻は、中宮にさぶらはせたまへ」

と聞こえさせたまひければ、これが初め、残りの巻々ゆかしがらせたまへど、

「今、次々に」

と聞こえさせたまふ。主上にも御心ゆかせたまひて思し召したるを、うれしく見たてまつりたまふ。

はかなきことにつけても、かうもてなしきこえたまへば、権中納言は、「なほ、おぼえ圧さるべきにや」と、心やましう思さるべかめり。主上の御心ざしは、もとより思ししみにければ、なほ、こまやかに思し召したるさまを、人知れず見たてまつり知りたまひてぞ、頼もしく、「さりとも」と思されける。

さるべき節会どもにも、「この御時よりと、末の人の言ひ伝ふべき例を添へむ」と思し、私ざまのかかるはかなき御遊びも、めづらしき筋にせさせたまひて、いみじき盛りの御世なり。

大臣ぞ、なほ常なきものに世を思して、今すこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなむと深く思ほすべかめる。

「昔のためしを見聞くにも、齢足らで、官位高く昇り、世に抜けぬる人の、長くえ保たぬわぎなりけり。この御世には、身のほどおぼえ過ぎにたり。中ごろなきになりて沈みたりし愁へに代はりて、今までもながらふるなり。今より後の栄えは、なほ命うしろめたし。静かに籠もりて、後の世のことをつとめ、かつは齢をも延べむ」と思ほして、山里ののどかなるを占めて、御堂を造らせたまひ、仏経のいとなみ添へてせさせたまふめるに、末の君たち、思ふさまにかしづき出だして見むと思し召すにぞ、とく捨てたまはむことは、かたげなる。いかに思しおきつるにかと、いと知りがたし。

と、親王に申したまへば、

「何の才も、心より放ちて習ふべきわざならねど、道々に物の師あり、学び所あらむは、事の深き浅きは知らねど、おのづから移さむに跡ありぬべし。筆取る道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆるを、深き労なく見ゆるおれ者も、さるべきにて、書き打つたぐひも出で来れど、家の子の中には、なほ人に抜けぬる人、何ごとをも好み得けるとぞ見えたる。院の御前にて、親王たち、内親王、いづれかは、さまざまとりどりの才習はさせたまはざりけむ。その中にも、とり立てたる御心に入れて、伝へ受けとらせたまへるかひありて、『文才をばさるものにて言はず、さらぬことの中には、琴弾かせたまふことなむ一の才にて、次には横笛、琵琶、箏の琴をなむ、次々に習ひたまへる』と、主上も思しのたまはせき。世の人、しか思ひきこえさせたるを、絵はなほ筆のついでにすさびさせたまふあだこととこそ思ひたまへしか、いとかう、まさなきまで、いにしへの墨がきの上手ども、跡をくらうなしつべかめるは、かへりて、けしからぬわざなり」

と、うち乱れて聞こえたまひて、酔ひ泣きにや、院の御こと聞こえ出でて、皆うちしほれたまひぬ。

二十日あまりの月さし出でて、こなたは、まださやかならねど、おほかたの空をかしきほどなるに、書司の御琴召し出でて、和琴、権中納言賜はりたまふ。さはいへど、人にまさりてかき立てたまへり。親王、箏の御琴、大臣、琴、琵琶は少将の命婦仕うまつる。上人の中にすぐれたるを召して、拍子賜はず。いみじうおもしろし。

明け果つるままに、花の色も人の御容貌ども、ほのかに見えて、鳥のさへづるほど、心地ゆき、めでたき朝ぼらけなり。祿どもは、中宮の御方より賜はず。親王は、御衣また重ねて賜はりたまふ。

れたるを選び置きたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひすまして静かに描きたまへるは、たとふべきかたなし。

親王よりはじめてたてまつりて、涙とどめたまはず。その世に、「心苦し悲し」と思ほししほどよりも、おはしけむありさま、御心に思ししことども、ただ今のやうに見え、所のさま、おぼつかなき浦々、磯の隠れなく描きあらはしたまへり。

草の手に仮名の所々に書きまぜて、まほの詳しき日記にはあらず、あはれなる歌などもまじれる、たぐひゆかし。誰もこと事思ほさず、さまざまの御絵の興、これに皆移り果てて、あはれにおもしろし。よろづ皆おしゆづりて、左、勝つになりぬ。

夜明け方近くなるほどに、ものいとあはれに思されて、御土器など参るついでに、昔の御物語ども出で来て、

「いはけなきほどより、学問に心を入れてはべりしに、すこしも才などつきぬべくや御覧じけむ、院ののたまはせしやう、『才学といふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の、命、幸ひと並びぬるは、いとかたきものになむ。品高く生まれ、さらでも人に劣るまじきほどにて、あながちにこの道な深く習ひそ』と、諫めさせたまひて、本才の方々のもの教へさせたまひしに、つたなきこともなく、またとり立ててこのことと心得ることもはべらざりき。絵描くことのみなむ、あやしくはかなきものから、いかにしてかは心ゆくばかり描きて見るべきと、思ふ折々はべりしを、おぼえぬ山賤になりて、四方の海の深き心を見しに、さらに思ひ寄らぬ隈なく至られにしかど、筆のゆく限りありて、心よりはことゆかずなむ思うたまへられしを、ついでなくて、御覧ぜさすべきならねば、かう好き好きしきやうなる、後の聞こえやあらむ」

れてさぶらふ。殿上人は、後涼殿の簀子に、おのおの心寄せつつさぶらふ。

左は、紫檀の箱に蘇芳の花足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に桜襲の汗衫、相は紅に藤襲の織物なり。姿、用意など、なべてならず見ゆ。

右は、沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦、あしゆひの組、花足の心ばへなど、今めかし。童、青色に柳の汗衫、山吹襲の相着たり。

皆、御前に昇き立つ。主上の女房、前後と、装束き分けたり。

召しありて、内大臣、権中納言、参りたまふ。その日、帥宮も参りたまへり。いとよしありておはするうちに、絵を好みたまへば、大臣の、下にすすめたまへるやうやあらむ、ことことしき召しにはあらで、殿上におはするを、仰せ言ありて御前に参りたまふ。

この判仕うまつりたまふ。いみじう、げに描き尽くしたる絵どもあり。さらにえ定めやりたまはず。

例の四季の絵も、いにしへの上手どものおもしろきことどもを選びつつ、筆とどこほらず描きながしたるさま、たとへむかたなしと見るに、紙絵は限りありて、山水のゆたかなる心ばへを見せ尽くさぬものなれば、ただ筆の飾り、人の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔のあと恥なく、にぎははしく、あなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くの争ひども、今日は方々に興あることも多かり。

朝餉の御障子を開けて、中宮もおはしませば、深うしろしめしたらむと思ふに、大臣もいと優におぼえたまひて、所々の判ども心もとなき折々に、時々さし応へたまひけるほど、あらまほし。

定めかねて夜に入りぬ。左はなほ数一つある果てに、「須磨」の巻出で来たるに、中納言の御心、騒ぎにけり。あなたにも心して、果ての巻は心ことにすぐ

まへり。

年の内の節会どものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりどりに描けるに、延喜の御手づから事の心書かせたまへるに、またわが御世の事も描かせたまへる巻に、かの齋宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみて思しければ、描くべきやう詳しく仰せられて、公茂が仕うまつれるが、いといみじきをたてまつらせたまへり。

艶に透きたる沈の箱に、同じき心葉のさまなど、いと今めかし。御消息はただ言葉にて、院の殿上にさぶらふ左近中将を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せたる所の、神々しきに、

「身こそかくしめの外なれそのかみの

心のうちを忘れしもせず」

とのみあり。聞こえたまはざらむも、いとかたじけなければ、苦しう思しながら、昔の御簪の端をいささか折りて、

「しめのうちは昔にあらぬ心地して

神代のことも今ぞ恋しき」

とて、縹の唐の紙に包みて参らせたまふ。御使の禄など、いとなまめかし。

院の帝御覧ずるに、限りなくあはれと思すにぞ、ありし世を取り返さまほしく思ほしける。大臣をもつらしと思ひきこえさせたまひけむかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ。

院の御絵は、後の宮より伝はりて、あの女御の御方にも多く参るべし。尚侍の君も、かやうの御好ましきは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ。

その日と定めて、にはかなるやうなれど、をかしきさまにはかなうしなして、左右の御絵ども参らせたまふ。女房のさぶらひに御座よそはせて、北南方々別

世の常のあだことのひきつくろひ飾れるに圧されて、業平が名をや朽たすべ  
き」

と、争ひかねたり。右の典侍、

「雲の上に思ひのぼれる心には

千尋の底もはるかにぞ見る」

「兵衛の大君の心高きは、げに捨てがたけれど、在五中将の名をば、え朽た  
さじ」

とのたまはせて、宮、

「みるめこそうらふりぬらめ年経にし

伊勢をの海人の名をや沈めむ」

かやうの女言にて、乱りがはしく争ふに、一卷に言の葉を尽くして、えも言  
ひやらず。ただ、あさはかなる若人どもは、死にかへりゆかしがれど、主上の  
も、宮のも片端をだにえ見ず、いといたう秘めさせたまふ。

大臣参りたまひて、かくとりどりに争ひ騒ぐ心ばへども、をかしく思して、

「同じくは、御前にて、この勝負定めむ」

と

、のたまひなりぬ。かかることもやと、かねて思しければ、中にもことなるは  
選りとどめたまへるに、かの「須磨」「明石」の二巻は、思すところありて、取  
り交ぜさせたまへり。

中納言も、その御心劣らず。このころの世には、ただかくおもしろき紙絵を  
ととのふることを、天の下いとなみたり。

「今あらため描かむことは、本意なきことなり。ただありけむ限りをこそ」

とのたまへど、中納言は人にも見せで、わりなき窓を開けて、描かせたまひ  
けるを、院にも、かかること聞かせたまひて、梅壺に御絵どもたてまつらせた

の世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契り高く、神代のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」

と言ふ。右は、

「かぐや姫ののぼりけむ雲居は、げに、及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のこととこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこき御光には並ばずなりにけり。阿部のおほしが千々の黄金を捨てて、火鼠の思ひ片時に消えたるも、いとあへなし。車持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に疵をつけたるをあやまち」となす。

絵は、巨勢相覧、手は、紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺をばいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常の装ひなり。

「俊蔭は、はげしき波風におぼほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほ、さして行きける方の心ざしもかなひて、つひに、人の朝廷にもわが国にも、ありがたき才のほどを広め、名を残しける古き心を言ふに、絵のさまも、唐土と日の本とを取り並べて、おもしろきことども、なほ並びなし」

と言ふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は、常則、手は、道風なれば、今めかしうをかしげに、目もかかやくまで見ゆ。左は、そのことわりなし。

次に、『伊勢物語』に『正三位』を合はせて、また定めやらす。これも、右はおもしろくにぎははしく、内わたりよりうちはじめ、近き世のありさまを描きたるは、をかしう見所まさる。

平内侍、

「伊勢の海の深き心をたどらずて

ふりにし跡と波や消つべき

中宮ばかりには、見せたてまつるべきものなり。かたはなるまじき一帖づつ、さすがに浦々のありさまやかに見えたるを、選りたまふついでにも、かの明石の家居ぞ、まづ、「いかに」と思しやらぬ時の間なき。

かう絵ども集めらると聞きたまひて、権中納言、いと心を尽くして、軸、表紙、紐の飾り、いよいよ調へたまふ。

弥生の十日のほどなれば、空もうららかにて、人の心ものび、ものおもしろき折なるに、内わたりも、節会どものひまなれば、ただかやうのことどもにて、御方々暮らしたまふを、同じくは、御覧じ所もまさりぬべくてたてまつらむの御心つきて、いとわざと集め参らせたまへり。

こなたかなたと、さまざまに多かり。物語絵は、こまやかになつかしさまざるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑある限り、弘徽殿は、そのころ世にめづらしく、をかしき限りを選び描かせたまへれば、うち見る目の今めかしきはなやかさは、いとこよなくまされり。

主上の女房なども、よしある限り、「これは、かれは」など定めあへるを、このころのことにすめり。

中宮も参らせたまへるころにて、方々、御覧じ捨てがたく思ほすことなれば、御行なひも怠りつつ御覧ず。この人びとのとりどりに論ずるを聞こし召して、左右と方分かたせたまふ。

梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少将の命婦。右には、大弐の典侍、中将の命婦、兵衛の命婦を、ただ今は心にくき有職どもにて、心々に争ふ口つきどもを、をかしと聞こし召して、まづ、物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』に『宇津保の俊蔭』を合はせて争ふ。

「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければ、かくや姫のこ

とて、おもしろく心ばへある限りを選びつつ描かせたまふ。例の月次の絵も、見馴れぬさまに、言の葉を書き続けて、御覽ぜさせたまふ。

わざとをかしうしたれば、また、こなたにてもこれを御覽ずるに、心やすくも取り出でたまはず、いといたく秘めて、この御方へ持て渡らせたまふを惜しみ、領じたまへば、大臣、聞きたまひて、

「なほ、権中納言の御心ばへの若々しきこそ、改まりがたかめれ」  
など笑ひたまふ。

「あながちに隠して、心やすくも御覽ぜさせず、悩ましきこゆる、いとめざましや。古代の御絵どものはべる、参らせむ」

と奏したまひて、殿に古きも新しきも、絵ども入りたる御厨子ども開かせたまひて、女君ともろともに、「今めかしきは、それぞれ」と、選り調べさせたまふ。

「長恨歌」「王昭君」などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、「事の忌みあるは、こたみはたてまつらじ」と選り止めたまふ。

かの旅の御日記の箱をも取り出でさせたまひて、このついでにぞ、女君にも見せたてまつりたまひける。御心深く知らで今見む人だに、すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて、忘れがたく、その世の夢を思し覚ます折なき御心どもには、取りかへし悲しう思し出でらる。今まで見せたまはざりける恨みをぞ聞こえたまひける。

「一人ゐて嘆きしよりは海人の住む  
かたをかくてぞ見るべかりける

おぼつかなさは、慰みなましものを」  
とのたまふ。いとあはれと、思して、

「憂きめ見しその折よりも今日はまた  
過ぎにしかたにかへる涙か」

まひ出づるに、あはれなる御けしき、あさはかならず見ゆれば、いといとほしく思す。

「めでたしと、思ほししみにける御容貌、いかやうなるをかしさにか」と、ゆかしう思ひきこえたまへど、さらにえ見たてまつりたまはぬを、ねたう思ほす。

いと重りかにて、夢にもいはけたる御ふるまひなどのあらばこそ、おのづからほの見たまふついでもあらめ、心にき御けはひのみ深さまされば、見たてまつりたまふままに、いとあらまほしと思ひきこえたまへり。

かく隙間なくて、二所さぶらひたまへば、兵部卿宮、すがすがともえ思ほし立たず、「帝、おとなびたまひなば、さりとも、え思ほし捨てじ」とぞ、待ち過ぐしたまふ。二所の御おぼえども、とりどりに挑みたまへり。

主上は、よろづのことに、すぐれて絵を興あるものに思したり。立てて好ませたまへばにや、二なく描かせたまふ。斎宮の女御、いとをかしう描かせたまふべければ、これに御心移りて、渡らせたまひつつ、描き通はさせたまふ。

殿上の若き人びとも、このことまねぶをば、御心とどめてをかしきものと思ほしたれば、まして、をかしげなる人の、心ばへあるさまに、まほならず描きすさび、なまめかしう添ひ臥して、とかく筆うちやすらひたまへる御さま、らうたげさに御心しみて、いとしげう渡らせたまひて、ありしよりけに御思ひまされるを、権中納言、聞きたまひて、あくまでかどかどしく今めきたまへる御心にて、「われ人に劣りなむや」と思しはげみて、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじくいましめて、またなきさまなる絵どもを、二なき紙どもに描き集めさせたまふ。

の御心ざま思し出づるに、「おほかたの世につけては、惜しうあたらしかりし人の御ありさまぞや。さこそえあらぬものなりけれ。よしありし方は、なほすぐれて」、物の折ごとに思ひ出できこえたまふ。

中宮も内にぞおはしましける。主上は、めづらしき人参りたまふと聞こし召しければ、いとうつくしう御心づかひしておはします。ほどよりはいみじうされおとなびたまへり。宮も、

「かく恥づかしき人参りたまふを、御心づかひして、見えたてまつらせたまへ」  
と聞こえたまひけり。

人知れず、「大人は恥づかしうやあらむ」と思しけるを、いたう夜更けて参り上りたまへり。いとつつましげにおほどかにて、ささやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかし、と思しけり。

弘徽殿には、御覧じつきたれば、睦ましうあはれに心やすく思ほし、これは、人ざまもいたうしめり、恥づかしげに、大臣の御もてなしもやむごとなくよそほしければ、あなづりにくく思されて、御宿直などは等しくしたまへど、うちとけたる御童遊びに、昼など渡らせたまふことは、あなたがちにおはします。

権中納言は、思ふ心ありて聞こえたまひけるに、かく参りたまひて、御女にきしろふさまにてさぶらひたまふを、方々にやすからず思すべし。

院には、かの櫛の筥の御返り御覧ぜしにつけても、御心離れがたかりけり。

そのころ、大臣の参りたまへるに、御物語こまやかなり。ことのついでに、齋宮の下りたまひしこと、先々ものたまひ出づれば、聞こえ出でたまひて、さ思ふ心なむありしなどは、えあらはしたまはず。大臣も、かかる御けしき聞き顔にはあらで、ただ「いかが思したる」とゆかしきに、とかうかの御事をのた

が

など、聞こえたまへど、いとかたはらいたければ、御文はえ引き出でず。宮は悩ましげに思ほして、御返りいとの憂くしたまへど、

「聞こえたまはざらむも、いと情けなく、かたじけなかるべし」

と、人びとそそのかしわづらひきこゆるけはひを聞きたまひて、

「いとあるまじき御ことなり。しるしばかり聞こえさせたまへ」

と聞こえたまふも、いと恥づかしけれど、いにしへ思し出づるに、いとなまめき、きよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし御幼心も、ただ今のこととおぼゆるに、故御息所の御ことなど、かきつらねあはれに思されて、ただかく、

「別るとて遙かに言ひし一言も

かへりてものは今ぞ悲しき」

とばかりやありけむ。御使の禄、品々に賜はず。大臣は、御返りをいとゆかしう思せど、え聞こえたまはず。

「院の御ありさまは、女にて見たてまつらまほしきを、この御けはひも似げなからず、いとよき御あはひなめるを、内は、まだいといはけなくおはしますめるに、かく引き違へきこゆるを、人知れず、ものしとや思すらむ」など、憎きことをさへ思しやりて、胸つぶれたまへど、今日になりて思し止むべきことにしあらねば、事どもあるべきさまにのたまひおきて、むつまじう思す修理宰相を詳しく仕うまつるべくのたまひて、内に参りたまひぬ。

「うけばりたる親さまには、聞こし召されじ」と、院をつつみきこえたまひて、御訪らひばかりと、見せたまへり。よき女房などは、もとより多かる宮なれば、里がちなりしも参り集ひて、いと二なく、けはひあらまほし。

「あはれ、おはせましかば、いかにかひありて、思しいたづかまし」と、昔

前齋宮の御参りのこと、中宮の御心に入れてもよほしきこえたまふ。こまかなる御とぶらひまで、とり立てたる御後見もなしと思しやれど、大殿は、院に聞こし召さむことを憚りたまひて、二条院に渡したてまつらむことをも、このたびは思し止まりて、ただ知らず顔にもてなしたまへれど、おほかたのことどもは、とりもちて親めききこえたまふ。

院はいと口惜しく思し召せど、人悪ろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の筥、打乱の筥、香壺の筥ども、世の常ならず、くさぐさの御薰物ども、薰衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことに調へさせたまへり。大臣見たまひもせむにと、かねてよりや思しまうけけむ、いとわざとがましかむめり。

殿も渡りたまへるほどにて、「かくなむ」と、女別当御覽ぜさす。ただ、御櫛の筥の片つ方を見たまふに、尽きせずこまかになまめきて、めづらしきさまなり。挿櫛の筥の心葉に、

「別れ路に添へし小櫛をかことにて

遥けき仲と神やいさめし」

大臣、これを御覽じつけて、思しめぐらすに、いとかたじけなくいとほしくて、わが御心のならひ、あやにくなる身を抓みて、

「かの下りたまひしほど、御心に思ほしけむこと、かう年経て帰りたまひて、その御心ざしをも遂げたまふべきほどに、かかる違ひ目のあるを、いかに思すらむ。御位を去り、もの静かにて、世を恨めしとや思すらむ」など、「我になりて心動くべきふしかな」と、思し続けたまふに、いとほしく、「何にかくあながちなることを思ひはじめて、心苦しく思ほし悩ますらむ。つらしとも、思ひきこえしかど、また、なつかしうあはれなる御心ばへを」など、思ひ乱れたまひて、とばかりうち眺めたまへり。

「この御返りは、いかやうにか聞こえさせたまふらむ。また、御消息もいか

絵 合

絵

合

藤裏葉 梅枝 真木柱 藤袴 行幸 野分 篝火 常夏 蛩 胡蝶 初音 玉鬢 少女 朝顏 薄雲 松風 絵合

一九 三四 六四 七六 九八 一一三 一二七 一三五 一五一 一六八 一八〇 二一三 二五二 二六九 二九三 三一〇 三二五